

農業開発総合センター遺跡群Ⅱ

UMATUKAMATU

馬塚松遺跡

ICHIBORI

市堀遺跡

DAIMONGUCHI

大門口遺跡

2006年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



馬塚松遺跡空中写真



馬塚松遺跡出土遺物



市堀遺跡空中写真



①大門口遺跡空中写真



②大門口遺跡出土遺物

序 文

この報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴って発掘調査された南さつま市（旧日置郡金峰町）に所在する馬塚松遺跡・市堀遺跡・大門口遺跡の発掘調査の記録です。

これらの遺跡からは、縄文時代早期から近世にわたる遺構・遺物が発見されました。特に、馬塚松遺跡においては、庇をもつ中世の掘立柱建物跡と多くの中国製輸入陶磁器が発見されました。また、直線距離にして500m離れた市堀遺跡でも同様に中世の庇をもつ掘立柱建物跡が発見され、中世集落の様相の一端が明らかになりました。さらに、市堀遺跡・大門口遺跡では、縄文時代晩期の掘立柱建物跡や柱列などの遺構が発見されました。

これらの遺跡の調査成果が、地域の歴史研究や埋蔵文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力をいただきました県農政部農業開発総合センター整備事務局をはじめ、南さつま市（旧日置郡金峰町）の関係部局、ならびに発掘調査に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

平成18年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 上 今 常 雄

報告書抄録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたーいせきぐん（うまつかまついせき・いちばりいせき・だいもんぐちいせき）									
書名	農業開発総合センター遺跡群Ⅱ（馬塚松遺跡・市堀遺跡・大門口遺跡）									
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
巻次	Ⅱ									
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書									
シリーズ番号	(97)									
編集者名	藤崎光洋・湯之前尚・山崎克之・川元禎久									
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター									
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 0995-48-5811									
発行年月日	2006年2月28日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "					
うまつかまつ 馬塚松遺跡	かごしまけん 鹿児島県 みなみ 南さつま市 きんぼうこう 金峰町	35	86	31°28′44″	130°20′35″	199708-199803 199804-199805 200005-200010	13,000㎡	農業開発総合センター建設		
いちばり 市堀遺跡	同上	35	89	31°28′22″	130°20′47″	200102-200103 200307-200401	10,000㎡	同上		
だいもんぐち 大門口遺跡	同上	35	82	31°28′31″	130°20′52″	199712-199801 200004-200002 200005-200005	40,000㎡	同上		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記		
馬塚松遺跡	散布地	縄文時代早期 晩期 弥生時代 中世 近世		集石遺構1基 総柱建物跡1基 掘立柱建物跡・溝状遺構 溝状遺構		吉田式土器・石鏃 上加世田・入佐・黒川式土器 入来・黒髪式土器 土師器・青磁・白磁 染付				
市堀遺跡	散布地	縄文時代早期 晩期 中世		掘立柱建物跡・柱列 掘立柱建物跡・竪穴状遺構		石坂式土器・石斧 上加世田・入佐式土器 土師器				
大門口遺跡	散布地	縄文時代早期 前期 中期 後期 晩期 弥生時代 古代 近世・現代		掘立柱建物跡・柱列 溝状遺構・道路遺構		加栗山・石坂・桑ノ丸式土器 深浦式土器 春日・並木式土器 南福寺・市来・西平式土器 上加世田・入佐式土器 入来式土器 土師器				
要約	馬塚松遺跡では縄文時代早期から中世・近世までの遺構・遺物が発見された。特に晩期の遺物量が豊富で入佐式土器の古段階から新段階までの一連の編年を確認することができた。また、中世から近世にかけての掘立柱建物跡や溝状遺構が検出し、それに伴う形で土師器や青磁・白磁が出土された。その他縄文時代早期から晩期にかけての石器や異形石器、弥生時代の石包丁などが確認された。また、時代特定には至らなかったが、大型局部磨製石斧が表採されるなど、遺構・遺物共に充実した遺跡であった。 市堀遺跡は縄文時代早期・晩期及び中世の時期の遺跡である。晩期は、掘立柱建物跡・柱列などの遺構が検出され、中世の時期は底付きの掘立柱建物跡などが検出された。 大門口遺跡は、縄文時代早期から古代までの遺物が出土し、縄文時代晩期と近世以降の遺構が検出された。									



農業開発総合センター遺跡群位置図（1/5,000）

例 言

- 1 本報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局の依頼を受け、鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査主体となって平成10年度・12年度に確認調査、13年度に本調査を実施した。
- 3 報告書作成事業は、平成15年度から実施した。
- 4 挿図番号・表番号・遺物番号については、通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 遺物の縮尺は基本的に土器は3分の1、大型石器は3分の1、小型石器は原寸とする。各挿図毎に縮尺は示している。
- 6 報告書中のレベル数値はすべて海拔高度である。
- 7 遺跡における遺構等の実測は発掘担当者が行なったが、一部は民間に実測委託も行なった。
- 8 遺物復元・実測・製図等の整理作業は整理担当者及び鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。また、一部の石器の実測・製図については実測委託をした。
- 9 本報告書の編集は、藤崎光洋・湯之前尚・山崎克之・川元禎久が行い中村耕治・日高正人の協力を得た。写真撮影については西園勝彦の協力を得た。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章～第Ⅲ章、第Ⅴ章、第Ⅶ章	湯之前尚
第Ⅳ章	山崎克之
第Ⅳ章 第2節・第3節	川元禎久
第Ⅴ章 第2節・第3節	藤崎光洋
第Ⅶ章 第2節・第3節	藤崎光洋
- 10 遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する計画である。

馬塚松遺跡

第1図	馬塚松遺跡位置図（1／25,000）	6
第2図	周辺地形及びグリッド図（1／2,000）	7
第3図	遺跡土層断面図1（S-6～9区）	8
第4図	遺跡土層断面図2（Z～V-6～8区）	9
第5図	縄文時代早期集石1	10
第6図	縄文時代早期土器1	11
第7図	縄文時代早期土器2	12
第8図	縄文時代早期石器	14
第9図	縄文時代早期石器出土状況	14
第10図	縄文時代前～後期土器	16
第11図	縄文時代晩期遺物出土状況	17
第12図	縄文時代晩期土器（1）	18
第13図	縄文時代晩期土器（2）	19
第14図	縄文時代晩期土器（3）	20
第15図	縄文時代晩期土器（4）	21
第16図	縄文時代晩期土器（5）	22
第17図	縄文時代晩期土器（6）	23
第18図	縄文時代晩期土器（7）	24
第19図	縄文時代晩期土器（8）	25
第20図	縄文時代晩期土器（9）	26
第21図	縄文時代晩期土器（10）	27
第22図	縄文時代晩期土器（11）	28
第23図	縄文時代晩期土器（12）	29
第24図	縄文時代晩期土器（13）	30
第25図	縄文時代晩期土器（14）	31
第26図	縄文時代晩期土器（15）	32
第27図	縄文時代晩期土器（16）	33
第28図	縄文時代晩期土器（17）	34
第29図	縄文時代晩期石器出土状況	36
第30図	縄文時代晩期石器（1）	37
第31図	縄文時代晩期石器（2）	38
第32図	縄文時代晩期石器（3）	39
第33図	縄文時代晩期石器（4）	40
第34図	縄文時代晩期石器（5）	41
第35図	縄文時代晩期石器（6）	41
第36図	弥生時代遺物出土状況	42
第37図	弥生時代総柱建物跡	43
第38図	弥生時代土器（1）	45

第39図	弥生時代土器（2）	46
第40図	弥生時代石器	47
第41図	弥生時代石器出土状況	47
第42図	中世遺構配置図	49
第43図	中世掘立柱建物跡（1）	50
第44図	中世掘立柱建物跡（2）	51
第45図	中世掘立柱建物跡（3）	52
第46図	中世掘立柱建物跡（5）	53
第47図	中世掘立柱建物跡（7）	54
第48図	中世掘立柱建物跡（8）	55
第49図	中世掘立柱建物跡（9）	56
第50図	中世掘立柱建物跡（10）	57
第51図	中世掘立柱建物跡（11）	58
第52図	中世掘立柱建物跡（12）	59
第53図	中世掘立柱建物跡（14）	60
第54図	中世掘立柱建物跡（15）	61
第55図	中世掘立柱建物跡（16）	62
第56図	中世掘立柱建物跡（17）	63
第57図	中世掘立柱建物跡（18）	64
第58図	中世掘立柱建物跡（19）	65
第59図	中世掘立柱建物跡（20）	66
第60図	中世掘立柱建物跡（21）	67
第61図	中世掘立柱建物跡（22）	68
第62図	中世掘立柱建物跡（24）	69
第63図	中世柱穴群	70
第64図	中世竪穴状遺構	76
第65図	中世溝状遺構	78
第66図	中世遺物出土状況	81
第67図	中世土師器（1）	82
第68図	中世土師器（2）	83
第69図	中世土師器（3）	84
第70図	中世陶磁器（1）	87
第71図	中世陶磁器（2）	88
第72図	中世陶磁器（3）	89
第73図	近世溝状遺構	92
第74図	条の状態と模式図	93

市堀遺跡

第1図	市堀遺跡位置図	95
-----	---------	----

第2図	グリッド図	96
第3図	土層断面図（1）	97
第4図	土層断面図（2）	98
第5図	縄文時代早期土器	99
第6図	縄文時代早期石器	100
第7図	縄文時代晩期遺構配置図	102
第8図	縄文時代晩期掘立柱建物跡	103
第9図	縄文時代晩期柱穴列（1）	105
第10図	縄文時代晩期柱穴列（2）	106
第11図	Ⅲ層遺物出土状況図	108
第12図	Ⅲ層遺物出土状況拡大図	109
第13図	縄文時代晩期出土土器（1）	110
第14図	縄文時代土器（2）・石器	111
第15図	中世遺構配置図	113
第16図	中世掘立柱建物跡（1）	114
第17図	中世掘立柱建物跡（2）	115
第18図	中世掘立柱建物跡（3）	116
第19図	中世掘立柱建物跡（4）	118
第20図	中世掘立柱建物跡（5）	119
第21図	中世掘立柱建物跡（6）	120
第22図	竪穴状遺構	122
第23図	出土土師器	122

大門口遺跡

第1図	大門口遺跡位置図	124
第2図	グリッド図	125
第3図	土層断面図（1）	126
第4図	土層断面図（2）	127
第5図	縄文時代早期土器（1）	129
第6図	縄文時代早期土器（2）	130
第7図	縄文時代前期～後期土器	132
第8図	縄文時代晩期遺構配置図	134
第9図	縄文時代晩期土坑（1）・出土土器	135
第10図	縄文時代晩期土坑（2）	136
第11図	縄文時代晩期掘立柱建物跡（1）	137
第12図	縄文時代晩期掘立柱建物跡（2）	138
第13図	縄文時代晩期掘立柱建物跡（3）	139
第14図	縄文時代晩期柱穴列（1）	141
第15図	縄文時代晩期柱穴列（2）	142

第16図	縄文時代晩期柱穴列（3）	143
第17図	縄文時代晩期柱穴列（4）	144
第18図	Ⅲ層遺物出土状況図	149
第19図	Ⅲ層遺物出土状況拡大図（1）	150
第20図	Ⅲ層遺物出土状況拡大図（2）	151
第21図	縄文時代晩期土器（1）	152
第22図	縄文時代晩期土器（2）	153
第23図	縄文時代晩期土器（3）	154
第24図	縄文時代晩期土器（4）	155
第25図	縄文時代晩期土器（5）	156
第26図	縄文時代晩期土器（6）	157
第27図	石鏃分類図	158
第28図	Ⅲ層出土石器（1）	159
第29図	Ⅲ層出土石器（2）	160
第30図	Ⅲ層出土石器（3）	161
第31図	Ⅲ層出土石器（4）	162
第32図	Ⅲ層出土石器（5）	163
第33図	Ⅲ層出土石器（6）	164
第34図	弥生時代以降土器	165
第35図	近世～現代遺構配置図	166

表 目 次

第1表	遺跡地名表	4
-----	-------	---

馬塚松遺跡

第2表	縄文時代早期土器観察表	13
第3表	縄文時代早期石器観察表	14
第4表	縄文時代前～後期土器観察表	15
第5表	縄文時代晩期土器観察表（1）～（7）	26～35
第6表	縄文時代晩期石器観察表	40
第7表	弥生時代総柱建物跡観察表	42
第8表	弥生時代土器観察表	46
第9表	弥生時代石器観察表	47
第10表	中世掘立柱建物跡観察表（1）	71
第11表	中世掘立柱建物跡観察表（2）	72
第12表	中世掘立柱建物跡観察表（3）	73
第13表	中世掘立柱建物跡観察表（4）	74
第14表	中世掘立柱建物跡観察表（5）	75

第15表	中世遺構内遺物觀察表……………75
第16表	中世溝狀遺構埋土觀察表……………78
第17表	中世出土遺物觀察表（1）土師器……………85
第18表	中世出土遺物觀察表（2）黑色土器……………85
第19表	中世出土遺物觀察表（3）瓦質土器……………85
第20表	中世出土遺物觀察表（4）青磁・白磁他 90

市堀遺跡

第1表	縄文時代早期土器觀察表……………100
第2表	縄文時代早期石器觀察表……………100
第3表	掘立柱建物跡 柱穴計測表……………104
第4表	柱穴列1～3号 柱穴計測表……………106
第5表	柱穴列4～9号 柱穴計測表……………107
第6表	縄文時代晚期土器觀察表……………111
第7表	縄文時代晚期石器觀察表……………111
第8表	1～3号掘立柱建物跡 柱穴計測表……………117
第9表	4号掘立柱建物跡 柱穴計測表……………118
第10表	5～8号掘立柱建物跡 柱穴計測表……………121
第11表	竪穴狀遺構柱穴計測表……………122
第12表	中・近世土器觀察表……………122

大門口遺跡

第1表	縄文時代早期土器觀察表……………130
第2表	縄文時代前期～後期土器觀察表……………131
第3表	遺構内出土土器觀察表……………135
第4表	掘立柱建物跡 柱穴計測表（1）……………139
第5表	掘立柱建物跡 柱穴計測表（2）……………140
第6表	柱穴列 柱穴計測表（1）……………143
第7表	柱穴列 柱穴計測表（2）……………145
第8表	柱穴列 柱穴計測表（3）……………146
第9表	柱穴列 柱穴計測表（4）……………147
第10表	縄文時代晚期土器觀察表……………157
第11表	Ⅲ層出土石器觀察表……………162
第12表	弥生時代以降土器觀察表……………165

図 版 目 次

馬塚松遺跡

図版1	掘立柱建物跡検出状況（空撮）……………176
-----	------------------------

図版2	縄文時代早期・弥生時代遺構他……………177
図版3	中世掘立柱建物跡……………178
図版4	中世掘立柱建物跡，竪穴狀遺構他……………179
図版5	中世溝狀遺構他……………180
図版6	縄文時代早期土器（1）……………181
図版7	縄文時代早期土器（2）……………182
図版8	縄文時代晚期土器（1）……………183
図版9	縄文時代晚期土器（2）……………184
図版10	縄文時代晚期土器（3）……………185
図版11	縄文時代晚期土器（4）……………186
図版12	縄文時代晚期土器（5）……………187
図版13	縄文時代晚期土器（6）……………188
図版14	縄文時代石器（1）……………189
図版15	縄文時代石器（2）……………190
図版16	縄文時代石器（3）……………191
図版17	弥生時代石器……………191
図版18	弥生時代土器……………192
図版19	中世遺物（青磁・黑色土器・土師器）……………193

市堀遺跡

図版1	縄文時代晚期掘立柱建物跡・柱穴列 中世掘立柱建物跡・竪穴狀遺構他……………194
図版2	縄文時代早期土器・石器……………195
図版3	縄文時代晚期土器……………196
図版4	縄文時代晚期石器・土師器……………197

大門口遺跡

図版1	縄文時代晚期掘立柱建物跡・柱穴列 遺物出土状況他……………198
図版2	縄文時代早期土器（1）……………199
図版3	縄文時代早期～後期土器……………200
図版4	縄文時代晚期土器（1）……………201
図版5	縄文時代晚期土器（2）……………202
図版6	縄文時代晚期土器（3）……………203
図版7	縄文時代晚期土器（4）……………204
図版8	Ⅲ層出土石器（1）……………205
図版9	Ⅲ層出土石器（2）……………206
図版10	Ⅲ層出土石器（3）……………207
図版11	弥生時代以降土器……………207

馬 塚 松 遺 跡

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

県農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は、「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島島の形成」の一環として、鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置郡吹上町・金峰町（現日置市吹上町・南さつま市金峰町）地区内において計画した。

このため農開総センター整備事務局は、本事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課、以下文化財課）に照会を行なった。これを受けた文化財課は平成6年11月に分布調査を実施した。その結果、事業区域内の対象面積 1,347,900㎡に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて、県農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することとした。

確認調査は、平成8・9年度に実施した。確認調査の結果、24遺跡（約10,000㎡）が存在することが明らかになり、削平される部分等について記録保存のための本調査を平成15年度まで実施した。

報告書作成のための整理作業は平成15年度からはじめて、平成16年度に日置市（旧吹上町）に所在する7遺跡の報告書を刊行した。

第2節 調査の組織

平成17年度

事業主体 鹿児島県農業開発総合

センター整備事務局

作成主体

鹿児島県教育委員会

作成総括

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 上今 常雄

作成企画

〃 次長兼総務課長 有川 昭人

〃 次長兼調査第一課長 新東 晃一

〃 主任文化財主事兼調査第一課

第一調査係長 池畑 耕一

〃 主任文化財主事 中村 耕治

事務担当

〃 主幹兼総務係長 平野 浩二

〃 主 事 田之畑美幸

整理担当

〃 主任文化財主事 中村 耕治

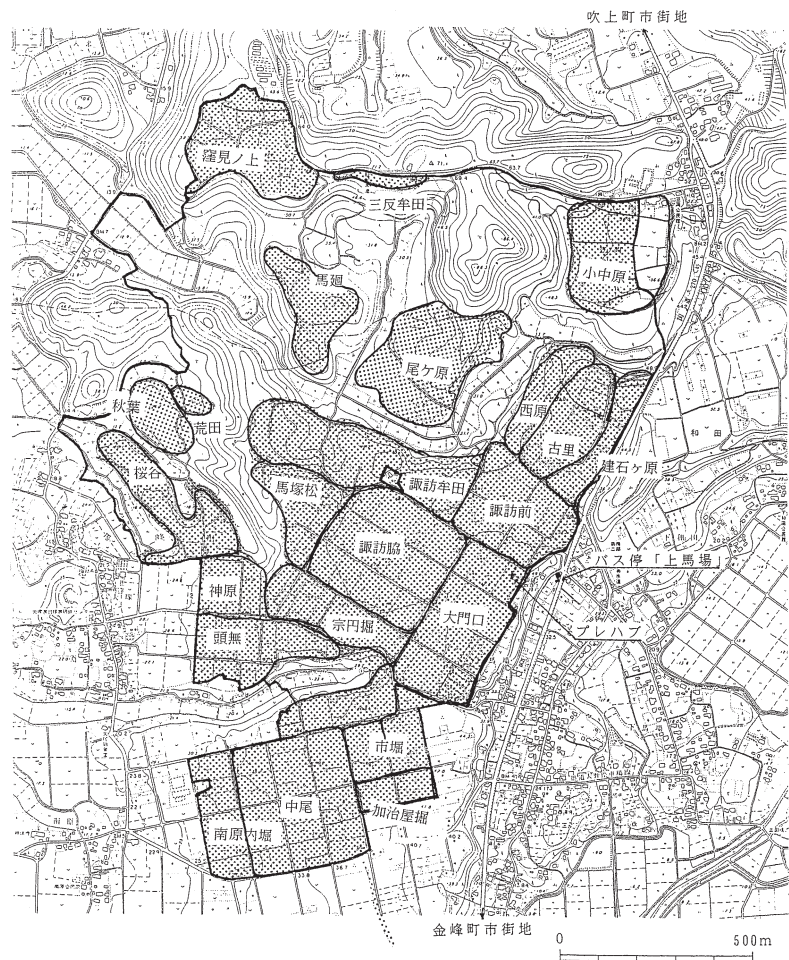
〃 文化財主事 藤崎 光洋

〃 文化財主事 湯之前 尚

〃 文化財主事 日高 正人

〃 文化財主事 山崎 克之

〃 文化財研究員 川元 禎久



第1図 農業開発総合センター内遺跡群位置図

目次

巻頭カラー

- 1 馬塚松遺跡空中写真
- 2 馬塚松遺跡出土遺物
- 3 市堀遺跡空中写真
- 4-① 大門口遺跡空中写真
- 4-② 大門口遺跡出土遺物

序文

報告書抄録

例言

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経緯	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 周辺遺跡	3
第Ⅲ章 層序	5
第Ⅳ章 馬塚松遺跡	6
第1節 調査の概要	6
1 遺跡の立地及び調査概要	6
2 遺跡の層序	6
第2節 発掘調査の成果	10
1 縄文時代早期の調査	10
(1) 遺構	10
(2) 遺物	11
2 縄文時代前～後期の調査	15
遺物	15
3 縄文時代晩期の調査	17
遺物	17
4 弥生時代の調査	42
(1) 遺構	42
(2) 遺物	44
5 中世の調査	48
(1) 遺構	48
(2) 遺物	79
6 近世の調査	91

遺構	91
第3節 小結	93
第Ⅴ章 市堀遺跡	95
第1節 調査概要	95
1 遺跡の立地及び調査概要	95
2 遺跡の層序	95
第2節 発掘調査の成果	99
1 旧石器時代・縄文時代早期の調査	99
遺物	99
2 縄文時代晩期の調査	101
(1) 遺構	101
(2) 遺物	101
3 中世・近世の調査	112
(1) 遺構	112
(2) 遺物	112
第3節 小結	123
第Ⅵ章 大門口遺跡	124
第1節 調査概要	124
1 遺跡の立地及び調査概要	124
2 遺跡の層序	124
第2節 発掘調査の成果	128
1 縄文時代早期の調査	128
遺物	128
2 縄文時代前期・中期・後期の調査	131
遺物	131
3 縄文時代晩期の調査	133
(1) 遺構	133
(2) 遺物	133
4 Ⅲ層出土の石器	158
5 弥生時代以降の調査	165
(1) 遺構	165
(2) 遺物	165
第3節 小結	167

挿図目次

第1図 農業開発総合センター内遺跡群位置図	1
第2図 周辺遺跡地図	4
第3図 模式柱状図	5

第3節 調査の経緯

馬塚松遺跡

平成9年度

- 8月 重機による表土剥ぎ、Ⅱ層で溝状遺構検出
- 9月 Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ、遺構検出、遺物取り上げ、Ⅱ層コンタ図作成
- 10月 Ⅱ・Ⅲ層溝状・道状遺構検出及び実測、Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ
- 1月 三木靖先生による現地指導（荒田・諏訪牟田・南原遺跡を含む）
- 2月 拡張部分掘り下げ・遺構検出、掘り下げ、実測・コンタ図作成
- 3月 遺構検出及び実測、Ⅲ層上面で航空撮影

平成10年度

弥生時代前期の遺物出土、弥生時代の2間×2間の総柱建物跡検出、諏訪前遺跡の調査優先のため移動

平成13年度

- 5月 Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ、遺物取り上げ、掘立柱建物跡精査・実測
- 6月 Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ、遺物取り上げ、ピット実測、下層確認のトレンチ調査
- 7月 掘立柱建物跡・ピット精査・実測
- 8月 下層確認のトレンチ調査、ピット掘り下げ
- 9月 掘立柱建物跡精査・実測
Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、Ⅳ層集石検出・実測
- 10月 Ⅲ層上面掘立柱建物跡・ピット精査・実測

市堀遺跡

平成9年度

- 6月～7月 確認調査

平成12年度

- 2月 表土剥ぎ、Ⅱ層掘り下げ
下層確認トレンチ設定・掘り下げ、遺構検出
- 3月 Ⅱ層掘り下げ、遺物取り上げ、遺構検出・掘り下げ・実測

平成15年度

- 7月 表土剥ぎ、Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ
- 8月 Ⅲ層掘り下げ、遺構検出、下層確認トレンチ

設定・掘り下げ・遺物取り上げ

- 9月 遺構検出・実測、トレンチ掘り下げ
- 12月 道路拡張部分表土剥ぎ、Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ
遺構検出
- 1月 遺構検出・掘り下げ・実測、下層確認トレンチ設定・掘り下げ・実測
- 12月 道路拡張部分表土剥ぎ・Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ
遺構検出
- 1月 遺構検出・掘り下げ・実測、下層確認トレンチ設定・掘り下げ・実測

大門口遺跡

平成9年度

- 6月～7月 確認調査
- 12月 一部本調査実施、遺構検出、遺物取り上げ
- 1月 遺構検出、遺物取り上げ、実測

平成12年度

- 4月 表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ
- 5月 Ⅱ層掘り下げ、遺物取り上げ、遺構検出、掘り下げ
- 6月 Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ、遺物取り上げ・遺構掘り下げ・実測・写真撮影、コンタ図作成
- 9月 Ⅱ層掘り下げ、遺物取り上げ、遺構検出・掘り下げ・実測・測量・写真撮影
- 10月 Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ、遺構検出
- 11月 下層確認トレンチ設定・掘り下げ、遺構掘り下げ
- 12月 Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ、遺物取り上げ、遺構検出・実測

- 1月 遺構検出・掘り下げ・実測

- 2月 遺構検出・掘り下げ・実測

平成13年度

- 5月 Ⅱ層掘り下げ、遺物取り上げ・下層トレンチ設定・掘り下げ、遺構検出・掘り下げ・実測
道路拡張部分本調査・遺物取り上げ

平成17年度

- 4月～9月まで整理作業を実施。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は南さつま市金峰町大野と日置市吹上町和田・中之里・入来にまたがって計画され敷地面積 180 ㏊と広範囲におよぶものである。

金峰町は南さつま市の最北部を占め、北側は日置市吹上町、東から東南部にかけては川辺町・鹿児島市、南側は万之瀬川を隔てて南さつま市加世田と接している。また、西側は吹上浜によって東シナ海に面する。金峰山がほぼ中央にそびえ、東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また、万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し、谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の阿多貝塚、弥生時代の高橋貝塚・松木園遺跡、古墳時代の中津野遺跡が知られているが、近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で、持鉢松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

第2節 周辺遺跡

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが、大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。

遺跡は大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡・市堀遺跡・中尾遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡とほぼ全域にわたって遺跡が存在し、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町は古くより発掘調査が行なわれ、県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で、人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出

土した遺跡であるが、現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の夥しい遺物が出土している。その中には、南島との交流をうかがわせる遺物（南島系の土器）もみられる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で、粃痕の認められる土器片が出土し、早くから稲作が行なわれていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡に後続するものであるが、弥生時代前期の土器（高橋式）と共に粃痕のある土器片・柱状挟入石器・ノミ形石器・磨製石鏃・磨製石剣・石鎌・石包丁等が共に出土しており、稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また、貝塚を形成することや南海産のゴホウラ貝が出土することから、海洋性に富んでおり南島と北部九州などの中継地としての位置付けも重要視されている。下小路遺跡では、鹿児島県では数少ない合口甕棺が発見され、弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。松木園遺跡は、限られた範囲の調査であるが、弥生時代後期の大溝（幅 4 ～ 5 m ・深さ 3 m の V 字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また、溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。中津野遺跡からは、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では、持鉢松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており、南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。平成 16 ・ 17 年の調査では縄文時代後期の足形土製品が渡畑遺跡と芝原遺跡から出土し接合している。荒平古窯跡群は県内でも数少ない古代の須恵器窯で、生産遺跡の研究上欠かせないものである。

第1表 遺跡地名表（南さつま市金峰町）

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
1	塚山	大野	古墳	22	寺下	大野	中世
2	大塚	〃	古墳	23	京田	〃	縄文・古墳・中世
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期・弥生・古墳	24	京田原	〃	古墳
4	諏訪牟田	〃	縄文・古墳・古代・中世	25	鎮守尾	〃	古墳・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期	26	南原A	〃	縄文中期・後期
6	馬塚松	〃	縄文早期・晩期・中世・近世	27	砂漠	池辺	古墳
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世	28	小堀	〃	古墳・古代
8	大門口	〃	縄文早期・晩期	29	萩ノ上	〃	古墳
9	宗円堀	〃	旧石器・縄文早期・中世	30	地頭堀	〃	古墳・古代
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期	31	塩屋堀	〃	古墳
11	秋場	〃	旧石器	32	玄同堀	〃	古墳・中世
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33	主水堀	〃	弥生・古墳
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34	秋葉下	〃	古墳
14	頭無	〃	縄文早期・古代	35	島田	〃	古墳
15	市堀	〃	縄文早期・中世	36	宮園	〃	古墳・古代
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37	牟礼ヶ城跡	〃	中世
17	加治屋堀	〃	縄文	38	小城田	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39	本寺	〃	古墳
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期	40	前平	〃	縄文・古墳
20	南原外堀	〃	古墳・古代	41	宮の前	〃	縄文・古代
21	原口	〃	古墳・古代				



第2図 周辺遺跡（日置市吹上町・南さつま市金峰町）

第Ⅲ章 層 序

I 層 灰黒色	農業開発総合センター予定地は、南さつま市金峰町と日置市吹上町にまたがる南北2km、東西1.5kmの広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり、山・台地・沖積地・開析谷と変化に富んでいる。そのために、それぞれの地点で層序が異なっている。第3図は台地部分の標準的な地層の模式図である。 また、以下の各層の説明も標準的なものである。 I 層 灰黒色土 現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってⅡ層との区別が可能である。地点によってはa・b・cの3層に細分できる。I c層は黒色に近い色調であるが、3cm大の白色軽石が混在している。中世末から近世初めの層である。I層の平均的な厚さは20cm程度であるが、圃場整備により削除されたり、盛り土されたりしており一定ではない。 Ⅱ層 黒色土 弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが、谷の部分などを中心に良好に残存している。層厚10～30cm。 Ⅲ層 黄橙色火山灰土 鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰(BP6,400年)とその腐植土である。上位(Ⅲa層)はⅡ
Ⅱ層 黒 色	
Ⅲ層 黄橙色火山灰	
Ⅳ層 黄褐色	
Ⅴ層 黒褐色	
Ⅵ層 暗黄褐色火山灰	
Ⅶ層 明茶褐色	
Ⅷ層 茶褐色粘質	
Ⅸ層 暗茶褐色粘質	
X層 黄橙色シルト質	
XI層 白色シラス	

第3図 模式柱状図 層との漸位層であり、やや黒色

を帯びる。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包含層である。中位(Ⅲb層)は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位(Ⅲc層)はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが、残存状況は悪くⅣ層との境目が明瞭ではない。層厚30～40cm。

Ⅳ層 黄褐色土

Ⅲ層と類似するが、より褐色味を帯び粘質である。縄文時代早期の遺物包含層で層厚20～30cm。

Ⅴ層 黒褐色土

硬質でよくしまる。2～3cm大の黄橙色のパミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層で層厚30cm。

Ⅵ層 暗黄褐色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰(BP11,500年)である。非常に薄くブロック状に堆積している。厚い所で15cm程度堆積している。

Ⅶ層 明茶褐色土

粘質土であるが、火山灰の混入によるザラついた感触をもつ。縄文時代草創期の遺物包含層で層厚10cm。

Ⅷ層 茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

Ⅸ層 暗茶褐色粘質土

Ⅷ層とほとんど同じ土質であるが、やや褐色土味を帯び、シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30cm。

X層 黄橙色シルト質(シラス質)

シラスの腐食したもので、5cm大の黄色軽石を含む。上位は旧石器時代(ナイフ形石器文化)の遺物包含層である。層厚80cm。

XI層 白色シラス

始良カルデラ起源のシラス(BP24,500年)である。近辺の露頭では十数mの堆積がみられる。

尾ヶ原遺跡も標準的な地層であるが、傾斜地及び丘陵の裾部においてはⅡ・Ⅲ層等の上層部が消失しており、表土を剥ぐと縄文時代早期の遺物包含層になる傾向がみられた。下方の平坦面においては上層からよく残り、古代・古墳時代・縄文時代晩期の遺構・遺物がよく残っている。

第Ⅳ章 馬塚松遺跡

第1節 調査の概要

1 遺跡の立地及び調査概要

(1) 遺跡の立地

南さつま市金峰町大字大野字馬塚松に所在し、農業大学校耕種試験場本館，研究棟建設地にあたる。

西から東にかけ急傾斜となる樹林帯および平坦面の畑地に位置している。平坦面の標高は平均約42mである。

東側，南側は大きく開け，金峰山，長屋山が臨める。北側に諏訪神社，諏訪牟田遺跡，東側に諏訪脇遺跡が隣接する。

(2) 調査の概要

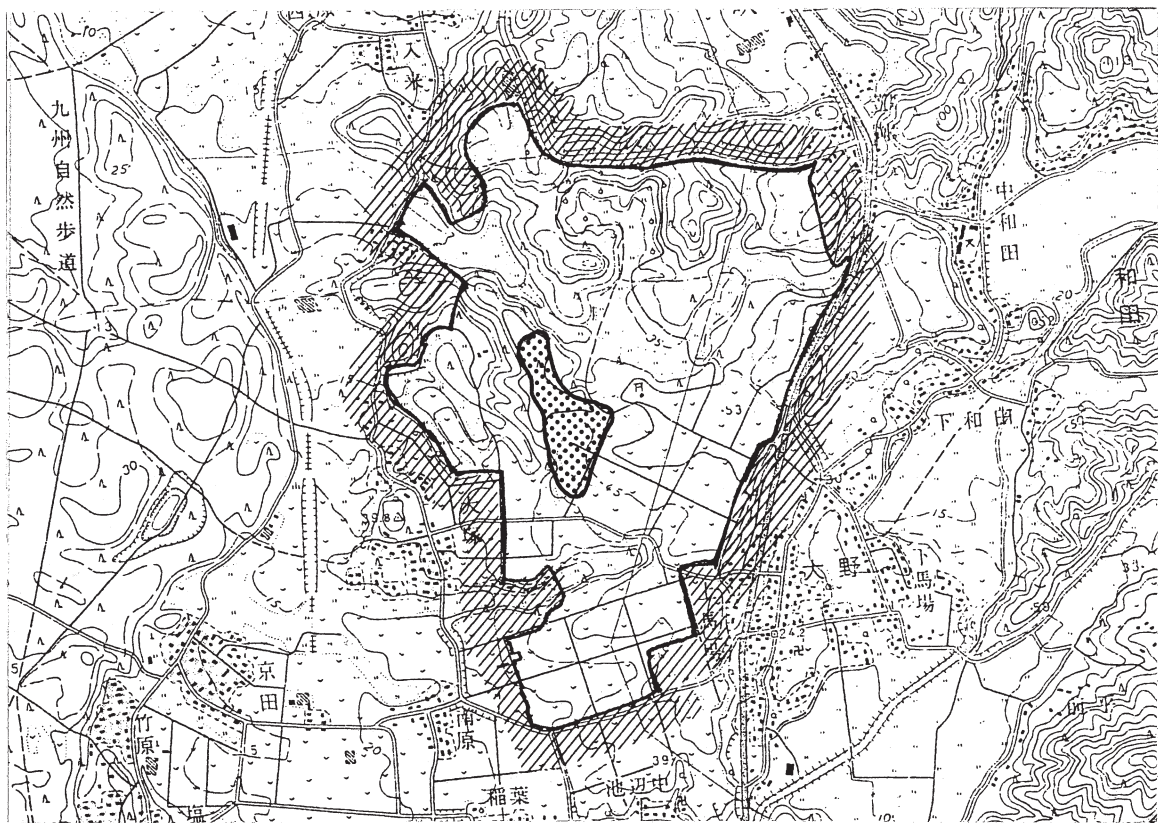
調査は平成9・10・13年度に行われた。主要な遺構・遺物は，縄文時代は早期の集石，土器・石器，前～後期は土器，晩期の土器・石器，弥生時代は総柱建物跡，土器・石器，中世は掘立柱建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，古道，土師器，青磁・白磁類，近世は溝状遺構である。

2 遺跡の層序

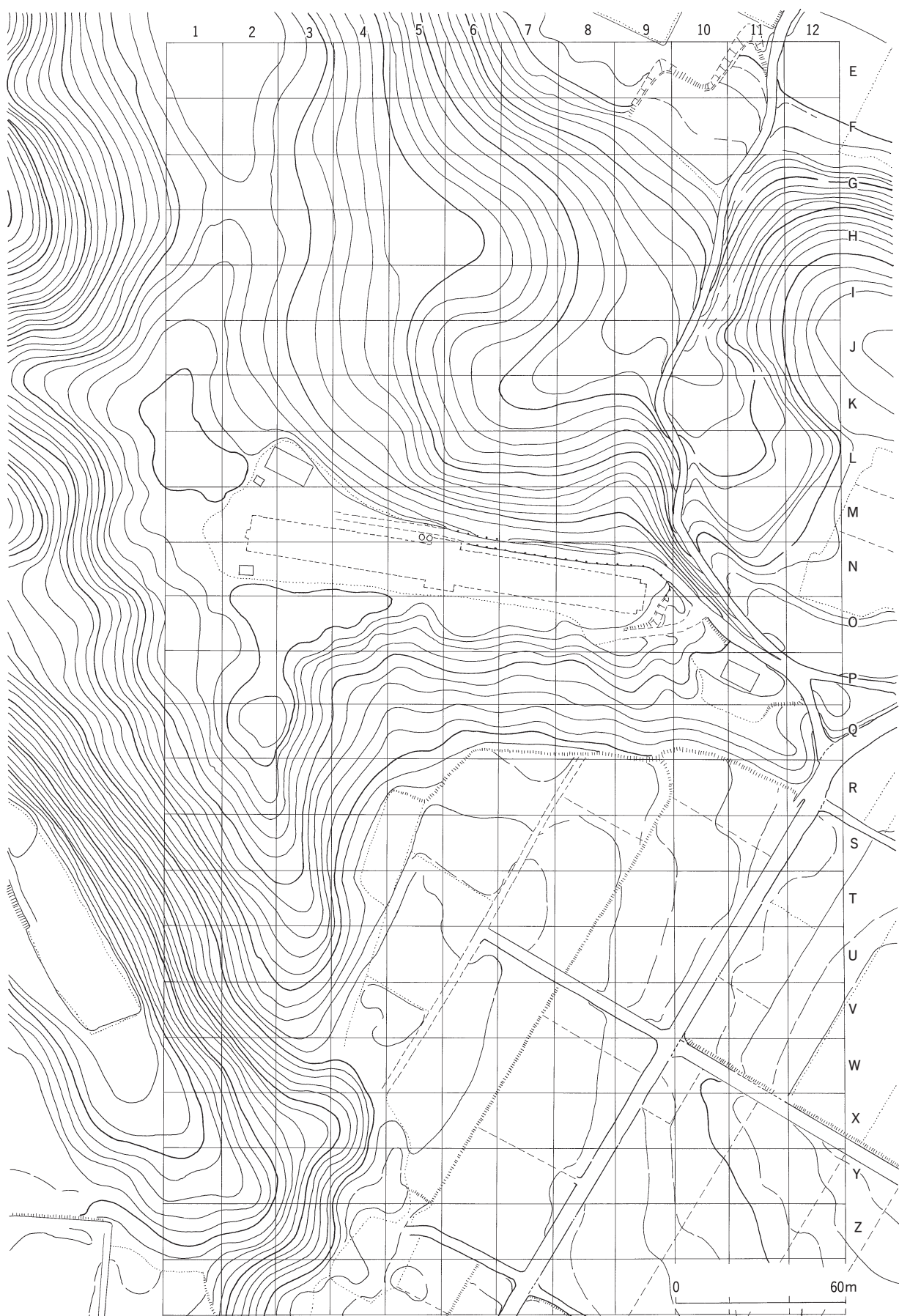
本遺跡の層序は，農業センター遺跡群全体の基準となる台地の層序と基本的に変わらない。

R～T-6～10区は平坦地になるためⅡ層以下の堆積が比較的良好で，遺構・遺物もこのエリアに集中している。ただし，北西側は傾斜する谷状地形を含むため，層序が明確でない地点もある。

第2図はZ-5～V-8区の西側，S-6～9区の北側の土層断面図である。遺物包含層はⅡ～Ⅴ層，全面調査はⅤ層まで行い，下層確認はⅥ層まで行った。



第1図 馬塚松遺跡位置図（1/25,000）



第2図 周辺地形及びグリッド図 (1/2,000)

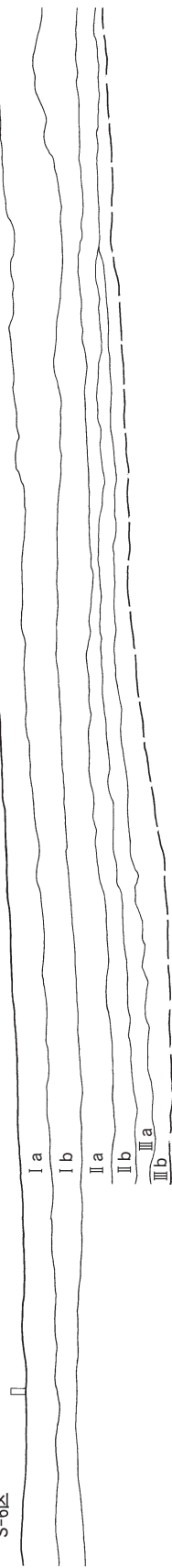
43.30m

S-6区 北壁



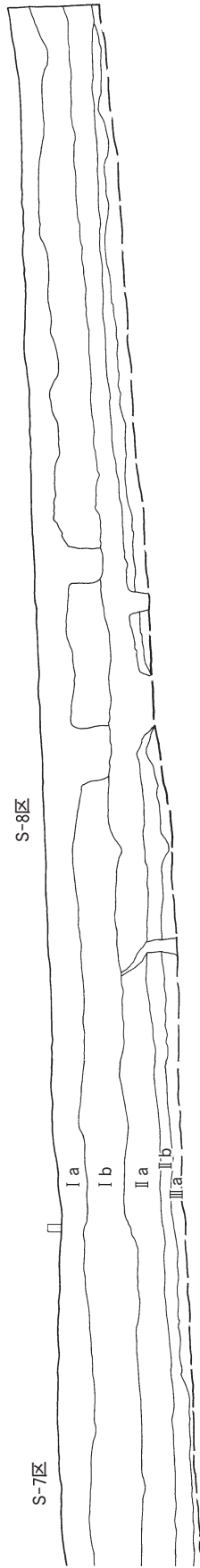
43.30m

S-7区



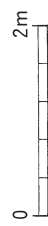
43.30m

S-8区



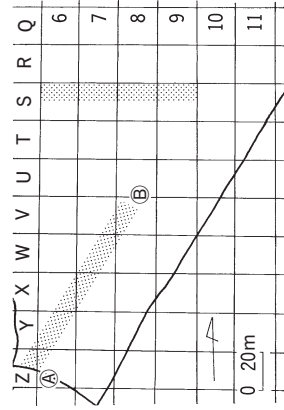
43.30m

S-9区

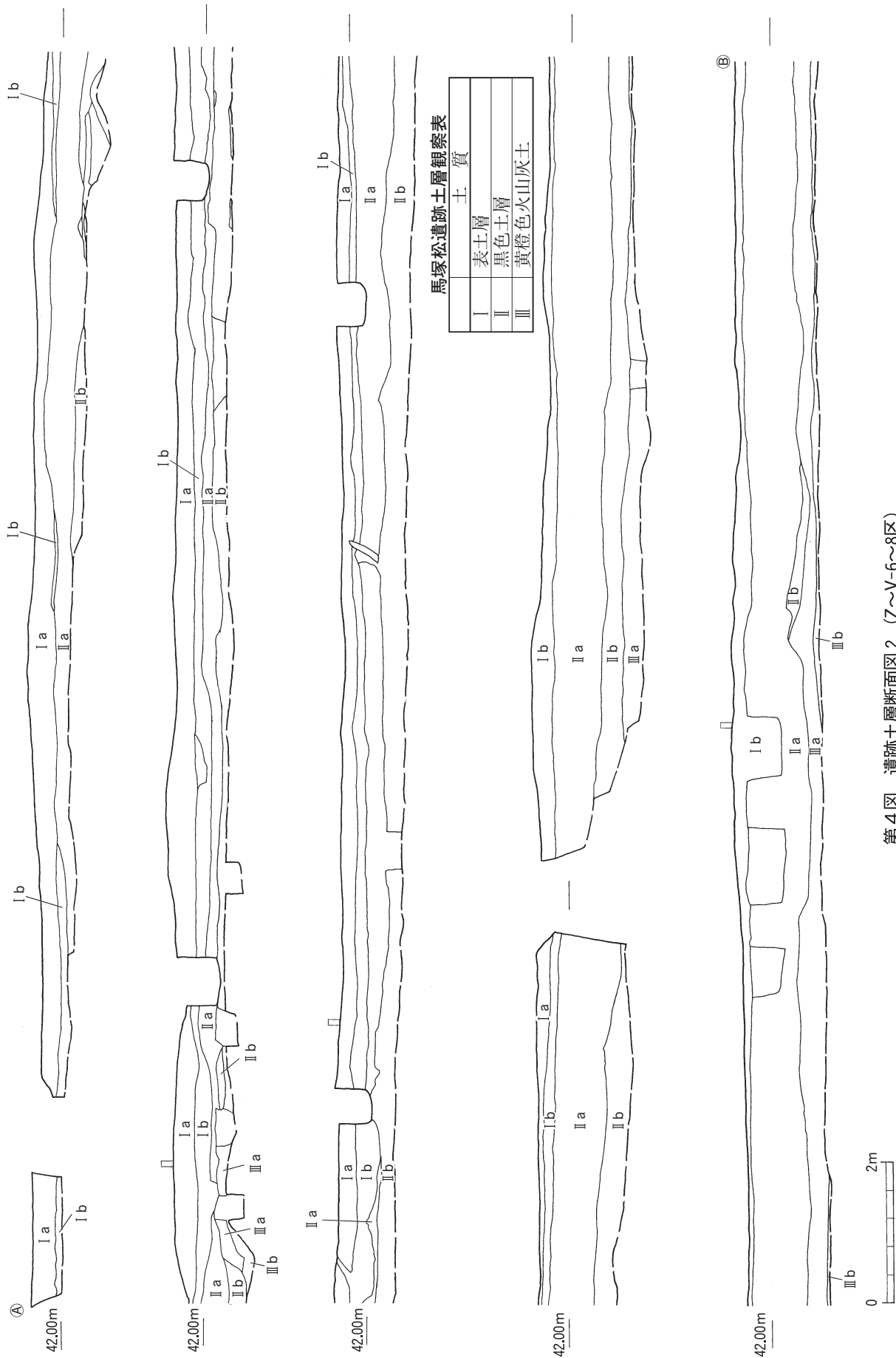


馬塚松遺跡土層観察表

	土質
I	表土層
II	黒色土層
III	黄橙色火山灰土



第3図 遺跡土層断面図1 (S-6~9区)



第4図 遺跡土層断面図2 (Z~V-6~8区)

第2節 発掘調査の成果

1 縄文時代早期の調査

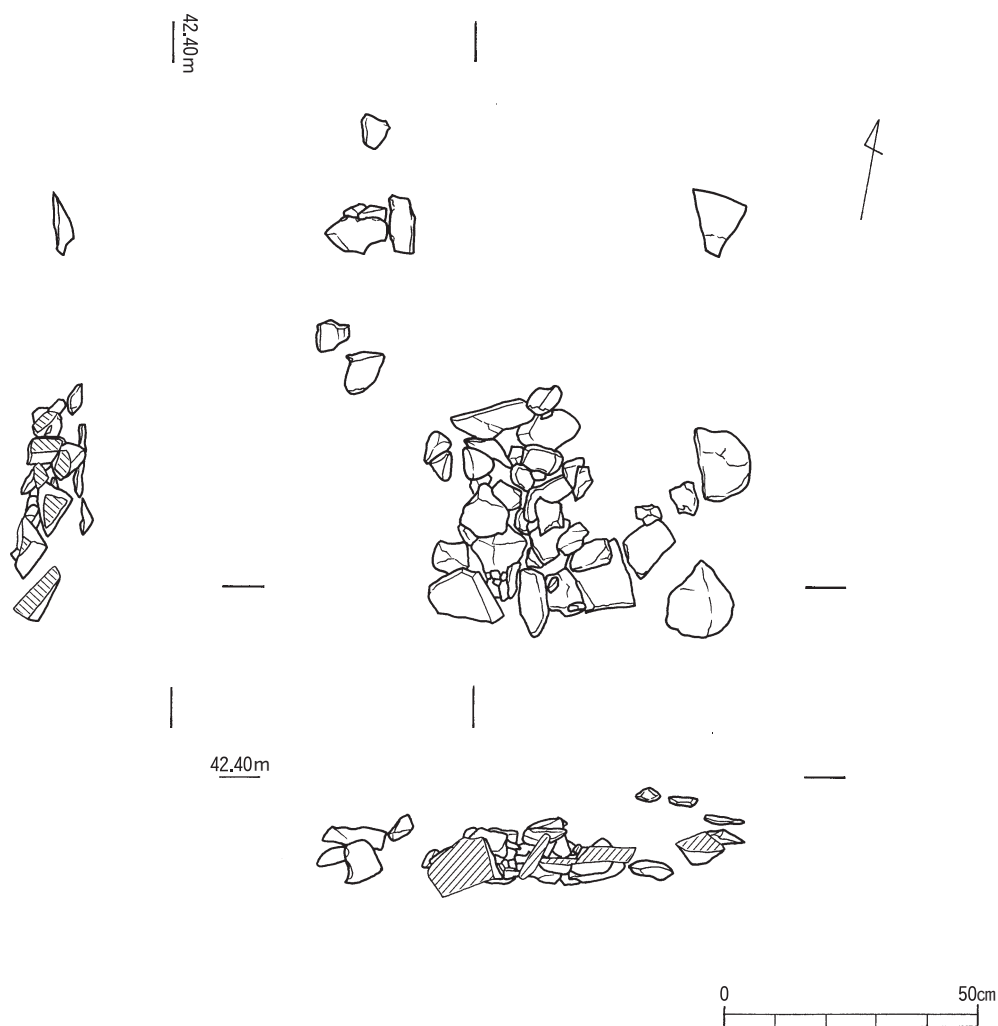
V層上面で集石1基、Ⅲ・Ⅳ層で土器・石器が出土した。早期前葉の遺物が中心であるが、少量である。範囲はR-10区に最も集中しており、遺構の検出地点とも近い。

遺構

(1) 集石 (第5図)

V層上面、S-9区で検出された。石材は凝灰岩を主体に、花崗岩が一割程度混在する。

礫の形状は大小様々だが、10cmを超え、重量も300gを超える比較的大きなものが多く利用されている。礫のまともりは良好で、重なりもみられるが明確な掘り込みは確認できない。被熱による赤化や破碎礫も数点あるが、炭化物はみられない。



第5図 縄文時代早期集石1

遺物

(1) 土器

縄文時代早期の土器29点を、型式よりⅠ～Ⅲ類に分類した。出土点数が少量の遺物は分類をせず、その他の土器として掲載した。

Ⅰ類土器 (第6・7図 1～20)

前平式に相当する。口縁部は貝殻腹縁を縦位に刺突し、胴部には貝殻条痕を横位に施文する。

1～9は口縁部から胴部上半である。1・2は貝殻腹縁を縦位に刺突する。胴部には貝殻条痕文を横位に施している。3～9はへうで縦位に刺突し、8・9はこれを口唇部から口縁端部にかけて羽状に施す。胴部には横位に貝殻条痕文を施す。7～10は胴部である。貝殻による条痕文を横位、あるいは斜めに施す。20は底部である。上げ底で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

Ⅱ類土器 (第7図 21・22)

吉田式に相当する。口縁部に楔状の突起を貼付するのが特徴である。21・22は口縁部下端である。器壁はⅠ類より薄い。21は横位の刻目が4条みられ、その下には貝殻腹縁の刺突を2条施す。22は縦位に楔状の突起を貼付する。突起周辺には刺突による連点文を施す。胴部には貝殻腹縁の刺突を縦位に施す。

Ⅲ類土器 (第7図 23～26)

石坂式に相当する。口縁部は外反し、端部がやや肥厚する。貝殻腹縁部よる刺突文が施される。胴部には貝殻条痕文が綾杉状に施される。底部は平坦で上げ底気味である。

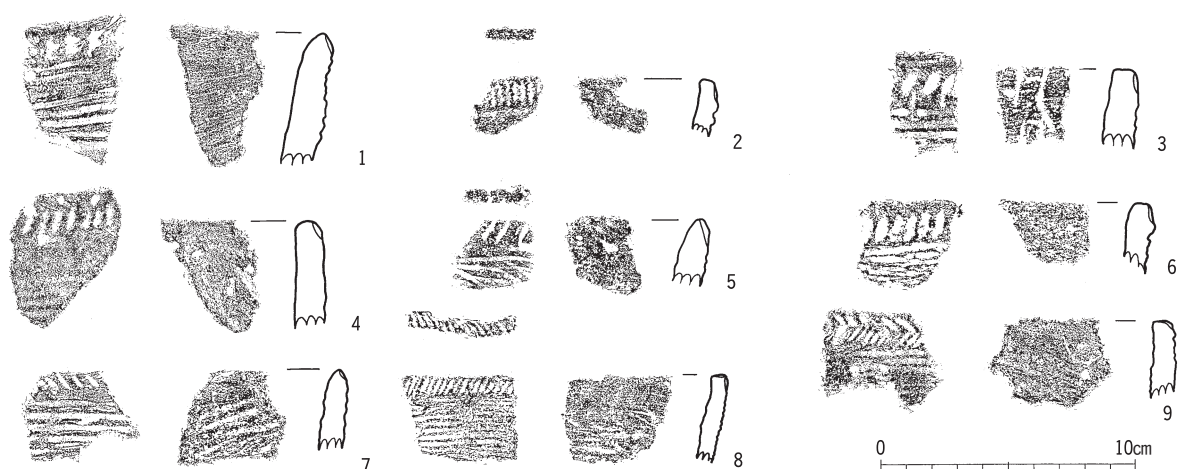
23～25は口縁部である。形状はいずれも口縁部が外反し端部がやや肥厚する。23・25は口唇部内側に刻目、口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が斜位に施される。24は口唇部の刻目が無く、口縁部に貝殻刺突文が斜位に施される。

26は底部である。平底でやや上げ底気味である。胴部最下端には縦位の刻目が施される。

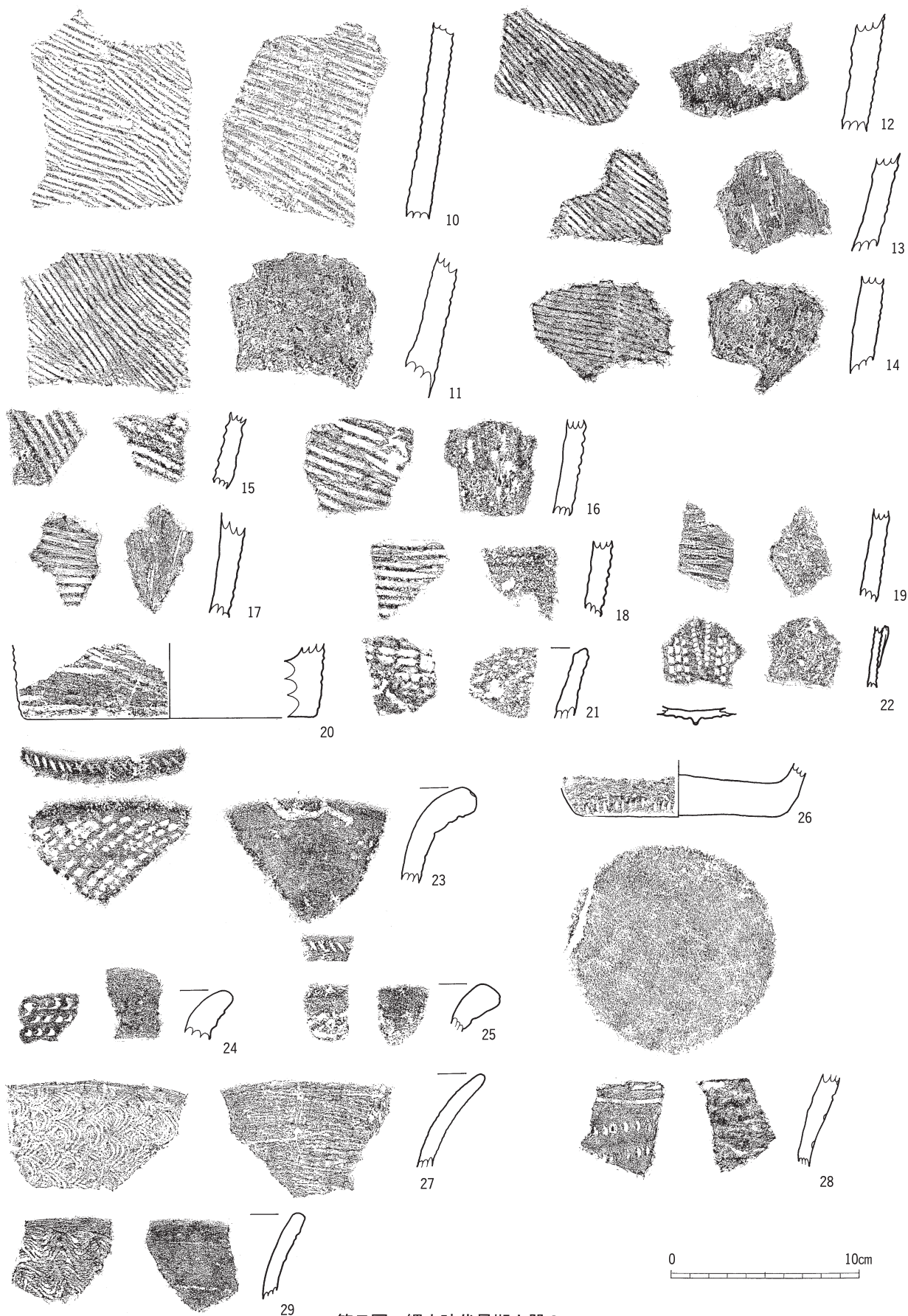
その他の縄文時代早期の土器 (第7図 27～29)

27・28は口縁部で外反する形状である。27は横位に、28は縦位に変形撚糸文を施す。29は塞ノ神式土器の外反する口縁部である。横位に断面U字状の沈線が1条、半裁竹管状の刺突文が2条みられる。

※本文中、各観察表の色調は「新版標準土色帖」2003年版に準拠する。



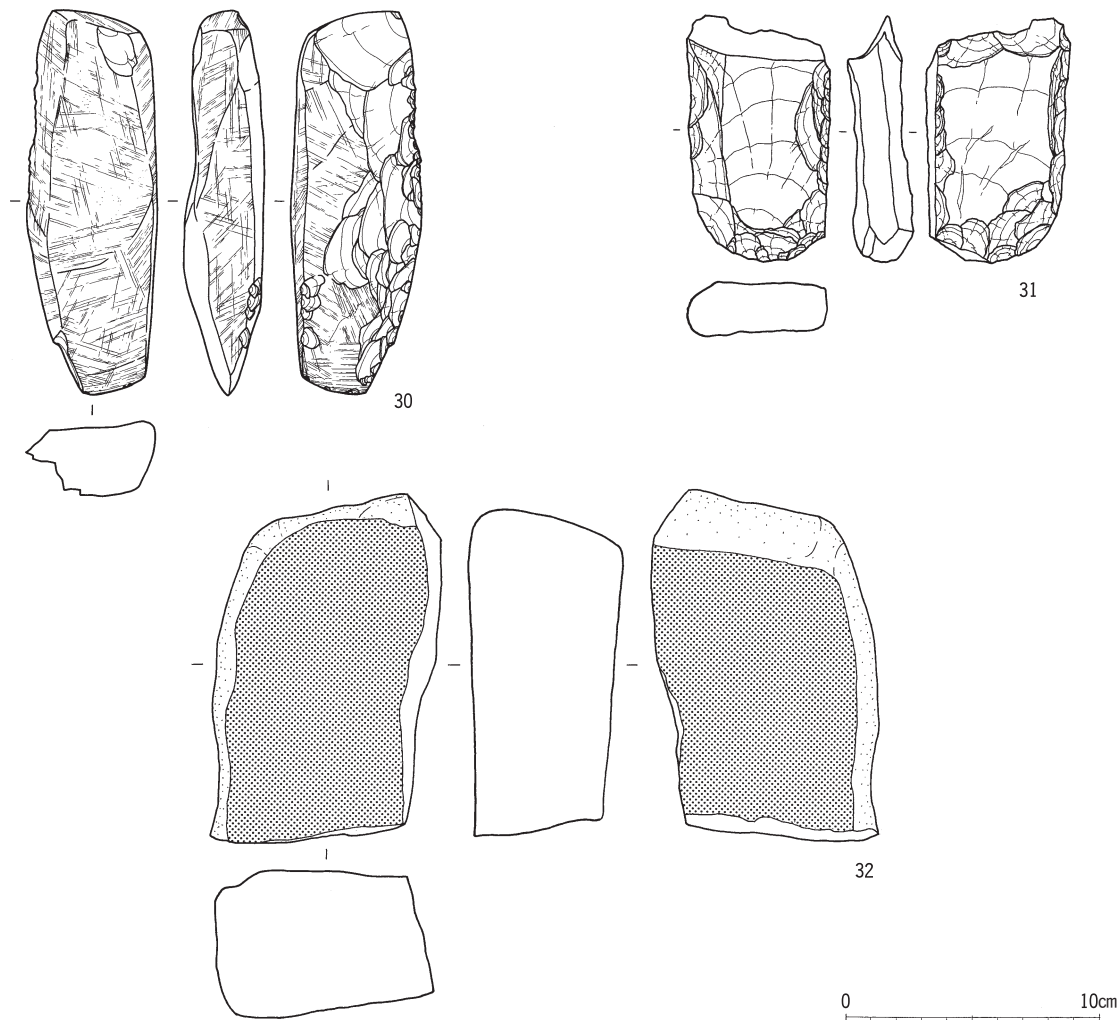
第6図 縄文時代早期土器 1



第7図 縄文時代早期土器 2

第2表 縄文時代早期土器 観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
6	1	9T	Ⅳ	口縁部	5YR4/6灰褐	5YR4/3灰褐	○	○	○		良	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	2	R-10	Ⅳ	口縁部	10YRにふい黄橙	10YRにふい黄橙		○			不良	貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	3	R-10	Ⅳ	口縁部	7.5YR8/4浅黄橙	5YR5/4にふい赤褐			○		良	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	4	R-10	Ⅳ	口縁部	7.5YR5/3にふい橙	7.5YR3/1黒褐		○			良	貝殻条痕・貝殻刺突	ケズリ
	5	R-10	Ⅳ	口縁部	10YR8/4浅黄橙	10YR7/4にふい黄橙					不良	貝殻条痕・貝殻刺突	ケズリ
	6	R-10	Ⅳ	口縁部	2.5YR4/2灰赤	2.5YR5/4にふい赤褐		○			良	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	7	6T	Ⅳ	口縁部	5YR4/2灰褐	5YR4/6赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	8	R-10	Ⅳ	口縁部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR5/3にふい褐		○	○		不良	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	9	R-10	Ⅲ	口縁部	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐		○			良	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ・ケズリ
7	10	R-10	Ⅳ	胴部	5YR6/6橙	7.5YR7/3にふい橙	○				不良	貝殻条痕	ナデ・ケズリ
	11	R-10	Ⅳ	胴部	10R4/8赤	2.5YR5/6明赤褐		○	○		不良	貝殻条痕	ナデ・ケズリ
	12	8T	Ⅳ	胴部	5YR3/1黒褐	5YR4/6赤褐	○				不良	貝殻条痕	ナデ・ケズリ
	13	8T	Ⅳ	胴部	2.5YR4/8赤褐	7.5YR8/4浅黄橙		○			不良	貝殻条痕	ケズリ
	14	R-10	Ⅳ	胴部	5YR4/8赤褐	5YR4/9赤褐		○			不良	貝殻条痕	ケズリ
	15	R-10	Ⅲ	胴部	5YR6/4にふい橙	10YR7/3にふい黄橙	◎				不良	貝殻条痕	ケズリ
	16	9T	Ⅳ	胴部	7.5YR7/4にふい橙	7.5YR8/4浅黄橙		○			良	貝殻条痕	ケズリ
	17	R-10	Ⅳ	胴部	10YR3/2黒褐	10YR3/1黒褐		○			良	貝殻条痕	ナデ・ケズリ
	18	R-10	Ⅲ	胴部	7.5YR5/2灰褐	5YR5/6明赤褐		○	○		不良	貝殻条痕	ナデ・ケズリ
	19	9T	Ⅳ	胴部	5YR4/2灰褐	5YR4/3にふい赤褐	◎	○	○		不良	貝殻条痕	ケズリ
	20	R-10	Ⅳ	底部	5YR5/2灰褐	2.5YR8/2灰白				金雲母	不良	貝殻条痕	ケズリ
	21	R-10	Ⅲ	口縁部	5YR6/6橙	5YR4/2灰褐		○			不良	貝殻押し引き	ケズリ
	22	R-10	Ⅳ	口縁部	5YR6/6橙	5YR6/6橙		○			良	貝殻押し引き	ナデ
	23	表採	表採	口縁部	5YR橙	5YR6/9橙		○	○		不良	貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	24	R-10	Ⅲ	口縁部	5YR橙	5YR6/9橙		○	○		良	貝殻刺突	ナデ
	25	表採	表採	口縁部	5YR橙	5YR6/9橙		○	○		良	貝殻刺突	ナデ
	26	Z-6	Ⅲ	底部	2.5YR5/9明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	○	◎	○		良	貝殻刺突	ナデ・ケズリ
	27	Y-6	Ⅲ	口縁部	7.5YR6/4にふい橙	5YR6/6橙		○			良	撚糸文	ナデ・ケズリ
	28	表採	表採	口縁部	7.5YR5/1褐灰	7.5YR4/1褐灰	○				良	撚糸文	ミガキ
	29	R-6	Ⅲ	胴部	5YR6/6橙	7.5YR6/4にふい橙		○	○		良	貝殻刺突	ナデ



第8図 縄文時代早期石器

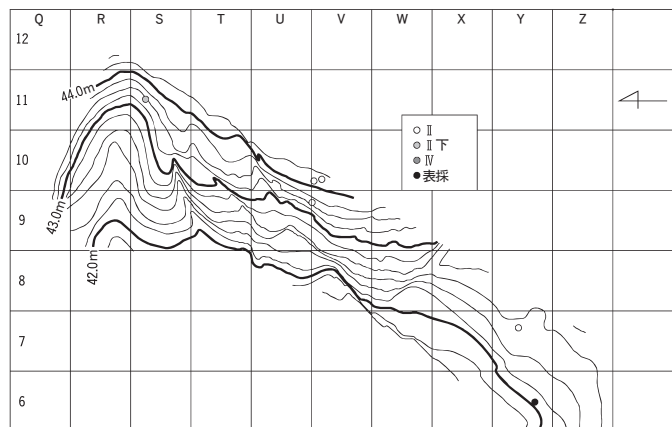
(2) 石器 (第8図 30～32)

石斧 30・31

30は自然礫を利用した縦15.2cm, 横5.3cmの局部磨製石斧である。裏面は片側から剥離を施し、表面・裏面とも自然面を残す。31は打製石斧の欠損品である。表・裏面両方の側縁部に剥離が施されるが一部側縁部に自然面を残す。

石皿 32

32は砂岩製の石皿である。表面・裏面ともに作業面を残すが側縁部は自然面で破損している。



第9図 縄文時代早期石器出土状況

第3表 縄文時代早期石器 観察表

挿図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
8	30	Ⅳ	打製石斧	R-10	頁岩	15	5.2	3.0	339.8	
	31	Ⅳ	打製石斧	R-10	頁岩	9.1	5.5	2.3	165.5	
	32		石皿		砂岩	13.2	7.8	5.0	1200	

2 縄文時代前～後期の調査

遺物

Ⅱ・Ⅲ層で土器片が数点出土している。轟B式、深浦式、阿高式、市来式である。遺構は検出されていない。

33は轟B式の胴部である。ミミズばれ突帯文3条を横位に貼付している。

34は深浦式である。口縁部外面に刻目を施した突帯を2条巡らした後、棒状工具による細い沈線を羽状に巡らせ、内面には連続した貝殻腹縁刺突文を横位に施す。口唇部には連点刺突文を施している。

35は胴部である。接合痕で破損している。不規則な格子状に細い沈線が施される。器壁が薄い。深浦式と思われる。

36・37は阿高式である。36は胴部である。曲線的な凹線文を施す。37は曲線的な凹線文と一部に鈎状

短沈線を施す。胎土に金雲母が認められる。

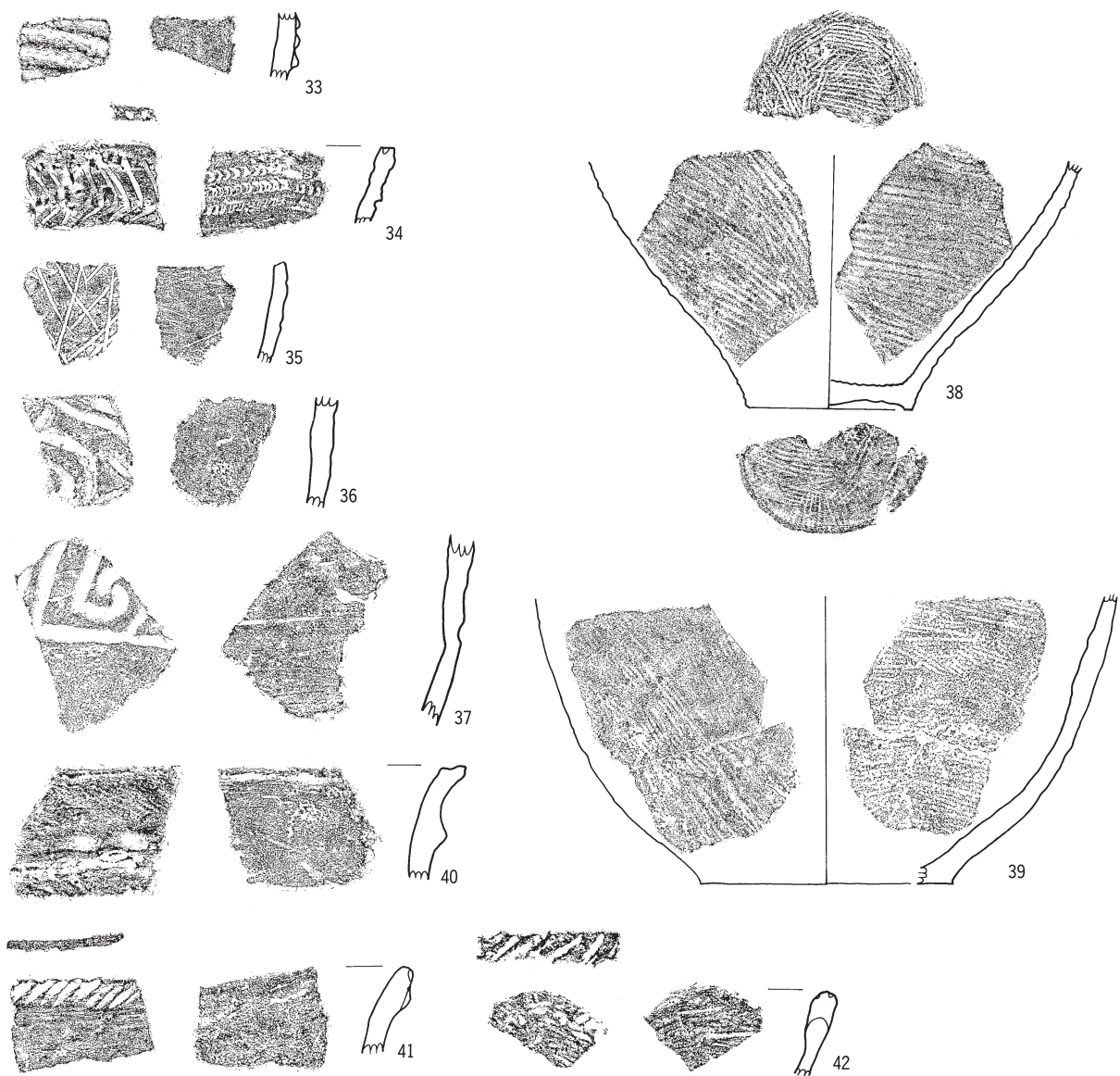
38・39は春日式の胴部から底部である。器面の内外面に条痕が認められ、一部ナデによって消されている。38は平底の底部から丸みを帯びて内弯気味に胴部が立ち上がる。39は上げ底の底部から直線的に立ち上がった胴部は外反した後、上半部にかけて丸みを帯びる。

40・41は市来式の口縁部である。41は粘土紐を貼り付け断面三角形状に肥厚させ、斜めに刻目を施している。40は器面調整後に粘土紐を貼り付け、断面三角形状の突帯にしている。接合部分は上部を丁寧

にナデている。口唇部は平坦に整形している。42は口縁部である。口唇部には斜めに刻みが施され、口縁部には条痕が認められる。形状から波状口縁が想定される。形式名は不明である。

第4表 縄文時代前～後期土器 観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
10	33	表採		胴部	7.5YR6/4にふい橙	5YR6/6橙	○	○	○		良	突帯	ナデ
	34	V-9	Ⅲ	口縁部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR6/4にふい橙			○		不良	沈線	貝殻腹縁刺突
	35	V-9	Ⅲ	胴部	5YR5/3にふい赤褐	10YR5/3にふい黄褐		○	○		不良	沈線	ナデ
	36	X-8	Ⅲ	胴部	10YR5/3にふい黄褐	7.5YR6/4にふい橙		○	○		良	凹線	ナデ
	37	X-8	Ⅲ	胴部	10YR5/3にふい黄褐	7.5YR6/4にふい橙		○	○	金雲母	良	凹線、短沈線	ナデ
	38	S-10 S-11	Ⅲ	胴部～底部	5YR5/6明赤褐	10YR5/4にふい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕	貝殻条痕
	39	表採	Ⅲ	胴部～底部	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	○		良	貝殻条痕	貝殻条痕
	40	R-9	Ⅲ	口縁部	5YR6/6橙	5YR5/4にふい赤褐		○	○		良	突帯	ナデ
	41	S-9	Ⅲ	口縁部	7.5YR4/2褐	2.5YR5/6明赤褐				火山ガラス	良	篋沈線・突帯	ケズリ
	42	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5YR6/6橙	2.5YR4/4にふい赤褐		○	○	火山ガラス	良	篋沈線・貝殻条痕	ケズリ



第10図 縄文時代前～後期土器

3 縄文時代晩期の調査

遺物

縄文時代後期末から晩期の土器は、上加世田式の新しい段階に該当するものから入佐式土器～黒川式土器に該当する土器が出土した。

①深鉢形土器（第12～24図 43～168）

本遺跡では完形に近い土器が少量のため、器形で分けた上で各部位の特徴から更に分類した。

（口縁部）

I 類土器（第12図 43～60）

頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲し口縁部がやや外傾もしくは直行する。器壁はやや薄く、口縁部文様帯の段が明瞭である。口縁部には数条の沈線が施される。43～54は沈線が明瞭・精緻だが、55～60はやや粗雑である。

II 類土器（第13～18図 61～114）

口縁部文様帯の段が明瞭なものと不明瞭になるものに細分した。

II a 類土器（第13図 61～64）

口縁部文様帯の段が明瞭で器壁がやや厚い。口縁部は斜位の粗雑な条痕が施される。

II b 類土器（第13～18図 65～119）

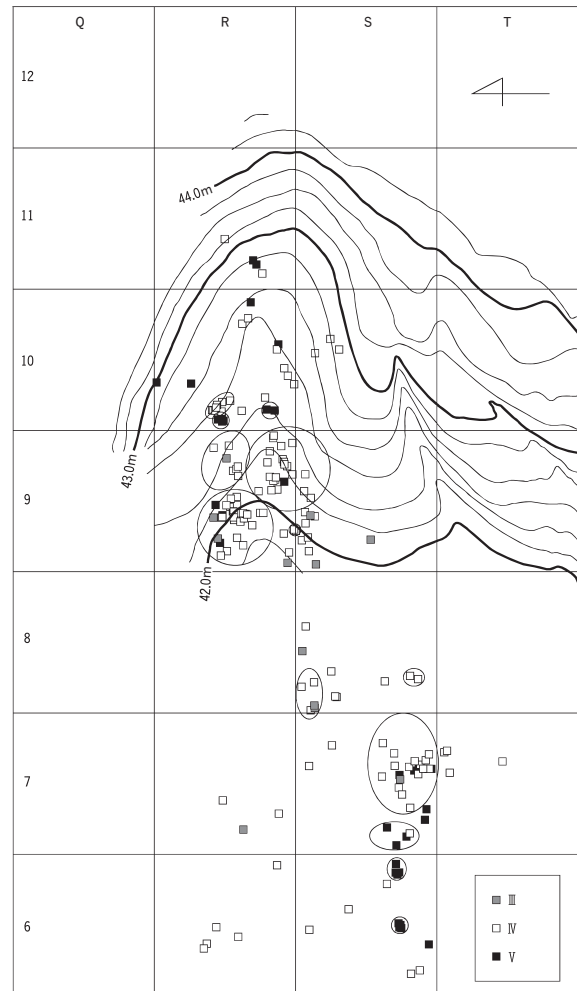
口縁部文様帯の段が不明瞭なものである。76・82～85は無文である。74の口縁部文様帯は不明瞭な沈線・条痕上に鋸歯文が施される。

86～97では92は口縁部上半が内弯するが、その他は外傾し、幅が広く無文で器壁は厚い。器面調整は外面がケズリ、内面はナデによる。胴部は明瞭な稜をもたない。100は外面の全面に条痕が施されるがその他は無文である。

111～114の底部は立ち上がり外傾し、明瞭な稜をもつ胴部から頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。内外面とも丁寧なヘラナデによる調整がみられる。器壁は厚手で口縁部文様帯には不明瞭な条痕が施されている。

II c 類土器（第18図 115～119）

115～119の胴部は、緩やかな曲線を描きながら立ち上がり、胴部に明瞭な稜をもたない。全体的に器壁は薄い、口縁部中位はやや肉厚である。口縁部



第11図 縄文時代晩期遺物出土状況

文様帯には不明瞭な条痕が施されており、内面ともヘラナデ・ケズリによる調整が施される。

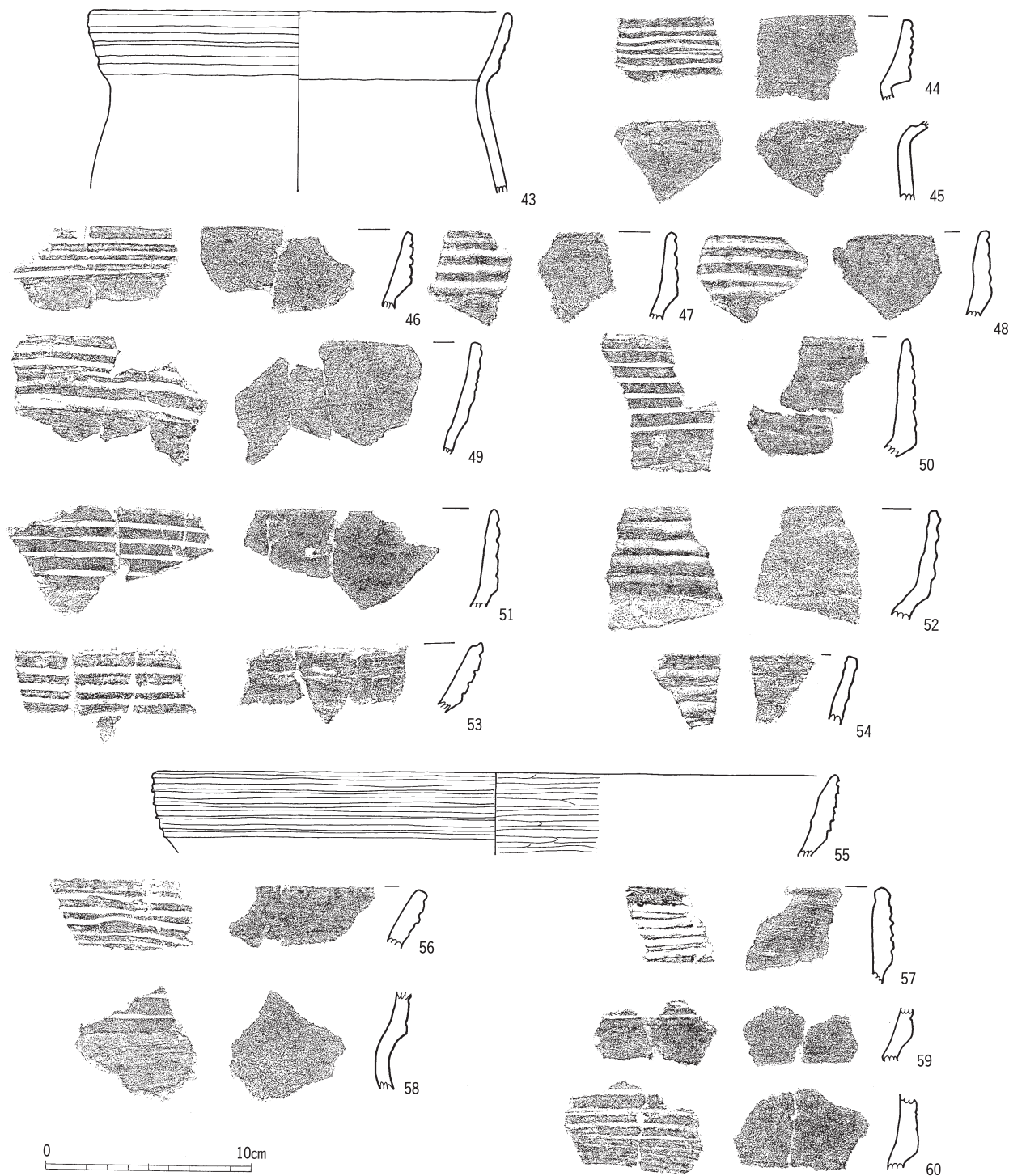
III 類土器（第19図 120～129）

胴部屈曲部が口縁部近くまで立ち上がるものである。口縁部が外傾するもの、緩やかに内反しながら外傾するもの、緩やかに内反しながら内傾するものがある。121・129は肩部に明瞭な段をもつ。120・121・126は口縁部にリボン状の突帯が施されている。器面調整は内外面ともに条痕がみられるが124・127・128の内面はナデによる調整が施される。

（胴部）

I 類土器（第20図 130～135）

胴部中央部もしくは肩部に「く」の字に屈曲した明瞭な稜をもつものである。135は屈曲部が若干不明瞭になる。器壁はやや薄い。I 類土器口縁部に該当する。

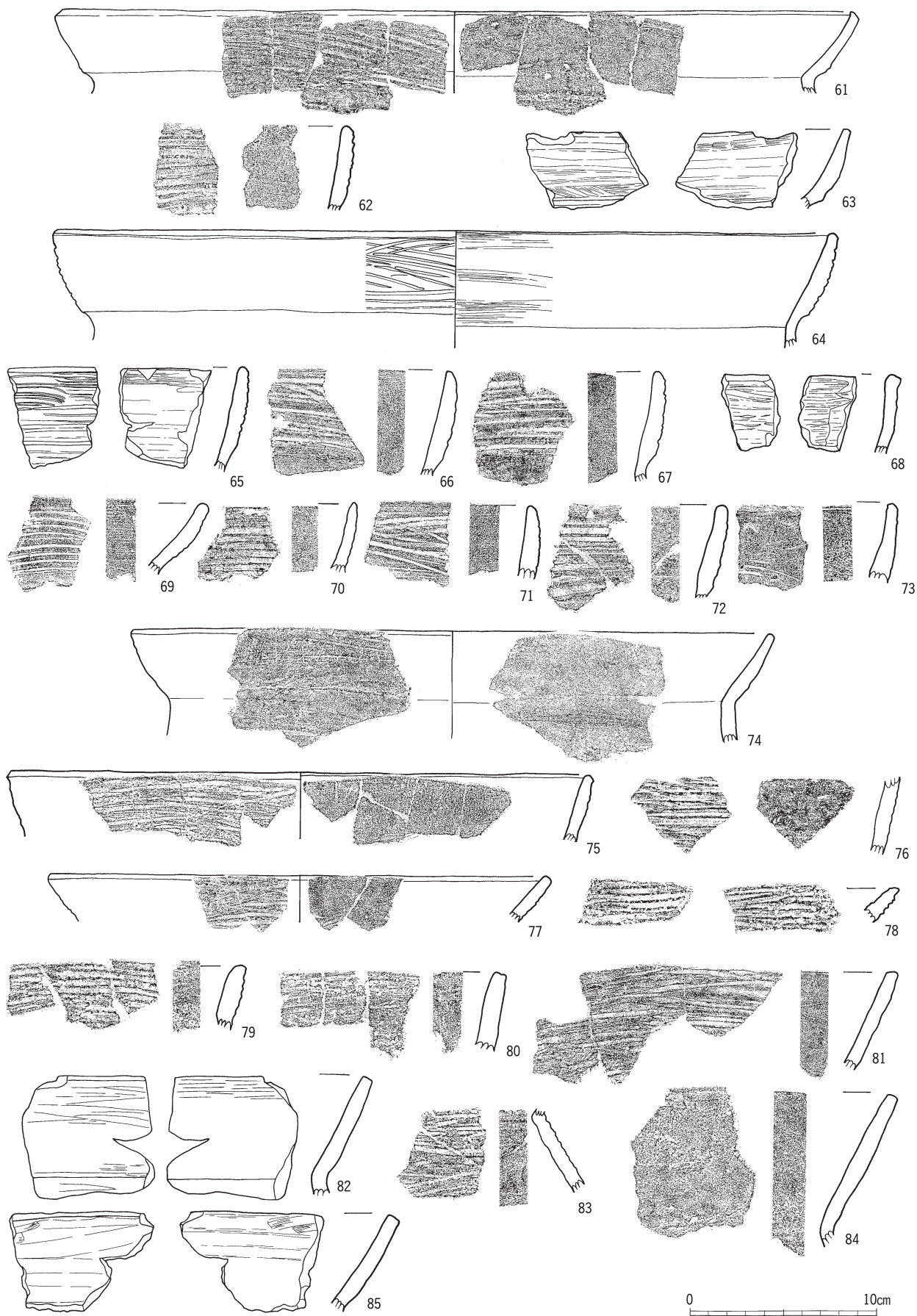


第12図 縄文時代晩期土器（1）

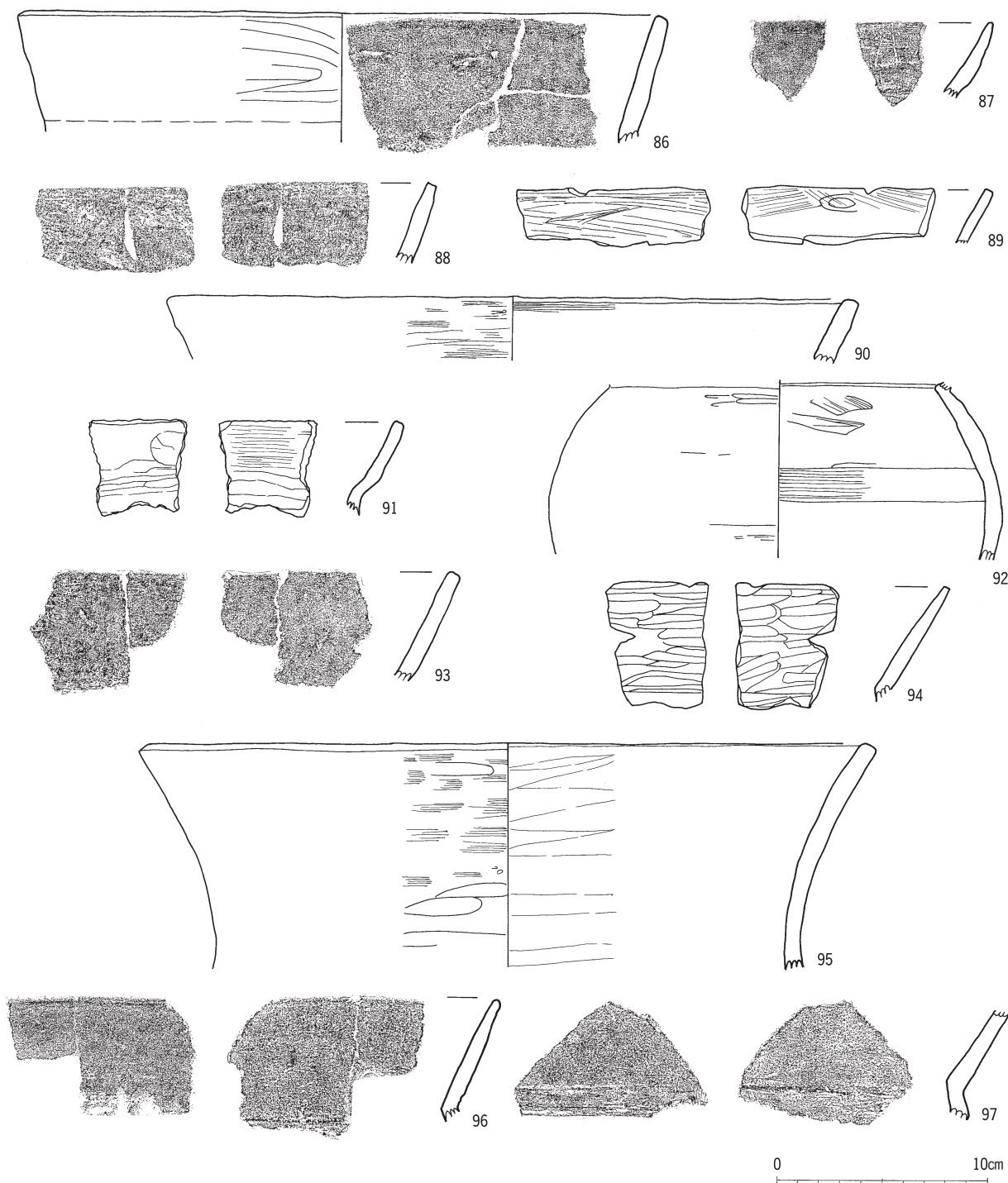
Ⅱ 類土器（第21～23図 136～151）

136・138～142は外面・内面ともにミガキ・ナデによる調整が施され、器壁がやや厚い。144～149は口縁部にかけて外傾し、胴部から底部にかけてすばまる。147は、外面が全面にヘラケズリによる調整が施され、145・146は条痕が施される。149はやや粗雑な

ナデが施され、148はナデ・ケズリが施されるなど多様な調整が観察できる。150は屈曲部に明瞭な段が施され、151はやや不明瞭ながらも中央部に稜をもつ。ともに外面にナデ・ミガキ、内面は条痕が施される。いずれもⅡ類土器口縁部に該当する。



第13図 縄文時代晩期土器 (2)



第14図 縄文時代晩期土器（3）

（底部）

（第24図 152～169）

形態から前記口縁部・胴部に該当する以下の3つに分類した。

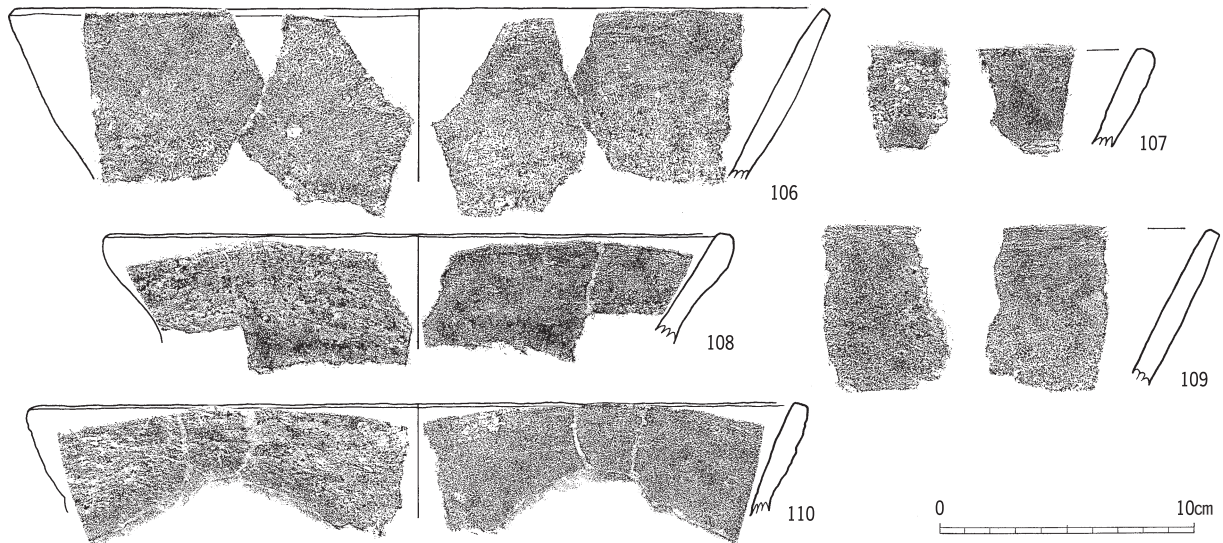
152・153・155・157は立ち上がりが緩やかに外傾するもので、Ⅰ～Ⅱ類土器に該当する。154・156・158・159は底部がやや張り出し、緩やかに屈曲しな

がら立ち上がる。ただし、この2つは明瞭に分類できない部分もある。160～168は底部が張り出し、「く」の字に屈曲しながら胴部にかけて外傾し、Ⅱ類土器に該当する。169は底部が厚みをもつ。底部が張り出し、「く」の字に屈曲しながら胴部にかけて立ち上がる。Ⅲ類土器に該当する。

なお、既存の土器型式によるとⅠ類土器は上加世



第15図 縄文時代晩期土器（4）



第16図 縄文時代晩期土器（5）

田式土器の新段階から入佐式土器の古段階，Ⅱ類土器は入佐式土器の中～新段階，Ⅲ類土器は黒川式土器に該当する。

②組織痕土器（第25図 170～179）

中華鍋形かそれに近い器形を呈すると思われる。底面に組織痕がみられ，上部に条痕が施される。組織痕の編み目は6～6.5mmで，編み方の種類はモデリング観察で「巻き編み」と呼ばれる技法（小結参照）と考えられる。

③中鉢形土器（第26図 180～195）

深鉢・浅鉢のいずれともはっきりしない土器の口縁部である。180・181・183は口縁部文様帯の段が明瞭で数条の沈線が施されている。184は屈曲部に貼り付けた突帯を穿孔している。187・188・190は口縁上部にもう一段粘土紐を重ねることによって，口唇部を形成し内外面に沈線を施したように見える。

④浅鉢形土器（第27～28図 196～226）

器形の特徴から以下の3つに分類する。

口縁部

Ⅰ類土器（第27図 196～201）

屈曲部から口縁部が短く立ち上がるものである。196～198・201は内面に沈線が施されているように見える。内外面共にミガキ・ナデの調整がみられる。

Ⅱ類土器（第27～28図 202～220）

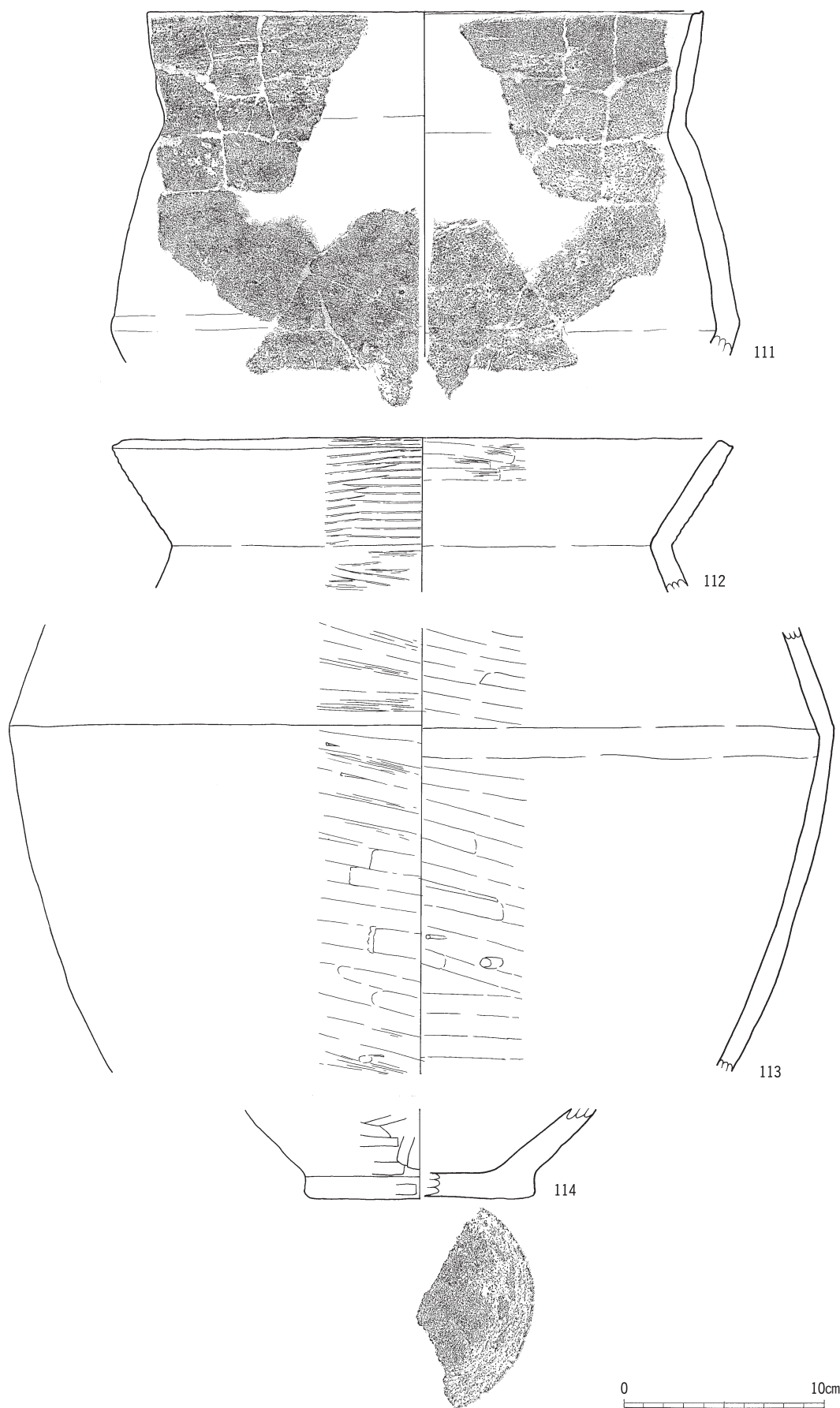
屈曲部から口縁部が長く立ち上がるものである。

202～207は口唇部に粘土紐を更に重ねることにより，沈線を施したように見える。208～211は口唇部までなだらかに立ち上がる。212～220は明瞭な屈曲部をもち内外面ともミガキ・ナデによる調整が施される。

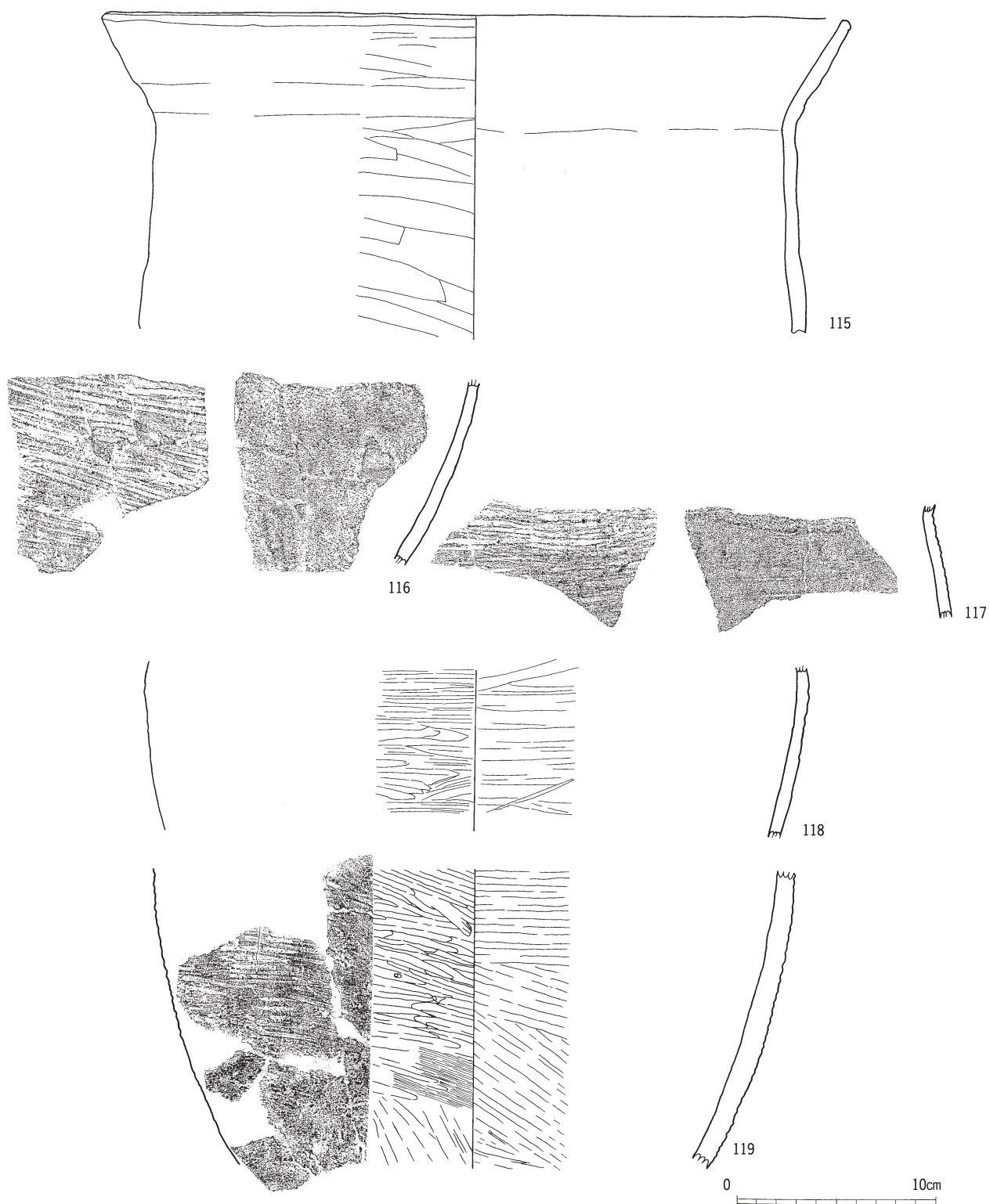
Ⅲ類土器（第28図 221～226）

胴部に屈曲部をもたず全体の器形が皿状を呈するものである。221・222・224・225は緩やかな曲線を描くが，226は外傾する。

なお，既存の土器型式によるとⅠ類土器は上加世田式土器の新段階から入佐式土器の古段階，Ⅱ類土器は入佐式土器に該当し，Ⅲ類土器は帰属がはっきりしないものである。



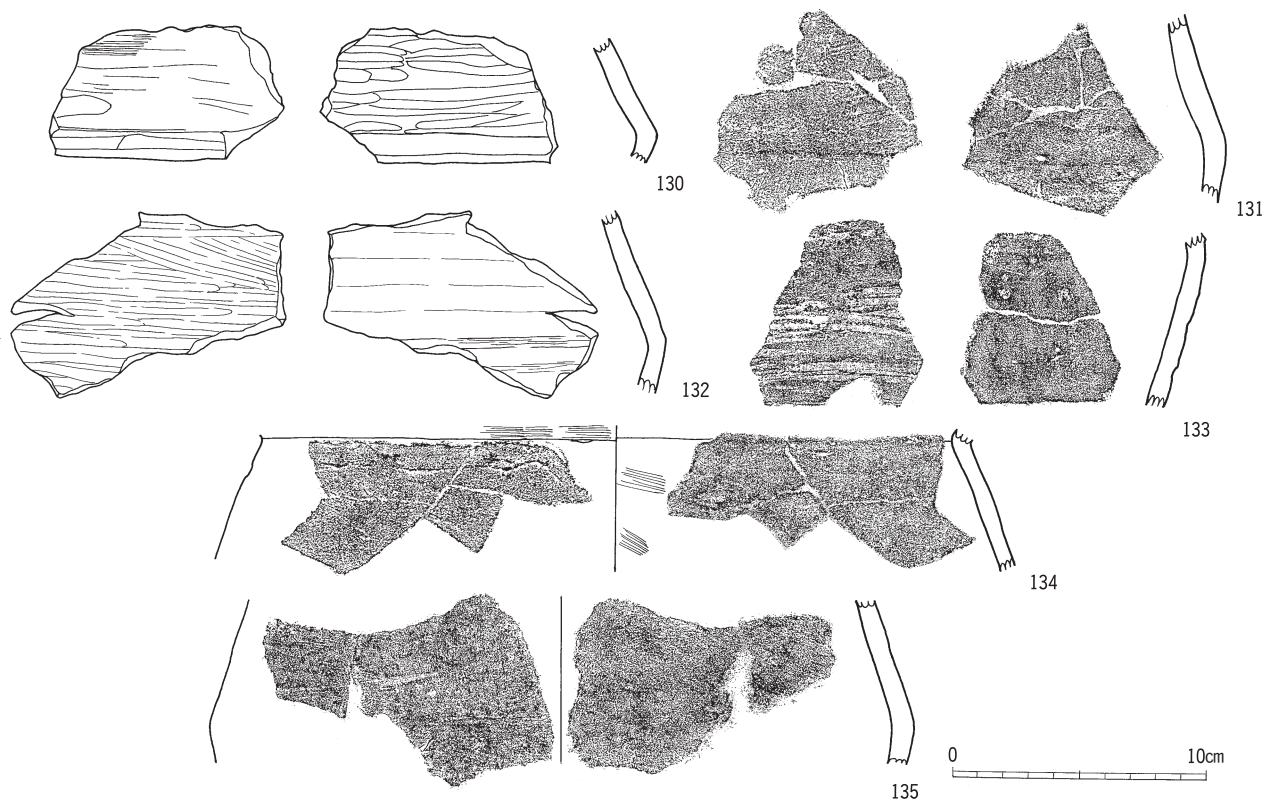
第17図 縄文時代晩期土器（6）



第18図 縄文時代晩期土器（7）



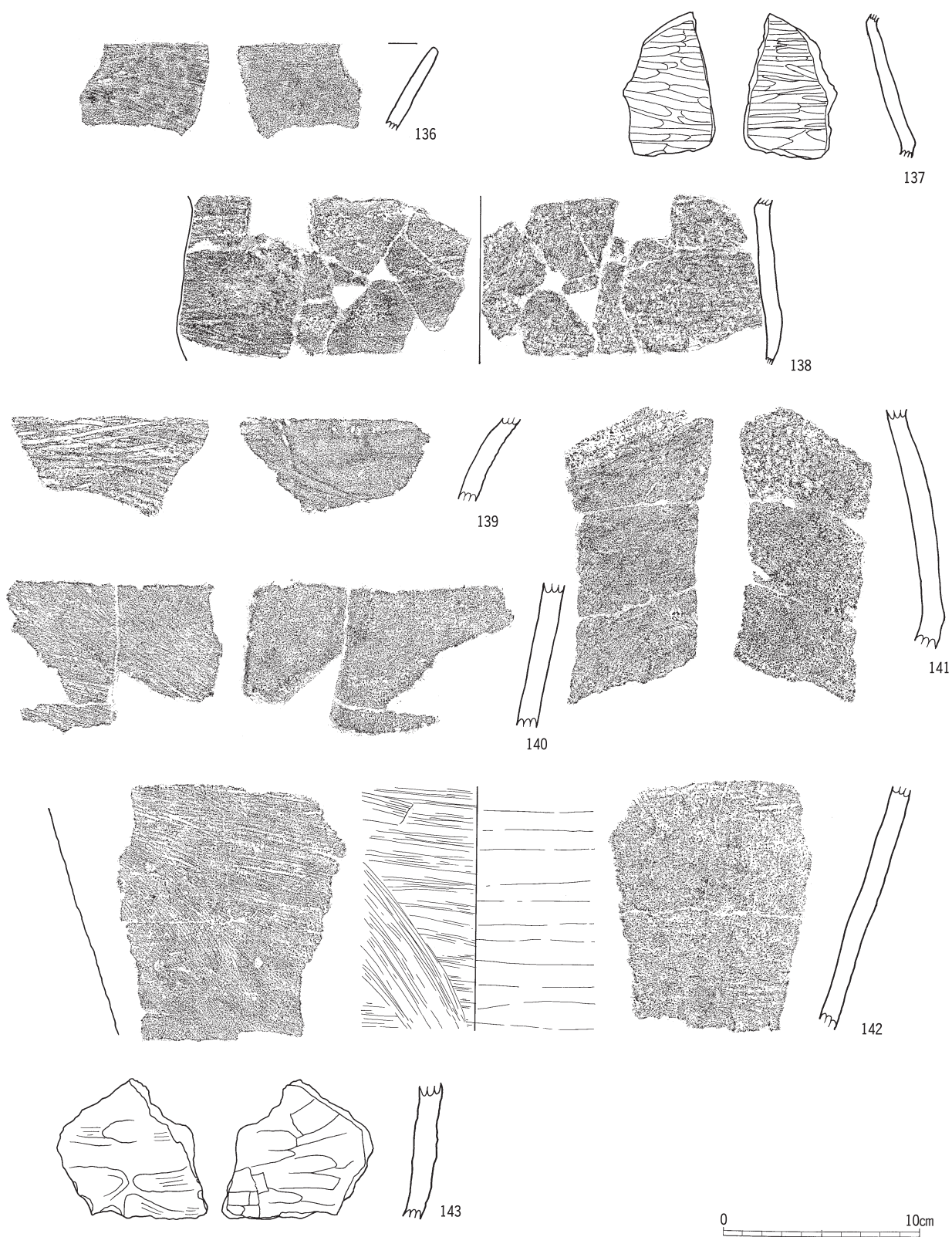
第19図 縄文時代晩期土器（8）



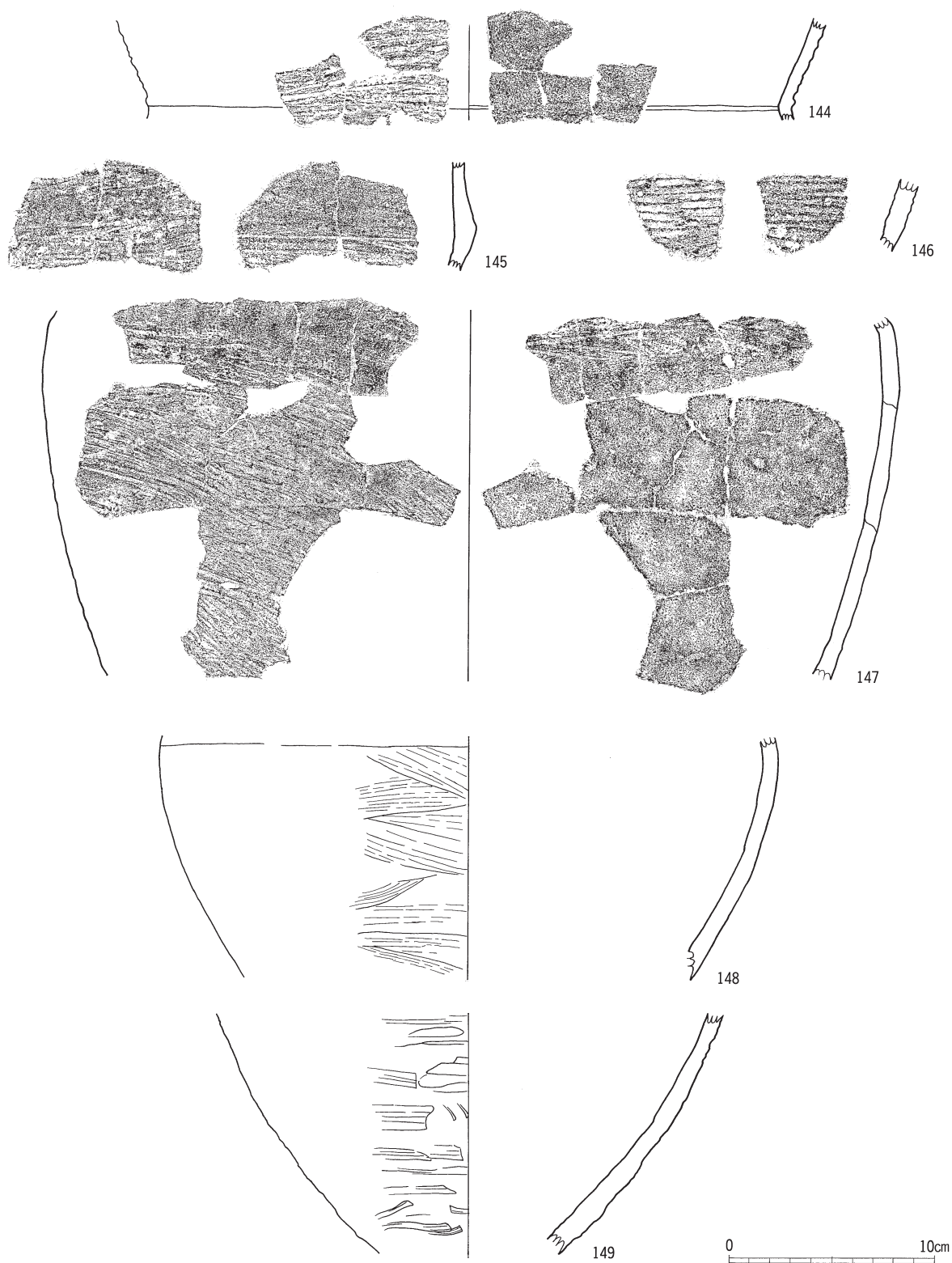
第20図 縄文時代晩期土器（9）

第5表 縄文時代晩期土器 観察表（1）

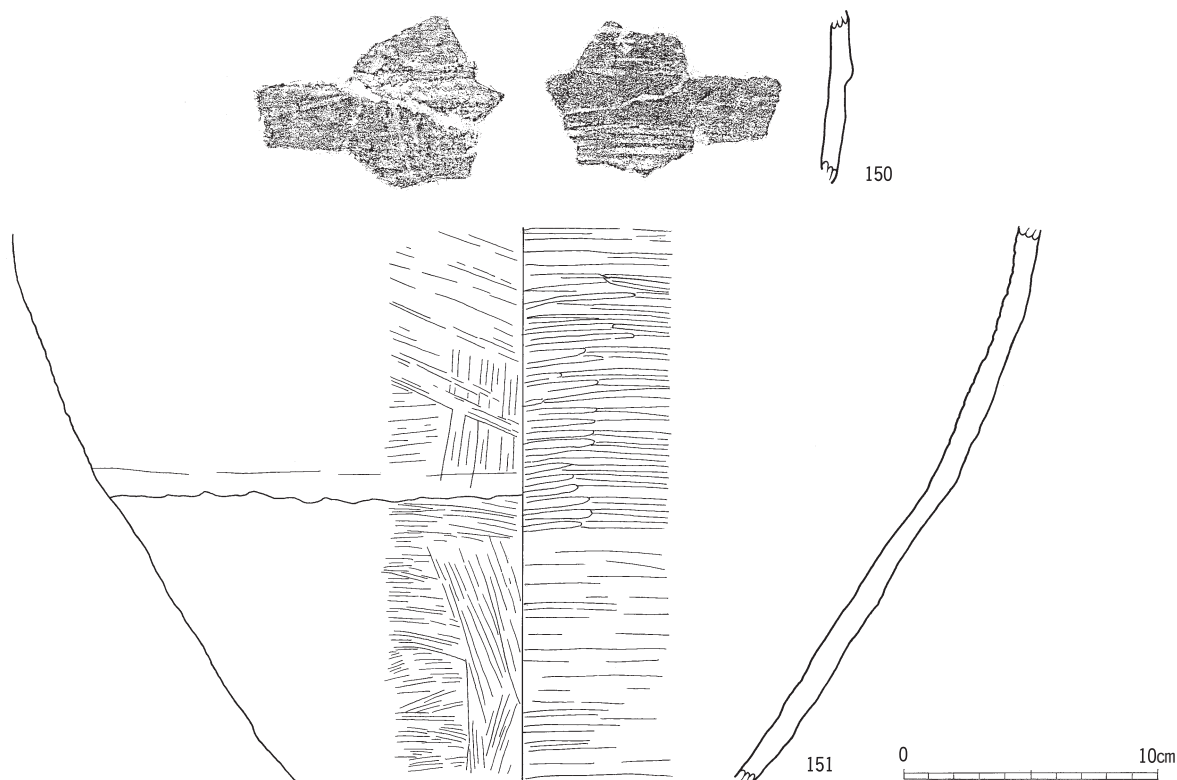
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燐石	その他			
12	43	表採	表採	口縁部	7.5YR7/4にふい橙	10YR8/2灰白	◎				良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	44	表採		口縁部	7.5YR3/1黒褐	7.5YR3/1黒褐		○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	45	S-9	Ⅲ	口縁部	10YR3/1黒褐	10YR3/2黒褐		○			良		ミガキ・ナデ
	46	S-6	Ⅲ	口縁部	2.5YR4/4にふい赤褐	7.5YR5/2灰褐	◎	○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	47	S-10	Ⅲ	口縁部	5YR6/6橙	10YR5/3にふい黄褐	○	○	○	火山ガラス	良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	48	R-10	Ⅲ	口縁部	2.5YR7/2灰黄	2.5YR7/2灰白		○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	49	R-6・S-6	Ⅲ	口縁部	5YR4/1褐灰	5YR4/2灰褐					良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	50	R-11	Ⅲ	口縁部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR4/1褐灰					良		ミガキ・ナデ
	51	S-8	Ⅲ	口縁部	10YR6/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐					良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	52	S-9	Ⅲ	口縁部	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にふい黄褐	○	○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	53	S-10・R-10	Ⅲ	口縁部	5YR5/4にふい赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	54	S-9	Ⅲ	口縁部	10YR6/2灰黄褐	10YR4/1褐灰	○	○		火山ガラス	良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	55	R-9・S-9	Ⅲ	口縁部	2.5YR6/8橙	7.5YR6/4にふい橙					良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	56	R-10	Ⅲ	口縁部	2.5YR8/2淡黄	10YR8/2灰白			◎		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	57	表採	表採	口縁部	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/4にふい橙					良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	58	S-8		口縁部	5YR6/4にふい橙	10YR5/2灰黄褐		○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	59	S-6	Ⅲ	口縁部	10YR2/1黒	10YR2/2黒褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	60	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐	○	○	○		良	横走沈線	ミガキ・ナデ



第21図 縄文時代晩期土器 (10)



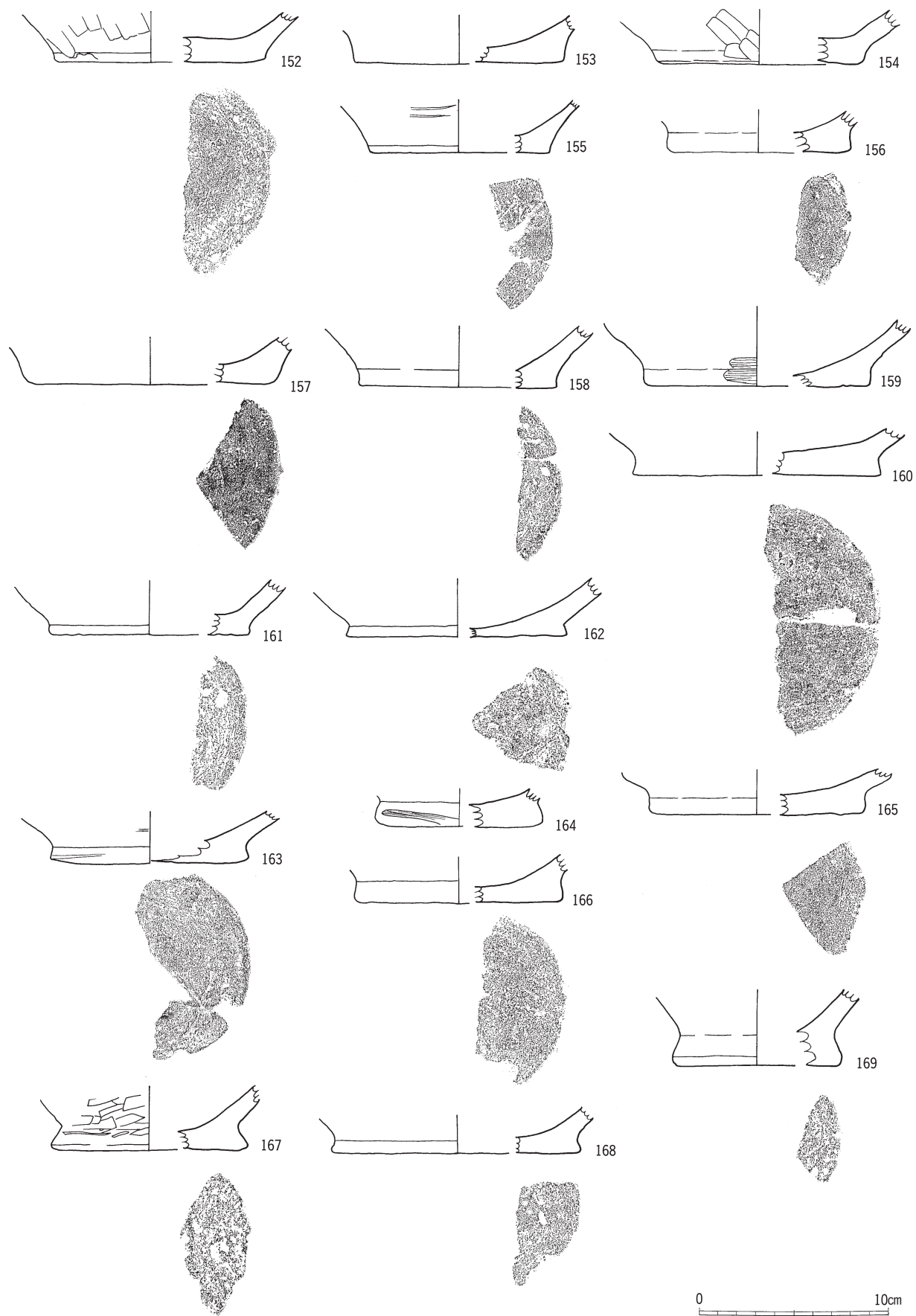
第22図 縄文時代晩期土器 (11)



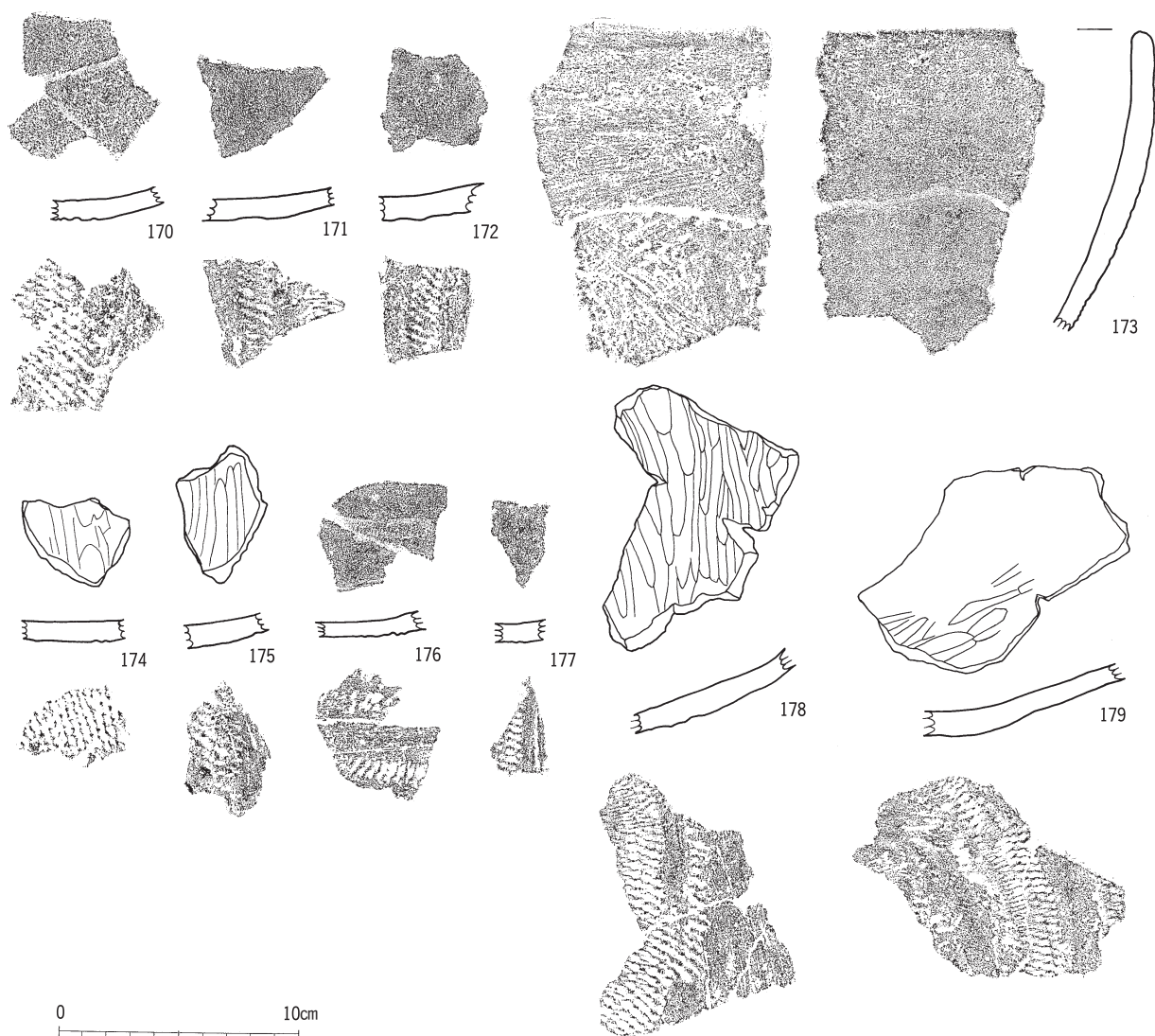
第23図 縄文時代晩期土器 (12)

第5表 縄文時代晩期土器 観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
13	61	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR4/2灰黄褐	5YR5/2灰褐	◎		○		良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	62	S-10	Ⅲ	口縁部	10R4/6赤	10R2/1赤黒					良		ミガキ・ナデ
	63	S-9	Ⅲ	口縁部	7.5YR5/3にふい褐	5YR5/4にふい赤褐		○			良		ミガキ・ナデ
	64	S-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/4にふい赤褐	5YR3/1黒褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	65	S-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/3にふい赤褐	5YR4/2灰褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	66	R-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/3にふい赤褐	5YR4/2灰褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	67	R-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/4にふい赤褐	5YR4/1褐灰					良	沈線	ミガキ・ナデ
	68	R-10	Ⅲ	口縁部	5YR2/1黒褐	5YR5/1黒褐					良		ミガキ・ナデ
	69	表採	Ⅲ	口縁部	5YR4/2灰褐	5YR7/6橙				小礫	良	沈線	ミガキ・ナデ
	70	S-8		口縁部	7.5YR5/2灰褐	5YR5/4にふい赤褐	○	○	○		良		ミガキ・ナデ
	71	S-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/4にふい赤褐	5YR3/1黒褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	72	R-10	Ⅲ	口縁部	2.5YR4/8赤褐	10R4/6赤					良		ミガキ・ナデ
	73	R-10	Ⅲ	口縁部	7.5YR3/1黒褐	7.5YR6/2灰褐	○	○	○		良		ミガキ・ナデ
	74	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR4/1褐灰	N1.5/黒					良		ミガキ・ナデ
	75	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR7/3にふい黄橙	10YR7/2にふい黄橙				クロ岩片	良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	76	S-9	Ⅲ	口縁部	10YR3/1黒褐	7.5YR8/2灰白		○			良		ミガキ・ナデ
	77	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐					良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	78	表採	表採	口縁部	7.5YR2/1黒	10YR3/1黒褐		○	○		不良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	79	S-8	Ⅲ	口縁部	2.5YR5/2灰赤	10YR5/2灰黄褐		◎			不良		ミガキ・ナデ
	80	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR7/3にふい黄橙	10YR6/2灰黄褐		○	○		良		ミガキ・ナデ
	81	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR7/3にふい黄橙	10YR6/2灰黄褐					良		ミガキ・ナデ
	82	R-9	Ⅱ・Ⅲ	口縁部	2.5YR4/3にふい赤褐	2.5Y8/2灰白		○	○		良		ミガキ・ナデ
	83	R-9	Ⅲ	口縁部	7.5YR4/1褐灰	5YR7/3にふい橙		○	○		良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	84	表採	表採	口縁部	7.5YR6/4にふい橙	2.5Y5/2暗灰黄	○	○			良		ミガキ・ナデ
	85	R-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/4にふい赤褐	2.5YR7/3浅黄		○	○		良		ミガキ・ナデ



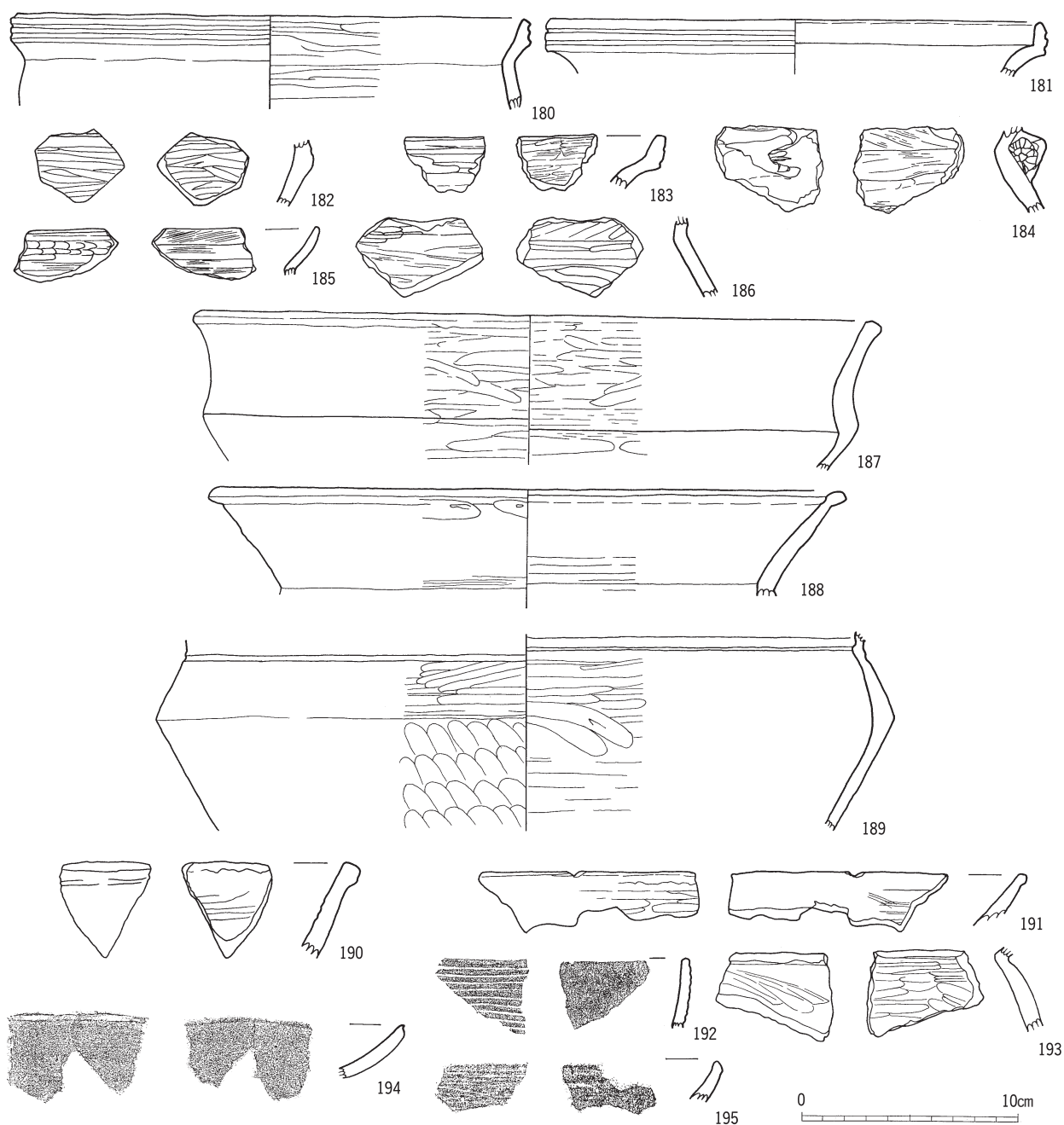
第24図 縄文時代晩期土器 (13)



第25図 縄文時代晩期土器 (14)

第 5 表 縄文時代晩期土器 観察表 (3)

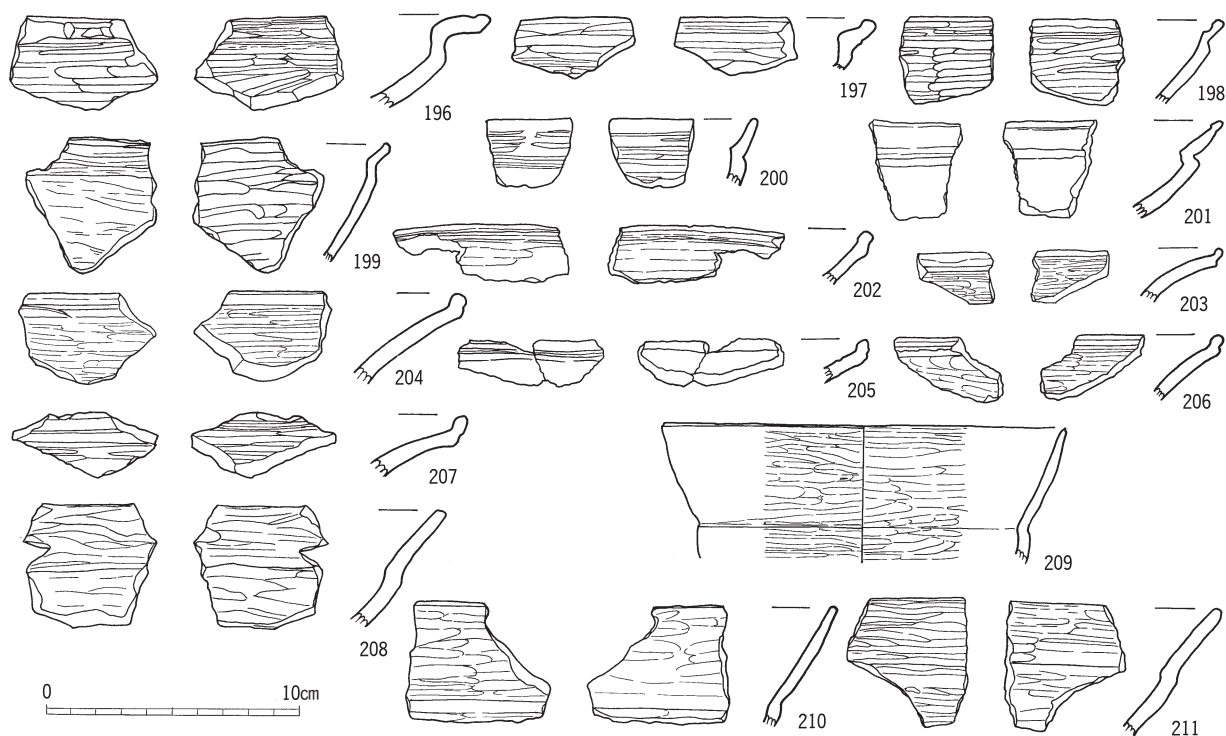
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
14	86	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR7/3にふい黄橙	10YR7/2にふい黄橙		○			良		ミガキ・ナデ
	87	R-9	Ⅲ	口縁部	7.5YR4/1褐灰	10YR4/1褐灰					良		ミガキ・ナデ
	88	表採	表採	口縁部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR5/1褐灰					良		ミガキ・ナデ
	89	R-10	Ⅲ	口縁部	5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰				火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	90	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR8/2灰白	10YR7/2にふい黄橙	○	○			良		ミガキ・ナデ
	91	S-7	Ⅲ	口縁部	10YR5/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐					良	突帯	ミガキ・ナデ
	92	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5Y6/1黄灰	10YR6/2灰黄褐	○	○		火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	93	S-9・R-9	Ⅲ	口縁部	10YR7/4にふい黄橙	10YR4/1褐灰		○			良		ミガキ・ナデ
	94	表採	Ⅲ	口縁部	10YR5/1灰黄褐	10YR4/1褐灰					良		ミガキ・ナデ
	95	S-6・R-6	Ⅲ	口縁部	5YR5/3にふい赤褐	5YR6/3にふい橙				火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	96	S-7	Ⅱ	口縁部	2.5Y6/1黄灰	10YR7/3にふい黄橙					良		ミガキ・ナデ
	97	S-9	Ⅲ	口縁部	5YR3/2暗赤褐	5YR5/3にふい赤褐		○			良		ミガキ・ナデ
	98	表採	表採	胴部	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/2灰黄		○	○		良		ミガキ・ナデ
15	99	表採	表採	胴部	10YR7/2にふい黄橙	2.5Y7/2灰黄		○			良		ミガキ・ナデ
	100	S-7	Ⅲ	胴部	7.5YR7/3にふい橙	7.5YR7/3明褐灰					良		ミガキ・ナデ



第26図 縄文時代晩期土器 (15)

第5表 縄文時代晩期土器 観察表(4)

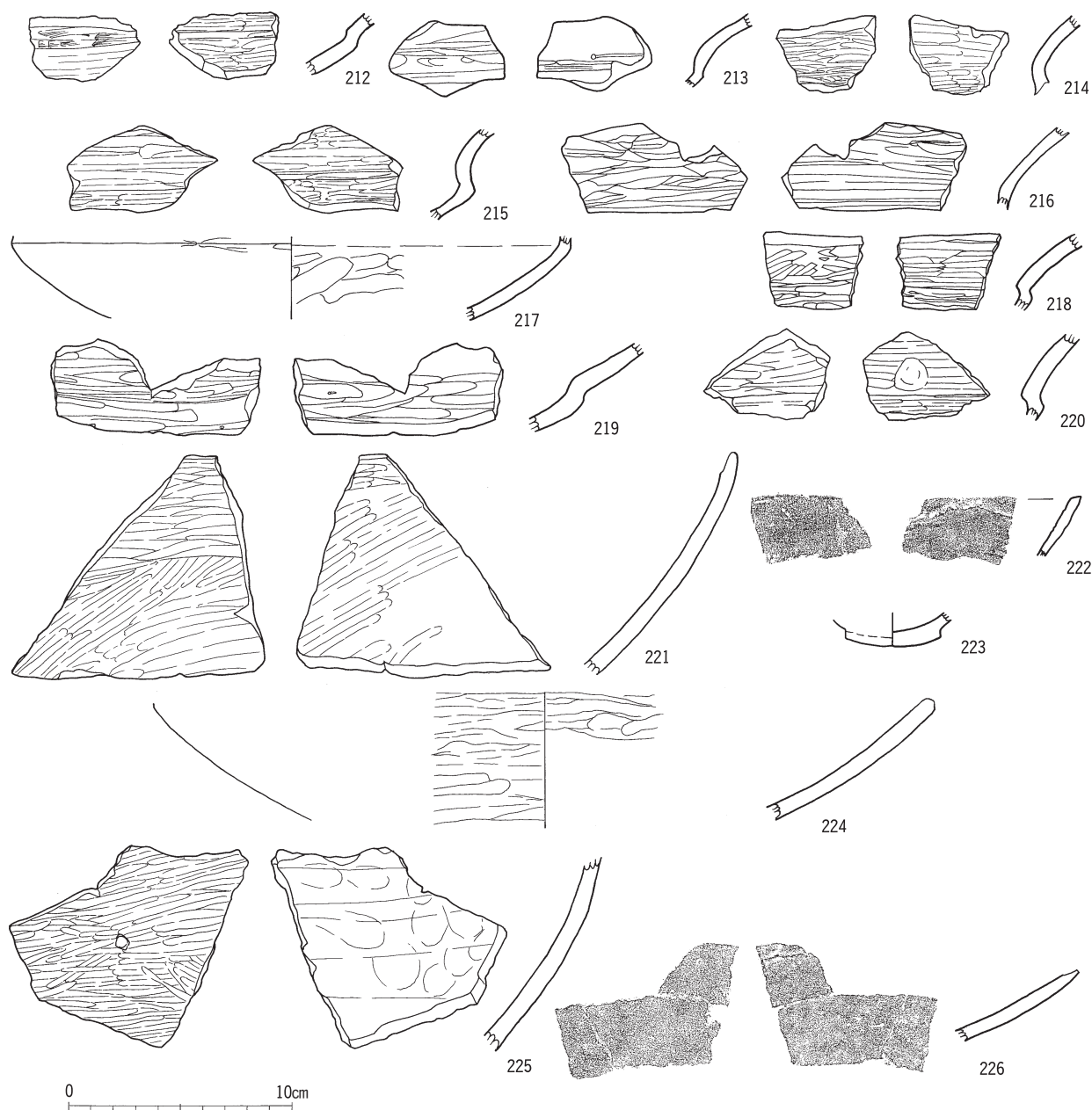
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
15	101	表採	表採	胴部	10YR7/2にふい黄橙	2.5YR8/2淡黄	○	○	○	火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	102	表採	表採	口縁部	7.5YR4/2灰褐	7.5YR7/2明灰褐		○			良		ミガキ・ナデ
	103	R-7	Ⅲ	口縁部	7.5YR7/3にふい橙	7.5YR5/1褐灰		○	○		良		ミガキ・ナデ
	104	表採	表採	胴部	7.5YR7/3にふい橙	10YR8/3浅黄橙		○	○		良		ミガキ・ナデ
	105	表採	表採	胴部	10YR5/2灰黄褐	10YR5/1褐灰		○			良		ミガキ・ナデ
16	106	表採	表採	胴部	10YR6/3にふい黄橙	10YR7/1灰白	◎				良		ミガキ・ナデ
	107	S-9	Ⅲ	胴部	10YR8/3浅黄橙	2.5YR7/3浅黄					良		ミガキ・ナデ
	108	R-9	Ⅲ	胴部	10YR7/3にふい黄橙	10YR8/3浅黄橙		○			良		ミガキ・ナデ
	109	表採	表採	胴部	7.5YR6/3にふい褐	2.5YR7/3浅黄		○			良		ミガキ・ナデ
	110	R-9	Ⅲ	胴部	10YR8/3浅黄橙	2.5Y7/3浅黄		○			良		ミガキ・ナデ
17	111	R-9	Ⅲ	胴部	10YR6/4にふい黄橙	10YR8/4浅黄橙		○		小礫	良		ミガキ・ナデ
	112		Ⅲ	胴部	10YR6/4にふい黄橙	10YR8/4浅黄橙				小礫	良		ミガキ・ナデ



第27図 縄文時代晩期土器 (16)

第 5 表 縄文時代晩期土器 観察表 (5)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
17	113	表採	表採	胴部	10YR7/4にふい黄橙	10YR6/2灰黄褐		○	○		良		ミガキ・ナデ
	114	R-9	Ⅲ	底部	10YR7/3にふい黄橙	10YR6/1褐灰		○	○	小礫	良		ミガキ・ナデ
18	115	表採	表採	口縁部	5YR6/4にふい橙	7.5YR7/3にふい橙		○		火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	116	R-9	Ⅲ	胴部	7.5YR4/2灰褐	7.5YR8/3浅黄橙		○			良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	117	R-10	Ⅲ	胴部	5YR4/3にふい赤褐	10YR7/3にふい黄橙		○	○		良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	118	R-9	Ⅲ	胴部	7.5YR3/2黒褐	7.5YR6/3にふい褐	◎	○			良	ヘラナデ	ミガキ・ナデ
	119	表採	Ⅲ	胴部	2.5YR5/8明赤褐	7.5YR6/4にふい橙		○			良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
19	120	R-10-Q-10	Ⅲ	スス・口縁部	7.5YR7/4にふい橙	7.5YR7/2明褐灰		○		火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	121	表採	Ⅲ	口縁部~胴部	7.5YR7/5にふい橙	7.5YR7/3明褐灰					良		ミガキ・ナデ
	122	R-9	Ⅱ	口縁部	2.5YR5/4にふい赤褐	5YR5/4にふい赤褐		○	○		良		ミガキ・ナデ
	123	S-6	Ⅱ	口縁部	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR4/4にふい赤褐		○	○		良		ミガキ・ナデ
	124	S-7	Ⅲ	口縁部	2.5YR4/1黄灰	2.5YR6/2灰黄			○		良		ミガキ・ナデ
	125	T-7	Ⅲ	口縁部	10YR4/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐		○	○		やや不良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	126	表採	Ⅲ	口縁部	10YR4/3灰黄褐	10YR5/3灰黄褐					良	条痕	ミガキ・ナデ
	127	表採	Ⅲ	口縁部	5YR2/1黒褐	5YR2/1黒褐					良		ミガキ・ナデ
	128	T-7	Ⅱ	口縁部	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐					良		ミガキ・ナデ
20	129	S-6	Ⅲ	口縁部	7.5YR3/2黒褐	7.5YR5/3にふい褐				火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	130	S-8	Ⅲ	胴部	7.5YR5/4にふい褐	7.5YR6/4にふい橙					良		ミガキ・ナデ
	131	S-8	Ⅲ	胴部	10YR7/2にふい黄橙	10YR7/3にふい黄橙	○	○	○	火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	132	R-11	Ⅲ	胴部	10YR7/3にふい黄橙	10YR6/3にふい黄橙	◎	○	○	クロ岩片	良		ミガキ・ナデ
	133	表採	Ⅲ	胴部	10YR4/1褐灰	7.5YR7/3にふい橙		◎			良		ミガキ・ナデ
	134	表採	表採	胴部	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白				クロ岩片	良		ミガキ・ナデ
	135	S-8	Ⅲ	胴部	10YR7/3にふい黄橙	7.5YR7/3にふい橙	◎		○	クロ岩片	良		ミガキ・ナデ



第28図 縄文時代晩期土器 (17)

第5表 縄文時代晩期土器 観察表 (6)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
21	136	R-10	Ⅲ	口縁部	10YR4/1灰白	10YR7/2にふい黄橙	○	○	○	火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	137	R-10	Ⅲ	胴部	10YR2/1黒	10YR3/2黒褐					良		ミガキ・ナデ
	138	R-10	Ⅲ	胴部	10YR4/1褐灰	10YR6/1褐灰				小礫	良		ミガキ・ナデ
	139	R-10	Ⅱ	胴部	7.5YR3/2黒褐	10YR6/4にふい黄橙					良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	140	R-9	Ⅲ	胴部	5YR4/4にふい赤褐	10YR7/3にふい黄橙	○	○	○		良		ミガキ・ナデ
	141	T-7	Ⅲ	胴部	7.5YR5/4にふい褐	7.5YR7/4にふい橙	○	○			良		ミガキ・ナデ
	142	R-9・S-8	Ⅲ	胴部	5YR2/1黒褐	5YR6/3にふい橙		○	○		良		ミガキ・ナデ
	143	T-7	Ⅱ	胴部	7.5YR5/3にふい褐	7.5YR5/2灰褐					良		ミガキ・ナデ
22	144	R-10	Ⅲ	胴部	5YR6/6橙	10YR8/2灰白		○			良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	145	R-6	Ⅲ	胴部	7.5YR4/2褐	5YR5/3にふい赤褐	○	○	○		良		ミガキ・ナデ

第5表 縄文時代晩期土器 観察表(7)

検出 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面
					内	外	石英	長石	燧石	その他			
22	146	表採	表採	胴部	5YR4/2灰褐	5YR3/1黒褐		○			不良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	147	S-7	Ⅲ	胴部	7.5YR6/2灰褐	10YR7/2にふい黄橙	○		○		良	貝殻条痕	ミガキ・ナデ
	148	表採	表採	胴部	10YR4/2灰黄褐	10YR6/1褐灰		○	○		良		ミガキ・ナデ
	149	R-10	表採	胴部	10YR7/3にふい黄橙	10YR4/1褐灰		○			良		ミガキ・ナデ
23	150	T-7	Ⅲ	胴部	10YR4/1褐灰	10YR7/3にふい黄橙		○	○		やや不良	突帯	ミガキ・ナデ
	151	S-7	Ⅰ	胴部	7.5YR7/3にふい橙	10YR7/2にふい黄橙					やや不良		ミガキ・ナデ
24	152	S-9	Ⅲ	底部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR3/1黒褐	○	○	○		良		ミガキ・ナデ
	153	R-9	Ⅰ	底部	7.5YR5/4にふい褐	10YR6/2灰黄褐				小礫	良		ミガキ・ナデ
	154	S-8	Ⅲ	底部	10YR6/3にふい黄橙	10YR4/1褐灰				小礫	良		ミガキ・ナデ
	155	S-7・S-6	Ⅲ	底部	5YR6/6橙	5YR2/1黒褐					良		ミガキ・ナデ
	156	R-9	Ⅲ	底部	7.5YR7/4にふい橙	5YR4/1褐灰		○			良		ミガキ・ナデ
	157	表採	Ⅲ	底部	5YR6/4にふい橙	10YR7/3にふい黄橙		○			やや不良		ミガキ・ナデ
	158	R-9	Ⅲ	底部	2.5YR4/6赤褐	2.5YR2/1黒褐		◎			良		ミガキ・ナデ
	159	R-9	Ⅲ	底部	2.5YR4/6赤褐	5YR3/1黒褐	◎	◎	○		良		ミガキ・ナデ
	160	R-10	表採	底部	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/2灰赤		○			良	へラミガキ	ミガキ・ナデ
	161	S-9	Ⅲ	底部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR2/1黒		○			良		ミガキ・ナデ
	162	S-7	Ⅲ	底部	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR6/1褐灰			○	小礫	良		ミガキ・ナデ
	163	R-7・R-9	Ⅲ	底部	5YR5/6明赤褐	5YR5/2灰褐				小礫	良		ミガキ・ナデ
	164	R-9	Ⅲ	底部	5YR6/4にふい橙	5YR4/1褐灰	○	○	○		良		ミガキ・ナデ
	165	R-9	Ⅲ	底部	10YR7/3にふい黄橙	10YR4/1褐灰		○	○		良		ミガキ・ナデ
	166	S-7	Ⅲ	底部	5YR4/6赤褐	5YR2/1黒褐		○			やや不良		ミガキ・ナデ
	167	R-9	Ⅲ	底部	10YR8/2灰白	10YR8/1灰白		○	○	小礫	良		ミガキ・ナデ
	168	T-7	Ⅲ	底部	5YR6/4にふい橙	10YR8/4浅黄橙				小礫	良		ミガキ・ナデ
25	169	R-9	Ⅲ	底部	5YR6/4にふい橙	10YR6/2灰黄褐					良		ミガキ・ナデ
	170	T-7・S-7	Ⅲ	底部	7.5YR7/4にふい橙	7.5YR6/3にふい褐					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	171	T-7	Ⅰ	底部	5YR5/4にふい赤褐	7.5YR6/4にふい橙					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	172	S-10	Ⅲ	底部	5YR6/6橙	5YR4/1褐灰					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	173	S-10	Ⅲ	底部	7.5YR5/2灰褐	7.5YR6/3にふい褐				小礫	やや不良	組織痕	ミガキ・ナデ
	174	表採	Ⅲ	底部	5YR6/6橙	5YR4/2灰褐					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	175	S-8	Ⅲ	底部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR4/1褐灰					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	176	T-7	Ⅲ	底部	5YR5/4にふい赤褐	10YR5/2灰黄褐					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	177	S-10	Ⅲ	底部	7.5YR6/4にふい橙	7.5YR4/1褐灰					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	178	T-7	Ⅰ	底部	5YR5/6明赤褐	5YR4/2灰褐					良	組織痕	ミガキ・ナデ
26	179	T-7	Ⅰ	底部	5YR5/6明赤褐	5YR4/2灰褐					良	組織痕	ミガキ・ナデ
	180	表採	表採	口縁部	7.5YR5/4にふい褐	7.5YR6/4にふい橙		○			良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	181	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5YR6/8橙	7.5YR4/2褐灰	○	○			良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	182	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	183	R-9	Ⅲ	口縁部	5YR4/6赤褐	5YR4/2灰褐					良	沈線	ミガキ・ナデ
	184	R-10	Ⅲ	口縁部	7.5YR5/3にふい褐	7.5YR5/3にふい褐					良		ミガキ・ナデ
	185	S-8	Ⅲ	口縁部	2.5Y2/1黒	7.5YR2/1黒					良		ミガキ・ナデ
	186	R-10	Ⅲ	口縁部	10YR4/1褐灰	10YR6/3にふい黄橙		○	○		良		ミガキ・ナデ
	187	S-6・R-9	Ⅲ	口縁部	10YR7/2にふい黄橙	10YR4/1褐灰					良		ミガキ・ナデ
	188	S-6	Ⅰ	口縁部	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白					良		ミガキ・ナデ
	189	R-10	Ⅲ	胴部	10YR4/1褐灰	10YR6/2灰黄褐					良		ミガキ・ナデ
	190	表採	表採	口縁部	5YR3/1黒褐	2.5YR4/4にふい赤褐					良		ミガキ・ナデ
	191	S-7	Ⅲ	口縁部	2.5YR4/1黄灰	2.5YR7/2黄灰					良		ミガキ・ナデ
	192	表採	表採	口縁部	2.5Y3/1黒褐	5Y2/1黒					良	横走沈線	ミガキ・ナデ
	193	R-9	Ⅲ	口縁部	5Y6/1灰	5Y6/1灰				火山ガラス	良		ミガキ・ナデ
	194	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5YR4/3にふい赤褐	2.5YR4/2灰赤	◎				良		ミガキ・ナデ
	195	R-9	Ⅲ	口縁部	10YR3/1黒褐	10YR4/1褐灰	○	○			良		ミガキ・ナデ
27	196	表採	Ⅲ	口縁部	10YR7/4にふい黄橙	2.5Y4/1黄灰					良		ミガキ・ナデ
	197	R-10	Ⅲ	口縁部	5Y6/1灰	2.5Y6/2灰黄					良		ミガキ・ナデ
	198	S-9	Ⅲ	口縁部	N1.5/黒	N1.5/黒					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	199	R-7	Ⅲ	口縁部	2.5Y3/1黒褐	2.5Y2/1黒					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	200	S-9	Ⅲ	口縁部	5Y2/1黒	N1.5/黒					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	201	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄					良		ミガキ・ナデ
	202	R-11	Ⅲ	口縁部	N3/暗灰	2.5Y6/2灰黄					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	203	表採	表採	口縁部	7.5Y2/1黒	7.5Y2/1黒					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	204	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5Y2/1黒	5Y2/1黒					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	205	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5Y3/1黒褐	2.5Y3/2黒褐					良		ミガキ・ナデ
	206	S-9	Ⅲ	口縁部	2.5Y7/2灰黄	N3/暗灰					良		ミガキ・ナデ
	207	S-8	Ⅲ	口縁部	2.5Y3/1黒褐	10YR3/2黒褐	○	○	○		良		ミガキ・ナデ
	208	R-9	Ⅲ	口縁部	5Y2/1黒	2.5YR4/2暗灰黄			○		良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	209	R-10	Ⅲ	口縁部	2.5YR2/1黒	10YR7/2にふい黄橙					良		ミガキ・ナデ
	210	表採	Ⅲ	口縁部	10YR5/2灰黄褐	10YR4/1褐灰					良		ミガキ・ナデ
	211	R-9	Ⅲ	口縁部	2.5YR2/1黒	2.5YR3/1黒褐					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
28	212	R-10	Ⅲ	胴部	10YR7/4にふい黄橙	7.5YR7/6橙	○				良		ミガキ・ナデ
	213	S-7	Ⅲ	胴部	2.5Y8/2灰白	2.5Y7/1灰白			◎		良		ミガキ・ナデ
	214	S-7	Ⅲ	胴部	2.5Y6/2灰黄	5Y5/1灰			○		良		ミガキ・ナデ
	215	R-11	Ⅲ	胴部	5Y2/1黒	2.5Y5/1黄灰					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	216	R-10	Ⅲ	胴部	10YR3/1黒褐	10YR4/2灰黄褐					良		ミガキ・ナデ
	217	R-10・S-7	Ⅲ	胴部	5Y3/1オリーブ黒	7.5YR5/4にふい褐	○	○			良		ミガキ・ナデ
	218	R-9	Ⅲ	胴部	10YR7/6明赤褐	10YR7/6明赤褐					良		ミガキ・ナデ
	219	S-8	Ⅰ	胴部	10YR6/1褐灰	10YR2/1黒		○	○		良		ミガキ・ナデ
	220	R-10	Ⅲ	胴部	10YR7/3にふい黄橙	2.5YR5/2暗灰黄		○			良		ミガキ・ナデ
	221	R-11	Ⅲ	胴部	5Y3/1オリーブ黒	2.5YR4/1にふい赤褐					良		ミガキ・ナデ
	222	S-7	Ⅲ	胴部	2.5Y6/1黄灰	2.5Y4/1黄灰		○	○		良		ミガキ・ナデ
	223	R-10	表採	底部	2.5Y2/1黒	2.5Y2/2灰白		○			良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	224	R-11	Ⅲ	胴部	10YR2/1黒	10YR5/1褐灰					良	黑色研磨	ミガキ・ナデ
	225	R-10	表採	胴部	5YR4/3にふい赤褐	10YR7/4にふい黄橙			◎		良		ミガキ・ナデ
	226	S-7	Ⅲ	胴部	2.5Y7/2灰黄	2.5Y2/1黒					良		ミガキ・ナデ

縄文時代晩期石器

Ⅲ 層石鏃 (第30図 227～242)

本文中遺物番号併記の記号(例：A-a-a)は、本報告書大門口遺跡 p158の第27図石鏃分類図に基づく。なお、類別の際の番号は本遺跡のみとする。

I 類：227 (A-a-a)

227は上牛鼻産の黒曜石製の石鏃である。長幅比が1.4で基部が平基の正三角形鏃である。

Ⅱ 類：228～233 (A-a-b)

平均長幅比が1.2でほぼ正三角形を呈するが、基部の挟りがやや浅い。数量としては少ないが、頁岩製・黒曜石製・チャート製・タンパク石製とバリエーションに富む。

Ⅲ 類：234・235 (A-a-c)

硬質頁岩製及び頁岩製である。234は先端部が欠損しているが、本来は二等辺三角形を呈していたと考えられる。235は側縁部に仕上げが鋸歯状を呈し、基部に浅い挟りが施されている。

Ⅳ 類：236～238 (A-a-d)

236は本遺跡で検出された石鏃の中では最も小型である。側縁部は鋸歯状を呈し、基部はU字状を呈する。237・238は頁岩製である。

V 類：239 (A-b-c)

頁岩製の石鏃である。ほぼ縦長の二等辺三角形を呈する。基部はすばまり、挟りが深い。側縁部は鋸歯状を呈する。

Ⅵ 類：240・241 (A-b-d)

240は頁岩製、241は黒曜石製の石鏃である。240はほぼ二等辺三角形を呈し両側縁部が鋸歯状を呈する。241は右脚部が欠損しているが基部はU字状を呈していたと考えられる。

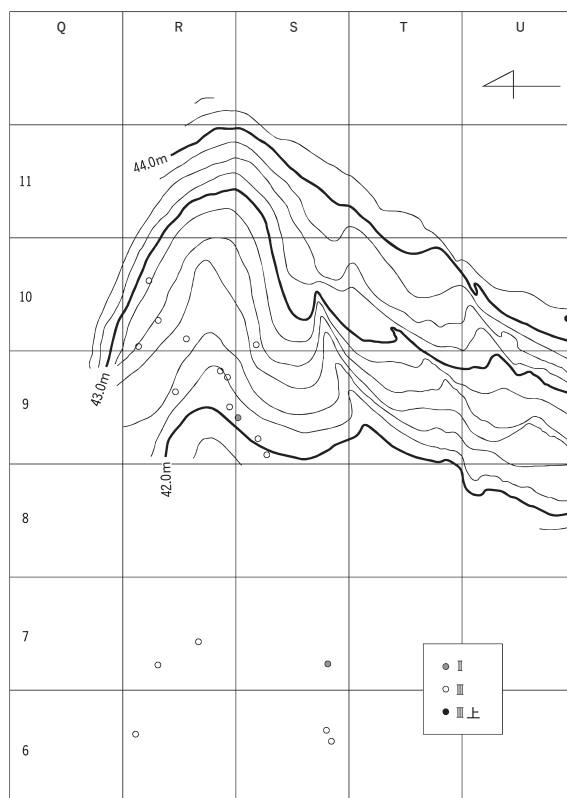
Ⅶ 類：242 (A-c-c)

242は側縁部の仕上げが鋸歯状を呈し、基部に深い挟りが施されている。

Ⅲ 層石器 (第31・32図 243～252)

異形石器 243

243は黒曜石製の異形石器である。縦長の剥片の側縁部を下部から上部にわたって無数の剝離を施している。目的がはっきりしない。



第29図 縄文時代晩期石器出土状況

尖頭器 245

245は硬質頁岩製の尖頭器である。やや厚手の剥片の側縁部には基部から上部にかけて微細な剝離が複数観察できる。

局部磨製石斧 246

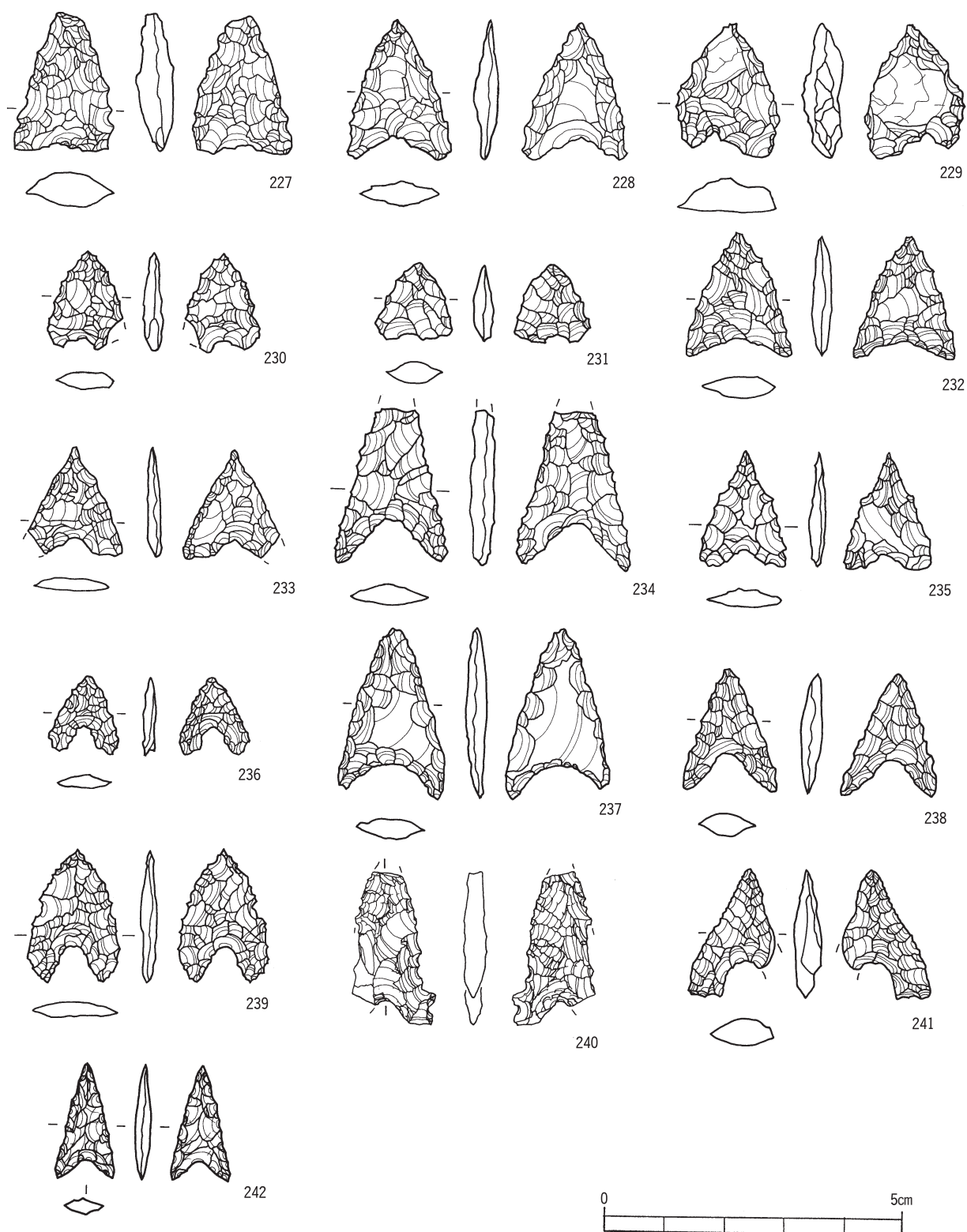
246は硬質頁岩製の打製石斧である。基部近くの両側縁部に対して大きく挟りを入れ、基部が扇状を呈する着柄を意識した作りになっており、刃部に擦痕が観察できる局部磨製石斧である。最大長22.6cmの本遺跡中、最大の石斧である。

磨製石斧 247～249

247～249は磨製石斧である。247は全体に擦痕が観察でき、側縁部に剝離が施されている。248は安山岩製の磨製石斧である。表裏面と側縁部の全面にかけて擦痕が施されている。249は安山岩製の磨製石斧である。刃部形成の擦痕が観察できる。表面は敲打による器面調整がみられる。

磨石 250～252

250は砂岩製の磨石である。最大長が5.2cmと比較的小型であるため、土器の器面調整に使用された可



第30図 縄文時代晩期石器（1）

能性がある。

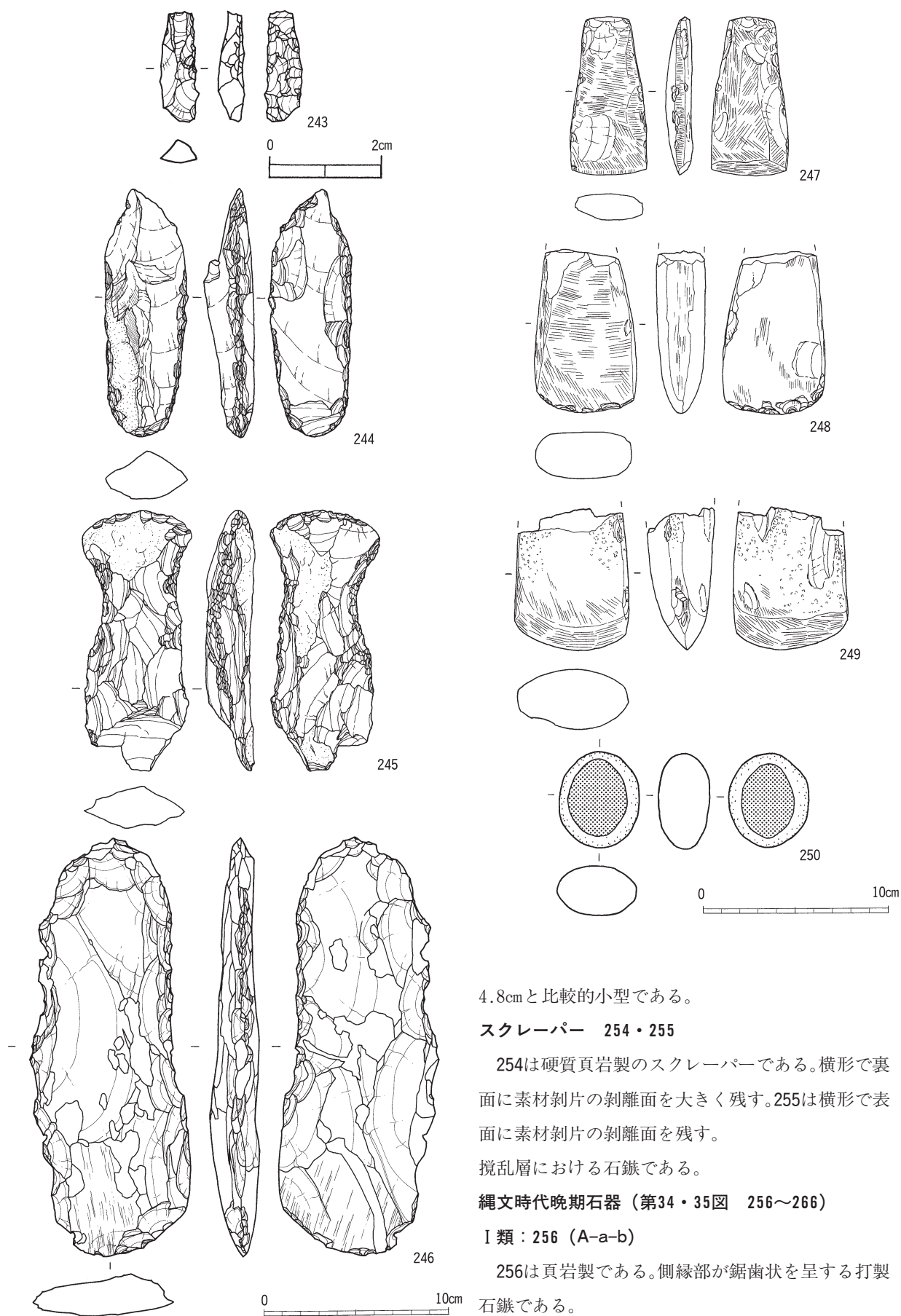
251・252は砂岩製の磨石である。稜線から中央にかけて使用面を残し、側縁部にわずかに敲打痕を残す。251は中世竪穴状遺構から出土したが、出土状況

からⅢ層出土とした。

Ⅱ層の石器（第33図 253～255）

磨石 253

253は砂岩製の磨石である。250と同様に最大長が



4.8cmと比較的小型である。

スクレーパー 254・255

254は硬質頁岩製のスクレーパーである。横形で裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す。255は横形で表面に素材剥片の剥離面を残す。

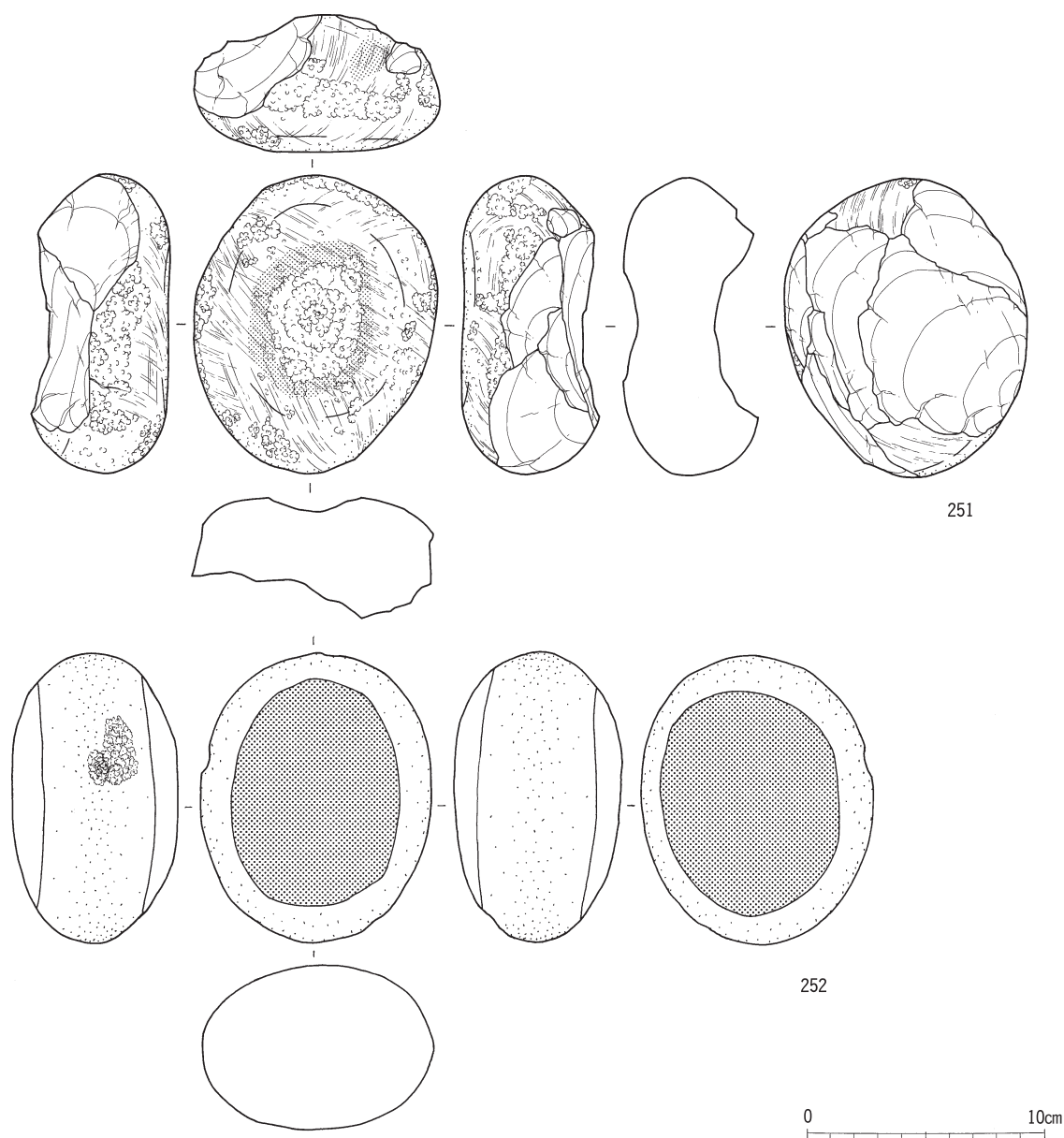
攪乱層における石鏃である。

縄文時代晩期石器（第34・35図 256～266）

I 類：256 (A-a-b)

256は頁岩製である。側縁部が鋸歯状を呈する打製石鏃である。

第31図 縄文時代晩期石器（2）



第32図 縄文時代晩期石器（3）

Ⅱ類：257～259（A-a-c）

257～259は頁岩製の石鏃である。

Ⅲ類：260（A-b-c）

260は頁岩製の石鏃で側縁部が鋸歯状を呈する。

Ⅳ類：261（A-b-d）

硬質頁岩製の石鏃である。基部が全体的に丸味を帯び、挟りがU字状を呈する。

Ⅴ類：262（A-c-b）

262は硬質頁岩製の石鏃である。全体的に紡錘状を呈し、挟りが浅い。

Ⅵ類：263（A-c-d）

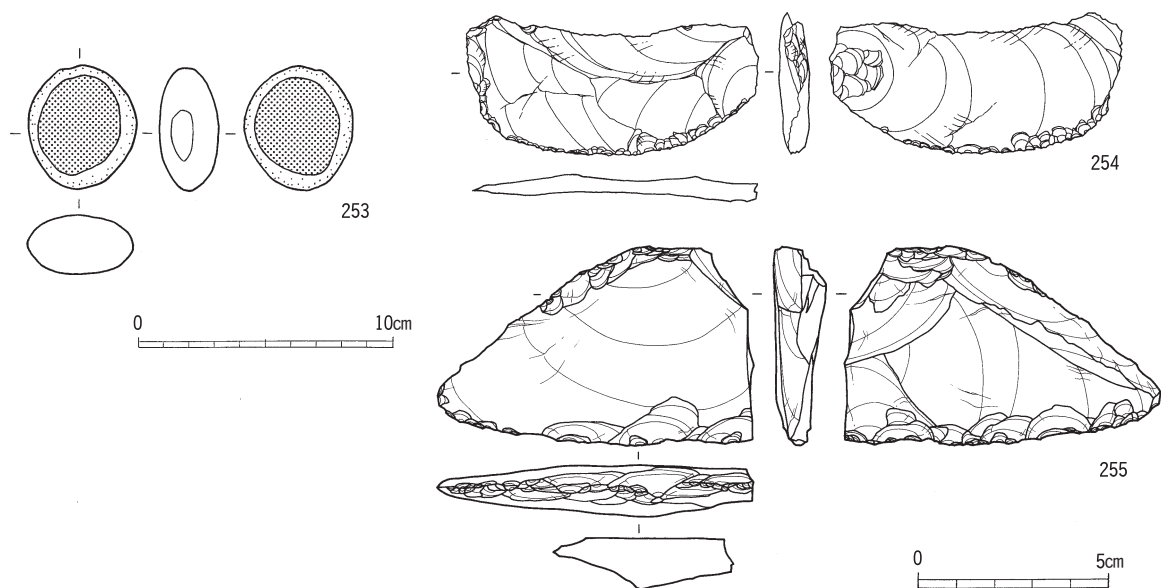
263は硬質頁岩製の石鏃である。先端部が欠損しているが、最大長が3.7cmで比較的大型である。

打製石斧 264・265

264は頁岩製の打製石斧である。側縁部から刃部にかけて細かい剥離が観察できる。劣化が激しく破損部が多い。265は比較的小型の打製石斧である。縦長の剥片を表面は自然面に擦痕を残す。

石皿 266

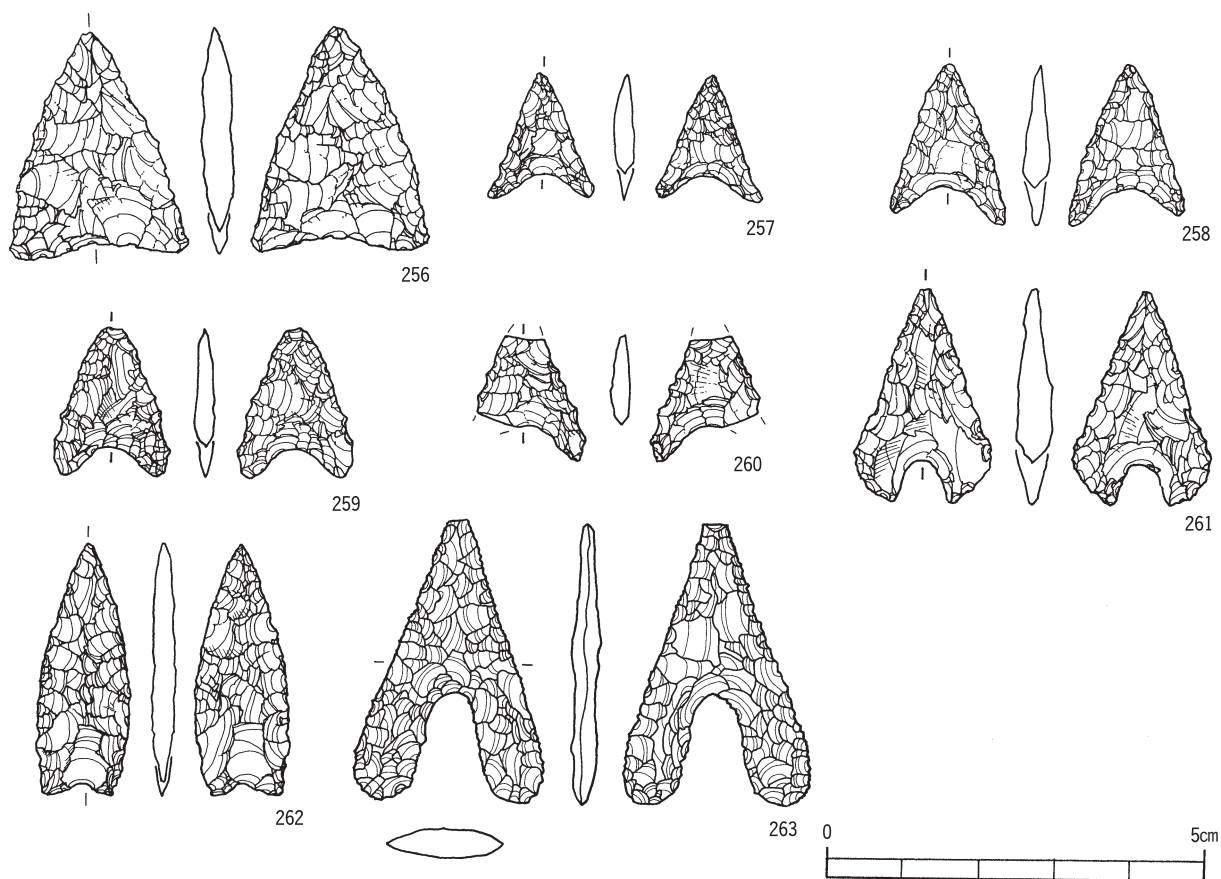
266は石皿の欠損品である。一部に使用面を残し、側縁部に敲打痕が観察できる。



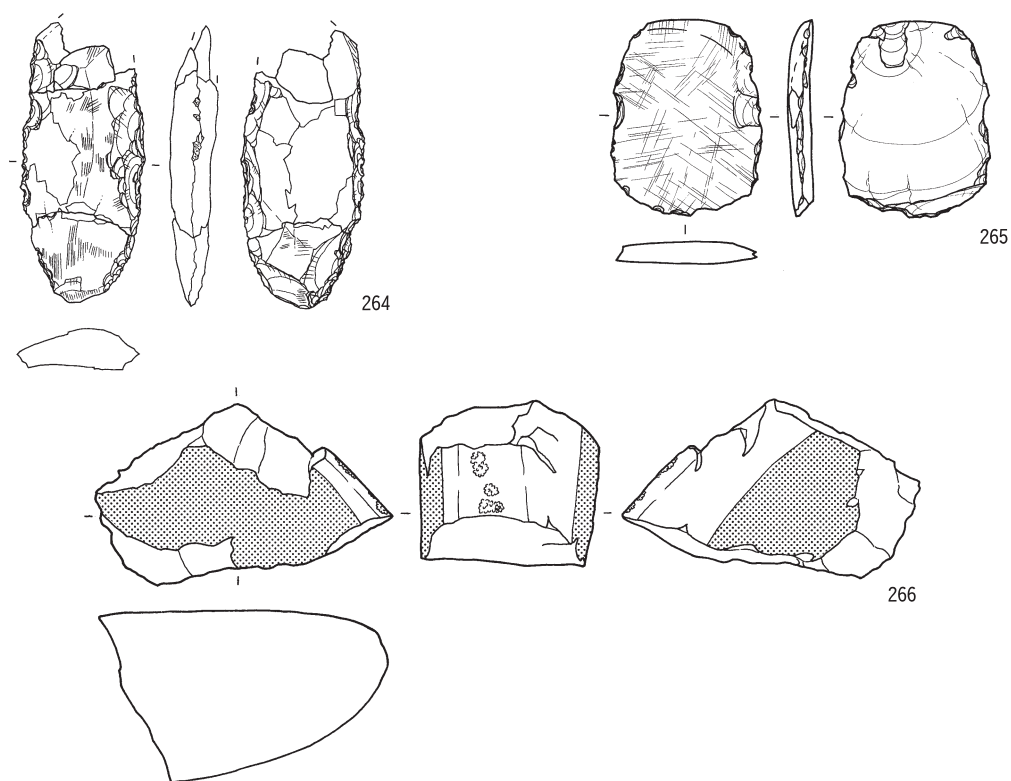
第33図 縄文時代晩期石器（4）

第6表 縄文時代晩期石器 観察表

挿図 番号	遺物番号	出土区	層位	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
30	227	R-10	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.3	1.65	0.6	1.82	
	228	S-6	Ⅲ	石鏃	頁岩	2.35	1.75	0.4	1.16	
	229	R-10	Ⅲ	石鏃	瑪瑙	2.25	1.7	0.7	2.11	
	230	R-9	Ⅲ	石鏃	黒曜石	1.65	1.25	0.35	0.54	
	231	R-10	Ⅲ	石鏃	チャート	1.3	1.3	0.35	0.43	
	232	R-6	Ⅲ	石鏃	チャート	2.1	1.75	0.3	1	
	233	R-7	Ⅲ	石鏃	タンパク石	1.85	1.6	0.18	0.5	
	234	S-6	Ⅲ	石鏃	硬質頁岩	2.1	1.9	0.4	1.64	
	235	R-10	Ⅲ	石鏃	頁岩	1.95	1.45	0.3	0.58	
	236	R-9	Ⅲ	石鏃	黒曜石	1.3	1.15	0.2	0.22	
	237	S-10	Ⅲ	石鏃	頁岩	2.9	1.8	0.3	1.19	
	238		Ⅲ	石鏃	頁岩	2.1	1.6	0.38	0.76	
	239	R-7	Ⅲ	石鏃	頁岩	2.25	1.5	0.25	0.67	
	240		Ⅲ	石鏃	頁岩	2.6	1.5	0.45	1.11	
31	241	R-9	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.2	14.5	0.5	0.77	
	242	R-10	Ⅲ	石鏃	頁岩	2.9	1.5	0.4	1.07	
	243	S-9	Ⅲ	異形石器	黒曜石	2	0.7	0.4	0.6	
	244	S-9	Ⅲ	尖頭器	硬質頁岩	12	4.05	2.45	105.4	
	245	S-11		打製石斧	硬質頁岩	12.55	5.35	2.4	156.2	
	246			打製石斧	頁岩	22.5	8.7	2.8	555	
	247	R-10	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	8.55	4.15	1.3	71.62	
	248	R-10	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	8.8	5.6	2.7	221.23	
32	249	R-10	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	7.65	6.2	3.6	221.08	
	250	R-9	Ⅲ	磨石	砂岩	5.3	4.4	2.7	90.28	
	251		Ⅲ	凹石	砂岩	12.6	10.3	5.9	840	
33	252		Ⅲ	磨石	安山岩	12.3	9.9	7	1060	
	253	S-7	Ⅱ	磨石（器面調整用）	砂岩	4.9	4.3	2.3	63.36	
	254	S-9	Ⅱ	スクレーパー	硬質頁岩	3.7	7.7	0.8	20.92	
34	255		Ⅱ	スクレーパー	頁岩	5.2	8.4	1.4	22	
	256	Y-7		石鏃	頁岩	3.01	2.4	0.4	2.4	
	257	R-11		石鏃	頁岩	2.2	1.7	0.4	0.66	
	258	V-10		石鏃	頁岩	1.7	1.4	0.3	0.36	
	259			石鏃	頁岩	2	1.5	0.3	0.64	
	260	V-10		石鏃	頁岩	1.7	1.7	0.3	0.45	
	261	Y-9		石鏃	硬質頁岩	3.4	1.3	0.3	1.3	
	262			石鏃	硬質頁岩	2.9	1.9	0.5	1.75	
35	263	R-11		石鏃	硬質頁岩	3.7	2.5	0.35	2.3	
	264	R-10	SD14	打製石斧	頁岩	11.05	4.9	1.8	92.29	
	265	SD13	SD13	打製石斧	頁岩	7.7	6	1.1	60.58	
	266		攪乱	石皿	砂岩	6.5	11.8	6.6	590	



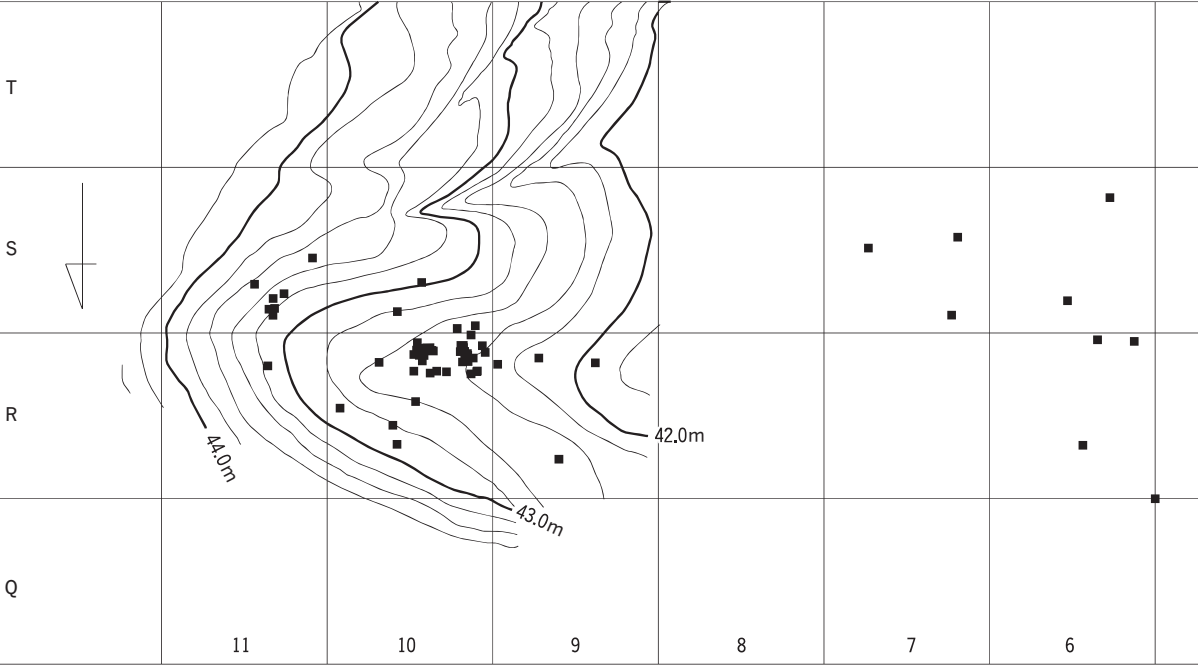
第34図 縄文時代晩期石器（5）



第35図 縄文時代晩期石器（6）

4 弥生時代の調査

R-10区のⅡ層を中心に、総柱建物跡1棟、磨製石 土器は弥生前期後半から中期にかけての甕、壺が
鍬3点、石包丁1点、土器が出土した。 出土している。



第36図 弥生時代遺物出土状況

(1) 遺構

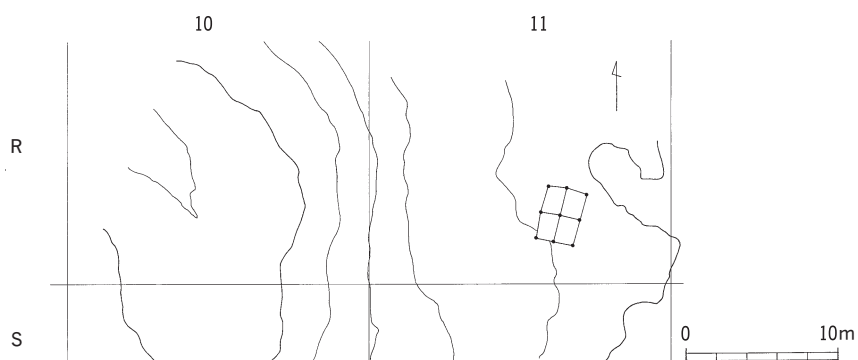
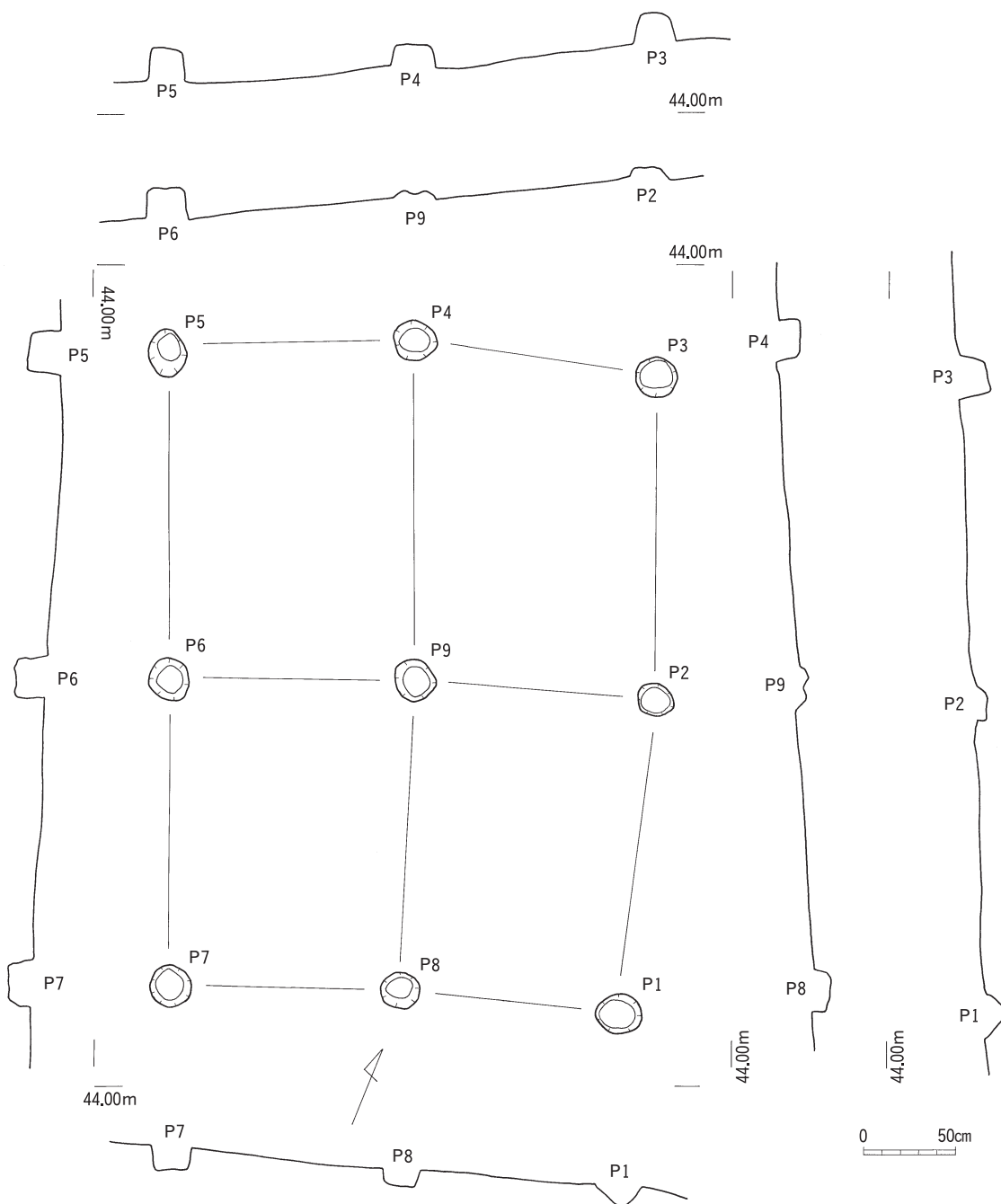
総柱建物跡（第37図）

R-11区，Ⅱ層で検出された。2間×2間で，中央にも柱をもつ総柱建物である。長軸354cm，短軸271cmを測り，南北に軸をとる。

柱穴痕の形状は平面が円形で断面が矩形状，底部は平坦もしくは丸底である。平均値は長径24.22cm，短径21.44cm，深さ12.5cmである。掘り込みが比較的に浅いのは，後年の削平によると思われる。

第7表 弥生時代総柱建物跡 観察表

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (m ²)	備考
棟部	P1-P7	250	P1-P2	175	354	1	13	26	22	橢円	18.49	
	P2-P6	269	P2-P3	179		2	7	22	18	橢円		
	P3-P5	271	P5-P6	179	359	3	18	23	22	円		
			P6-P7	170		4	11	26	23	橢円		
						5	19	27	21	橢円		
						6	17	25	23	橢円		
						7	15	23	23	円		
						8	9	22	20	円		
						9	4	24	21	橢円		
	平均	263.33		175.75	356.5		12.5	24.22	21.44			



第37図 弥生時代 総柱建物跡

（２）遺物

土器

出土した土器は、前期後半から中期にかけてのものである。各時代の土器は重複して出土しており、分布状況に明瞭な違いはみられない。器種ごとの分類、共伴関係については主に中園聡氏（鹿児島国際大学）の編年を参考にした。

壺形土器 入来Ⅰ式土器（第38図 267～280）

短い口縁部突帯が下方を向き、突帯の断面形はU字状を呈する。口唇部にはへら状工具による縦位の刻目が密に施され、胴部には口縁部突帯より小さな刻目突帯文やへら描きの沈線文が施される。胴部の形状は砲弾形である。

267～271は口縁部から胴部にかけてである。267と268は同一個体と思われる。外面はススの付着が顕著で、内面は赤褐色を呈する。胴部には口縁部よりも小さな突帯を1条巡らし、浅い刻目を施す。口唇部から胴部突帯までは横ナデ、以下は縦位のへらミガキ調整である。

269は縦位にへラケズリ調整を施す。270・271は胴部に沈線を1条巡らせる。口縁部突帯周辺は横ナデ、胴部はへらミガキ調整がみられる。口縁部外面周辺にススの付着がみられる。

272～274は小型の甕形土器と思われる。口縁部突帯は無刻目で、胴部との境は調整不十分である。

壺形土器（第38図 275～280）

275～280は同一個体と思われる。短い口縁部は緩やかに外反し、胴部は丸みを帯びた形状である。肩部はナデ肩で、浅いへら描き沈線文を施す。調整は口縁部が横ナデ、頸部の外面が縦位のへらミガキ、肩部以下と内面が横方向のへらミガキである。外面は赤褐色、内面は浅黄桃色を呈する。

275・276は口縁部から頸部の部分である。276は肩部に1条の沈線を巡らした後、頸部以下の外面に縦方向のへらミガキ調整を施す。278・279は肩部から胴部上半である。肩部に2条の細いへら描き沈線文を巡らした後、沈線から上位には縦方向、下部には

斜め方向に交錯するへらミガキ調整を行っている。

277・280他は胴部の最も張り出した部分に相当する。280は胴部の中位に1条の沈線文を巡らしている。内面には指頭圧痕がみられる。

甕形土器 入来Ⅱ式土器（第39図 281～291）

短い口縁部が下方へ垂れ、口唇部が浅く凹む。胴部は弱く張り、数条の細い突帯を巡らす。口縁部周辺は横ナデ、胴部内外面はへらミガキ調整を施す。

281～283は口縁部である。口縁部の形状がL字状を呈する。287～291は胴部片である。288～291は断面三角突帯が貼付されている。289・290はいわゆる絡縄突帯と呼ばれているもので、突帯の上下を指でつまんでいる。貼付部分の調整は不十分である。291の突帯には縦位に刻目が施される。

壺形土器（第39図 284・285）

284は口縁部が下方に垂れ下がり口唇部は浅く凹んでいる。285は口縁部が上向きになる。

黒髪式（第39図 286～291）

口縁部が上方へ傾く甕形土器である。286は口縁部である。上面は浅く凹む。内面が強く突出し、内外面とも横ナデを施す。

底部（第39図 292～297）

292～296甕形土器の底部である。上げ底、平底の2種に分類できる。

292は脚台状を呈する。上げ底の接地面は平坦に成形され、直線的に胴部へと立ち上がる。外面には縦方向にへらミガキがみられる。

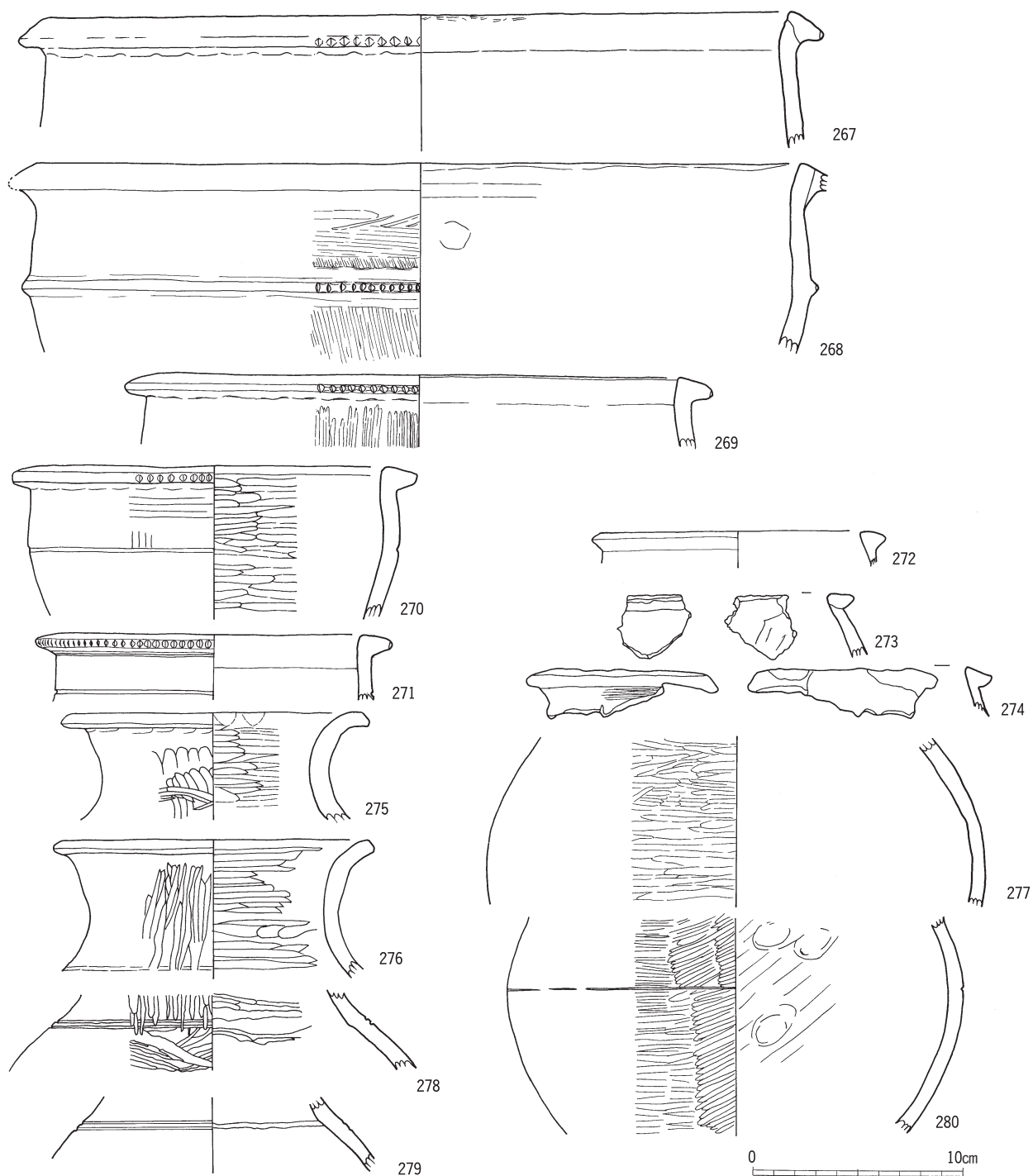
293～295は、平底から外反気味に胴部へ開く様子がうかがえ、縦方向にへらミガキがみられる。293は外面が赤褐色で内面が浅褐色である。

296は胴部への立ち上がりが他よりも直線的で、外面には縦方向のへらミガキと一部板ナデがみられる。

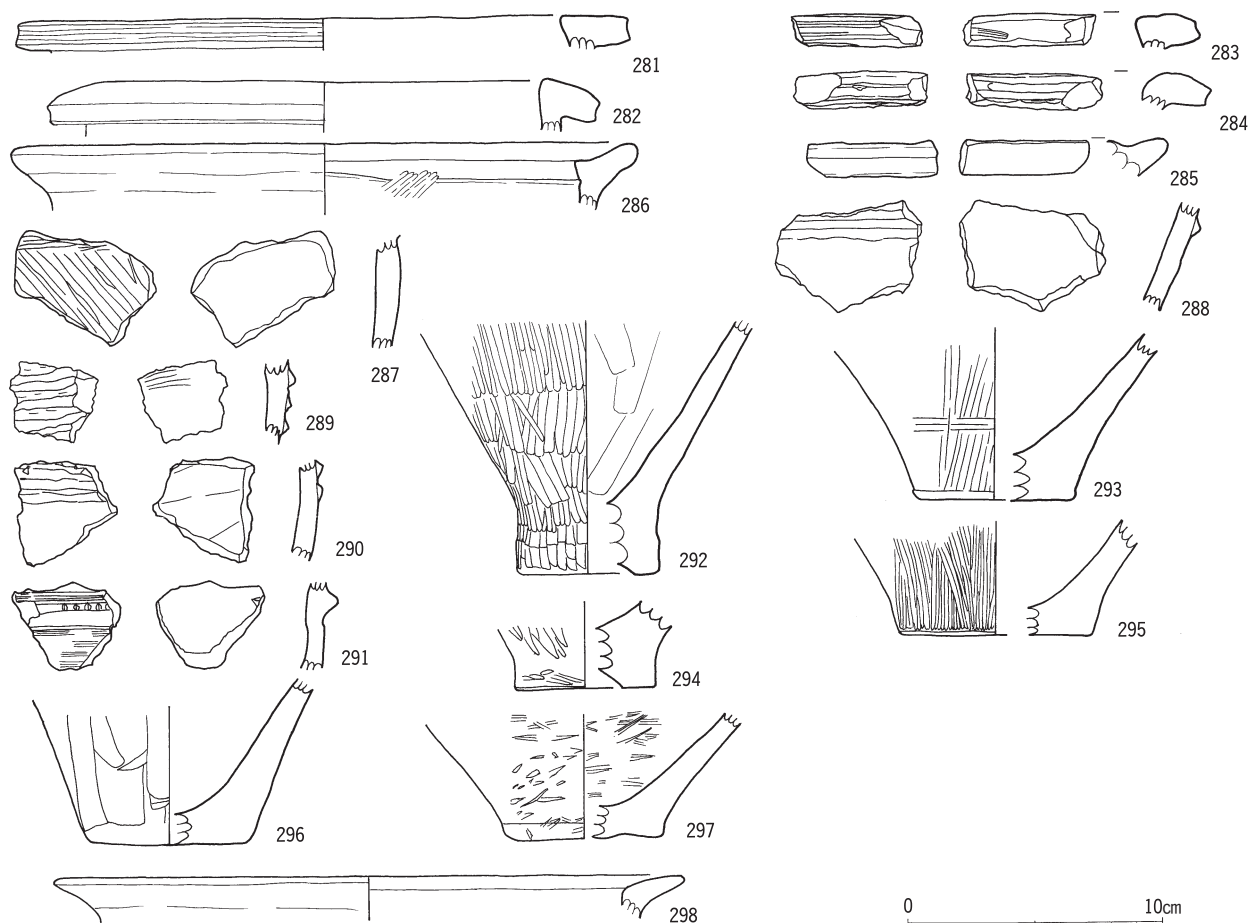
297は壺形土器の底部である。外面には細かなへらミガキを施す。外面が黒色を呈する。

その他の遺物（第39図 298）

298は「く」の字状に起き上がる甕形土器の口縁部である。口唇部は先端がすばみ丸みを帯びる。1点のみの出土で、弥生時代後期のものと思われる。



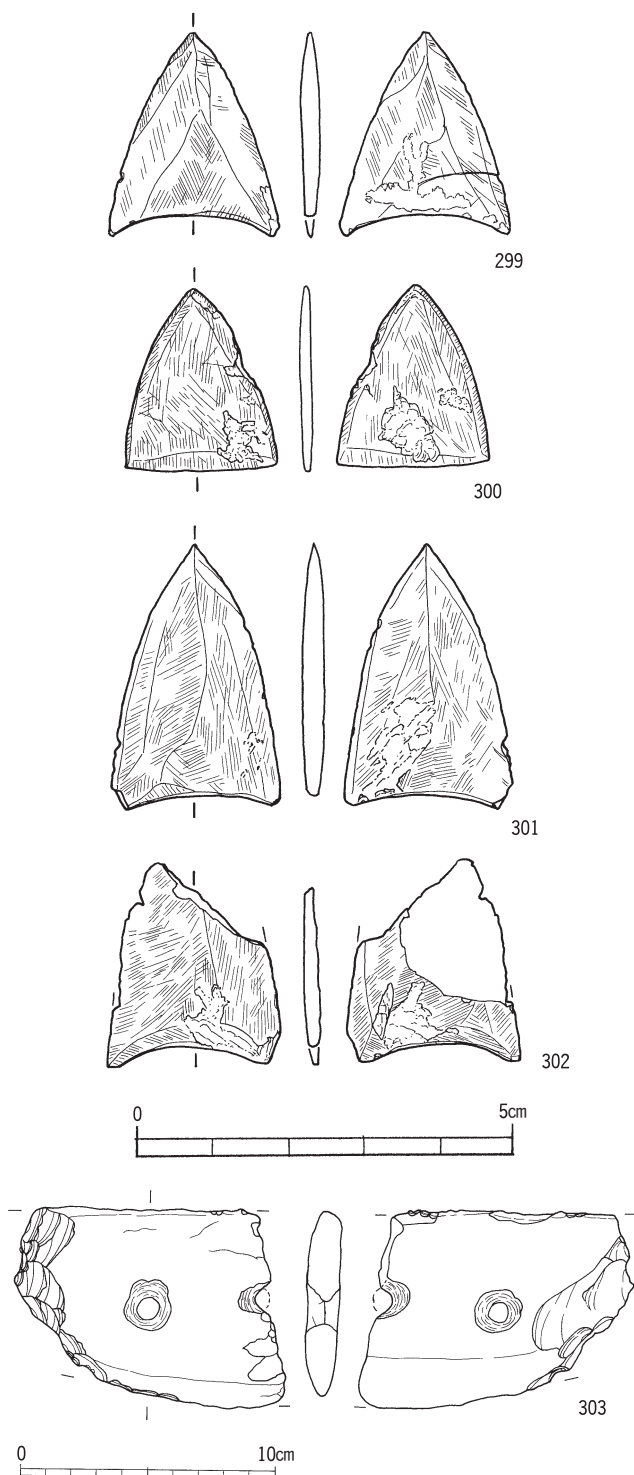
第38図 弥生時代土器（1）



第39図 弥生時代土器（2）

第8表 弥生時代土器 観察表

神図 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	部 位	色 調		調 整		焼成	備 考
						内	外	内	外		
38	267	S-11・R-10	Ⅱ	甕	口縁部～胴部	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	ナデ	ナデ	良	
	268	S-11	Ⅱ	甕	口縁部～胴部	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	ナデ	ナデ・ミガキ	良	
	269	R-10	Ⅱ	甕	口縁部	7.5YR4/2灰褐	5YR5/4にぶい赤褐	ナデ	ナデ・ミガキ	良	
	270	R-10	Ⅱ	甕	口縁部～胴部	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	良	
	271	R-10	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/4にぶい橙	5YR6/6橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	良	
	272	R-10	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR7/6橙	ナデ	ナデ	良	
	273	R-10	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR7/6橙	ミガキ	ミガキ	良	
	274	R-10	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR7/6橙	ナデ	ナデ	良	
	275	R-10	Ⅱ	壺	口縁部～頸部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	良	
	276	R-10	Ⅱ	壺	口縁部～肩部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	良	
	277	R-9・10	Ⅱ	壺	肩部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
	278	R-10	Ⅱ	壺	肩部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
	279	S-10	Ⅱ	壺	胴部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
	280	S-10・R-10	Ⅱ	壺	胴部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
39	281	R-6	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ナデ	良	
	282	S-7	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR6/6橙	ナデ	ナデ	良	
	283	S-6	Ⅱ	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR6/6橙	ナデ	ナデ	良	
	284	S-7	Ⅱ	壺	口縁部	7.5YR5/4にぶい褐	5YR5/6明赤褐	ナデ	ナデ	良	
	285	R-9	Ⅱ	壺	口縁部	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	
	286	R-9	Ⅱ	甕	口縁部	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	ナデ	ナデ	不良	
	287	R-10	Ⅱ	甕	胴部	7.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/6明赤褐	ナデ	ミガキ	良	
	288	R-10	Ⅱ	甕	胴部	7.5YR6/4にぶい橙	2.5YR5/6明赤褐	ナデ	ナデ	良	
	289	S-6	Ⅱ	甕	胴部	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ナデ	良	
	290	胴部	S-7	Ⅱ	甕	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ナデ	良	
	291	S-7	Ⅱ	甕	胴部	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	ナデ	ナデ	良	
	292	R-10	Ⅱ	甕	胴部～底部	5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	ナデ	ミガキ	不良	
	293	R-10・11	Ⅱ	甕	胴部～底部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
	294	R-10	Ⅱ	甕	底部	10YR3/1黒褐	5YR5/4にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
	295	R-6	Ⅱ	甕	胴部～底部	7.5YR6/4にぶい橙	5YR4/4にぶい赤褐	ナデ	ミガキ	良	
	296	R-10	Ⅱ	甕	胴部～底部	2.5YR6/8橙	2.5YR5/6明赤褐	ミガキ	ミガキ・板ナデ	良	
	297	R-10	Ⅱ	壺	胴部～底部	2.5YR6/6明赤褐	7.5YR3/1黒褐	ミガキ	ミガキ	良	
	298	表採	表採	甕	口縁部	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ナデ	良	



第40図 弥生時代石器

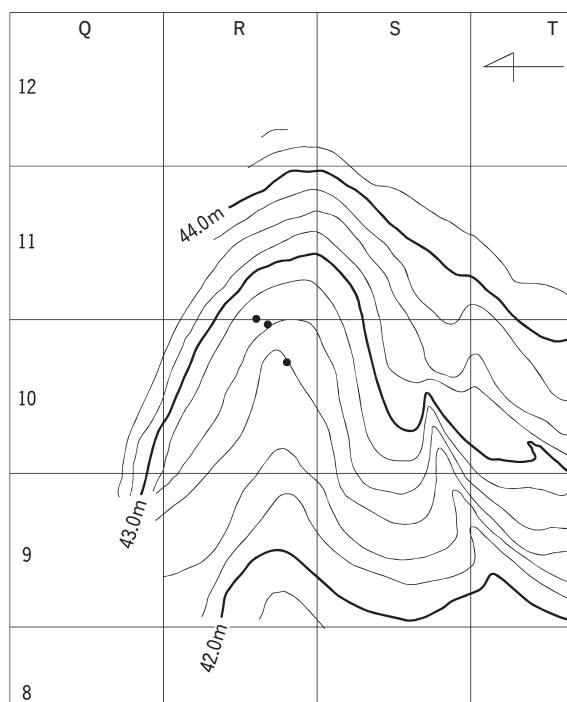
弥生時代の石器（第40図 299～303）

石鏃（第40図 299～302） A-a-a

299は頁岩製，300～302は石英製の磨製石鏃である。全体的に研磨されており，刃部にかけて鑄を意識した調整になっている。

石包丁（第40図 303）

303は蛇紋岩製の石包丁である。R-11区検出の2間×2間建物跡の時代特定基準にした石器である。器面全体に擦痕が観察できる。刃部近くに鑄が施され，鋭利な刃部を形成している。金属顕微鏡を使用し，使用痕分析を行った。石包丁の全面において，光沢を放つ細かい凹凸が多くみられた。この凹凸の中に微細なコーングロスパッチが存在しても現在の観察状況では判別は不可能である。よって，コーングロスパッチの有無を確認することはできなかった。



第41図 弥生時代石器出土状況

第9表 弥生時代石器 観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
40	299	R-10	Ⅱ	磨製石鏃	頁岩	2.8	2.3	0.3	1.49	
	300	表採		磨製石鏃	鉄石英	2.5	2.0	1.8	1.01	
	301	R-11	Ⅱ	磨製石鏃	鉄石英	3.55	2.3	0.35	2.28	
	302	表採		磨製石鏃	鉄石英	2.7	2.3	0.2	1.28	
	303	R-10	Ⅱ	石包丁	蛇紋岩	5.3	7.2	0.85	46.6	

5 中世の調査

Ⅲ層上面から竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡24棟、溝状遺構8条、古道5条を検出した。遺物は土師器、青・白磁である。主な出土範囲はQ-10区、R～T-5～10区のエリアである。中でもS-6～8区に最も集中している。

(1) 遺構

①掘立柱建物跡

24棟が検出された。T～U-7～10区、W～Y-6・7区の2か所に集中している。方向軸は北北東、東西に大別できる。遺跡は東から西へ傾斜しており、地形の高低差との関係では、北北東に軸をとる遺構は等高線に対して水平になり、床面のレベル幅が小さく、東西の場合は垂直になる為、レベル幅が大きい傾向がみられる。

規模は2間×3間を主体に、1間×2間、四面庇を有するものまである。エリアによる規模、主軸方向の差異はみられない。T-7～9区では同じ主軸をもつ、建物間での切り合い関係が顕著にみられることから数回の建替えが想定される。

梁間平均は339.45cm、桁行平均は544.85cmである。

柱穴の掘り方は円形もしくは楕円形である。埋土はⅡ層黒色土である。断面は矩形状、底面は平坦、もしくは丸みを帯びる。平面の長径平均は29.78cm、短径平均は25.17cm、深さの平均は37.86cmを測る。検出状況からは上屋構造の判別はできない。全体的に柱並びは良好である。柱痕が確認できたものは無い。

なお、掘立柱建物跡4・6・13・23については平成10年度の台風による強風で実測図面を紛失した。この為、規格等の詳細なデータは掲載できず、本文では規模・主軸方向と検出位置図のポイントから復元した遺構配置図のみを掲載した。

掘立柱建物跡1 (第43図)

S-7・8区で検出された。2間×3間の四面庇付で主軸はほぼ南北方向である。棟部と底部の間隔の平均は109cmである。推定床面積は25.87㎡で最大である。柱穴の掘り方は楕円形が多い。東側の長軸沿

いに中世溝状遺構10が検出されている。掘立柱建物跡2と切り合い、掘立柱建物跡16と隣接する。柱穴5で皿が出土している。

遺構内遺物 皿(304)

体部が直線的に立ち上がる。体部最下端には糸切り技法による切り離しを途中でやめた痕跡が残る。底部には糸切り痕がみられる。赤色粒が全体的に認められる。

掘立柱建物跡2 (第44図)

S-8区で検出された。2間×3間で総柱を2本もつ。主軸はほぼ南北方向である。掘立柱建物跡1と切り合っており、柱穴が重複する。方向軸は同一なので時期差はあまり無いと思われる。東側の長軸沿いに中世溝状遺構10が検出されている。

掘立柱建物跡3 (第45図)

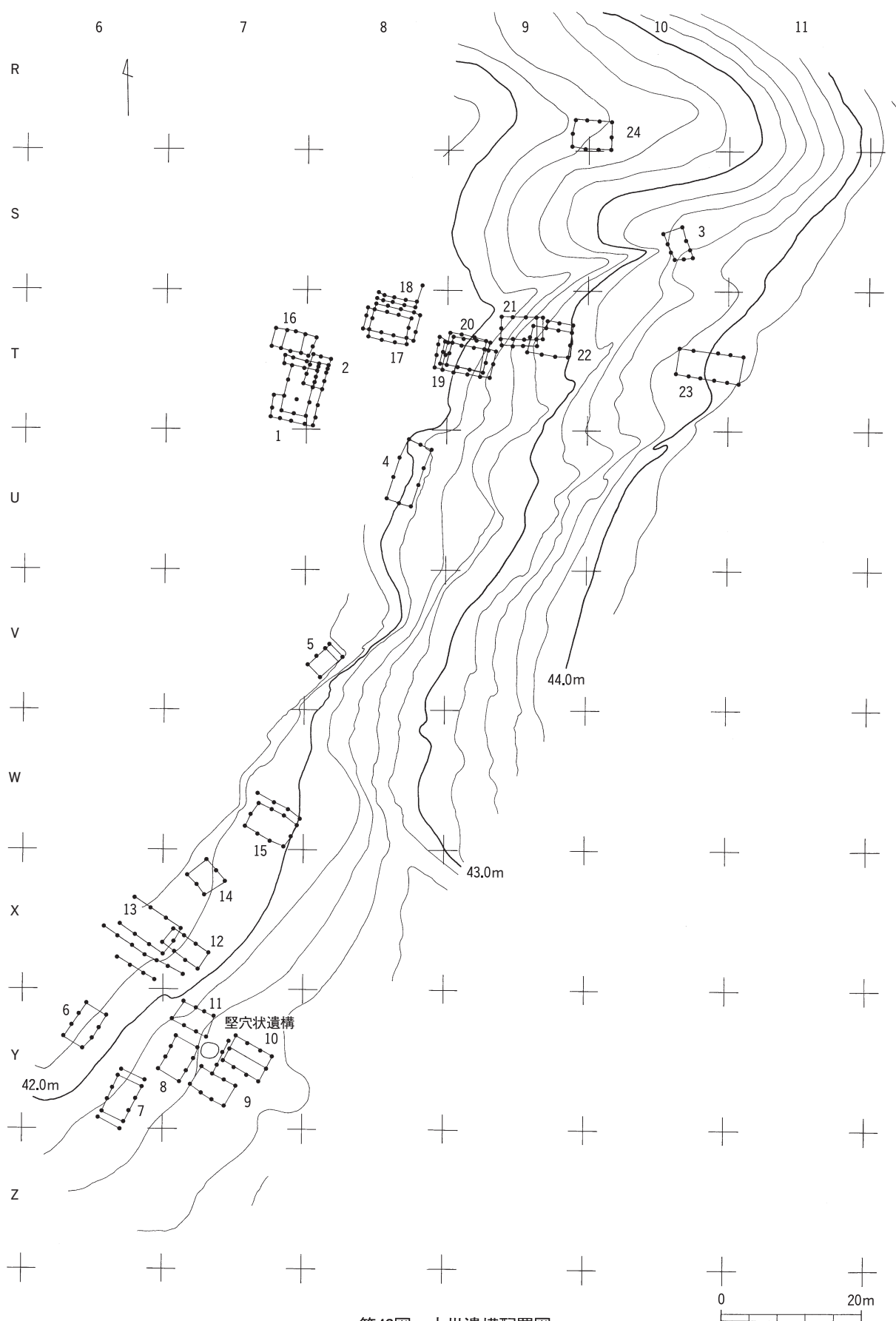
S-10区で検出された。2間×3間、主軸は北北西方向である。柱穴の深さが不揃いである。

掘立柱建物跡4

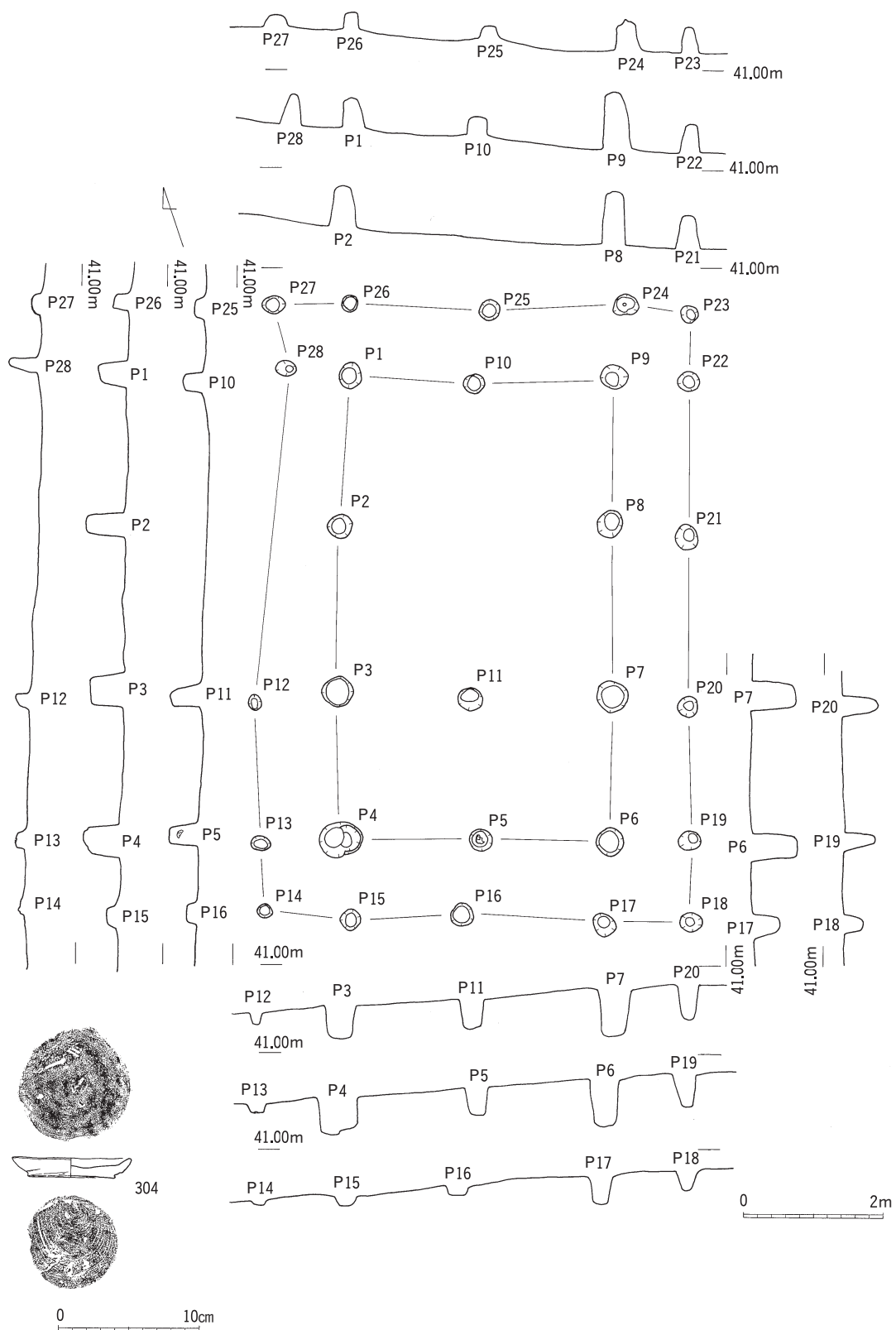
U-8区で検出された。2間×3間である。主軸は北北東である。調査期間中の台風により実測図を紛失し、平面図及び断面図は作成不可能である。

掘立柱建物跡5 (第46図)

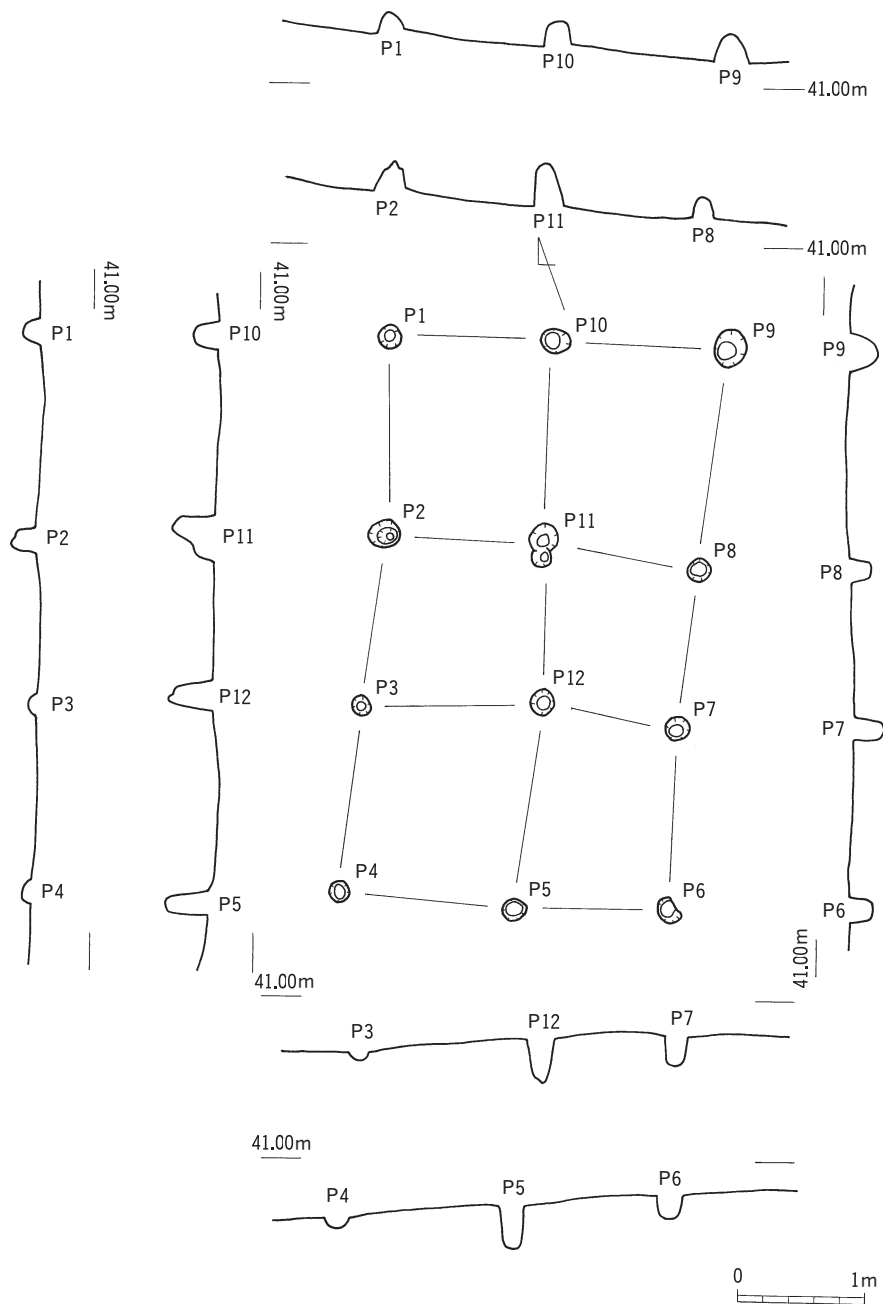
V-7・8区で検出された。掘立柱建物跡が集中する2つのエリアの中間に位置する。1間×2間で北側に片面庇が付く。推定床面積は9.61㎡で24棟中最少である。主軸はほぼ北東方向である。半径20m以内に他の棟が無い。



第42図 中世遺構配置図



第43図 中世掘立柱建物跡（1）



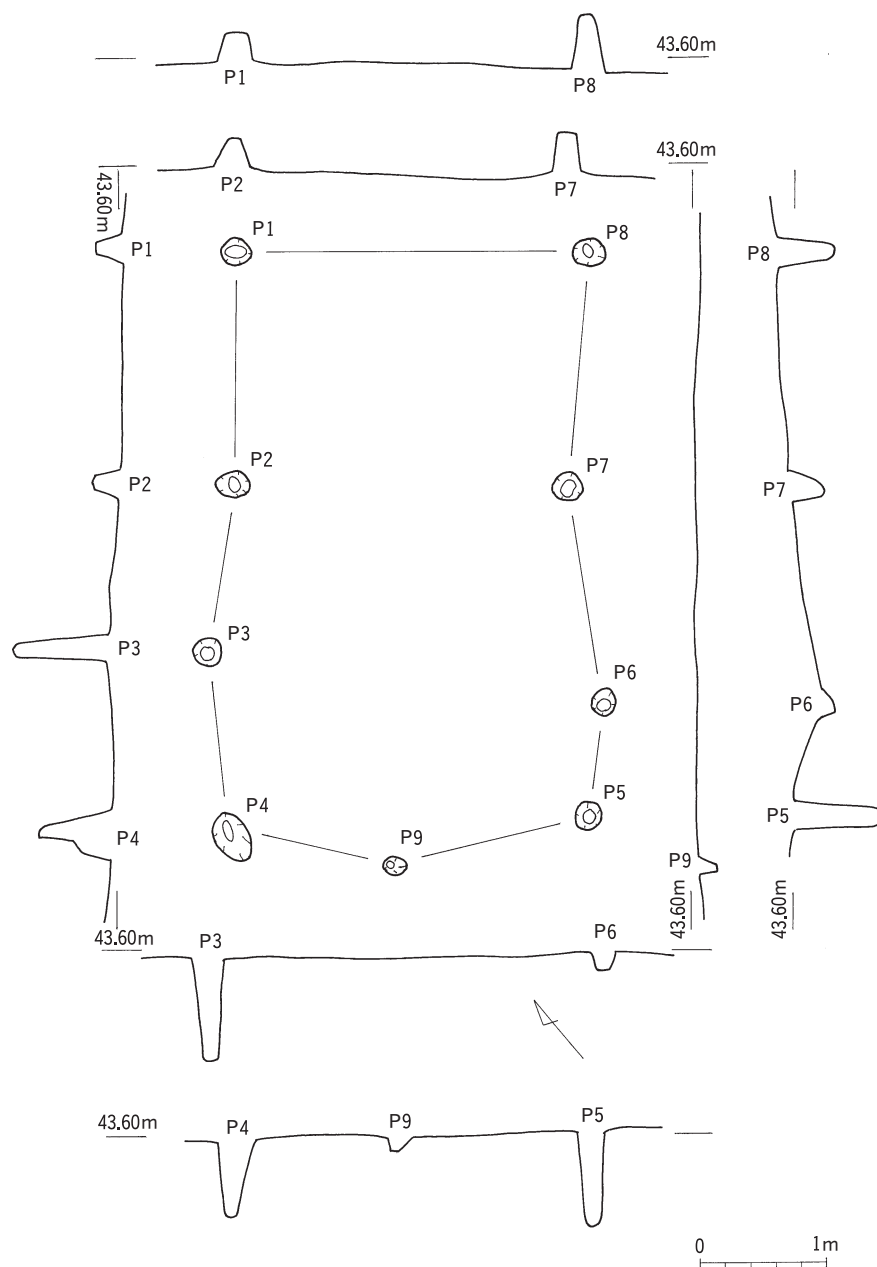
第44図 中世掘立柱建物跡（2）

掘立柱建物跡 6

Y-6区で検出された。2間×3間である。主軸は北北東方向である。棟部南端で中世溝状遺構4と切り合っている。2m東側の掘立柱建物跡7との間で中世溝状遺構5の硬化面が検出されている。調査期間中の台風により実測図を紛失し、平面図及び断面図は作成不可能である。

掘立柱建物跡 7（第47図）

Y-6区で検出された。1間×3間で南北に二面底が付く。主軸はほぼ北北東方向である。柱穴の深さの平均は22棟中最も深い56.88cmである。同一の主軸方向をもつ掘立柱建物跡6・8と隣接する。棟部と中世溝状遺構2・3・4が切り合い、4m西側では長軸とほぼ同方向に延伸する中世溝状遺構5の硬化面が検出されている。



第45図 中世掘立柱建物跡（3）

柱穴2ですり鉢の口縁部が出土している。

遺構内遺物 すり鉢（305）

305はすり鉢の口縁部である。口縁端部には整形による指頭痕が残る。

掘立柱建物跡8（第48図）

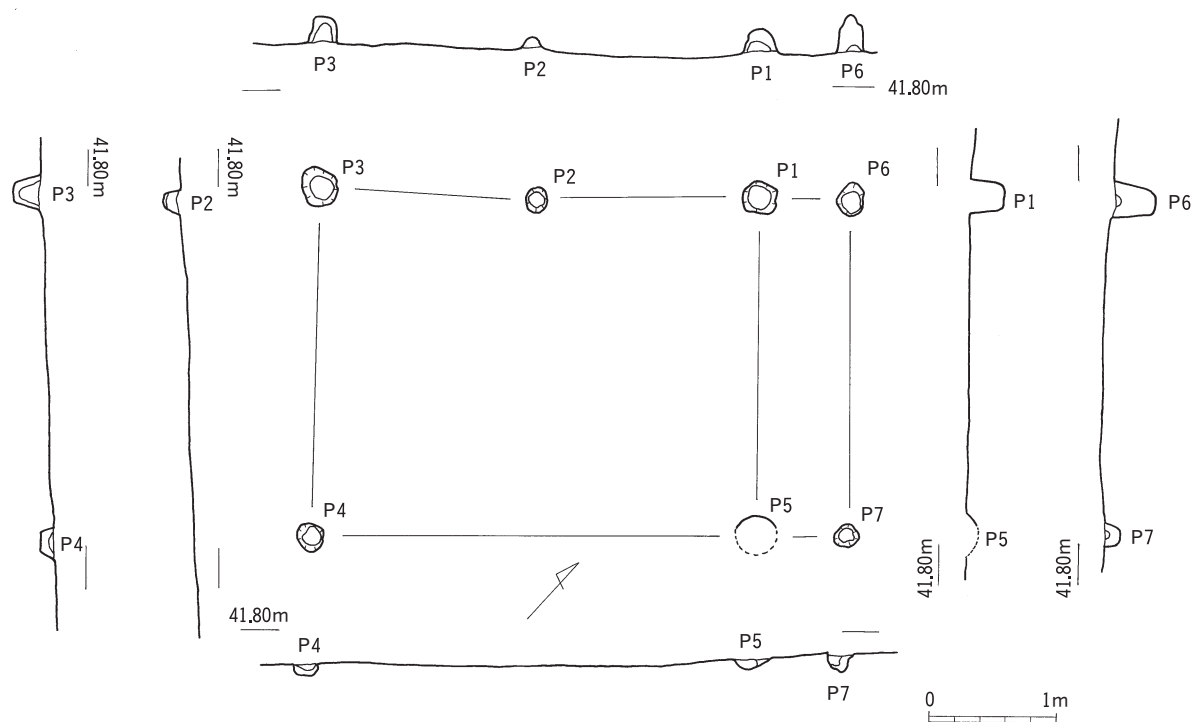
Y-6・7区で検出された。1間×3間である。主軸はほぼ北北東方向である。北側に掘立柱建物跡9～11が隣接するが主軸方向が異なるため、時期差があると思われる。

掘立柱建物跡9（第49図）

Y-7区で検出された。1間×3間で主軸はほぼ北西方向である。掘立柱建物跡10・11と平行している。柱穴8で坏が出土している。

遺構内遺物 坏（306）

306は坏である。体部は直線的に立ち上がる。内面を横ナデし、見込みは回転ナデの後丁寧にナデ消している。底部には糸切り痕が認められる。



第46図 中世掘立柱建物跡（5）

掘立柱建物跡10（第50図）

Y-7区で検出された。2間×3間で主軸はほぼ北西方向である。北西側で短軸に平行して柱穴列が1条検出されている。柱穴5・10はわずかに外側に掘られている。約50cm南側で中世溝状遺構4が検出されている。

掘立柱建物跡11（第51図）

Y-7区で検出された。1間×3間で主軸はほぼ北西方向である。約3m北の長軸側で検出された中世溝状遺構5が、掘立柱建物跡12の手前で屈曲し掘立柱建物跡11の短軸側に延伸している。柱穴3で小皿が出土している。

遺構内遺物 皿（307）

307は皿である。体部はやや丸みをもって立ち上がり口縁部に至る。体部最下端には、糸切り技法による底部の切り離しを途中で止めた際に生じた溝が認められる。内外面を横ナデし、見込みには回転ナデ、底部には糸切り痕がみられる。

掘立柱建物跡12（第52図）

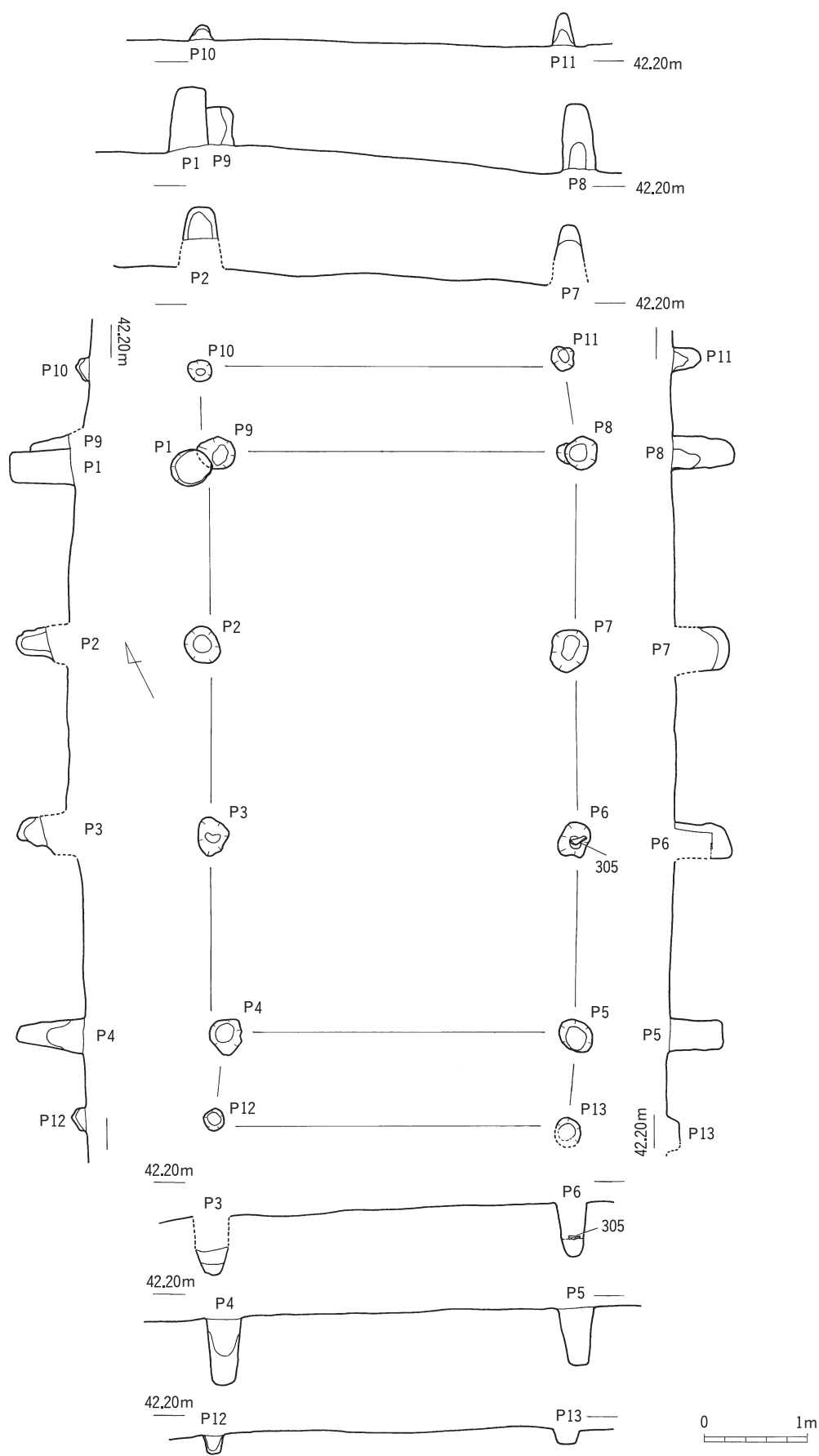
X-7区で検出された。1間×3間で主軸はほぼ北西方向である。南西側に柱穴列が2条平行して検出されている。溝状遺構13と切り合っている。1m南東で中世溝状遺構5が検出されている。中世溝状遺構5は掘立柱建物跡11との間で屈曲し、南西方向に延伸していく。

掘立柱建物跡13

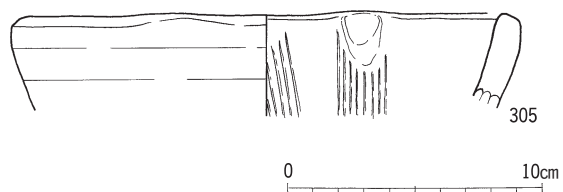
X-6・7区で検出された。2間×3間で主軸はほぼ北東方向である。掘立柱建物跡12と切り合っている。南西側に平行する柱穴列が2条検出されている。調査期間中の台風により実測図を紛失し、平面図及び断面図は作成不可能である。

掘立柱建物跡14（第53図）

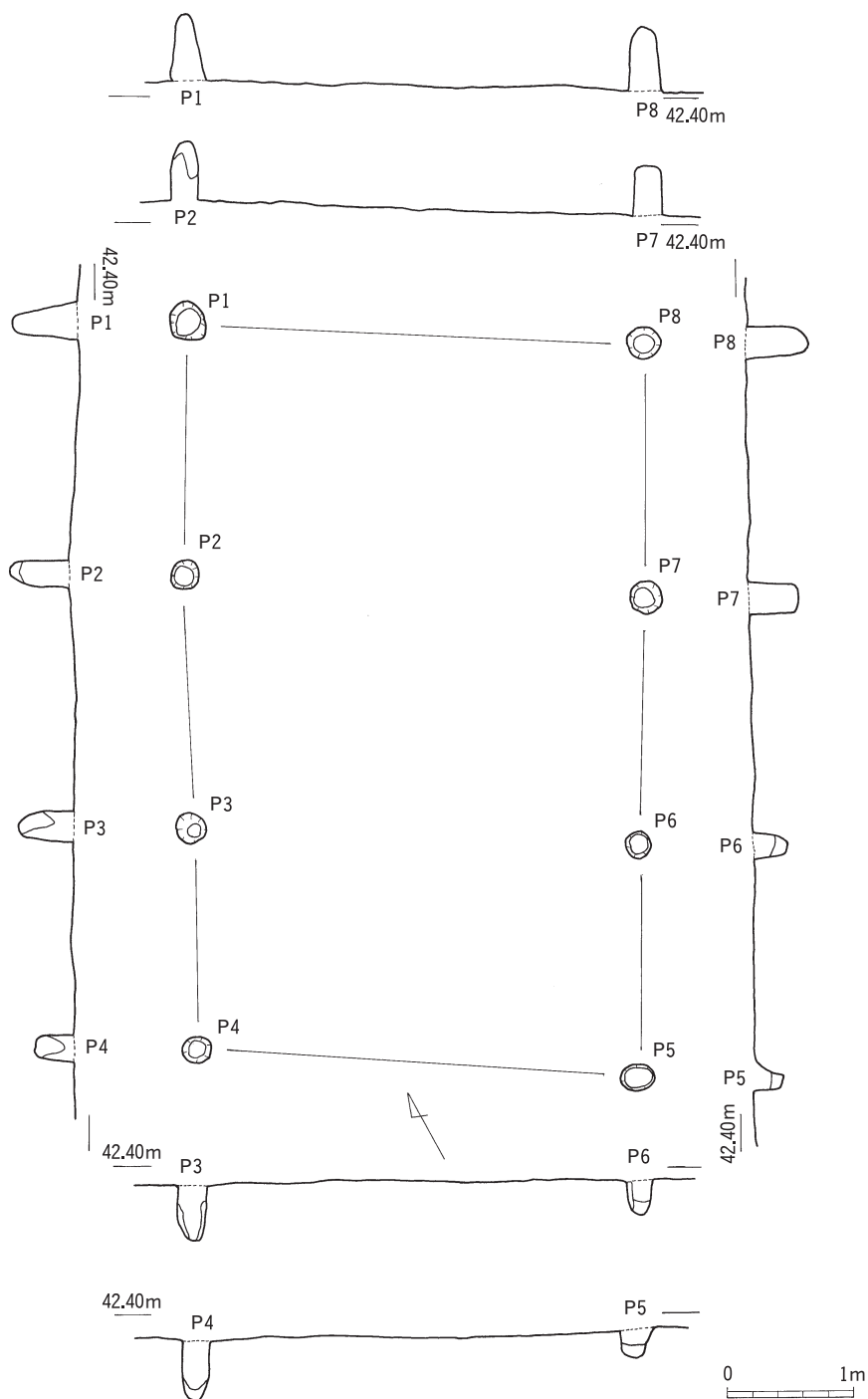
X-7区で検出された。1間×2間で主軸はほぼ北西方向であるが、このエリアの他の中世溝状遺構より若干北寄りに主軸をとる。



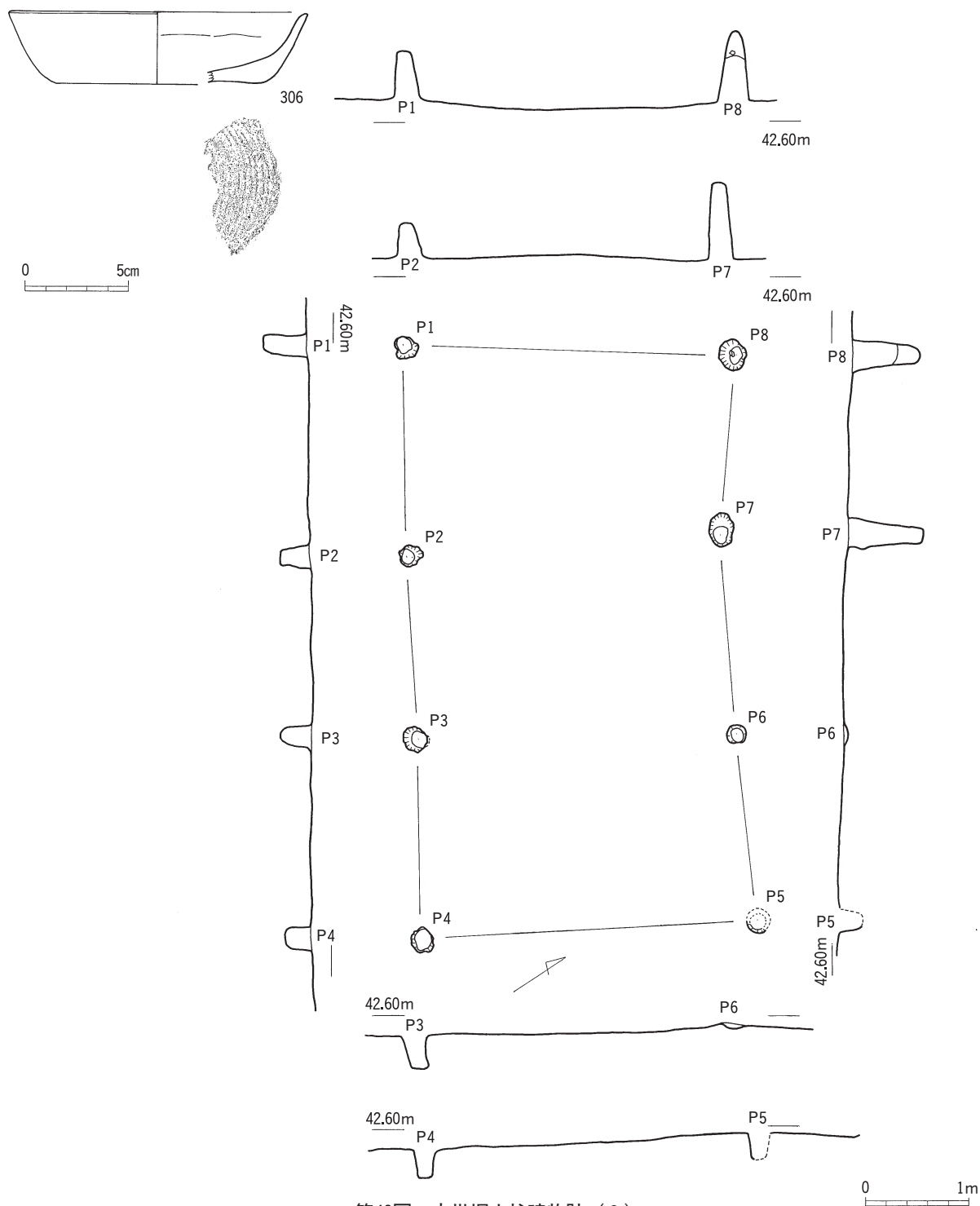
第47图 中世掘立柱建物跡（7）



中世掘立柱建物跡（7）遺構内遺物



第48図 中世掘立柱建物跡（8）



第49図 中世掘立柱建物跡（9）

掘立柱建物跡15（第54図）

W-7区で検出された。2間×3間で主軸はほぼ北西方向である。北東側に柱穴列が平行して検出されている。桁行きよりもやや長めではあるが、棟部との距離が約90cmである。これは他の底をもつ掘立柱建物跡とも一致するので、この柱穴列も底部とみなした。5 m 東側に中世溝状遺構 7 が検出された。

掘立柱建物跡16（第55図）

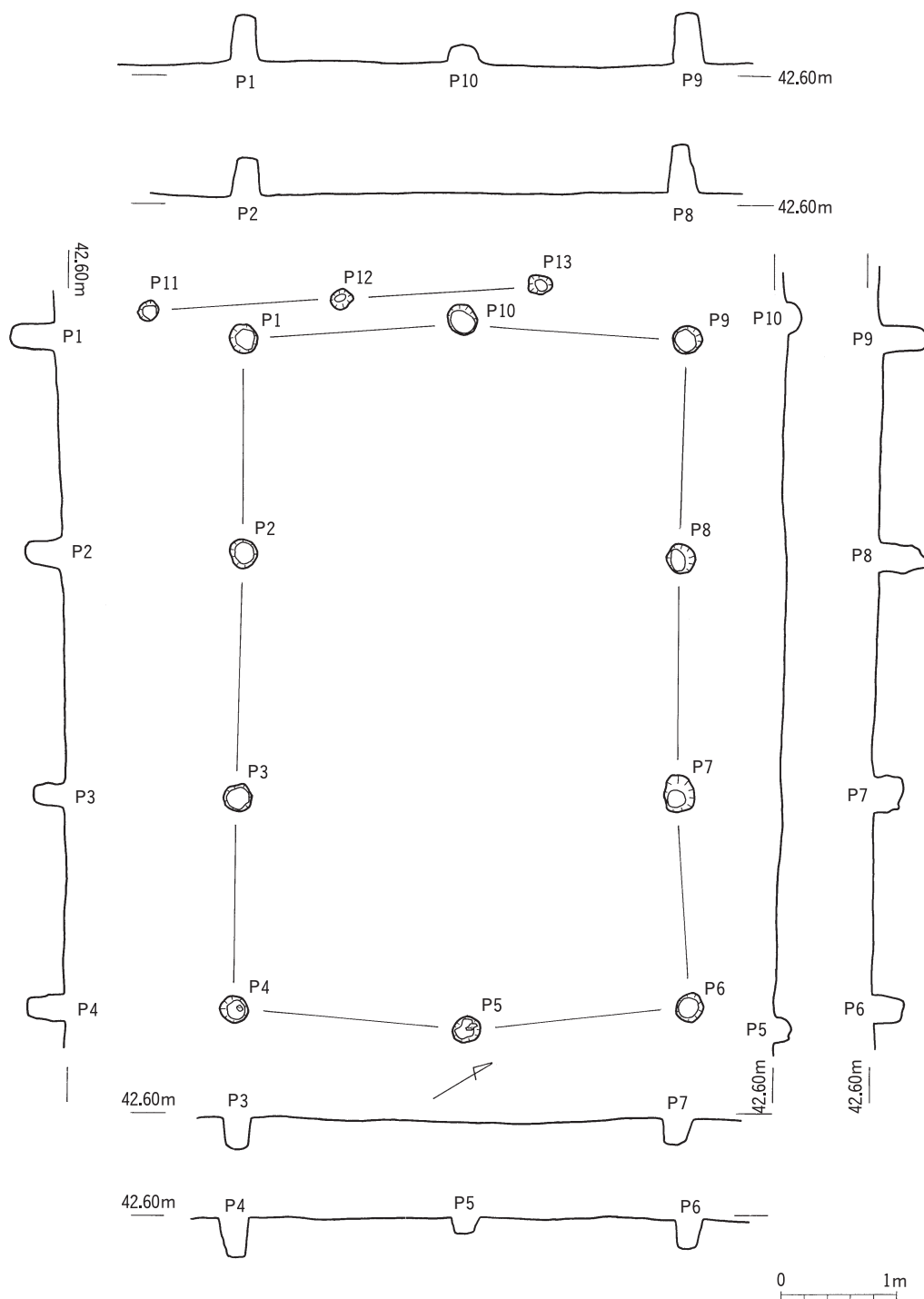
T-7・8区で検出された。2間×3間の主軸はほぼ東西である。西側に片面庇が想定される。柱穴の平均値が深さ14.2cm、長径20.2cm、短径19cmで24棟中最小である。南側に掘立柱建物跡 1・2 が隣接するが、主軸が異なるため時期差があると思われる。柱並びがやや不揃いである。

掘立柱建物跡17（第56図）

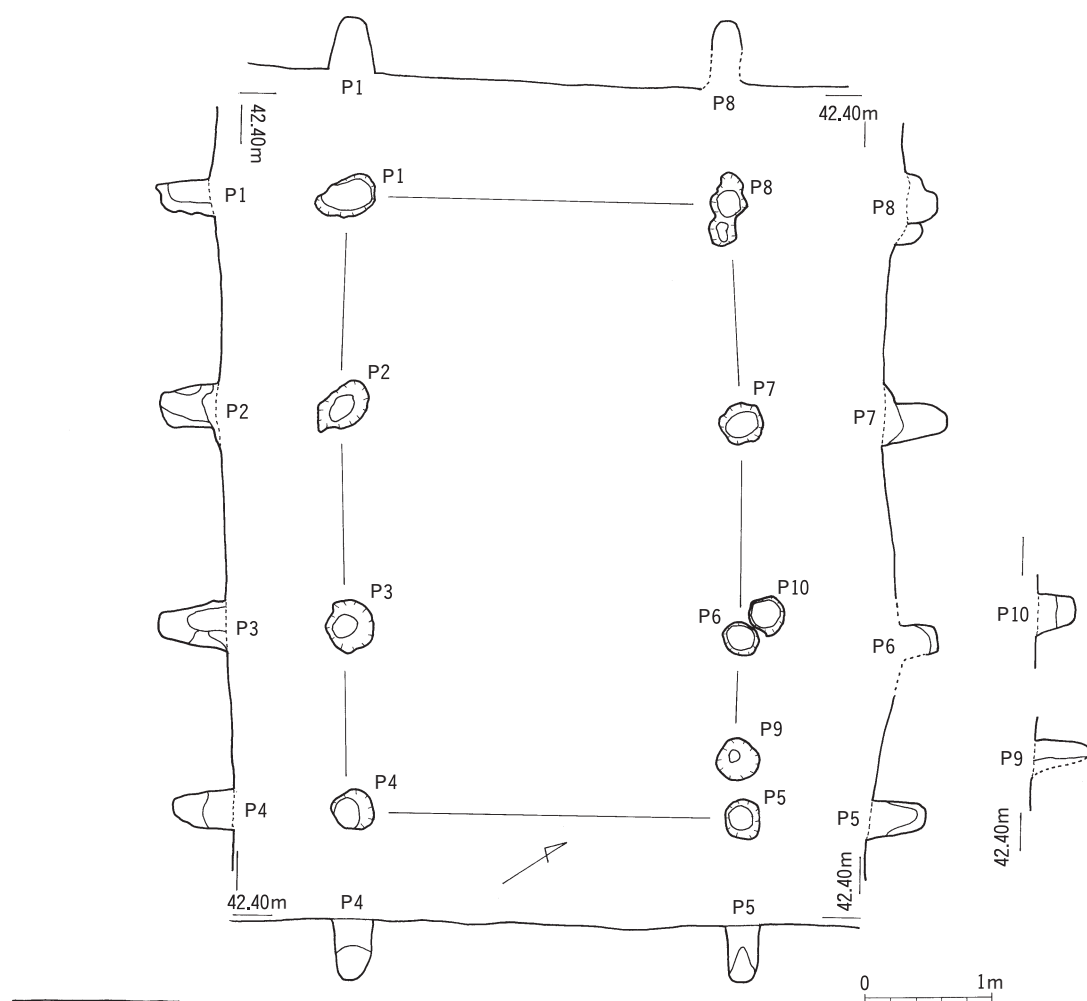
T-8区で検出された。2間×3間の四面底付で主軸はほぼ東西方向である。柱穴の平面は楕円で、長径平均値が24棟中最大の47.3cmである。東側掘立柱建物跡19との間に平行する溝跡が検出されている。この溝は掘立柱建物跡9の周辺で西向きに屈曲する。掘立柱建物跡18・19・20と隣接する。

掘立柱建物跡18（第57図）

T-8区で検出された。一部の柱穴痕のみの検出であり、全体の構成はうかがえないが、1間×3間以上の底付が想定される。掘立柱建物跡17と平行して隣接し、主軸はほぼ東西方向である。東側で平行する溝跡が検出されている。



第50図 中世掘立柱建物跡（10）



第51図 中世掘立柱建物跡 (11)

掘立柱建物跡19 (第58図)

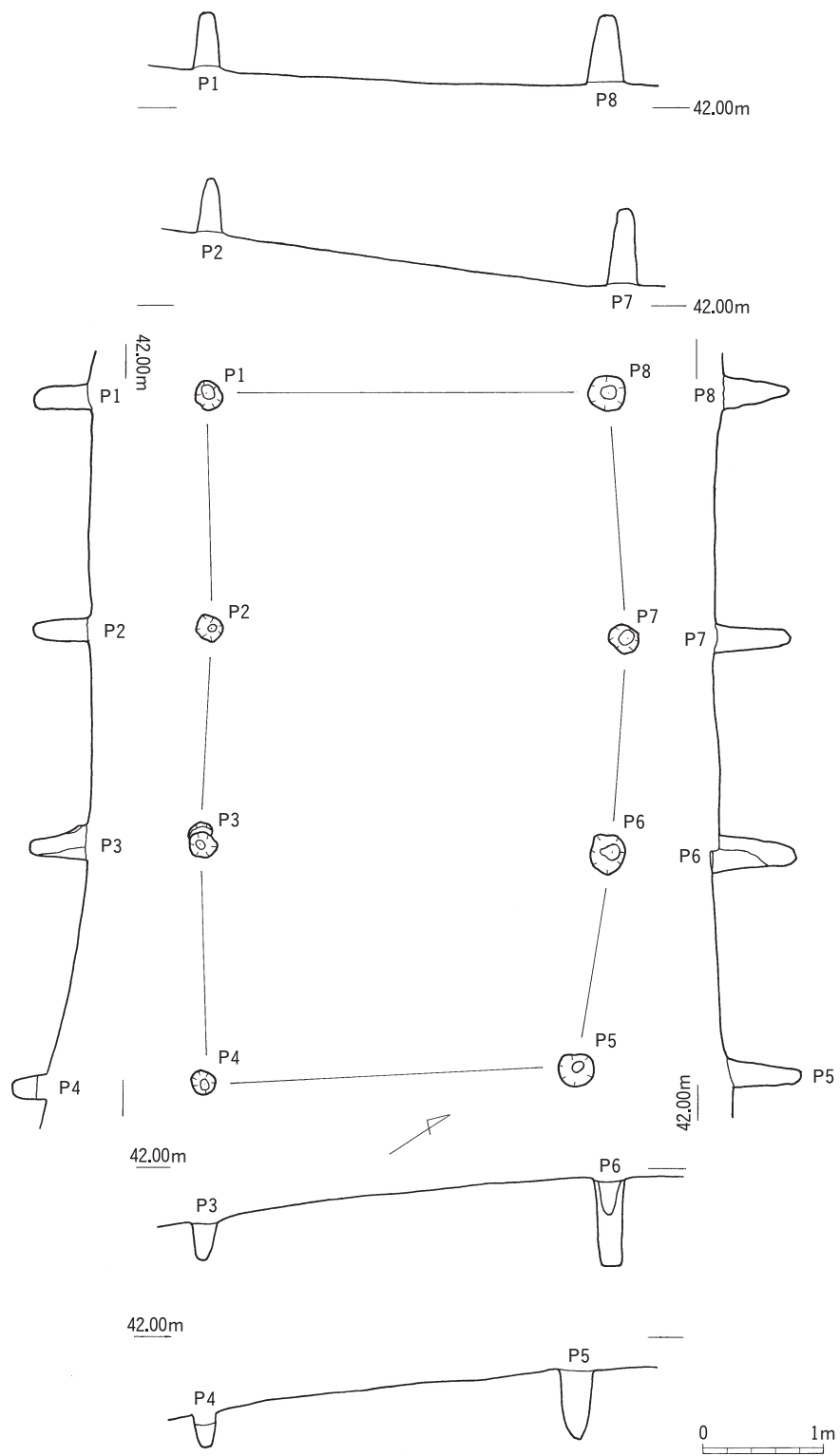
T-8・9区で検出された。2間×3間の二面庇付で主軸はほぼ東西方向である。底部は北と西側にあり、棟部と底部の間隔は平均78cmである。柱並びは棟部、底部ともに良好である。掘立柱建物跡20と重なるように切り合っている。推定床面積はほぼ同一である。西側の掘立柱建物跡17との間には溝状遺構が1条検出されている。

掘立柱建物跡20 (第59図)

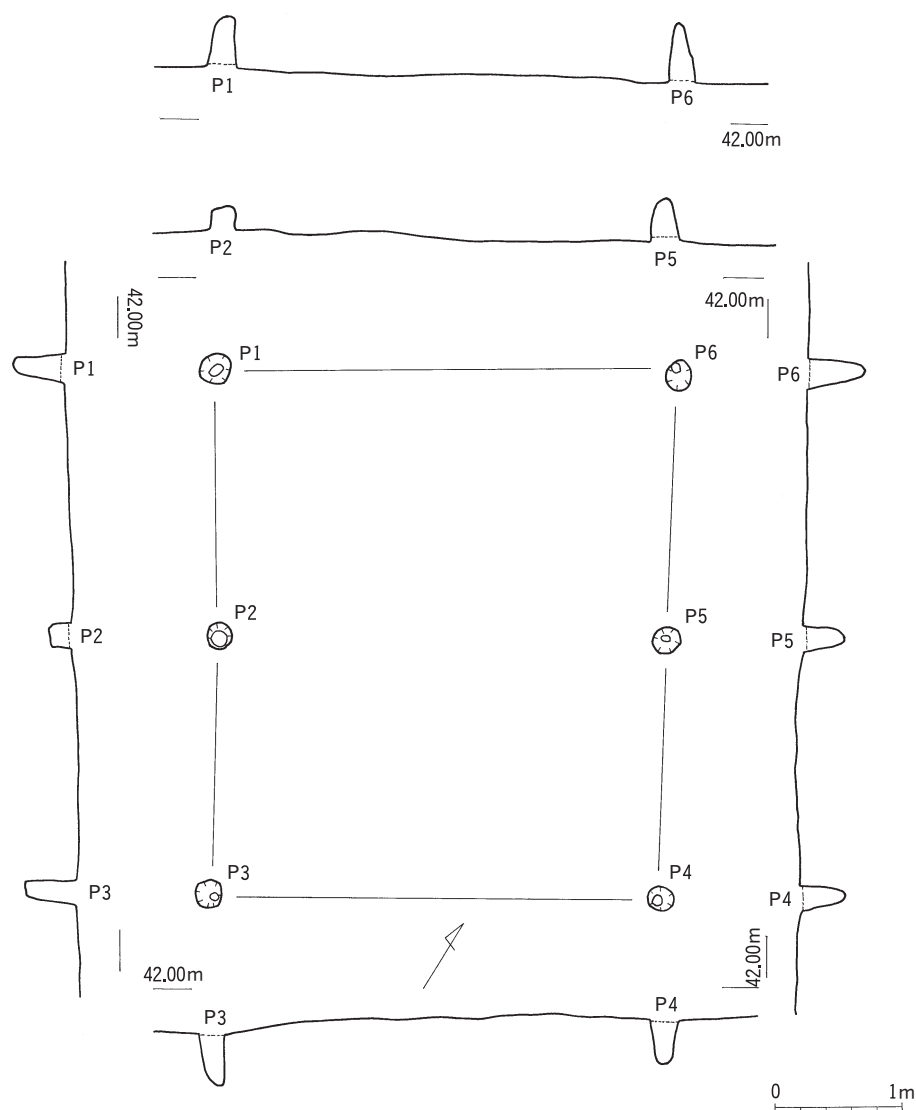
T-8・9区で検出された。2間×3間の三面庇付で主軸はほぼ東西方向である。底部は北と西側にあり、棟部と底部の間隔は平均85cmである。柱並びは棟部、底部ともに良好である。掘立柱建物跡19と重なるように切り合っている。北東側に掘立柱建物跡21・22が隣接する。

掘立柱建物跡21 (第60図)

T-9区で検出された。2間×3間の二面庇付で主軸はほぼ東西方向である。底部は東と南側にあり、棟部と底部の間隔は平均70cmである。柱並びは棟部、底部ともに良好である。掘立柱建物跡22と切り合っている。



第52図 中世掘立柱建物跡 (12)



第53図 中世掘立柱建物跡 (14)

掘立柱建物跡22 (第61図)

T-9区で検出された。2間×3間、北側に底部があり主軸はほぼ東西方向である。棟部と底部の間隔は平均1mである。掘立柱建物跡21と切り合っている。南東側に中世溝状遺構8が伸びてきており、付随する遺構の可能性はある。

掘立柱建物跡23

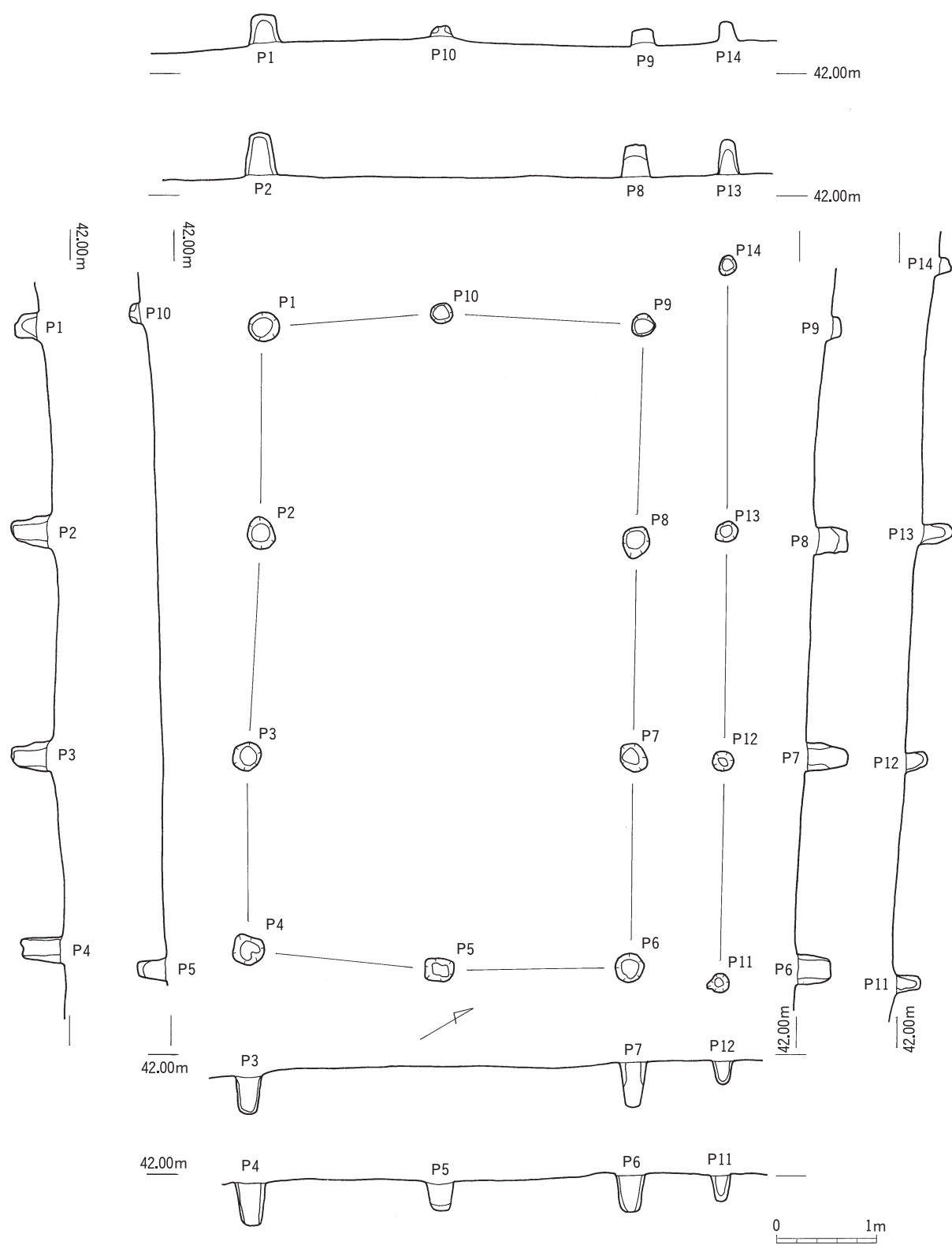
T-10・11区で検出された。柱穴痕の検出状況からは正確な間取りの把握は困難である。底付きの建物も想定できる。調査期間中の台風により実測図を紛失し、平面図及び断面図は作成不可能である。

掘立柱建物跡24 (第62図)

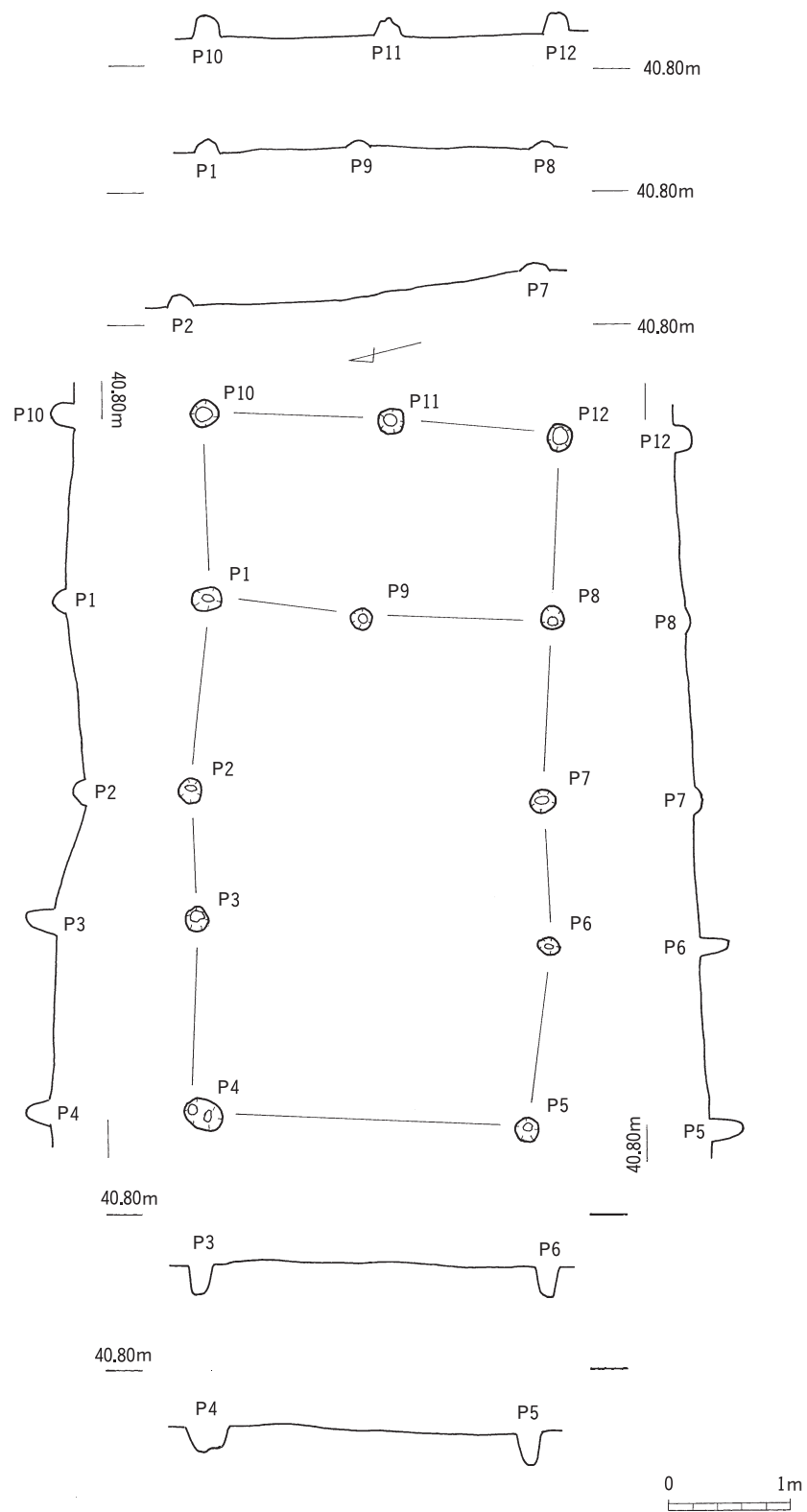
R-9・10区で検出された。2間×3間の主軸はほぼ東西方向である。24棟中最北に立地する。

柱穴群 (第63図)

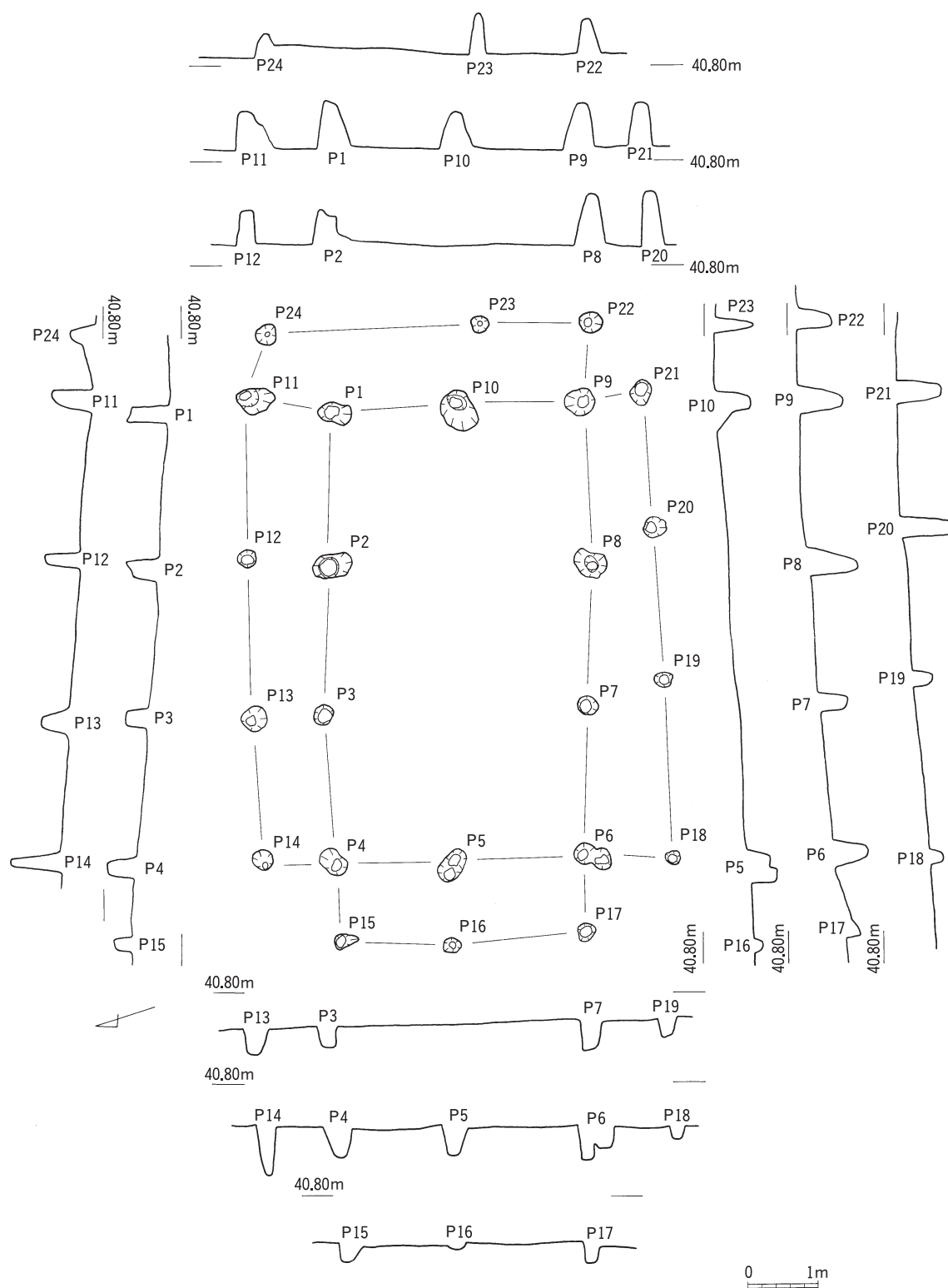
柱穴群1～4はR～S-9～10区において掘立柱建物跡に隣接する状況で検出された。それぞれの心芯距離の平均は1.56m(柱穴群1), 2.84m(柱穴群2), 2.41m(柱穴群3), 3.01m(柱穴群4)で全体的にまとまりに欠ける。深さも検出時ではばつきがあり、今後農業センター遺跡群全体で柱穴の検出状況をまとめ、タイプ別の分類が必要になると思われる。



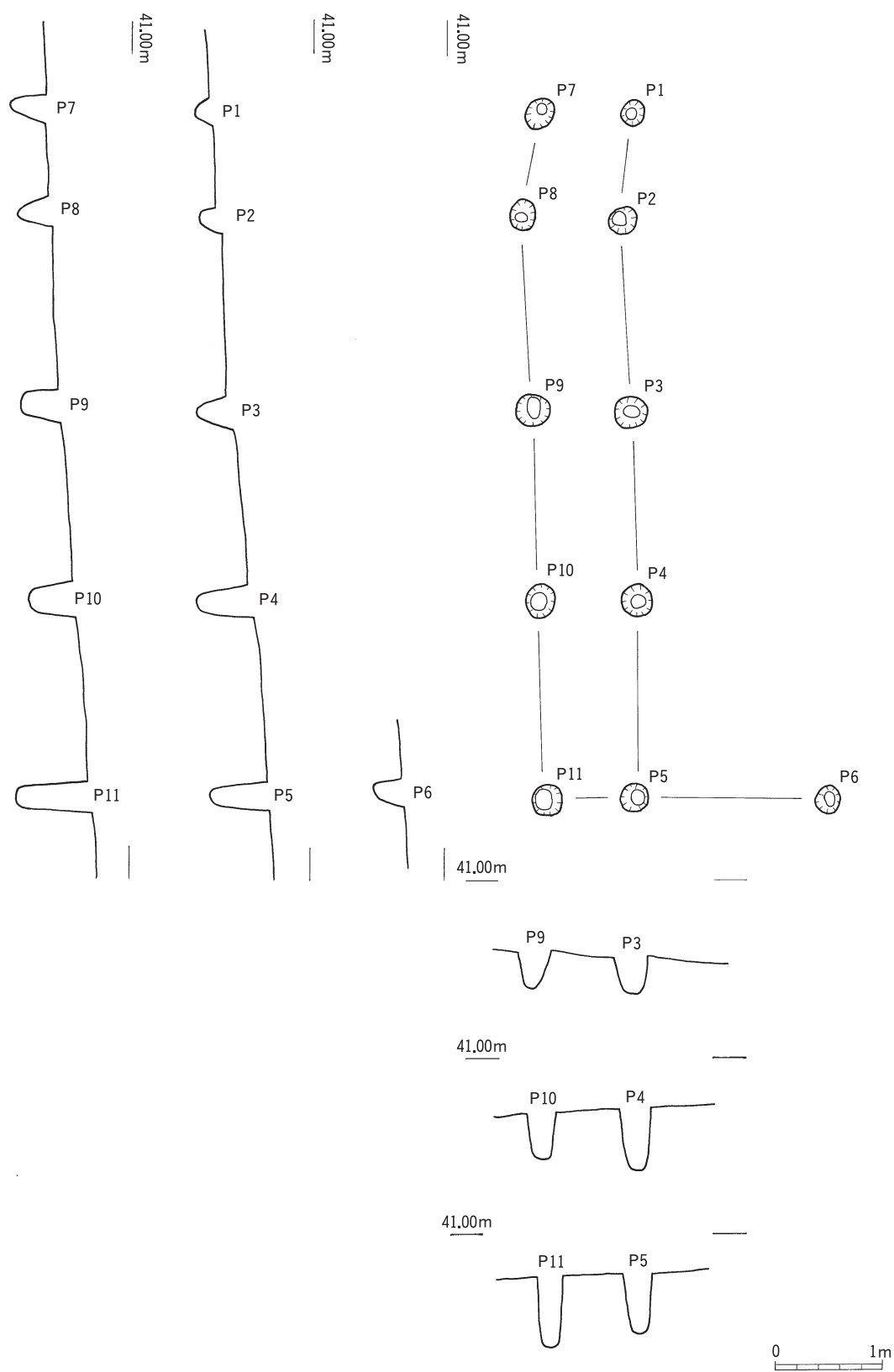
第54图 中世掘立柱建物跡 (15)



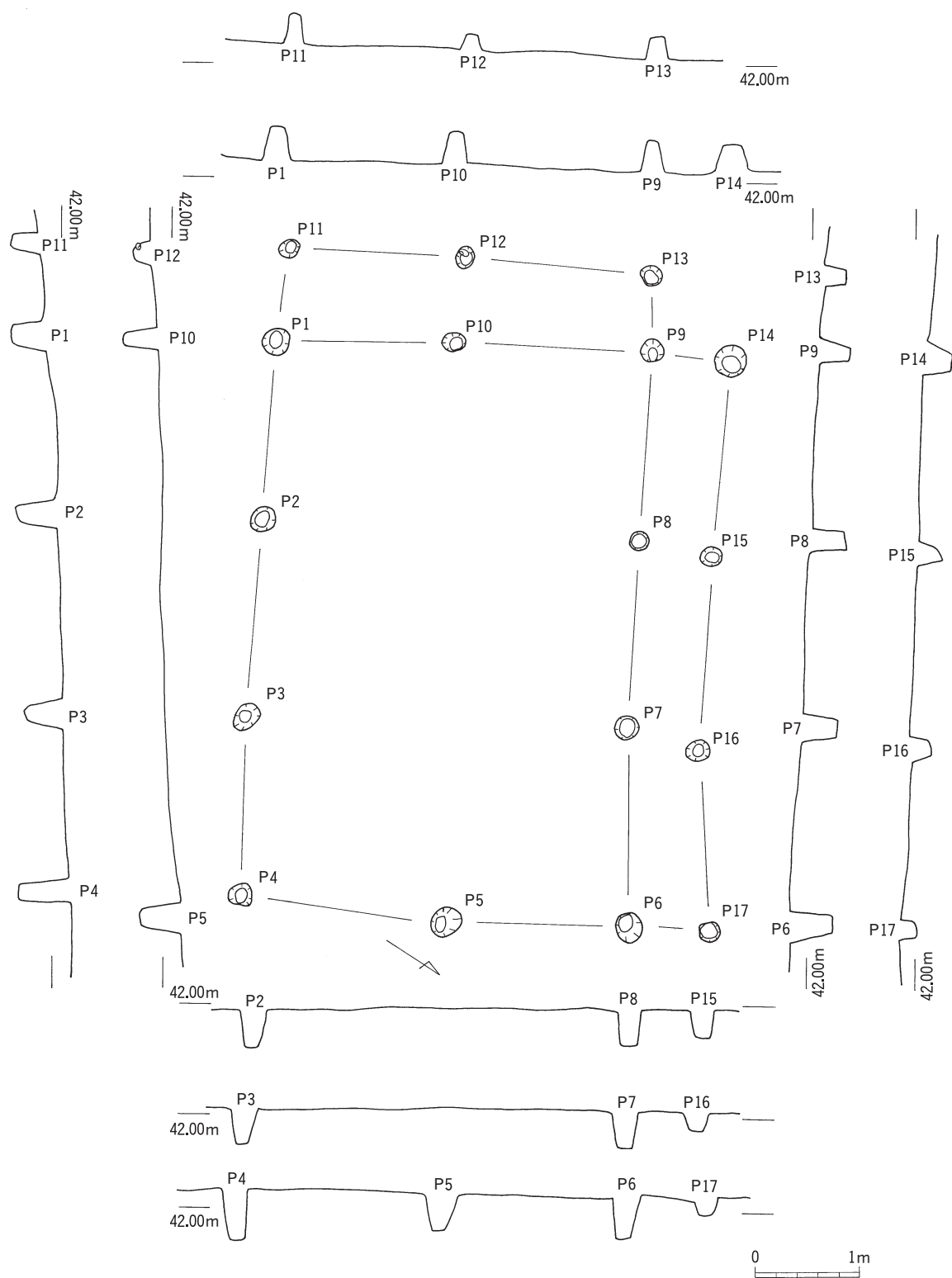
第55图 中世掘立柱建物跡 (16)



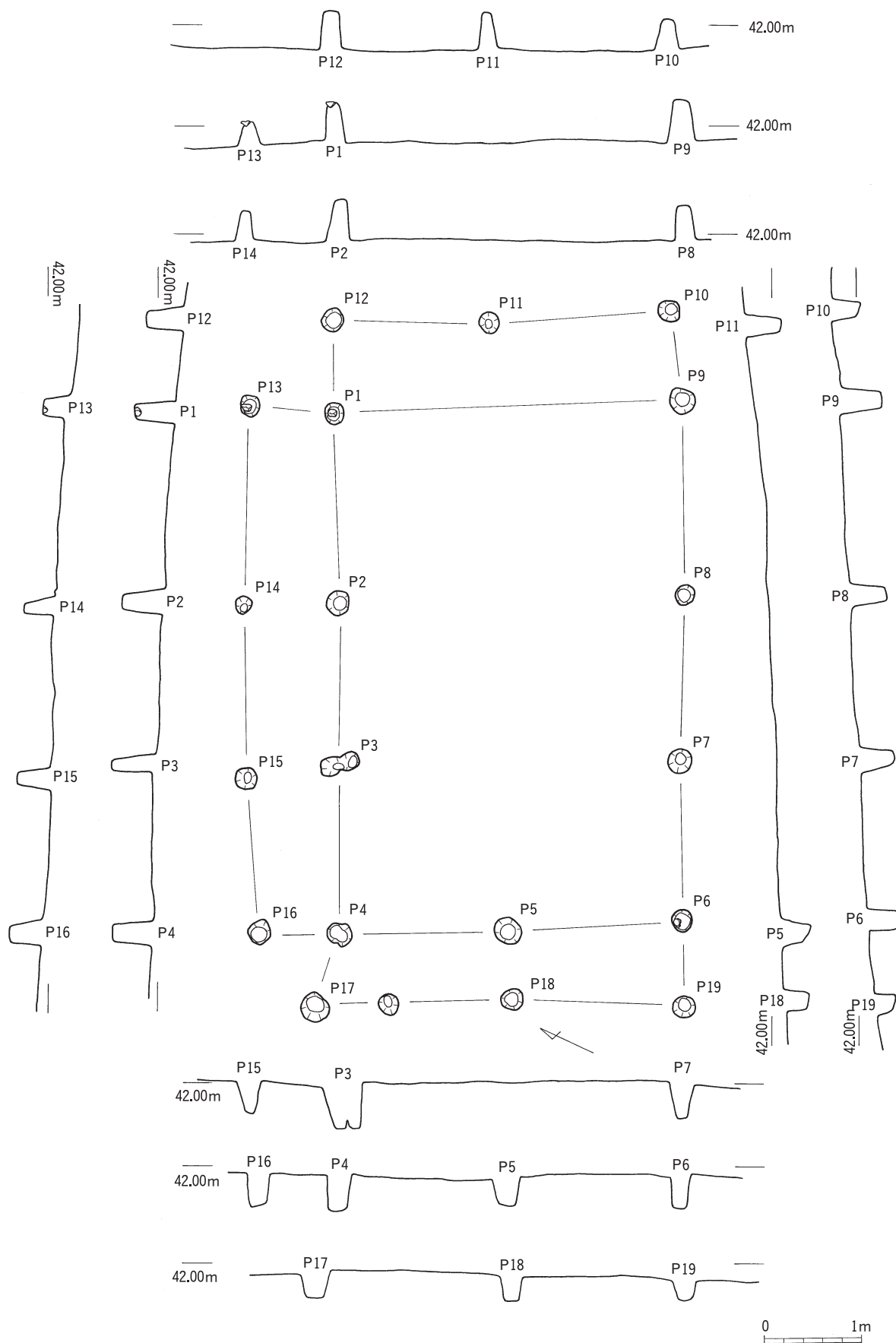
第56图 中世掘立柱建物跡 (17)



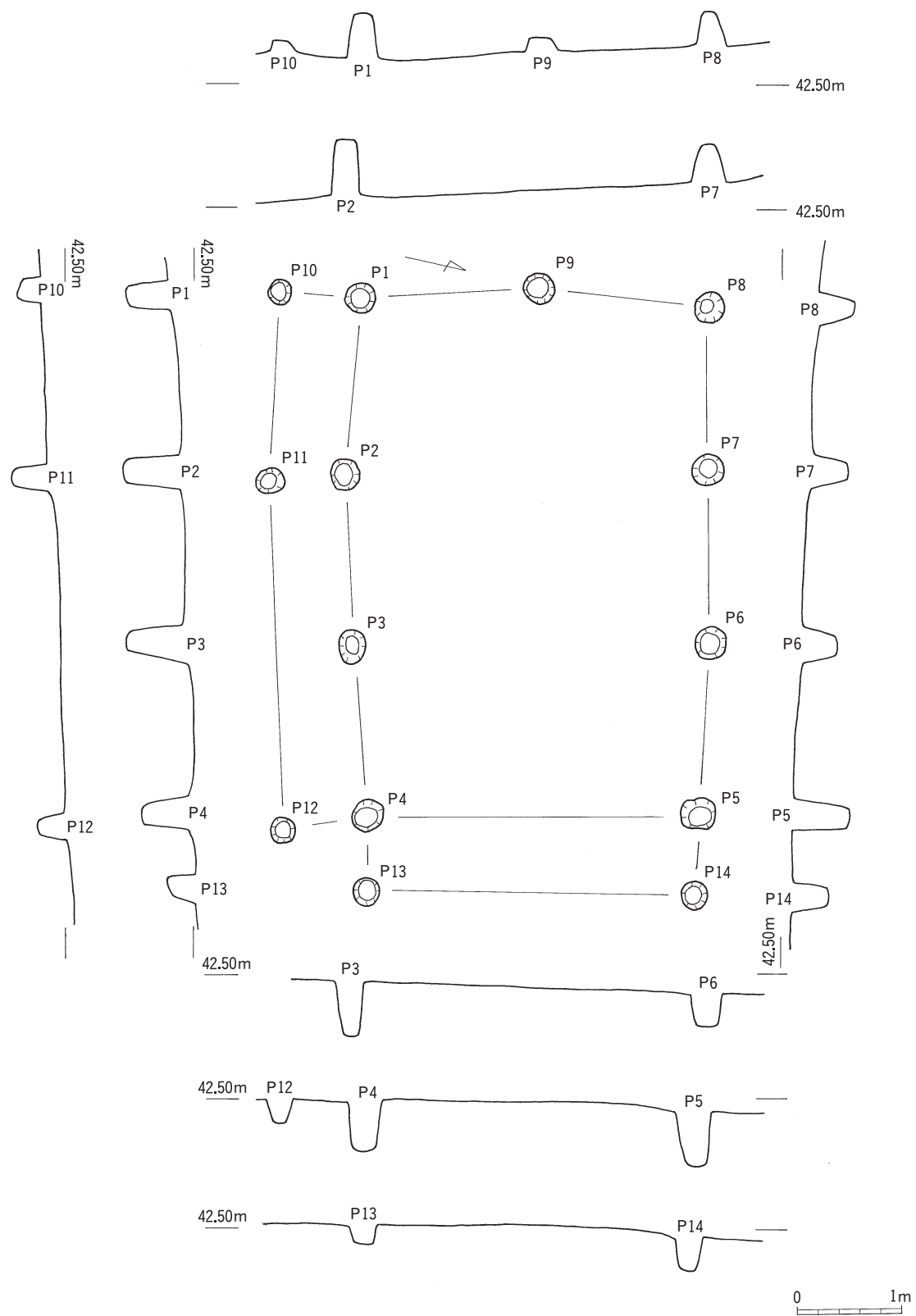
第57图 中世掘立柱建物跡 (18)



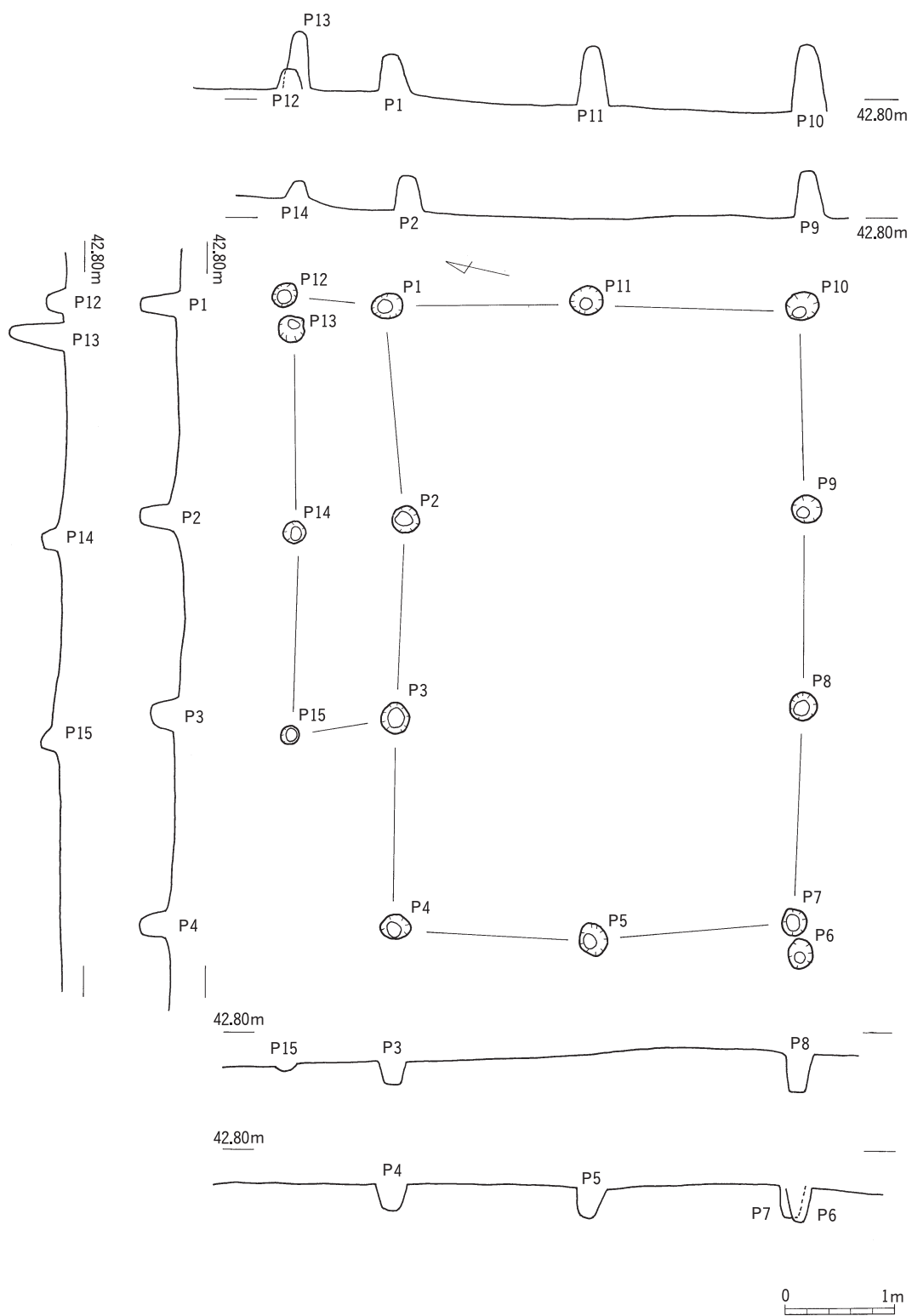
第58图 中世掘立柱建物跡 (19)



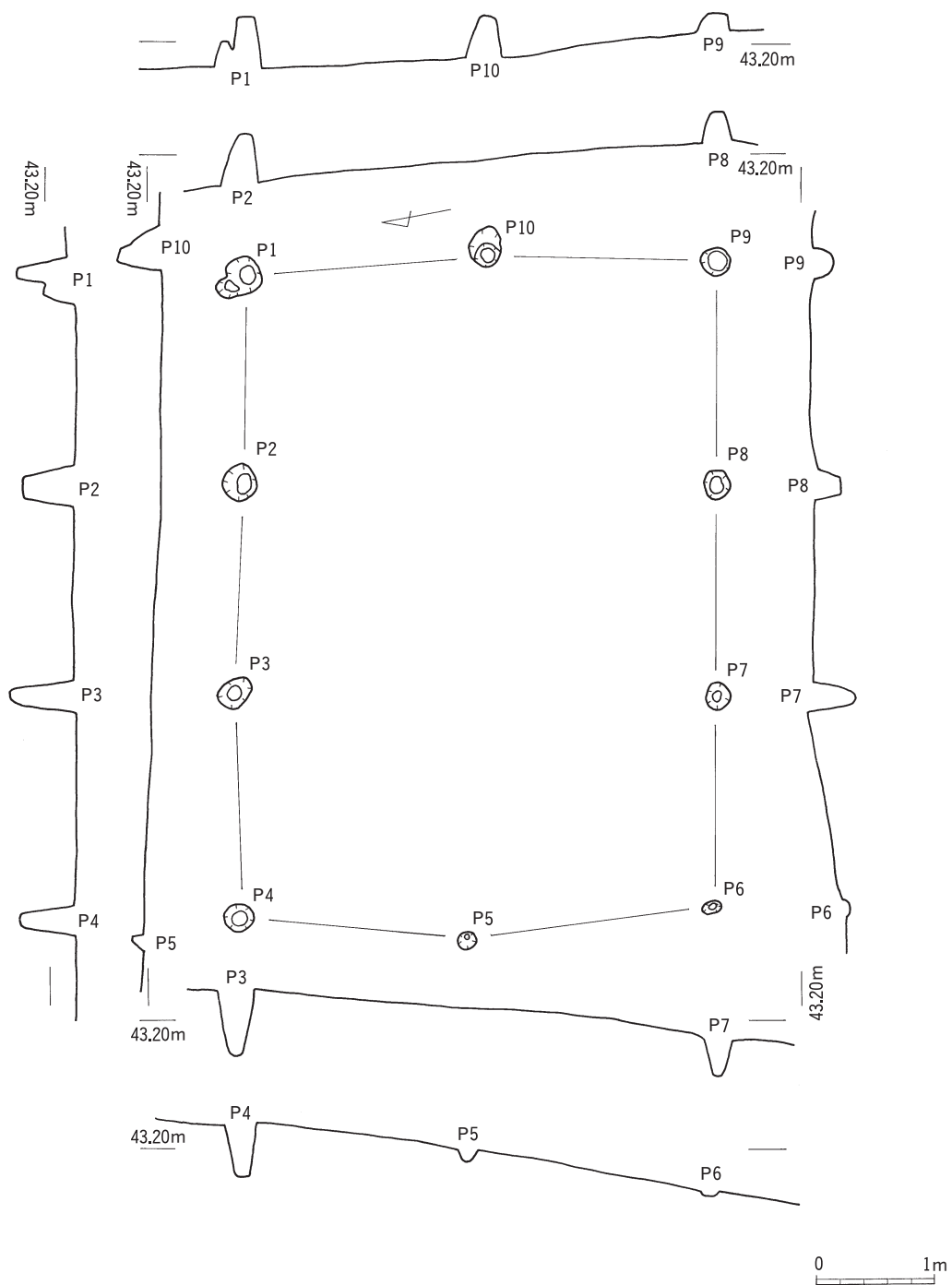
第59图 中世掘立柱建物跡 (20)



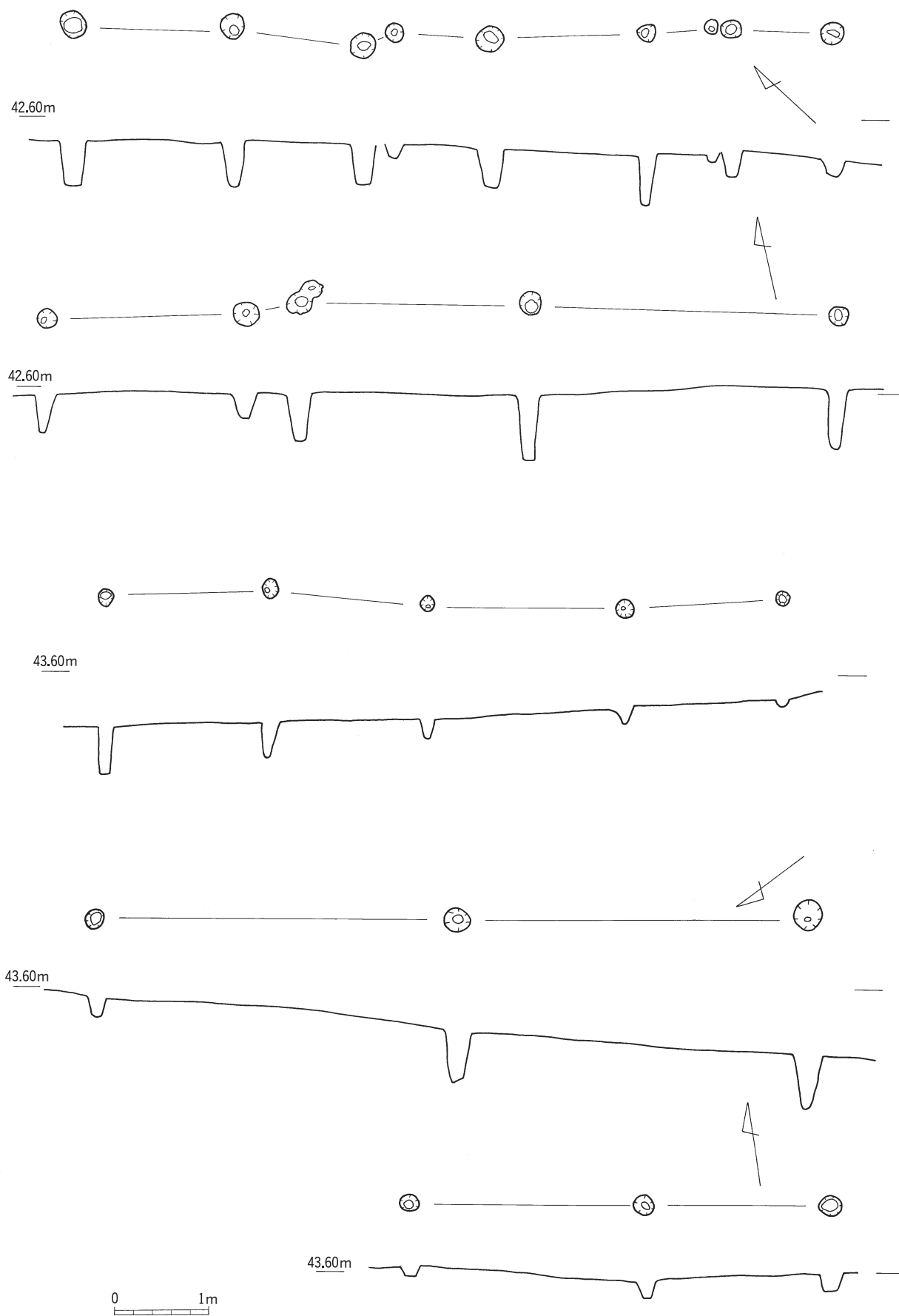
第60图 中世掘立柱建物跡 (21)



第61图 中世掘立柱建物跡 (22)



第62図 中世掘立柱建物跡 (24)



第63图 中世柱穴群

第10表 中世掘立柱建物跡観察表（1）

1号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-12-E

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1-P9	378	P1-P2	217	670	1	42	39	32	楕円	25.87	四面底
	P2-P8	392	P2-P3	239		2	56	35	33	楕円		
	P3-P7	397	P3-P4	214		3	49	43	41	楕円		
	P4-P6	388	P6-P7	200	660	4	51	62	51	楕円		
			P7-P8	255		5	40	34	32	円		
			P8-P9	205		6	66	38	38	円		
						7	66	46	44	円		
						8	74	41	35	楕円		
						9	80	41	35	楕円		
						10	32	30	28	円		
						11	42	36	34	楕円		
	平 均	388.75		221.67	665		54.36	40.45	36.64			
	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
底部	P14-P15	125	P12-P13	198	295	12	18	23	19	楕円		
	P15-P16	158	P13-P14	97		13	12	29	20	楕円		
	P16-P17	206	P18-P19	122	879	14	6	21	20	円		
	P17-P18	122	P19-P20	191		15	14	39	30	楕円		
	P23-P24	95	P20-P21	248		16	12	35	32	楕円		
	P24-P25	199	P21-P22	220		17	39	35	32	楕円		
	P25-P26	200	P22-P23	98		18	30	33	29	楕円		
	P26-P27	111	P27-P28	95		19	45	35	27	楕円		
						20	51	30	29	円		
						21	47	35	34	円		
						22	41	30	29	円		
						23	38	26	26	円		
						24	45	38	30	楕円		
						25	18	30	29	円		
						26	23	25	23	円		
						27	18	34	25	楕円		
						28	41	30	22	楕円		
	平 均	152		158.63	587		29.29	31.06	26.82			

2号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-16-E

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P9	260	P1-P2	158	445	1	17	21	19	円	11.67	
P2-P8	270	P2-P3	137		2	24	26	23	楕円		
P3-P7	252	P3-P4	150		3	7	17	17	円		
P4-P6	262	P6-P7	143	449	4	8	18	18	円		
P7-P8	131				5	35	21	17	楕円		
P8-P9	175				6	18	23	15	楕円		
					7	24	20	20	円		
					8	17	20	17	円		
					9	23	30	26	楕円		
					10	20	25	20	楕円		
					11	32	35	32	円		
					12	35	22	20	円		
平 均	261		149	447		21.67	23.17	20.33			

3号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-18-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P8	280	P1-P2	185	535	1	23	25	22	円	14.16	
P2-P7	265	P2-P3	210		2	23	28	20	楕円		
P3-P6	316	P3-P4	140		3	77	22	22	円		
P4-P5	287	P5-P6	89	452	4	60	41	26	楕円		
		P6-P7	174		5	74	22	21	円		
		P7-P8	189		6	12	21	18	円		
					7	27	23	23	円		
					8	46	26	22	楕円		
					9	12	19	16	楕円		
平 均	287		164.5	493.5		39.33	25.11	21.11			

5号掘立柱建物跡 1間×2間 方位 N-47-E

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1-P5	270	P1-P2	178	350	1	21	30	28	円	9.61	片面底
	P3-P4	277	P2-P3	172		2	12	21	18	円		
			P4-P5	352	352	3	23	33	29	楕円		
						4	12	24	22	円		
	平 均	273.5		234	351		15.8	28	25.6			
	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
底部	P6-P7	266	P1-P6	135		6	29	26	22	不定形		
			P5-P7	122		7	17	21	17	楕円		
	平 均	266		128.5			23	23.5	19.5			

第11表 中世掘立柱建物跡観察表（2）

7号掘立柱建物跡 1間×3間 方位 N-25-E

棟部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
	P1-P8	365	P1-P2	178	555	1	64	39	32	円	19.91	二面底
	P2-P7	358	P2-P3	189		2	51	39	32	楕円		
	P3-P6	354	P3-P4	188		3	53	39	31	楕円		
	P4-P5	341	P5-P6	190	568	4	65	35	32	楕円		
			P6-P7	189		5	52	38	29	楕円		
			P7-P8	189		6	56	35	28	楕円		
						7	53	43	38	楕円		
						8	61	39	33	楕円		
	平 均	354.5		187.17	561.5		56.88	38.38	31.88			
底部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
	P10-P11	353	P9-P10	83		10	14	24	21	楕円		
	P12-P13	342	P8-P11	96		11	31	24	22	円		
			P4-P12	85		12	14	23	20	円		
			P5-P13	93		13	13	29	26	円		
	平 均	347.5		89.25			18	25	22.25			

8号掘立柱建物跡 1間×3間 方位 N-21-E

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P8	364	P1-P2	201	621	1	52	33	29	楕円	21.63	
P2-P7	367	P2-P3	210		2	47	26	22	楕円		
P3-P6	353	P3-P4	210		3	44	25	23	円		
P4-P5	353	P5-P6	185	583	4	31	26	20	楕円		
		P6-P7	195		5	23	26	20	楕円		
		P7-P8	203		6	26	20	20	円		
					7	39	27	26	円		
					8	50	26	26	円		
平 均	359.25		200.67	602		39	26.13	23.25			

9号掘立柱建物跡 1間×3間 方位 N-63-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P8	324	P1-P2	207	578	1	47	25	23	楕円	17.91	
P2-P7	306	P2-P3	177		2	32	23	20	楕円		
P3-P6	310	P3-P4	194		3	32	26	23	楕円		
P4-P5	327	P5-P6	182	553	4	28	23	20	楕円		
		P6-P7	195		5	26	24	23	円		
		P7-P8	176		6	3	20	19	円		
					7	73	27	26	楕円		
					8	70	31	26	楕円		
平 均	316.75		188.5	565.5		38.88	24.88	22.5			

10号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-63-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P9	388	P1-P2	187	583	1	39	26	24	円	22.6	
P2-P8	381	P2-P3	212		2	33	26	23	楕円		
P3-P7	384	P3-P4	184		3	27	24	23	円		
P4-P6	399	P6-P7	182	582	4	35	25	23	円		
		P7-P8	209		5	14	26	22	楕円		
		P8-P9	191		6	26	27	23	楕円		
					7	26	33	27	楕円		
					8	44	26	25	円		
					9	41	26	23	円		
					10	15	29	24	楕円		
平 均	388		194.17	582.5		30	26.8	23.7			

11号掘立柱建物跡 1間×3間 方位 N-65-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P8	304	P1-P2	168	490	1	42	49	29	楕円	15.23	
P2-P7	318	P2-P3	173		2	46	59	31	楕円		
P3-P6	314	P3-P4	149		3	54	41	38	円		
P4-P5	313	P5-P6	143	486	4	47	32	31	円		
		P6-P7	168		5	43	32	26	楕円		
		P7-P8	175		6	30	29	24	楕円		
					7	49	33	32	円		
					8	53	59	29	楕円		
平 均	312.25		162.67	488		45.5	41.75	30			

12号掘立柱建物跡 1間×3間 方位 N-56-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P8	335	P1-P2	196	577	1	47	23	22	円	19.13	
P2-P7	347	P2-P3	180		2	48	23	20	楕円		
P3-P6	343	P3-P4	201		3	47	29	23	楕円		
P4-P5	314	P5-P6	181	566	4	27	22	19	円		
		P6-P7	180		5	56	29	26	楕円		
		P7-P8	205		6	71	33	29	円		
					7	62	26	21	楕円		
					8	55	32	30	円		
平 均	334.75		190.5	571.5		51.63	27.13	23.75			

第12表 中世掘立柱建物跡観察表（3）

14号掘立柱建物跡 1間×2間 方位 N-49-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (m ²)	備考
P1-P6	365	P1-P2	213	416	1	42	25	25	円	15	
P2-P5	356	P2-P3	203		2	19	22	20	円		
P3-P4	353	P4-P5	208	422	3	43	23	21	円		
		P5-P6	214		4	36	20	19	円		
					5	34	23	20	円		
					6	47	25	20	楕円		
平 均	358		209.5	419		36.83	23	20.83			

15号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-62-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (m ²)	備考
棟部	P1-P9	385	P1-P2	207	626	1	33	32	29	円	24.37	
	P2-P8	377	P2-P3	224		2	41	33	28	楕円		
	P3-P7	388	P3-P4	195		3	39	29	28	円		
	P4-P6	385	P6-P7	212	644	4	42	33	33	円		
			P7-P8	218		5	31	29	23	楕円		
			P8-P9	214		6	37	29	29	円		
						7	43	29	25	楕円		
						8	32	34	28	楕円		
						9	13	23	22	円		
						10	5	22	20	円		
平 均	383.75		211.67	635		31.6	29.3	26.5				
底部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
			P11-P12	223	723	11	27	24	20	楕円		
			P12-P13	233		12	22	22	21	円		
			P13-P14	267		13	31	24	21	楕円		
						14	14	21	17	楕円		
平 均			261	723		23.5	22.8	19.8				

16号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-76-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (m ²)	備考
棟部	P1-P8	285	P1-P2	152	417	1	13	22	21	円	12.02	片面底
	P2-P7	292	P2-P3	107		2	12	23	19	楕円		
	P3-P6	291	P3-P4	158		3	26	21	20	円		
	P4-P5	278	P5-P6	152	422	4	21	20	20	円		
			P6-P7	123		5	28	30	23	楕円		
			P7-P8	147		6	22	20	18	円		
						7	6	19	14	楕円		
						8	5	22	18	楕円		
						9	5	20	18	円		
	平 均	286.5	139.83	419.5		14.2	20.2	19				
底部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
	P10-P12	295	P1-P10	153		10	18	23	21	円		
			P9-P11	167		11	15	21	21	円		
			P8-P12	152		12	17	23	20	楕円		
	平 均	295	157.33			16.7						

17号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-78-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (m ²)	備考
棟部	P1-P9	362	P1-P2	222	648	1	70	48	26	楕円	23.97	四面底
	P2-P8	378	P2-P3	213		2	47	68	34	楕円		
	P3-P7	374	P3-P4	213		3	29	30	27	円		
	P4-P6	368	P6-P7	214	651	4	39	42	27	楕円		
			P7-P8	202		5	42	50	31	楕円		
			P8-P9	235		6	48	55	19	変形		
						7	43	30	27	楕円		
						8	70	47	36	変形		
						9	67	44	38	楕円		
						10	54	59	44	楕円		
平 均	370.5		216.5	649.5		50.9	47.3	30.9				
底部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
	P15-P17	354	P11-P12	233	671	11	57	55	36	変形		
	P22-P24	457	P12-P13	230		12	50	26	26	円		
			P13-P14	208		13	40	36	34	楕円		
			P18-P19	254	674	14	37	30	28	楕円		
			P19-P20	221		15	25	34	22	変形		
			P20-P21	199		16	7	25	20	楕円		
						17	28	27	24	楕円		
						18	18	22	19	楕円		
						19	28	26	22	楕円		
						20	80	33	29	楕円		
						21	63	37	31	楕円		
						22	50	34	31	楕円		
						23	58	23	23	楕円		
						24	32	29	29	楕円		
平 均	405.5		224.17	672.5		40.93	31.21	26.71				

第13表 中世掘立柱建物跡観察表（4）

18号掘立柱建物跡 1間×3間 方位 N-78-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P5-P6	183	P2-P3	183	550	1	18	25	22	円	計測不可	二面庇？
			P3-P4	180		2	21	27	24	円		
			P4-P5	187		3	34	32	31	円		
						4	54	30	28	円		
						5	56	28	27	円		
						6	40	27	24	楕円		
	平 均	183		183.33	550		36.5	26.9	22.6			
庇部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
			P1-P2	100	831	7	33	32	25	楕円		
			P7-P8	186		8	33	30	25	楕円		
			P8-P9	184		9	36	35	33	円		
			P9-P10	174		10	45	32	27	楕円		
			P10-P11	187		11	72	29	28	円		
	平 均			166.2	831		43.8	31.6	27.6			

19号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-80-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1-P9	364	P1-P2	173	533	1	33	29	27	円	19.76	二面庇
	P2-P8	362	P2-P3	189		2	39	27	24	円		
	P3-P7	368	P3-P4	171		3	36	30	21	楕円		
	P4-P6	374	P6-P7	188	544	4	51	23	21	楕円		
			P7-P8	177		5	35	40	27	楕円		
			P8-P9	179		6	40	29	25	楕円		
						7	34	25	23	円		
						8	36	20	18	円		
						9	30	23	21	円		
						10	31	23	19	楕円		
	平 均	367		179.5	538.5		36.5	26.9	22.6			
庇部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
	P11-P13	348	P14-P15	186	544	11	29	20	18	楕円		
			P15-P16	184		12	17	22	18	楕円		
			P16-P17	174		13	21	21	18	楕円		
						14	27	31	30	円		
						15	25	21	20	円		
						16	21	23	22	円		
						17	17	21	20	円		
	平 均	348		181.33	544		22.43	22.71	20.86			

20号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-79-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1-P9	366	P1-P2	198	542	1	43	23	19	円	19.6	
	P2-P8	360	P2-P3	170		2	45	26	24	円		
	P3-P7	358	P3-P4	174		3	47	41	13	変形		
	P4-P6	360	P6-P7	168	544	4	33	26	22	楕円		
			P7-P8	172		5	30	31	26	楕円		
			P8-P9	204		6	34	22	21	円		
						7	36	27	25	円		
						8	47	23	20	円		
						9	45	29	27	楕円		
	平 均	361		181	543		40	27.56	21.89			
庇部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
	P10-P12	354	P13-P14	205	368	10	30	25	21	楕円		
	P17-P20	337	P14-P15	177		11	29	23	20	楕円		
			P15-P16	166		12	38	24	22	円		
						13	26	22	21	円		
						14	31	19	16	楕円		
						15	34	23	22	楕円		
						16	35	27	24	楕円		
						17	28	29	21	楕円		
						18	26	24	21	楕円		
	平 均	345.5		182.67	368		29.54	23.82	21.18			

21号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-90-W

	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1-P8	337	P1-P2	170	503	1	42	29	29	円	16.87	二面庇
	P2-P7	351	P2-P3	166		2	56	31	27	円		
	P3-P6	345	P3-P4	167		3	56	34	26	楕円		
	P4-P5	323	P5-P6	167	492	4	47	34	29	楕円		
			P6-P7	168		5	54	34	29	楕円		
			P7-P8	157		6	34	31	31	円		
						7	36	32	29	円		
						8	35	32	29	円		
						9	13	31	29	円		
	平 均	339		165.83	497.5		41.44	32	28.67			
庇部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
	P13-P14	315	P10-P11	184	521	10	21	25	21	円		
			P11-P12	337		11	34	27	24	楕円		
						12	26	25	25	円		
						13	36	27	25	円		
	平 均	315		260.5	521		30.4	26.4	24			

第14表 中世掘立柱建物跡観察表（5）

22号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-81-W

棟部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
	P1-P10	386	P1-P2	199	583	1	35	29	23	楕円		
	P2-P9	374	P2-P3	185		2	33	25	23	円		
	P3-P8	381	P3-P4	199		3	23	29	26	円		
	P4-P7	375	P7-P8	200	569	4	24	29	23	楕円		
			P8-P9	183		5	27	30	27	楕円		
			P9-P10	186		6	33	25	22	楕円		
						7	36	26	22	楕円		
						8	37	26	25	円		
						9	44	27	25	楕円		
						10	60	29	18	楕円		
						11	74	40	35	楕円		
	平 均	379		192	576		38.73	28.64	24.45			
庇部	柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	備考	
			P13-P14	196	383	13	53	26	25	円		
			P14-P15	187		14	18	20	20	円		
						15	7	17	16	円		
	平 均			191.5	383		26	21	20.33			

24号掘立柱建物跡 2間×3間 方位 N-86-W

柱穴番号	梁間柱間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P1-P9	405	P1-P2	179	453	1	43	41	32	変形	18.44	
P4-P6	409	P2-P3	180		2	44	30	29	円		
		P3-P4	194		3	56	32	23	楕円		
		P6-P7	180	453	4	47	27	24	円		
		P7-P8	181		5	11	17	17	円		
		P8-P9	192		6	6	19	12	楕円		
					7	48	26	23	楕円		
					8	32	26	23	楕円		
					9	19	27	26	楕円		
					10	38	37	35	楕円		
平 均	407		184.33	453		34.4	28.2	24.4			

第15表 中世遺構内遺物観察表

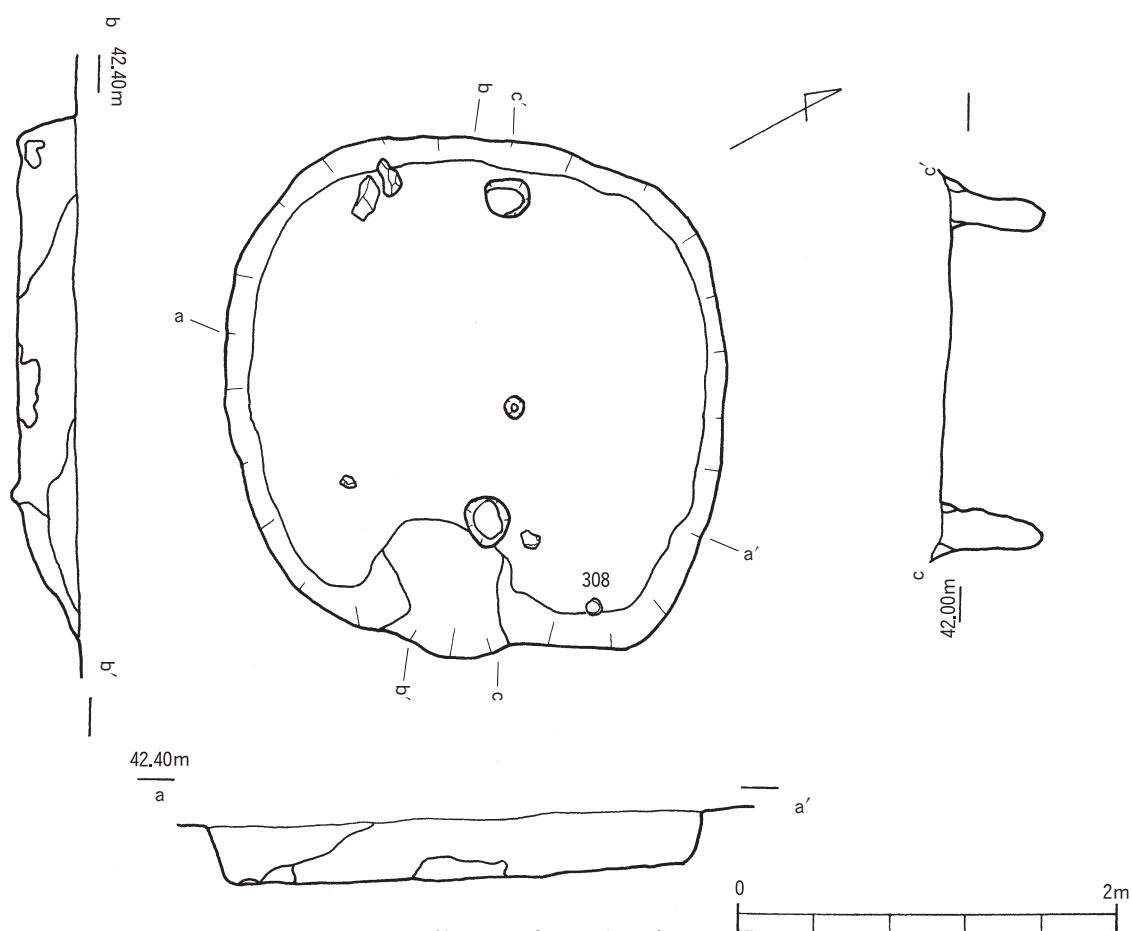
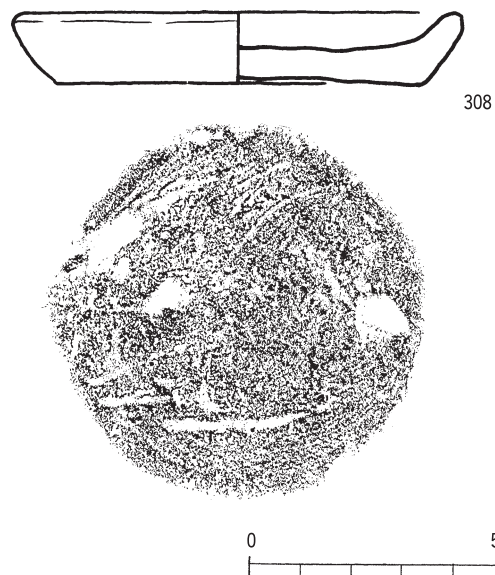
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	種別	部位	法量 (cm)				胎土	焼成	色調 (外)	備考
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高				
43	304	SB1		皿	完形	8.5	6.1	1.4		赤含む	良	10YR8/4浅黄橙	
48	305	SB7P2		すり鉢	口縁部	20				脆弱	不良	7.5YR7/4にぶい橙	
49	306	SB9		杯	完形	14.5	10	3.5		礫含む	良	2.5YR6/6	
51	307	SB11P3		皿	完形	7.3	5.2	1.9	1.9	精緻	良	5YR6/6橙	
64	308	SH1		皿	完形	8.7	7.2	1.7		精緻	良	7.5YR7/6橙	
65	309	SD3		黒色土器	完形	16.1	7	6.8	1.1	精緻	良	10YR7/6明黄褐	
65	310	SD3		灯明皿	完形	8	7.2	1.3		精緻	良	2.5YR6/6橙	
65	311	SD3		灯明皿	底部		8.8			精緻	良	10YR7/4にぶい黄橙	

② 堅穴状遺構 (第64図)

Y-7区, III層上面で検出された。平面プランは円形に近い隅丸方形を呈する。長径278cm, 短径262cm。掘り込みは, 東側の中央部分の幅55cm程度がなだらかなスロープ状になっているほかは, ほぼ垂直に立ち上がっている。深さは30cm前後である。埋土は6種に分層された。床面に近いほど炭化物の量が増す傾向がみられた。柱穴痕は東西方向に2本検出されている。平面プランは柱穴痕1・2とも楕円形を呈し, 床面からほぼ垂直に掘り込まれている。1は長径25cm, 短径19cm, 深さ48cm, 2は長径26cm, 短径23cm, 深さ52cmを測る。土師器小皿, 凹石, 未加工の安山岩, 頁岩が共伴する。土師器小皿は底部の切り離しに糸を使用した痕跡が残る。周辺では掘立柱建物跡9棟, 柱穴列4列, 溝状遺構6条が検出されている。

遺構内遺物 皿 (308)

308は皿である。口径8.7cm, 底径7.2cm, 器高1.7cmを測る。器形は歪みが生じている。体部は直線的に立ち上がり, やや口縁部が内弯する。底部には糸切り痕がみられる。



第64図 中世堅穴状遺構

③中世溝状遺構（第66・73図）

中世溝状遺構は11条検出された。このうち、溝6～8は位置的な問題と近世溝状遺構との切り合い関係にあるため、近世溝状遺構図に掲載した。また、溝9～11は最大幅が狭く、同縮尺の掲載が困難であるため、文章のみとした。

溝状遺構1（第65図）

Z-6区で検出された。本遺跡における溝状遺構では最も北側に位置する。長さ約9m、最大幅128cmである。

溝状遺構2（第65図）

Y-Z-6～7区で検出された。北東から南西にかけて延びており、長さ26.8m、最大幅120cm（一部幅290cm）、深さ約60cmである。溝状遺構4に切られる形で検出している。溝状遺構5の硬化面、掘立柱建物跡5にも切られている。近接する掘立柱建物跡6の短軸に北側がほぼ平行である。

溝状遺構3（第65図）

Y-Z-6～7区において溝状遺構7に切られる形で検出された。長さ約26.6m、最大幅110cm、深さ10～30cmである。掘立柱建物跡7によっても切られている。ほぼ溝状遺構2と平行している。黒色土器309と土師器皿310・311が出土した。

遺構内遺物（309～311）

309は体部に横方向の丁寧なヘラケズリ、底部外面には回転ナデがみられる。胎土に赤色粒がわずかに混在する。310・311は器高が低く灯明皿と思われる。底部内面に静止ナデ、外面には糸切り痕がみられる。

溝状遺構4（第65図）

Y-6～8区において検出された。北東から南西にかけて一旦は延びるが、弯曲し北西に向かって延びる。長さ約47m、最大幅62cm、深さ24cm程度である。溝状遺構5の硬化面と掘立柱建物跡6に切られる形で検出した。溝状遺構5との間に掘立柱建物跡8～11を挟む。

溝状遺構5（第65図）

W-Y-6～8区において検出された。全長約79.4mで、本遺跡中世溝状遺構最大のものである。北端と北側に硬化面を含み、全体的に鈎状を呈する。W

-8区において溝状遺構6に切られている。掘立柱建物跡11の短軸が近接している。Y-6～7区の硬化面は溝状遺構2～4を切っており、溝状遺構5の上場付近に沿って形成されている。また、この硬化面は近接する掘立柱建物跡6の長軸に平行する。また、X-8区において溝状遺構7と平行する。最大幅150cm、深さ30～40cmである。

溝状遺構6（第73図）

U-V-9～10区において南北に溝状遺構7と平行になる形で検出された。長さ約28m、最大幅110cm、深さ約10～20cm程度である。

溝状遺構7（第73図）

U-V-9～10区において南北に溝状遺構6と平行になる形で検出された。長さ約28m、最大幅105cm、深さ20cmから浅い部分では2cm程度である。北側は近世の溝状遺構と思われる溝状遺構1に切られる形で検出された。溝状遺構6・7ともに溝状遺構5の延長線上に位置する。

溝状遺構8（第73図）

S-T-9～10区において検出された。S-10区において大きくカーブを描き、途中で検出不可能となった。同様の形態である溝状遺構9との関連が考えられるが、掘立柱建物跡19～22との時代差を含めて検討する必要がある。長さ約23m、最大幅100cmで非常に浅い。

溝状遺構9

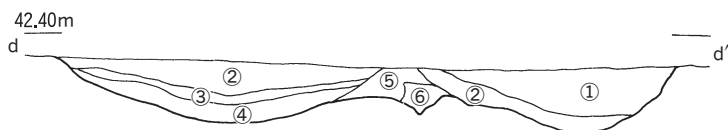
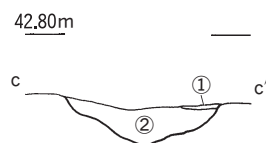
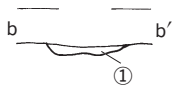
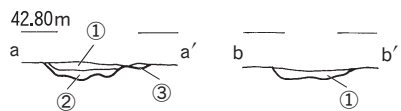
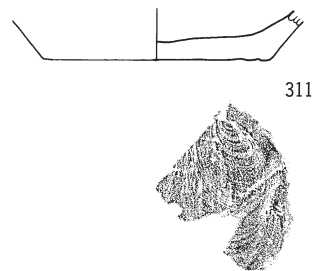
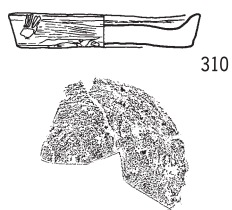
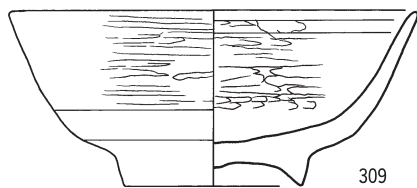
S-8～9区において鈎状の形を呈し検出された。長さ約5.5m、最大幅60cm、深さ8cmである。掘立柱建物跡19～22に隣接する形で検出されているため、溝状遺構8との関連を含めて検討の余地がある。

溝状遺構10

ほぼ、南北に沿う形で全長約15.6mにわたって検出された。最大幅80cmで非常に浅い。埋土は黒色土であった。本遺跡最大の四面庇付き掘立柱建物跡1と切り合う形で出土した。

溝状遺構11

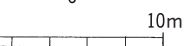
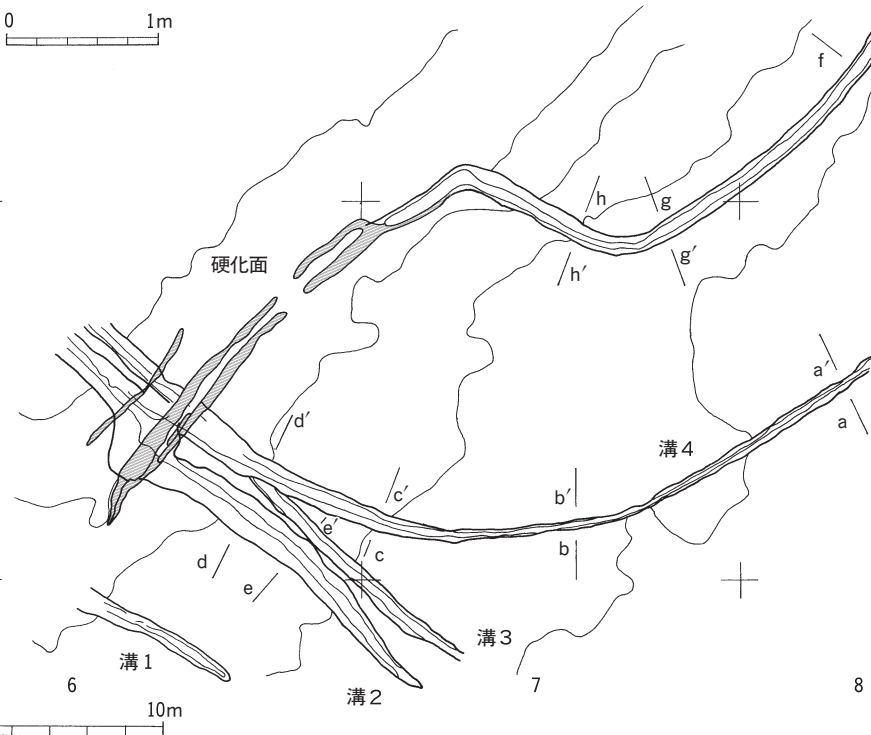
溝状遺構10に切られる形で検出された。ほぼ南北に延び、全長約20m、最大幅25cmで非常に浅い。掘立柱建物跡1・2・11との関連が考えられる。



X

Y

Z



第65図 中世溝状遺構

第16表 中世溝状遺構埋土観察表
溝状遺構観察表 (SD 4)

断面	層	埋土の状態
a-a'	①	黒色土：白色軽石の小粒を含む。
	②	①とⅡ層のブロックを含む。
	③	淡黒褐色土：白色軽石を含む。
b-b'	①	淡黒茶褐色土
	②	淡黒褐色土
c-c'	①	淡黒褐色土
	②	淡黒茶褐色土：Ⅳ層ブロック含む。

溝状遺構観察表 (SD 2・3・4)

断面	層	埋土の状態
d-d'	①	淡黒茶褐色土：Ⅲ層のブロックを含む。
	②	黒褐色土
	③	黒茶褐色：粒子がそろってしまりがあ
	④	茶褐色弱粘質土
	⑤	黄茶褐色土
	⑥	黄褐色土 (Ⅲ層と同質)

溝状遺構観察表 (SD 2・3)

断面	層	埋土の状態
e-e'	①	黒褐色土：粒子がそろってしまりがあ
	②	茶褐色弱粘質土：白色軽石を含む。しまりがあって硬い。

溝状遺構観察表 (SD 5)

断面	層	埋土の状態
f-f'	①	黒褐色土
	②	黒茶褐色土
	③	黄茶褐色土
g-g'	①	淡黒褐色土
	②	黒褐色土
	③	黒茶褐色土
h-h'	①	黒褐色土
	②	黒茶褐色土

(2) 遺物

Ⅱ・Ⅲ層から出土している。遺物には土師器坏・皿、黒色土器、青磁碗・皿、白磁碗、青白磁等がみられる。

土師器

出土範囲は坏がS-5・6区、R-9区、皿がS-6～8区、T-7区に集中している。坏・皿ともに底部が大半を占めるため器形全体を把握できる資料が少なかった。

坏の口径平均は12.4cm、底径平均は8.7cmである。皿は口径平均8.9cm、底径平均7.4cmである。ともに口径と底径の差が小さい傾向にある。

土師器坏・皿の器種分類は、底部が平底で器高が2cm以上を「坏」とし、器高が2cm以下のものを「皿」とした。

なお、坏は形態を基準に以下の通りに分類した。

I類…体部が直線的に立ち上がる平底のもの

Ⅱ類…体部がやや内弯気味に立ち上がる平底のもの

Ⅲ類…口縁部が外反するもの

なお、円盤状の底部を有すると思われるものは、それ以外の遺物としてまとめた。

製作・調整技法としては内外両面の回転ナデ、見込みの回転・不整方向のナデ、底部外面の回転糸切り、ナデ仕上げが確認できる。

1 坏

I類 (第67図 312～329)

体部が直線的に立ち上がり、口縁部に至る器形である。312は体部内外面に横ナデが認められ、見込みには回転ナデが残る。底部には糸切り痕が明瞭に残る。313・314は内外面を横ナデし、体部外面にはナデの稜がみられる。

315～329は底部である。315は全体にススが付着している。胎土に赤色粒を少量含む。316は底部に糸切り痕と簾状の圧痕がみられる。317は底部内面と体部の境が横ナデにより凹み、見込みの中心が突出する。317・318は体部最下端に糸切りによる底部切り離しを途中でやめた溝状の痕跡が1条残る。320はにぶい

黄色を呈し、底部内面と体部の境が横ナデによりやや凹む。321は胎土に赤色粒を少量含む。322は見込みに回転ナデがみられる。323は体部下端と底部に簾状の圧痕がみられる。324は見込みに不整方向のナデがみられる。325は体部外面のナデ幅が狭く2条の稜を残す。見込みには不整方向のナデがみられる。

326は内外面に強いナデによる稜が数条認められる。327は体部下端に横方向のケズリが明瞭に残る。328は底部から体部にかけての部分である。体部外面下半には横方向のヘラケズリがみられる。それ以外の部分はナデが施されている。329は底部である。330は外面に糸切り痕が明瞭に残り、はみ出た粘土が未処理の状態である。見込みには回転ナデが認められる。

Ⅱ類 (第68図 330～338)

体部中央で内弯気味に立ち上がる器形である。330は、内面の体部と底部との境目は横ナデにより凹んでいる。見込みには回転ナデがみられる。331はナデ幅が狭く体部外面に2条の稜線を残す。胎土に赤色粒を少量含む。332は口縁部がやや内弯する。334は内面に横ナデの終点が残る、約8mmの狭いナデ幅が確認できる。335・336は内外面に横ナデをし、その後外面にはケズリ調整をしたことが認められる。胎土に赤色粒をわずかに含む。

338は口縁端部がすばまる。底部外面にはナデが不十分なせいか糸切り痕がわずかに残る。

Ⅲ類 (第68図 339～341)

口縁部が外反する器形である。339は口縁端部が強く外反する。胎土に赤色粒を少量含む。340・341は内弯した体部が口縁部でやや外反する。

円盤状の底部 (第68図 343・359)

全て底部（一部体部を含む）付近のみの残存で、全体の形状はうかがえない。底径は10cm以内で、色調はにぶい黄色、橙色、浅黄橙である。

343はにぶい橙色を呈する。胎土に砂粒が多く脆弱

である。359はにぶい黄色を呈する。見込みに静止ナデがみられる。ともに底部外面はナデ調整を行っている。

2 皿（第68・69図 344～367）

344は見込みに指頭痕がみられる。345は体部が直線的に立ち上がり、口縁部でやや肥厚する。胎土に砂粒を少量含む。346は口唇部が細くすばまる。体部外面に横ナデによる稜が残る。347は底部の糸切り痕をナデにより消している。348は体部下端に横ナデ、底部には糸切り痕、見込みには回転ナデがみられる。胎土に赤色粒がわずかに残る。349はにぶい黄橙色を呈する。底部に糸切り痕、見込みは丁寧なナデがみられる。焼成が不十分なため胎土断面は灰色を呈する。

350は見込みに静止ナデ、351・352は見込みに回転ナデがみられ、底部には糸切り痕と簾状の圧痕がみられる。

353は摩耗が激しいが見込みに静止ナデが認められる。354は底部に糸切り痕がみられる。胎土には赤色粒を含む。356は体部が直線的に外開きに立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。内外面に横方向のナデがみられる。底部は糸切り痕が認められる。見込みと体部の境目には強いナデにより凹みが認められ、中心部には回転ナデが残る。

357は体部が内湾しながら立ち上がる。体部外面に横方向のナデによる稜がみられる。見込みには静止ナデがみられ中心部はやや凹む。底部には糸切り痕と簾状の圧痕がみられる。整形が不十分なため器形に歪みが生じている。358は浅黄橙色を呈する。体部が直線的に立ち上がり、中位で内湾し口縁部に至る。内外面、底部ともに丁寧なナデがみられる。360は浅黄橙色を呈する。胎土が脆弱なために磨耗が激しいが、見込みの静止ナデと底部外面の糸切り痕が認められる。赤色粒がわずかにみられる。361は見込みに静止ナデがみられ、底部外面には簾状の圧痕が残る。362・363は体部が直線的に立ち上がり、底部に糸切り痕が認められる。364は見込みに静止ナデがみられ、底部外面には簾状の圧痕がみられる。364は見込

みに回転ナデがみられる。365は底部である。磨耗が激しく器種の特定は困難であるが、体部立ち上がりの破損部分から推定し皿に分類したが、縁辺部にケズリ痕が認められるため、紡錘車に転用したことも考えられる。

3 その他の土師器（第70図 368）

368は鉢の底部である。透かしが確認できる。

4 黒色土器・埴（第70図 369～372）

369、370、371は口縁部から体部である。内外面に横方向のミガキがなされている。369・370は曲線的に立ち上がるタイプである。369は内面の黒色面が口縁部外面にまで及んでいる。371はややほぼ直線的に立ち上がり口縁部でわずかに外反する。

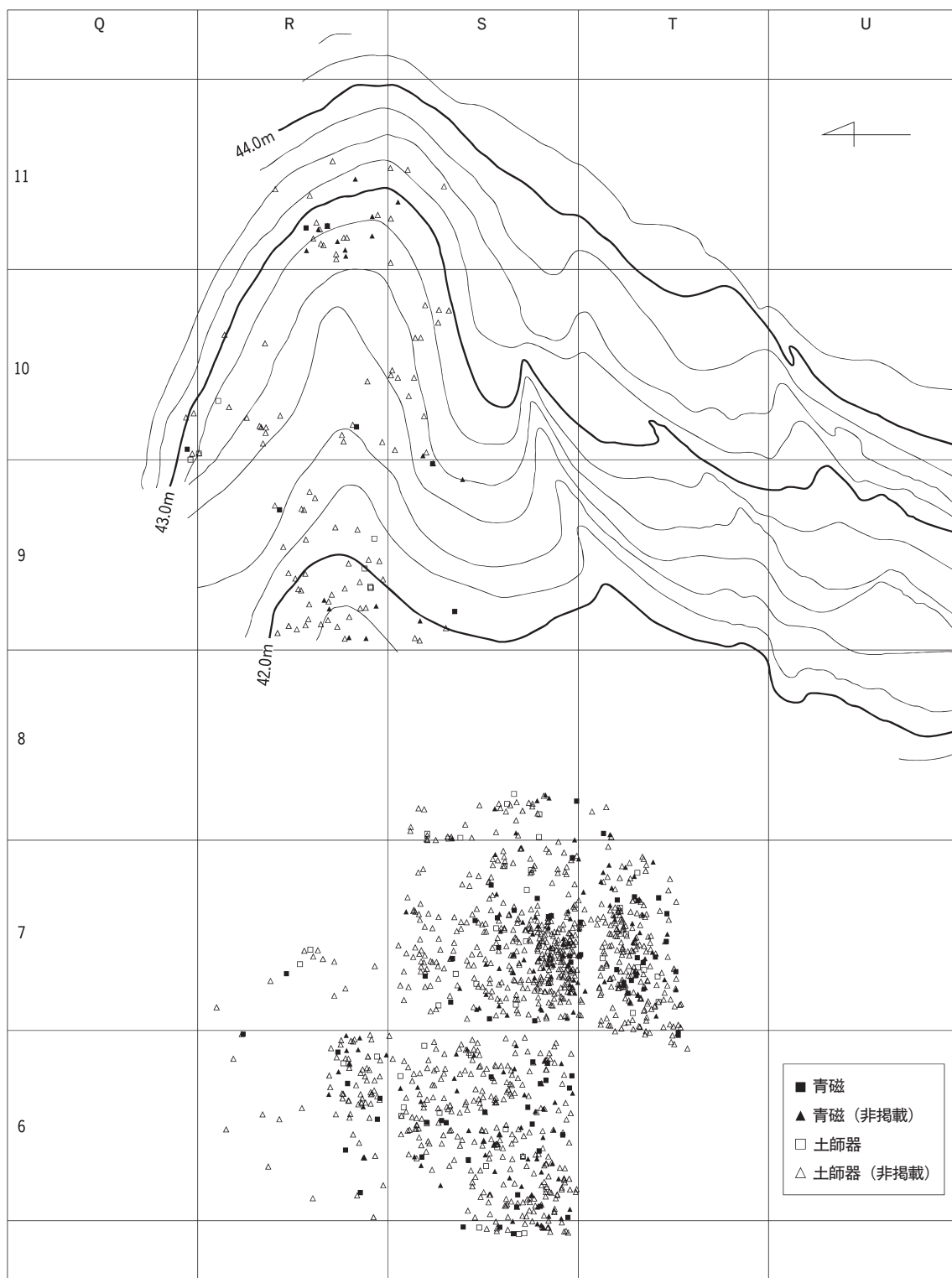
372は底部である。欠損しているが高台高は1 cm強と思われる。見込みは横方向のミガキ、それ以外の部分は横ナデがなされている。

5 黒色土器・皿（第70図 373）

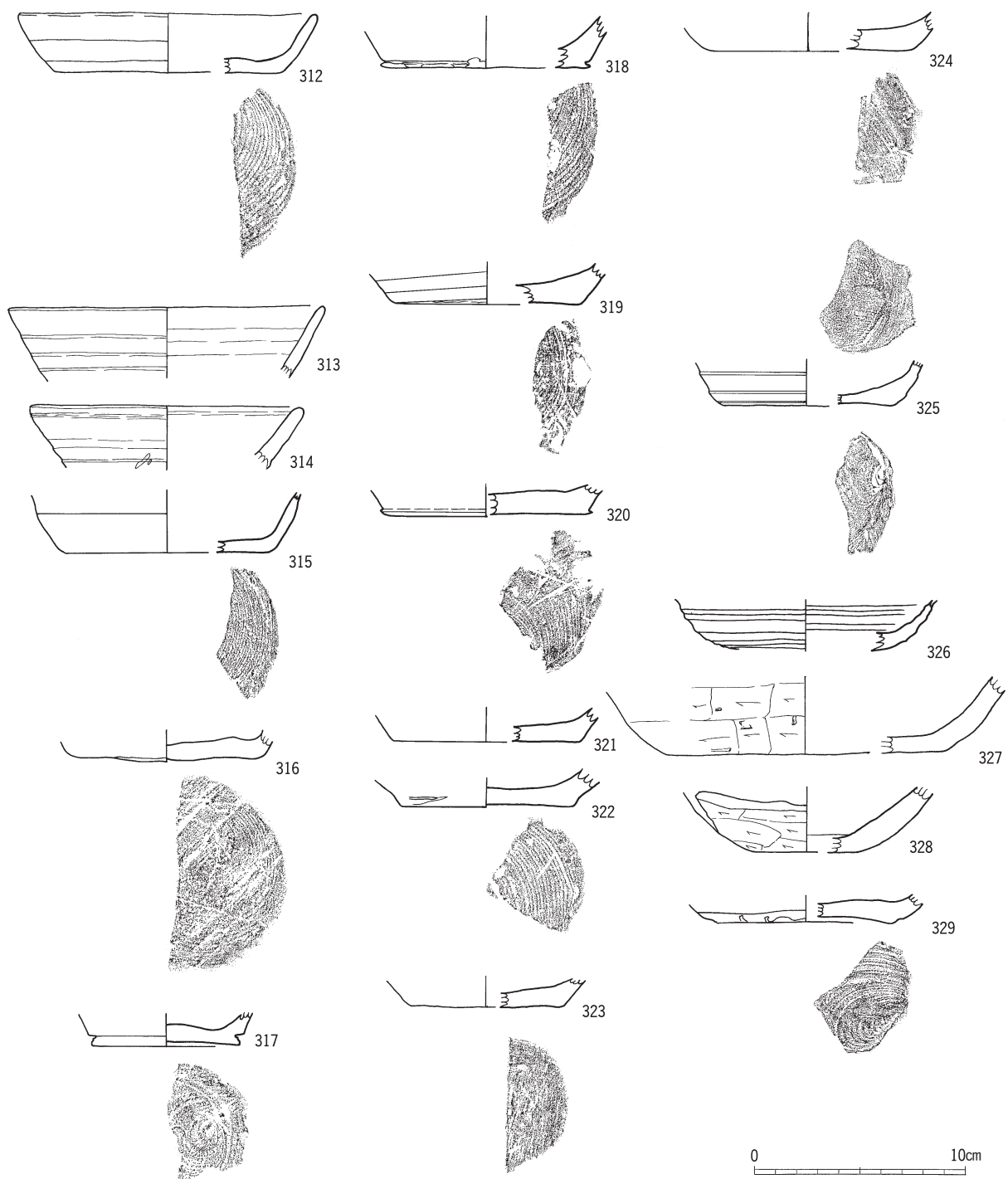
373は高台付きの皿である。高台は1 cm以内と低く端部は鋭角的である。外面はナデ、内面と見込みは横方向のミガキ、底部外面は回転ナデで仕上げている。

6 瓦器（第70図 374）

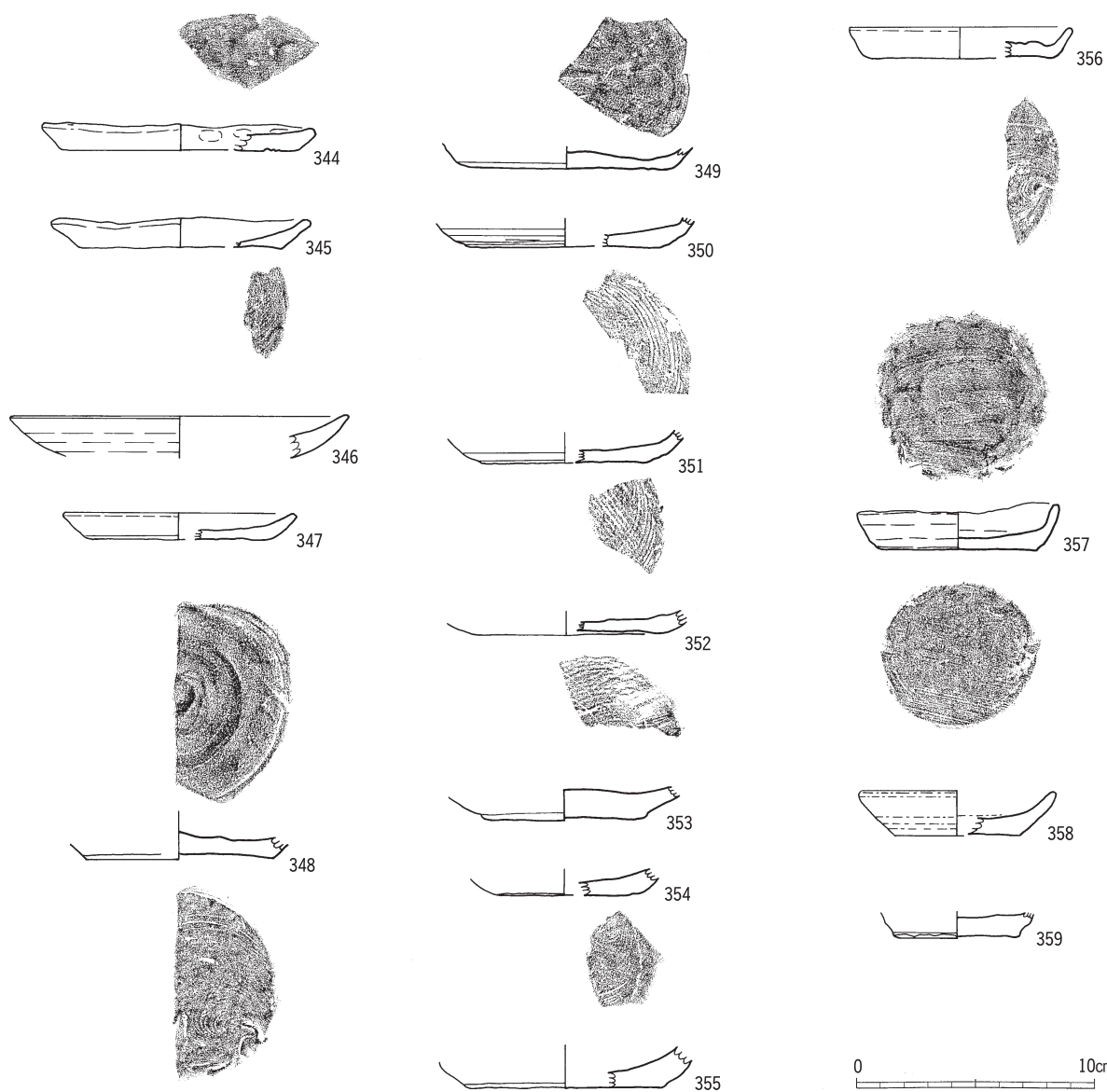
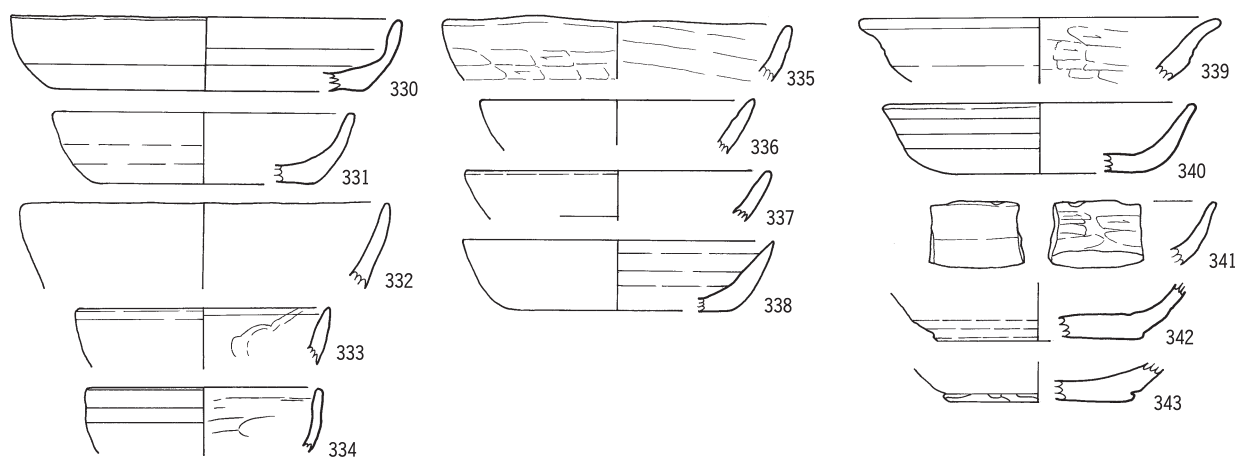
374は体部下端から底部である。体部下端外面は横方向にケズリ調整をしている。内面は丁寧にナデている。



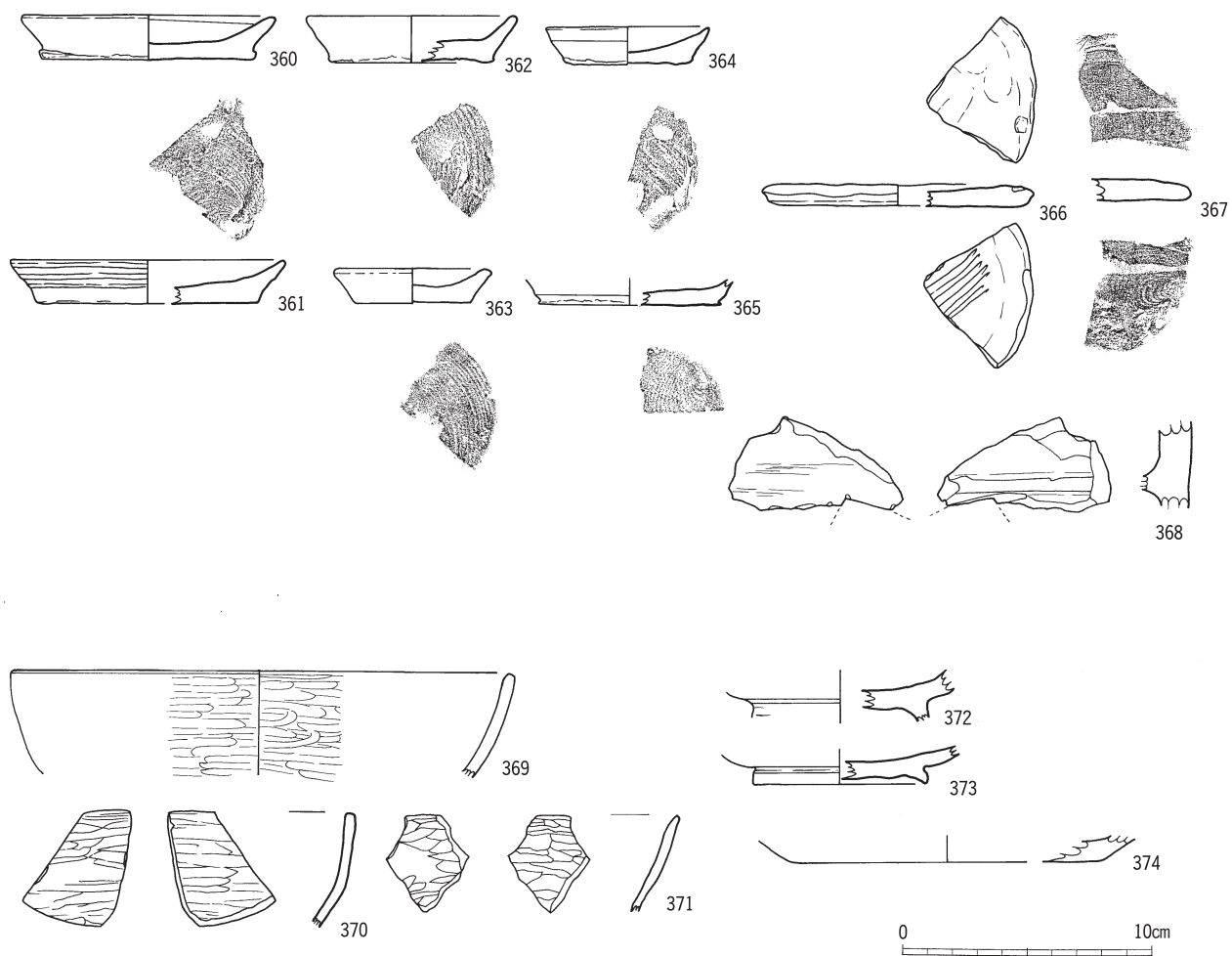
第66図 中世遺物出土状況



第67図 中世土師器 (1)



第68図 中世土師器（2）



第69図 中世土師器 (3)

第17表 中世出土遺物観察表(1) 土師器

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	種別	部位	法量 (cm)				胎土	焼成	色調 (外)	備考
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高				
67	312	R-10	Ⅱ	坏	口縁部~底部	14.2	10.7	2.8		砂粒多い	良	7.5YR6/4にふい橙	
	313	R-7	Ⅱ	坏	口縁部	11				砂粒, 脆弱	良	10YR8/4浅黄橙	
	314	R-6	Ⅱ	坏	口縁部	12				精緻	不良	10YR7/4にふい黄橙	
	315	S-7	Ⅱ	坏	底部		9.8			赤含む	良	7.5YR7/4にふい橙	
	316	R-9	Ⅲ	坏	底部		8.8			脆弱	良	5YR7/6橙	
	317	S-8	Ⅱ	坏	底部		7			精緻	良	7.5YR6/4にふい橙	
	318	R-9	Ⅲ	坏	底部		9.5			精緻	良	5YR6/6橙	
	319	S-7	Ⅱ	坏	底部~体部		9			脆弱	良	10YR8/3浅黄橙	
	320	S-6	Ⅱ	坏	底部		9.4			脆弱	良	10YR7/3にふい黄橙	
	321	T-7	Ⅱ	坏	底部		8.8			赤含む	良	5YR6/4にふい橙	
	322	T-7	Ⅱ	坏	底部		8.2			脆弱	良	7.5YR7/4にふい橙	
	323	R-7	Ⅱ	坏	底部		7			礫, 脆弱	良	7.5YR8/6黄橙	
	324	S-7	Ⅱ	坏	底部		9.5			脆弱	良	7.5YR7/4にふい橙	
	325	S-6	Ⅱ	坏	底部		7.9			脆弱	良	10YR7/3にふい黄橙	
	326	表採		坏	底部~体部					精緻	良	7.5YR7/4にふい橙	
	327	表採		坏	底部		12.8			脆弱	不良	7.5YR7/4にふい橙	
	328	S-6	Ⅱ	坏	底部					精緻	不良	10YR7/4にふい黄橙	
	329	T-7	Ⅲ	坏	底部		8.6			砂粒多い	不良	10YR7/3にふい黄橙	
68	330	S-6	Ⅱ	坏	口縁部~底部	15.4	12.4	2.9		精緻	良	7.5YR7/6橙	
	331	表採		坏	口縁部~底部	11.9	8.5	2.8		脆弱	良	7.5YR8/4浅黄橙	
	332	T-7	Ⅱ	坏	口縁部	14.5				精緻	良	5YR6/6橙	
	333	R-9	Ⅱ	坏	口縁部~体部	10				精緻	良	7.5YR7/6橙	
	334	R-9	Ⅱ	坏	口縁部~体部	9.3				精緻	良	5YR7/6橙	
	335	S-6	Ⅱ	坏	口縁部~体部	13.8				脆弱	良	10YR8/3浅黄橙	
	336	S-7	Ⅱ	坏	口縁部~体部	10.9				脆弱	良	10YR8/3浅黄橙	
	337	表採		坏	口縁部~体部	12				脆弱	良	7.5YR6/4にふい橙	
	338	表採		坏	口縁部~底部					精緻	良	10YR7/4にふい黄橙	
	339	S-8	Ⅱ	坏	口縁部	14.2				赤含む	不良	10YR7/4にふい黄橙	
	340	R-9	Ⅱ	坏	口縁部~底部	12.4	7.8	2.8		砂粒	良	5YR6/6橙	
	341	S-6	Ⅱ	坏	口縁部~底部					精緻	良	10YR7/4にふい黄橙	
	342	S-5	Ⅱ	坏	底部		8.2			脆弱	不良	10YR7/3にふい黄橙	
	343	T-7	Ⅱ	坏	底部		7			砂粒, 脆弱	良	7.5YR7/4にふい橙	
	344	T-7	Ⅱ	Ⅲ	口縁部~底部	11.5	9.6	1		脆弱	良	7.5YR7/6橙	
	345	S-8	Ⅱ	Ⅲ	口縁部~底部	11	8.4	1.2		砂粒多い	良	7.5YR7/4にふい橙	
	346	T-7	Ⅱ	Ⅲ	口縁部	14.2				精緻	良	7.5YR7/4にふい橙	
	347	表採		Ⅲ	口縁部~底部	9.8	7.4	1.2		精緻	良	10YR6/3にふい黄橙	
	348	S-8	Ⅱ	Ⅲ	底部		8			赤含む	良	7.5YR8/4浅黄橙	
	349	Q-10	Ⅱ	Ⅲ	底部		9.3			精緻	良	10YR7/3にふい黄橙	
	350	S-7	Ⅱ	Ⅲ	底部		8			精緻	不良	5YR6/6橙	
	351	S-6	Ⅱ	Ⅲ	底部		7			精緻	良	5YR6/6橙	
	352	S-7	Ⅱ	Ⅲ	底部		8			精緻	良	10YR7/3にふい黄橙	
	353	R-6	Ⅱ	Ⅲ	底部		7			脆弱	良	10YR7/3にふい黄橙	
	354	S-7	Ⅱ	Ⅲ	底部		5.6			赤含む	良	10YR8/4浅黄橙	
	355	S-8	Ⅱ	Ⅲ	底部~体部		8.2			脆弱	良	7.5YR7/6橙	
	356	S-7	Ⅱ	Ⅲ	口縁部~底部	9.4	7.4	1.3		精緻	良	5YR7/6橙	
	357	S-6	Ⅱ	Ⅲ	完形	8.4	6.6	1.8		精緻	良	10YR6/3にふい黄橙	
	358	S-6	Ⅱ	Ⅲ	口縁部~底部	8.4	5.3	1.9		精緻	良	10YR8/3浅黄橙	
	359	S-5	Ⅱ	Ⅲ	底部		5.2			脆弱	良	10YR8/4浅黄橙	
69	360	T-7	Ⅱ	Ⅲ	完形	10.2	8.4	1.8		精緻	良	7.5YR7/6橙	
	361	S-7	Ⅱ	Ⅲ	口縁部~底部	10.8	9	1.8		精緻	良	10YR7/3にふい黄橙	
	362	T-7	Ⅱ	Ⅲ	口縁部~底部	8.6	6.5	1.9		精緻	良	10YR6/2灰黄褐	
	371	T-7	Ⅱ	Ⅲ	完形	6.4	4.6	1.4		精緻	良	10YR7/3にふい黄橙	
	364	S-6	Ⅱ	Ⅲ	完形	6.6	4.8	1.6		脆弱	良	10YR7/4にふい黄橙	
	365	表採		Ⅲ	底部					精緻	良	10YR7/4にふい黄橙	
	366	S-7	Ⅱ	Ⅲ	底部		11	0.9		精緻	良	10YR7/3にふい黄橙	
	367	S-6・8	Ⅱ	Ⅲ	底部		7			精緻	良	7.5YR7/6橙	
	368	表採		鉢	底部					脆弱	良	10YR7/3にふい黄橙	

第18表 中世出土遺物観察表(2) 黒色土器

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	種別	部位	法量 (cm)				胎土	焼成	色調 (外)	備考
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高				
69	369	R-10	Ⅲ	埴	口縁部	20.2				精緻	良	10YR6/4にふい黄橙	
	370	2T2	Ⅱ	埴	口縁部					精緻	良	10YR6/4にふい黄橙	
	371	R-10	Ⅲ	埴	口縁部					精緻	良	7.5YR5/3にふい褐	
	372	S-6	Ⅱ	埴	底部		7.2			精緻	良	10YR7/4にふい黄橙	
	373	表採		Ⅲ	底部		7		0.7	精緻	良	7.5YR8/3浅黄橙	

第19表 中世出土遺物観察表(3) 瓦質土器

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	種別	部位	法量 (cm)				胎土	焼成	色調 (外)	備考
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高				
69	374	表採		瓦質	底部		12.2			脆弱	良	10YR3/1黒褐	

青磁・白磁

R・S-6, S・T-7 区のⅡ層を中心に出土した。産地は越州窯系と龍泉窯系に大別できる。比率は龍泉窯系が優勢である。青磁が9割以上を占め、器種は碗・皿がほとんどで、他に小碗・合子がある。器形と文様により分類した。規格・色調については観察表を参照されたい。

青磁 (第70～72図 375～444)

越州窯系 (第70図 375)

375は無文の碗である。体部がやや丸みをもって立ち上がり、直線的に口縁部に至る。内外とも釉切れがみられる。

龍泉窯系 (第70～72図 376～453)

(第70～72図 376～433)

376～380は体部内面に劃花文を有する。381は口縁部内面に1条沈線を有する。382～384は見込み、体部内面に劃花文を有する。383・384は全面に施釉後、畳付と外底の釉を削り取っている。385は体部外面に幅広の蓮弁、体部立ち上がり部分と内面に沈線が2条みられる。

386・387は体部に鎬蓮弁を有する。386は断面四角形の底部で畳付と外底の釉を施釉後に削り取っている。

389は体部外面に幅広の蓮弁文を有する。390～393は口縁部に幅広の蓮弁文を有する。394は体部から底部である。高台は破損している。外面に幅広の蓮弁文、内面の体部立ち上がりには、沈線が1条巡る。

395は体部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がっている。外面に幅広の蓮弁文を有する。396は外面に蓮弁、397は内面口縁端部に1条沈線を有する。398は無文である。399は体部外面に幅広の蓮弁文を有する。全体に施釉後、畳付の釉を削り取っている。

400～402は体部外面に幅広の蓮弁を有する。

403は体部が垂直に立ち上がる。外面には片切り彫りの鎬蓮弁文を有する。404～409は体部から口縁部にかけて外側に直行する形状である。

404～407は外面に幅広の蓮弁文を有する。407は高台が破損している。

408・409は外面に鎬蓮弁文を有する。410は体部外面に鎬蓮弁文を有し、体部内面立ち上がりには、沈線1条が巡る。全面施釉後、断面四角形の高台は畳付と外底の釉が削り取られている。412は体部外面に鎬蓮弁文を有する。高台は破損している。413は体部外面に片切り彫りの鎬蓮弁文を有し、見込みには劃花文がみられる。全体を施釉後に、断面四角形の高台は畳付と外底の釉を削り取っている。414・415は外面に鎬蓮弁を有する。

416は外面に雷文を有する。

417～420は外面に幅広で細線の蓮弁文を有する。

421は体部外面に不明瞭な蓮弁文を有する。高台は破損している。422・423は全体を施釉後、高台の畳付と外底の釉を削り取っている。425は端反り口縁の小碗である。外面に蓮弁文を有する。

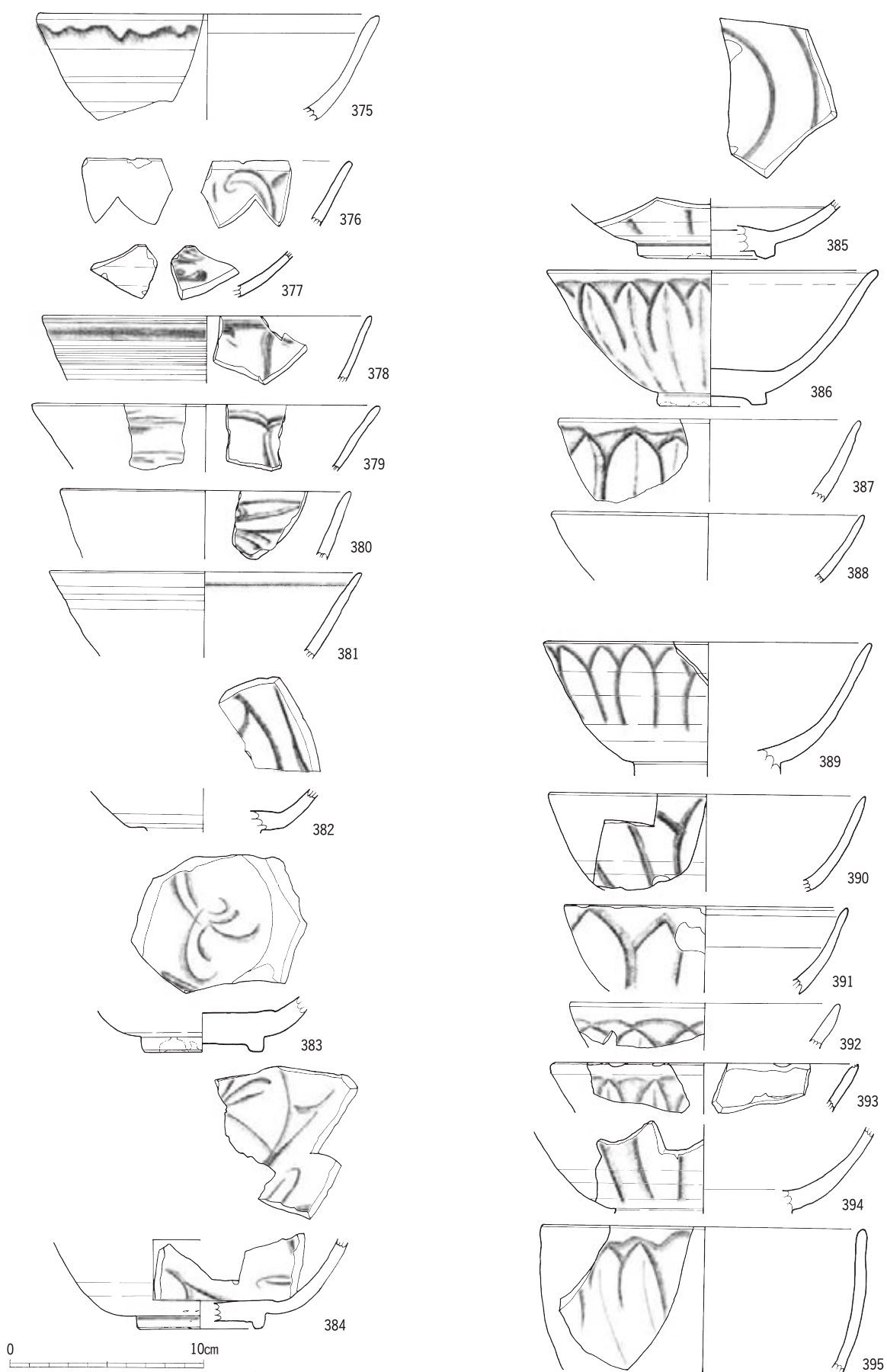
426は全体を施釉後に、外底のみ環状に釉を削り取っている。427は端反りで無文の碗である。428は幅広の蓮弁文を有する直口碗である。429は線描きの細線で蓮弁文を表現しているが、剣頭は波状の沈線になる。施釉が不十分なために所々露胎している。

430は体部に細線の蓮弁文を有する。高台は破損しているが、外底の釉の削り取りが認められる。

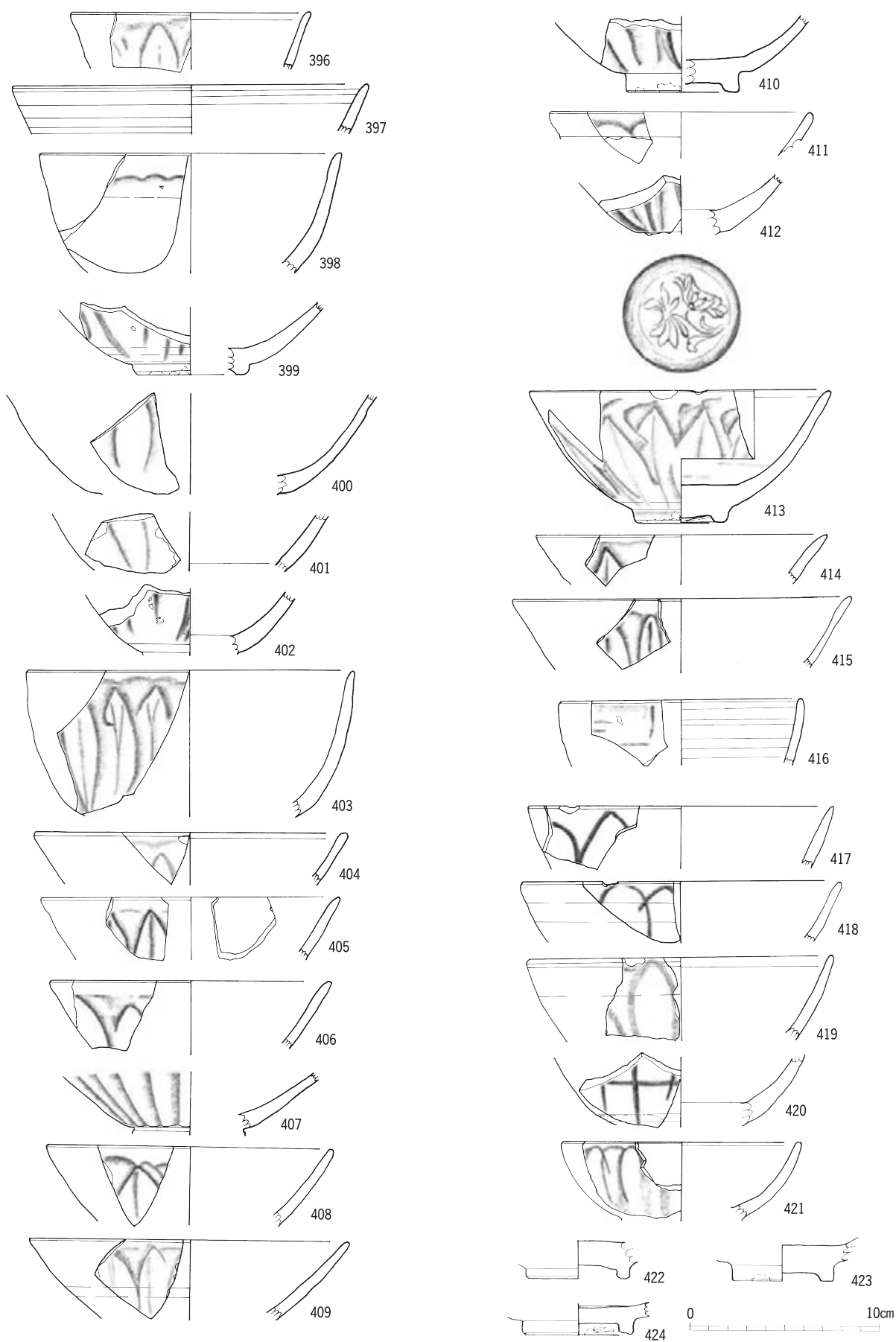
431は無文の直口碗、432は端反りの碗である。433は全体的に釉が厚いが特に高台の部分が厚く、微細な気泡がみられる。畳付のみが露胎である。

皿 (第72図 434～444)

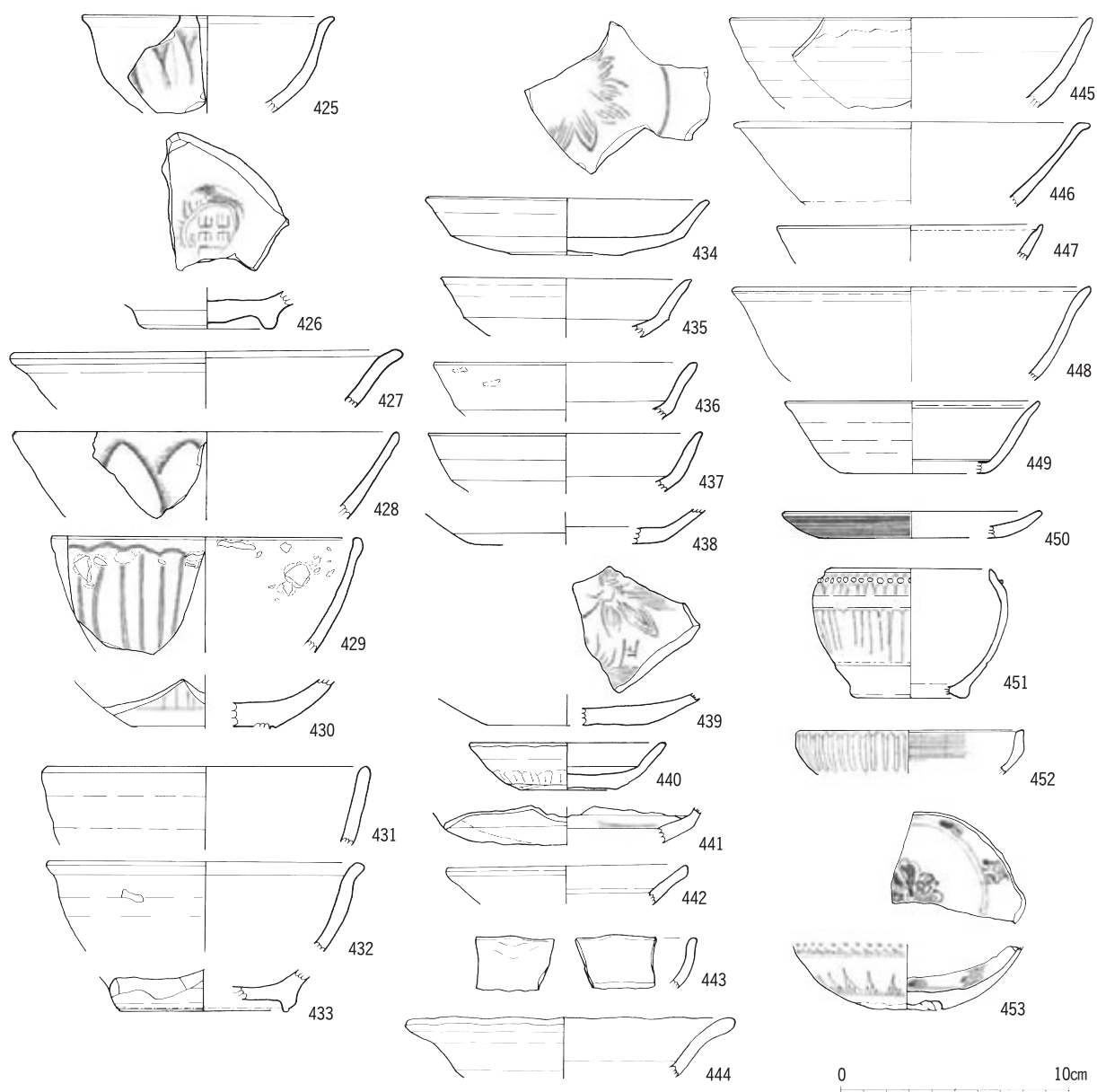
平底から外側に直線的に立ち上がり、途中稜をもち屈曲する器形である。434は見込みに劃花文と体部立ち上がり部分に沈線を1条有し、外底は釉を削り取っている。435～438は体部立ち上がり部分に沈線を1条有する。439は見込みに劃花文を有し、外底は施釉後に釉を削り取っている。440は底部と体部の屈曲部下半の釉を削り取っている。441は一部施釉されていない。442は口縁部が弱く屈曲し外反する。443は口縁部が内側に凹む部分があり、波状口縁の可能性がある。444は口縁部が外反し、口唇部がやや肥厚する。釉に光沢が無く、細かい気泡や貫入がみられる。



第70图 中世陶磁器 (1)



第71图 中世陶磁器 (2)



第72図 中世陶磁器（3）

白磁碗・その他（第72図 445～450）

445は無文，446は端反り口縁，447・448・449は口縁端部がやや反り，口縁部の釉が掻き取られた口禿口縁の碗である。

450は青っぱい明緑灰を呈した，他の遺物とは異なる色調の皿である。韓半島が生産地かと思われる。

青白磁（第72図 451・452）

451は合子の身である。外面上部に浮き彫りの点を

1条巡らし，体部に有段の菊弁文を施す。釉は口唇部を削り取り，体部下端以下は無釉である。

452は合子の蓋である。内面と口唇部は釉を削り取っている。外面は無段菊弁文をもつ。

染付（第72図 453）

453は皿である。碁笥底を呈し，外面下部に芭蕉葉文，上部に波濤文，見込みに十字花に類似する花文と界線2条をもつ。

第20表 中世出土遺物観察表(4) 青磁・白磁他

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	層	部 位	法量 (cm)				色調 (外)	胎土色	焼成	備 考
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高				
70	375	青磁	碗	T-6・S-6	Ⅱ	口縁部～体部	18				5Y5/2 灰オリーブ	褐灰	良	
	376	青磁	碗	T-7・S-8	Ⅱ	口縁部					5Y5/3 灰オリーブ	灰黄	良	
	377	青磁	碗	表採	Ⅱ	体部					5Y5/2 灰オリーブ	褐灰	不良	
	378	青磁	碗	S-5・6	Ⅱ	口縁部	17.3				5Y5/3 灰オリーブ	灰白	良	
	379	青磁	碗	R-6	Ⅱ	口縁部	18.2				5Y5/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	380	青磁	碗	S-6	Ⅱ	口縁部	15.2				5Y5/3 灰オリーブ	灰白	良	
	381	青磁	碗	S-5	Ⅱ	口縁部	16.1				2.5Y5/3 黄褐	灰褐	良	
	382	青磁	皿	S-7	Ⅱ	胴部～底部					5Y6/2 灰オリーブ	灰黄	良	
	383	青磁	碗	R-6	Ⅱ	底部		6.3		0.8	5Y5/3 灰オリーブ	灰	良	
	384	青磁	碗	T-7	Ⅱ	底部		6.5		0.7	2.5GY6/2 オリーブ灰	黄灰	良	
	385	青磁	碗	S-8	Ⅲ	底部～体部					5Y4/3 暗オリーブ	にぶい黄	良	
	386	青磁	碗	S-8	Ⅱ	完形	16.4	5.8	7.1	0.8	10GY6/1 緑灰	緑灰	良	
	387	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	16				5Y5/2 灰オリーブ	褐灰	良	
	388	青磁	碗	T-8	Ⅱ	口縁部	16.4				5Y5/3 灰オリーブ	灰黄	良	
	389	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部～底部	16.8	7.4	6.6	0.8	2.5Y5/4 黄褐	灰黄	良	
	390	青磁	碗	S-7	Ⅱ	口縁部～体部	15				10Y5/2 オリーブ灰	灰	良	
	391	青磁	碗	S-7	Ⅱ	口縁部～体部	13				10Y5/2 オリーブ灰	灰	良	
	392	青磁	碗	S-7	Ⅱ	口縁部	14.3				10Y5/2 オリーブ灰	灰黄	良	
	393	青磁	碗	S-6	Ⅱ	口縁部					5GY6/1 オリーブ灰	灰	良	
	394	青磁	碗	S-6・T-7	Ⅱ	底部～体部					5Y5/4 オリーブ	灰黄	良	
71	395	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部～体部	15.2				2.5Y6/3 にぶい黄	灰黄	良	
	396	青磁	小碗	T-7	Ⅱ	口縁部	13				7.5Y6/2 灰オリーブ	灰白	良	
	397	青磁	碗	S-6	Ⅱ	口縁部	19.2				7.5Y5/3 灰オリーブ	灰黄	良	
	398	青磁	碗	S-6	Ⅱ	口縁部～体部	16.2				5Y5/3 灰オリーブ	灰白	良	
	399	青磁	碗	R-11	Ⅱ	底部～体部					5Y4/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	400	青磁	碗	S-6	Ⅱ	体部					10Y5/1 灰	灰	良	
	401	青磁	碗	表採	Ⅱ	体部					2.5GY6/1 オリーブ灰	黄灰	良	
	402	青磁	碗	Q-10	Ⅱ	体部					5Y5/3 灰オリーブ	灰黄	良	
	403	青磁	碗	S-6	Ⅱ	口縁部～底部	17.7				5Y5/4 オリーブ	灰白	良	
	404	青磁	碗	T-7	Ⅱ	口縁部	16.6				5Y4/3 暗オリーブ	灰	良	
	405	青磁	碗	R-6	Ⅱ	口縁部	16.2				5GY6/1 オリーブ灰	黄灰	良	
	406	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	15.2				7.5Y5/2 灰オリーブ	灰白	良	
	407	青磁	碗	S-6	Ⅱ	体部					2.5Y5/3 黄褐	灰黄褐	良	
	408	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	15.2				5Y5/3 灰オリーブ	黄灰	良	
	409	青磁	碗	R-6	Ⅱ	口縁部～体部	17.2				10Y5/2 オリーブ灰	黄灰	良	
	410	青磁	碗	表採	Ⅱ	底部～体部					2.5Y5/3 灰オリーブ	にぶい黄橙	良	
	411	青磁	碗	T-7	Ⅱ	口縁部	14.2				5Y4/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	412	青磁	碗	T-7	Ⅱ	体部					5Y5/2 灰オリーブ	灰	良	
	413	青磁	碗	S-9	Ⅲ	完形	15.9	5	7.1	0.8	7.5YR4/3 暗オリーブ	灰	良	
72	414	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	15.6				5GY6/1 オリーブ灰	黄灰	良	
	415	青磁	碗	R-9	Ⅲ	口縁部	18.2				5GY6/1 オリーブ灰	灰白	良	
	416	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	13.2				7.5GY 6/1 緑灰	灰白	良	
	417	青磁	碗	S-6	Ⅱ	口縁部	16.4				5Y5/4 オリーブ	灰黄	良	
	418	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	17.3				5Y5/3 灰オリーブ	灰黄	良	
	419	青磁	碗	T-7	Ⅱ	口縁部	16.6				2.5Y5/3 黄褐	灰黄褐	良	
	420	青磁	碗	S-6	Ⅱ	体部					7.5Y5/2 灰オリーブ	褐灰	良	
	421	青磁	碗	T-7	Ⅱ	口縁部	12.6				10Y6/2 オリーブ灰	灰白	良	
	422	青磁	碗	S-7	Ⅱ	底部		5.6		0.4	2.5GY5/1 オリーブ灰	灰白	良	
	423	青磁	碗	S-6	Ⅱ	底部		5.4		0.4	5Y5/3 灰オリーブ	灰白	良	
	424	青磁	碗	S-6	Ⅱ	底部		6		0.5	5Y4/3 暗オリーブ	黄灰	良	
	425	青磁	小碗	T-3	Ⅱ	口縁部～体部	11.4				10Y4/2 オリーブ灰	灰	良	
	426	青磁	碗	表採	Ⅱ	底部		6.2		0.6	7.5GY6/1 緑灰	灰白	良	
	427	青磁	碗	表採	Ⅱ	口縁部	17.2				7.5GY6/1 緑灰	灰白	良	
	428	青磁	碗	S-7	Ⅱ	口縁部	17				2.5GY7/1 明オリーブ灰	灰黄	良	
	429	青磁	碗	T-7	Ⅱ	口縁部	13.6				2.5GY5/1 オリーブ灰	灰黄	良	
	430	青磁	碗	R-10	Ⅱ	底部～体部					10Y5/2 オリーブ灰	褐灰	不良	
	431	青磁	碗	R-11	Ⅱ	口縁部	14.7				5Y6/4 オリーブ灰	灰白	良	
	432	青磁	碗	S-7	Ⅱ	口縁部	14				5GY6/1 オリーブ灰	黄灰	良	
	433	青磁	皿	S-7	Ⅱ	底部		7.6		0.5	5Y4/3 暗オリーブ	褐灰	良	
72	434	青磁	皿	S-6	Ⅱ	完形	12.4	4.3	2.3		2.5GY6/1 オリーブ灰	灰白	良	
	435	青磁	皿	S-7	Ⅱ	口縁部	11.2				5Y6/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	436	白磁	皿	S-6	Ⅱ	口縁部	11.8				5Y6/2 灰オリーブ	灰白	良	
	437	白磁	皿	R-7・S-6	Ⅱ	口縁部	12				5Y6/2 灰オリーブ	灰白	良	
	438	青磁	皿	T-7	Ⅱ	底部～体部		8.6			7.5Y6/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	439	青磁	皿	S-7	Ⅱ	底部		7			5Y6/2 灰オリーブ	灰白	良	
	440	青磁	皿	R-6	Ⅱ	完形	8.8	4.2	2		7.5GY6/2 灰オリーブ	灰	良	
	441	青磁	皿	S-5	Ⅱ	底部					5Y5/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	442	青磁	皿	S-7	Ⅱ	口縁部	10.6				2.5GY6/2 オリーブ灰	灰白	良	
	443	青磁	皿	R-6	Ⅱ	口縁部	21.3				5Y5/3 灰オリーブ	灰黄	良	
	444	青磁	皿	表採	Ⅱ	口縁部	14.5				5GY6/3 オリーブ灰	灰	良	
	445	白磁	皿	3 T-2	Ⅱ	口縁部～体部	16.2				7.5Y7/2 灰白	灰白	良	
	446	白磁	皿	S-7	Ⅱ	口縁部	15.6				7.5Y7/1 灰白	灰白	良	
	447	青磁	皿	T-7	Ⅱ	口縁部	11.7				5Y6/2 灰オリーブ	黄灰	良	
	448	白磁	皿	T-7	Ⅱ	口縁部～体部	16				10Y7/1 灰白	灰白	良	
	449	白磁	皿	S-6	Ⅱ	口縁部～底部	11.4	6.4	3.1		10Y7/1 灰白	灰白	良	
	450	青磁	皿	表採	Ⅱ	口縁部～体部	11.4	8.2	1.2		10GY8/1 明緑灰	灰白	良	
	451	青白磁	合子	S-5・6	Ⅱ	完形	7.5	5	5.6		10G7/2 明緑灰	灰白	良	
	452	青白磁	合子	S-6	Ⅱ	口縁部	10.2				5G7/1 明緑灰	灰白	良	
	453	染付	皿	R-6	Ⅱ	底部		3			10Y7/1 灰白	灰白	良	

6 近世の調査

本遺跡において近世溝状遺構は8条、硬化面2条が検出された。遺構内遺物として陶磁器、染め付け茶碗等の破片が確認された。陶磁器、染め付け茶碗等については、小片でまとまりにかけると図面等の掲載は省略した。

遺構

①近世溝状遺構 1～8

溝状遺構 1

近世のものと思われる溝状遺構の中で本遺跡中最長のものである。V～W-7～10区の北東から南西にかけて検出された。全長約80m、幅2m80cm、深さ10～17cmである。V-10区において、樹痕に切られる形で検出されたが、樹痕には根が残存し、科学分析の結果、樺の木と判定された。（詳細は付編）

溝状遺構 2

T～U-10～11区において検出された。途中判然としない部分があるが、延伸方向から同一の溝状遺構と判断した。長さ27m、最大幅80cm程度で非常に浅い。

溝状遺構 3

T～V-9～11区において検出された。全長約55m、最大幅70～80cm、深さ20cmである。途中T-10区において判然としない部分があったが、前後の出土状況から同一の遺構と考えられる。

溝状遺構 4

V-9区において、ほぼ直角を呈する形で検出された。長さ約7m、最大幅150cm、深さ20cmである。溝状遺構3の同一の遺構であったことも考えられる。溝状遺構3のバイパス、もしくは北西からの肢道であった可能性が高い。※溝状遺構1～4は、それぞれが平行に位置している。

溝状遺構 5

S～U-9～11区において検出された。長さ約50m、幅2～3m。本遺跡で検出された溝状遺構の中で最も幅広で非常に浅い。形状から近世の畑境の可能性が高い。

溝状遺構（硬化面） 1

V-9区において硬化面を検出した。長さ約10m、

幅60cm程度である。溝状遺構2の延長上にあった硬化面である可能性が高い。

溝状遺構（硬化面） 2

V～W-7～8区において硬化面を検出した。長さ約26m、最大幅60cmである。溝状遺構2・硬化面1の延長上にあった硬化面である可能性が高い。掘立柱建物跡5の長軸に沿って検出しており、関連も考えられる。

溝状遺構 6

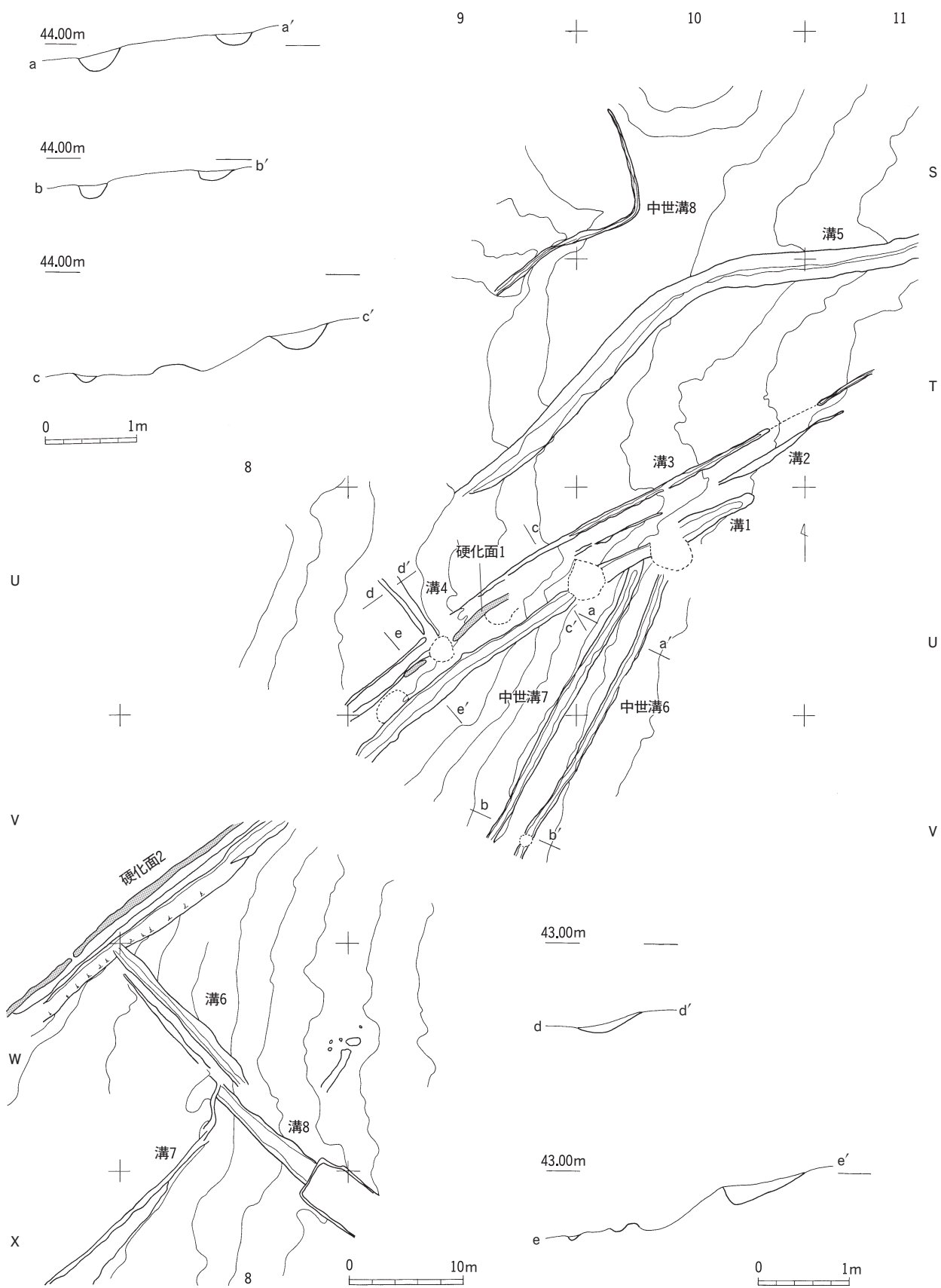
W-8区において中世の溝状遺構5を切り、近代の遺構に切られる形で検出された。長さ約11m、幅210cmで北東から南西に向かっている。中世の溝状遺構5とほぼ直行し、溝状遺構8と平行する。北側は溝状遺構7に切れ、延長線上は溝状遺構1に直行する。

溝状遺構 7

W～X-7～8区において検出された。溝状遺構6を切る。長さ約24m。上場、下場がはっきりしない部分がある。途中から分岐していたと思われるが、検出時には判然としなかった。

溝状遺構 8

W-8区において、一部分が溝状遺構6と平行する形で検出された。長さ16.4m、最大幅150cmである。近世のものと思われる溝状遺構に直行する形で検出された。溝状遺構6・7との関連が考えられる。



第73図 近世溝状遺構

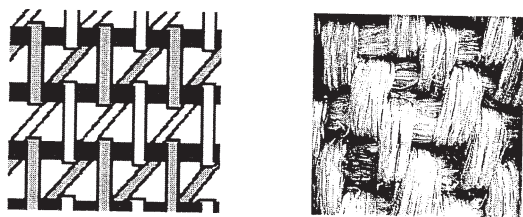
第3節 小結

縄文時代晩期土器

本遺跡出土の縄文時代晩期の土器は、深鉢・浅鉢ともに上加世田式土器の新段階から入佐式土器の古～中～新段階、及び黒川式土器まで一連の型式編年が観察できた。特に中間の形態を示すものもあり、その特徴を表すため、部位ごとの掲載を試みた。

組織痕土器

本遺跡の組織痕土器に用いられた「巻き編み」と呼ばれる技法は次のような方法によると思われる。まず、1本のヨコの条を巻き上げ、その2列ずつをタテの条を巻き付け固定していく。それを1周ごとに1列ずつずらしていき形を作る、といったことを繰り返すことで製品を完成していく。この方法を用いた製品は現在でもよくみかけるようだ。今回の仮説は、偶然にもコップをおくためのコースターに使用されているところを見つけたところから始まった。モデリングの観察を行い双方比較した際、非常に類似していたためこのような仮説に至った次第である。



第74図 条の状態と模式図
(人類誌集報2002 人類誌調査グループより転載)

中世掘立柱建物跡

24棟検出された。配置状況から、本遺跡の建物群は方位と道・溝に規制を受けている傾向が読み取れる。

また、主軸方向・切り合い状況から3時期にわたることが想定される。主軸を北北東にとる建物群8棟(掘立柱建物跡1～8)が最も古く、東西にとる建物群16棟(同9～24)がこれに次ぐ。後者は切り合いや隣接状況が顕著なことから、多少の時期差があったと思われる。但し、詳細な時期区分は判然としな

い。

同時期の遺構として道・溝状遺構があるが、建物跡内に共伴するその他の遺構は無い。

建物の種別、規模と形態であるが、庇付建物11棟、側柱建物13棟で梁行と桁行の構成は2間×3間が14棟(推定1棟を含む)で6割を占め、1間×3間が6棟、1間×2間が2棟である。(残り2棟は確定できない)

平面形態は長短の違いはあるが長方形である。柱穴の間隔は概ね等間隔で、柱筋も直線的に通っている。検出状況からは平地式、高床式の判別はできない。

梁行と桁行を1辺として計算した場合、推定床面積は最小9.61㎡(掘立柱建物跡5)、最大25.87㎡(掘立柱建物跡1)で平均19.56㎡である。15～20㎡が最も多く10棟、20～25㎡の5棟、10～15㎡が3棟、30㎡以上が3棟、10㎡未満、25～30㎡が各1棟である。梁間平均は339.45cm、桁行平均は544.85cmである。

棟部の柱間距離の平均は187.8cm、最大221.67cm(掘立柱建物跡1)、最短139.83cm(掘立柱建物跡16)である。

柱穴の掘り方は円形もしくは楕円形である。埋土はⅡ層黒色土である。断面は矩形状、底面は平坦、もしくは丸みを帯びる。棟部を構成する柱穴の深さは平均37.81cm、最深56.88cm(掘立柱建物跡7)、最も浅いもの5cm(掘立柱建物跡16)である。長径は平均29.53cm、最大68cm(掘立柱建物跡17)、最小17cm(掘立柱建物跡2・24)である。短径は平均24.94cm、最大44cm(掘立柱建物跡1・17)、最小は12cm(掘立柱建物跡24)である。

* 推定床面積の算出は、実測図・遺構配置図を参考に規模の確定できる22棟を対象にした。

* 梁行・桁行、柱間距離、柱穴のデータは詳細な実測図が紛失した掘立柱建物跡4・6・13・23を除く20棟を対象とした。

* 本遺跡は諏訪神社に隣接すること、掘立柱建物跡の柱穴の大きさや出土青磁などから、中世遺構に関しては当時の有力者が住んでいた可能性も指摘できる。(五味克夫氏)

遺物

土師器、青磁・白磁が出土している。土師器の器種は坏と皿が大多数を占めている。坏の器高は全体に低く、皿の平均高との差や、形態的にも口径と底径の差が小さい傾向にある。青磁は1点越州窯があるが、龍泉窯系の碗・皿が主流で時期は13・14世紀、15世紀のものも数点みられる。出土地点から、R・S-6・7区の庇付の掘立柱建物跡と重複する傾向がみられる。

中世溝状遺構

本遺跡においてはⅡ層上面、Ⅲ層上面において中世の溝状遺構が11条検出されている。南側から検出された3条が切り合っており時代差を予想できる。道幅は竪穴状遺構および掘立柱建物跡と切り合いながら、いくつかの掘立柱建物跡を囲むように大きくカーブを描く。溝状遺構3が溝状遺構2を切っており、溝状遺構2が古い。最大幅平均95.4cmと本遺跡検出の近世溝状遺構に比べると、やや狭いのが特徴である。断面はU字状を呈し、埋土はレンズ状に堆積している。底面及び壁面には水が流れたような痕跡（ラミネ）やその他の造作は観察できなかった。

両遺構とも本遺跡で設定したグリッドの南北線に対し45°にちかい角度で検出されているが、遺跡の北道側にある諏訪神社（南方神社）の参詣道もほぼ45°より角度で交差しているので、両溝とも平行な関係にある事が判明した。距離は、約328mで約3町歩（1町は約110m）ある。

近世溝状遺構

本遺跡ではⅡ層上面において近世のものと思われる溝状遺構8条、硬化面2条が検出されている。近世のものと思われる溝状遺構は、本遺跡におけるグリッドの南北線に対しほぼ45°の角度で検出された。最大幅平均161cmで、溝状遺構は中世の遺構に比べ比較的幅広である。T字状に交錯するもの、平行に並ぶもの等がある。断面の形状はほぼU字状を呈し、比較的浅い。硬化面は溝状遺構の延長線上にあるため同一と思われる。

延伸方向には諏訪神社（創建18世紀？、南方神社）がある。明治33年の絵図にも神社と結ぶ道が描写されており、近代にもこの道が利用されていたと思われる。また、道沿いから古木が検出され、科学分析の結果、櫨であることが判明した。（詳細は付編）

櫨の実には和蠟燭の原料となる。すでに17世紀には薩摩藩による専売が行われていた。18世紀になると、提灯のあかりとして需要が伸びていたことに着目し、温暖な南方の気候に生育が適した櫨の実をもとに和蠟燭を生産し、財政再建策の一環として大坂等に出荷していた。櫨蠟生産の精錬所は山川、桜島、大根占など県内各地にあった。本遺跡の所在地である金峰町から北に約10km、日置市吉利（現在の吉利小学校敷地内）にもあったが、18世紀初頭には精蠟所拡張のため、本遺跡から約4kmの同市吹上の伊作に移転しているようだ。

その為か、19世紀半ばには金峰町田布施地区が県内最大の生産地であった。

参考文献

- | | | |
|----------------|------|---------------------|
| 農業開発総合センター遺跡群Ⅰ | 2005 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 大坪遺跡 | 2005 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 九養岡・高篠・踊場遺跡 | 2003 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 財部城ヶ尾遺跡 | 2005 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 柳原遺跡 | 2005 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 榎崎B遺跡 | 1993 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 菩提遺跡 | 1998 | 隼人町教育委員会 |
| 留守氏館跡 | 2001 | 隼人町教育委員会 |
| 桑幡氏館跡 | 2003 | 隼人町教育委員会 |
| 持鉢松遺跡 | 2003 | 金峰町教育委員会 |
| 金峰町郷土史 | 1998 | 金峰町教育委員会 |
| 日吉町郷土史 | 1982 | 日吉町教育委員会 |
| 太宰府条坊跡Ⅴ | 2000 | 太宰府市教育委員会 |
| 貿易陶磁研究 No. 1～5 | 1998 | 日本貿易陶磁研究会 |
| 人類誌集報2002 | 2002 | 東京都立大学
人類誌調査グループ |

市 堀 遺 跡

第Ⅴ章 市堀遺跡

第1節 調査の概要

1 遺跡の立地及び調査の概要

(1) 遺跡の立地

金峰町大野字市堀に所在する遺跡の中で、農業試験場研究畑として整備される部分を調査した。標高約40mの西側に傾斜する尾根に立地する。北側は頭無迫田遺跡と接し、南側は谷を隔てて加治屋堀遺跡と接する。

(2) 調査の概要

調査は、確認調査が平成9年度、本調査が平成12年と平成15年の2回にわたって行われた。研究畑造成に起因する調査のため、造成される部分のみの調査であった。したがって、掘削が及ばない部分については本調査を実施後、一部下層確認調査を実施した。

本調査は、表土を重機で除去後、人力で掘り下げた。しかし、近・現代の開発・圃場整備等により包含層であるⅡ・Ⅲ層が削除されている部分も多かった。

残存していたⅡ層からは土師器が、Ⅲ層上部からは縄文時代晩期の土器が出土した。また、Ⅲ層下面では中世のものと考えられる掘立柱建物跡や竪穴状遺構、縄文時代晩期と考えられる柱列・掘立柱建物跡（1間×1間）が検出された。

掘削が及ぶ部分はⅣ層よりも上の部分であったのでⅣ層以下は確認調査を行った。

確認調査の結果、縄文時代早期に相当するⅣ層から礫、旧石器時代のⅦ層から黒曜石片が出土した。

縄文時代早期に関しては、Ⅲ層までが削平されていた部分から土器片が数点出土しているの、包含層が存在している可能性も考えられる。

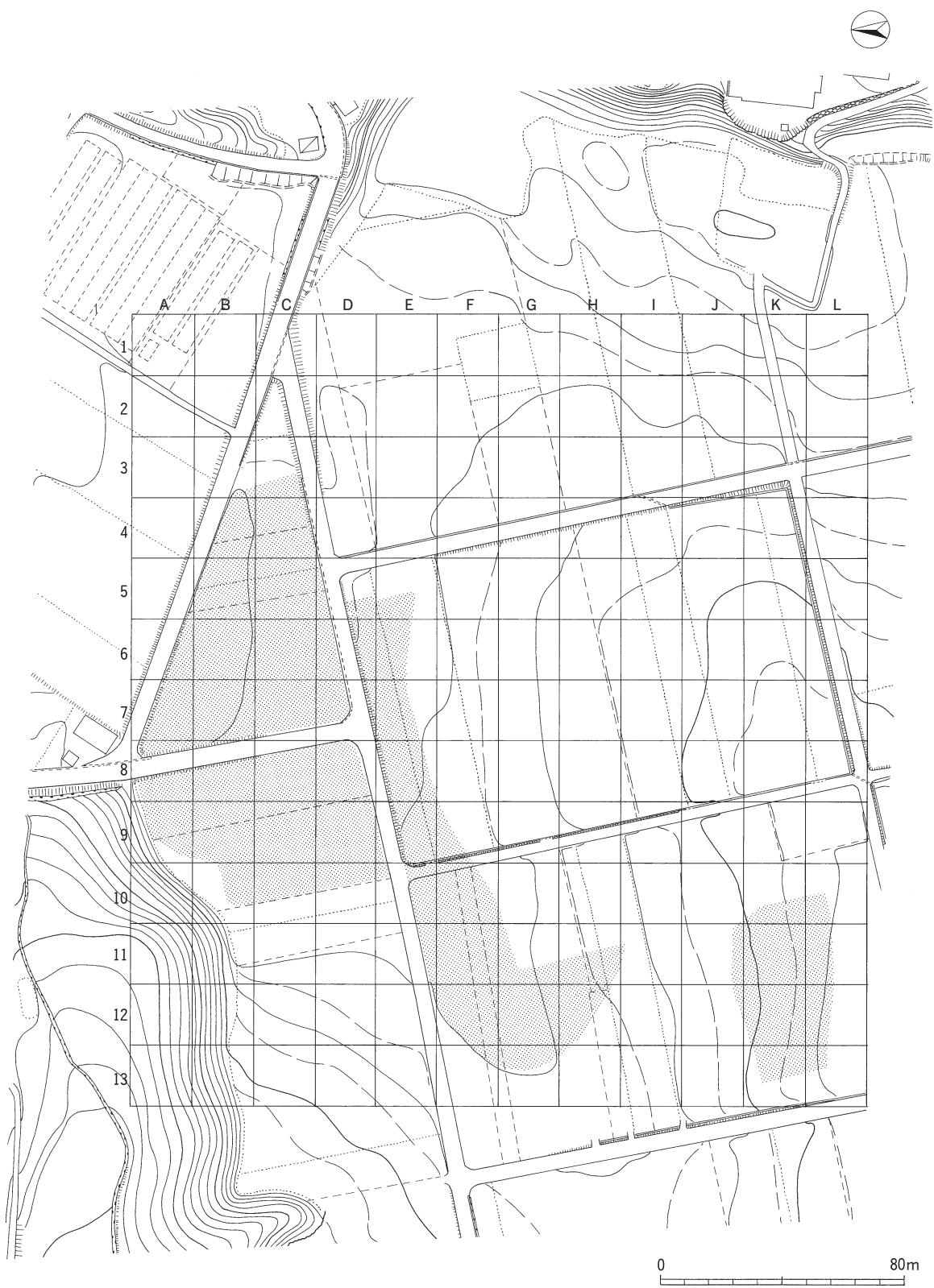
旧石器時代に関しては、黒曜石片は非常に小さく数も2点のみの出土であったので、包含層の可能性は低いが、周辺には旧石器時代の遺物が出土した遺跡もあるため、今後開発を行う際は注意が必要である。

2 遺跡の層序

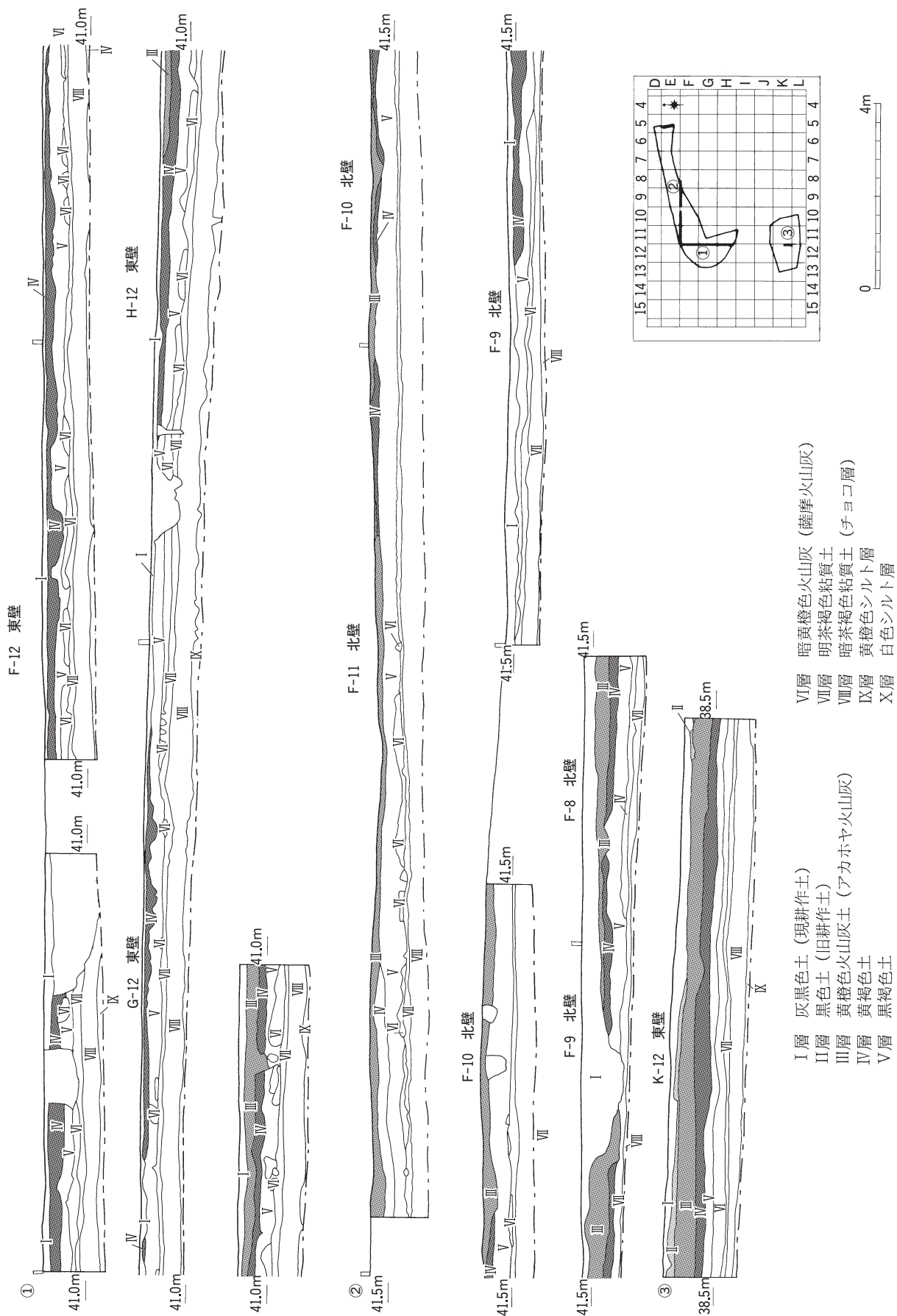
本遺跡の層序は、農業開発総合センター遺跡群全体の基準層序と基本的に変わらない。



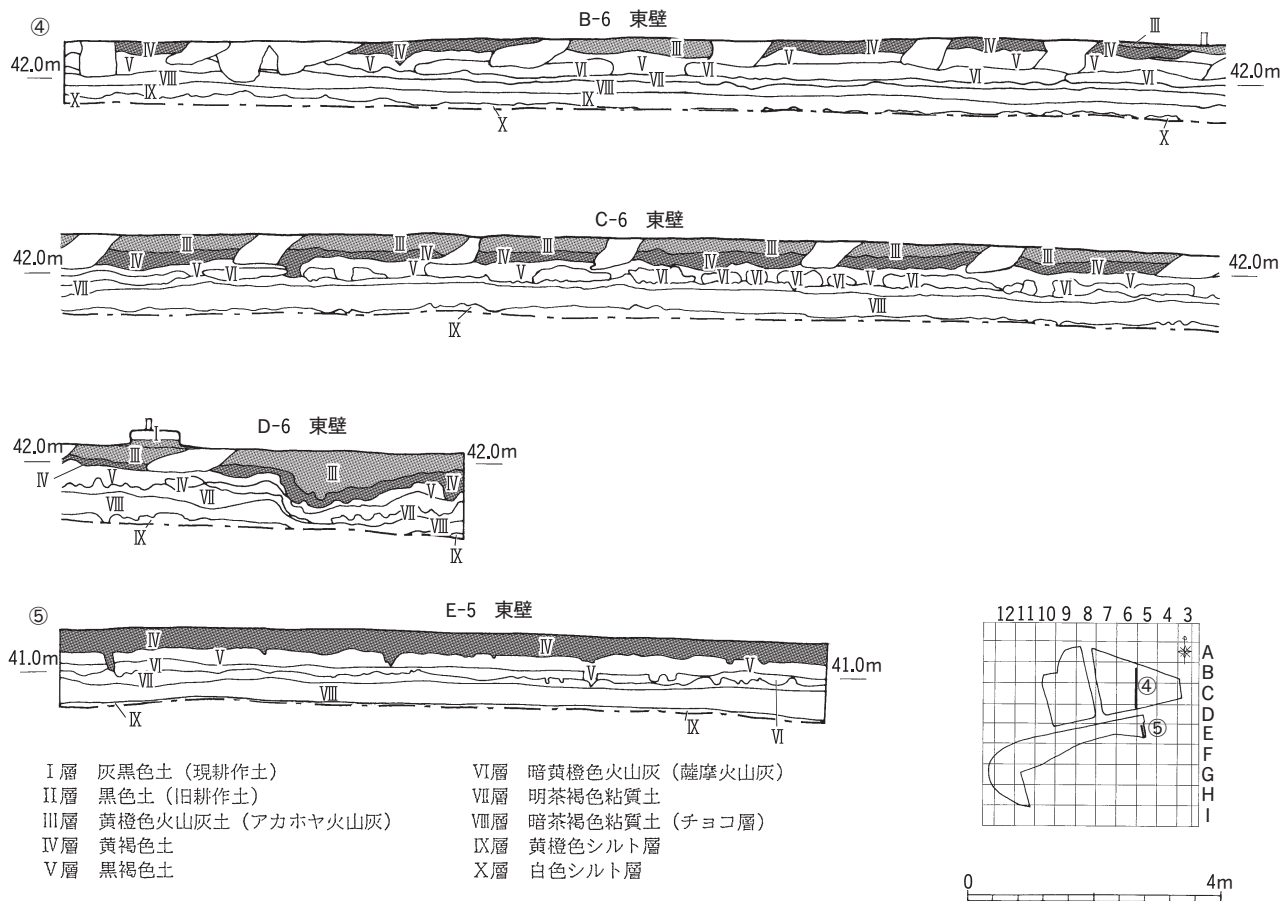
第1図 市堀遺跡位置図



第2図 グリッド図



第3図 土層断面図 (1)



第4図 土層断面図（2）

第2節 発掘調査の成果

1 旧石器時代・縄文時代早期の調査

旧石器時代の遺物は、黒曜石片が2点出土したが、図化できないくらいの小片であった。

縄文時代早期の調査は掘削がほとんど及ばないため、縄文時代早期に関しては、本調査を実施していない。対象部分で遺構は検出されなかった。

遺物については、土器・石器合わせて10点程度出土しただけだった。

(1) 土器 (第5図)

1は外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部である。口唇部にへう刻目を施し、外面には貝殻による連続刺突文を2条巡らし、その下から胴部にかけては横位の貝殻条痕が施されている。2は底部に近い胴部である。外面には横位の貝殻条痕が施されている。3は直径10cmの底部である。立ち上がりの部分に刻目を施しその上部は綾杉状の貝殻条痕で調整されている。

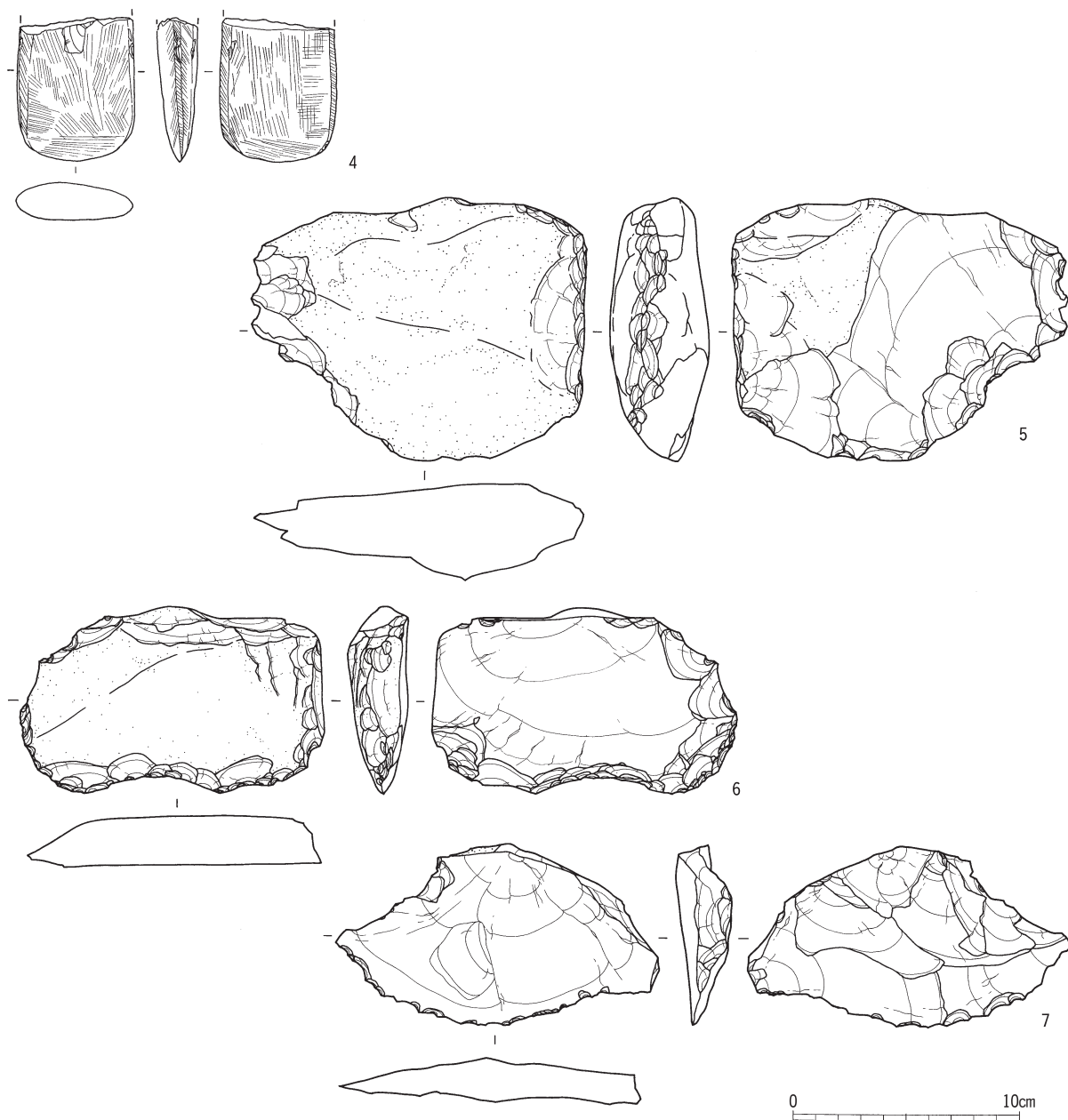
1と2は同一個体になる可能性もある。いずれの土器片も縄文時代早期中葉の土器である「石坂式土器」の範疇に含まれると考えられる。

(2) 石器 (第6図)

4は磨製石斧の刃部である。石斧の中央部で折れている。全体的に擦痕を有する。丁寧に研磨され、きれいな平坦面を有する。5は礫器の未製品であろうと思われる。刃部を作成しようとした痕跡はみられるが、最後まで作成したようにはみられない。6も礫器もしくはスクレイパーの未製品ではないかと思われる。刃部の作成は意図しているようであるが、完成はしていない。7は調整剥片であろうと思われる。石器周辺を剥離し、調整した後大きく剥離しているようである。4・5同様に礫器・スクレイパーか石斧のような道具を作成しようとしたものではないかと思われる。



第5図 縄文時代早期土器



第6図 縄文時代早期石器

第1表 縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
5	1	E-5	IV	明赤褐色	明褐色	○	○	○		良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	2	E-5	IV	明赤褐色	明褐色	○	○	○		良	貝殻条痕	ケズリ	
	3	L-10	IV	明赤褐色	暗褐色	○	○	○		良	貝殻条痕	ケズリ	

第2表 縄文時代早期石器観察表

図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
6	4	IV	石斧	トレンチ	頁岩	6	5	1.5	90	
	5	IV	礫器	E-5	頁岩	15	11.5	2	840	
	6	IV	礫器	トレンチ	頁岩	13.5	8	2	360	
	7	IV	調整剥片	E-7	頁岩	9.5	5.5	0.8	50	

2 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は、遺構が検出され、遺物も他の時期に比べると多く、本遺跡の中心をなす時期である。遺構に関しては、中世該当期の遺構も同一の面で検出したため判別しにくい面もあったが、埋土の違いにより区別した。

中世該当期の遺構の埋土は黒色の強い土であった。それに比べ、縄文時代晩期の埋土は、黒色が薄く、土層断面の観察から、表土の下には黒色が堆積し、その下はアカホヤ層の二次堆積土であったが、晩期とした遺構の埋土はアカホヤ二次堆積の上部の色に似ていたため晩期とした。

(1) 遺構 (第7図～10図)

掘立柱建物跡6棟・柱穴列9基を検出した。

①掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はすべて1間×1間の建物跡である。市堀遺跡だけでなく農業開発総合センター遺跡群内の各遺跡で多くみられる。大きさ・方向・柱間形状等に統一性はみられない。

また、立地している場所も統一性はみられない。台地の頂上部分から傾斜地までその範囲は広く点状にしている。

1・2号掘立柱建物跡は、軸の方向は異なるがほぼ長方形になる形態である。規模は1号の方が、全体的に50cmほど長い。長軸と短軸の差は共に約50cm程である。深さに差は見られない。

3号掘立柱建物跡はほぼ平行四辺形になる形態である。対角に位置する柱穴2と4は共に2本の柱が重なってみられる。建て直しか、補強材かははっきりしない。

4～6号掘立柱建物跡は、形状がいびつな形になるものである。柱穴は20cmぐらいの太さで、深さはそれぞれまちまちで、10cm～30cmを測る。

②柱穴列

柱穴列も農業開発総合センター遺跡群においてはよく見られる遺構である。3個以上の柱穴が直線上に並んでいるものを人為的な遺構としてとらえた。

市堀遺跡の柱穴は3個から6個までのものがみられる。個数が多くなると若干直線からずれるものも

みられるが、大きくずれることはない。

1～4・9号は3個が直線に並ぶ柱列である。長さは3m30cmから5mを超えるものまでさまざまで深さ・柱間の長さも一定しない。

5～8は柱穴が4個以上並ぶものである。長さは4m50cmから8mを超えるものまでである。こちらも深さ・柱間とも共通性はない。

(2) 遺物

縄文時代晩期の遺物は他の時期に比べると非常に多かった。本遺跡の中心をなす時期であろうと思われる。

しかし、出土した遺物は細片が多く図化しにくい物も多かった。

1 土器 (第13図～14図)

8～16は深鉢形土器の口縁部である。形状により3種類に分類した。

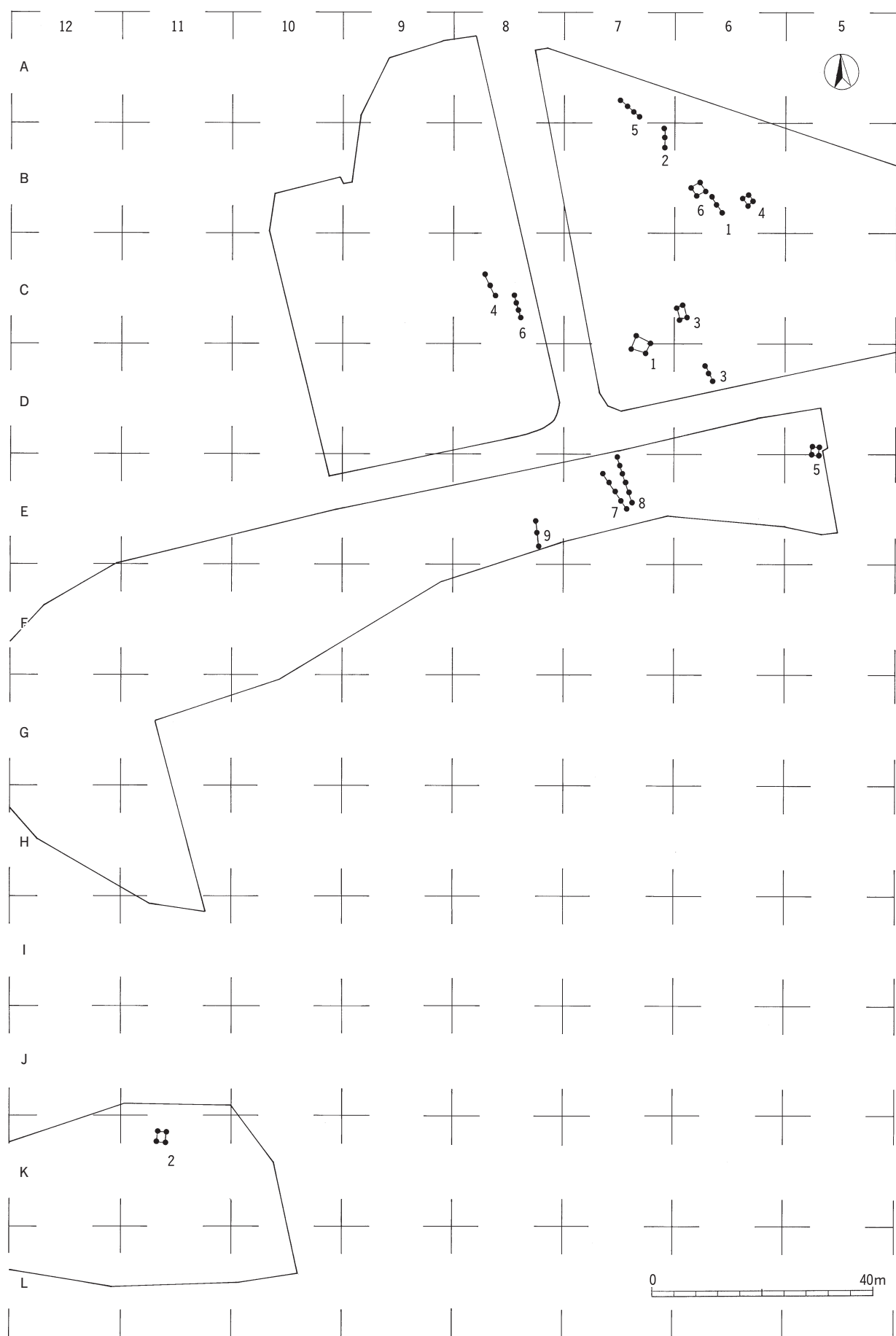
8～12は口縁部が直立し、文様帯が狭いのが特色である。8～11はやや肥厚する口縁部文様帯に沈線が3条施されている。(8と9は1個体になる可能性がある) 8～10は頸部との境が明瞭である。11は頸部との境ははっきりしない。12は凹線が明瞭でなく、条痕状に施されている。また、やや外反する形状など前述の土器と形状を異にするが、口縁部文様帯の面の幅が狭いことから前者の範疇とした。

13・14は口縁部の稜がはっきりしなくなり、やや外反する形状をなす。口縁部外部に文様は施されず、粗い調整が施されている。

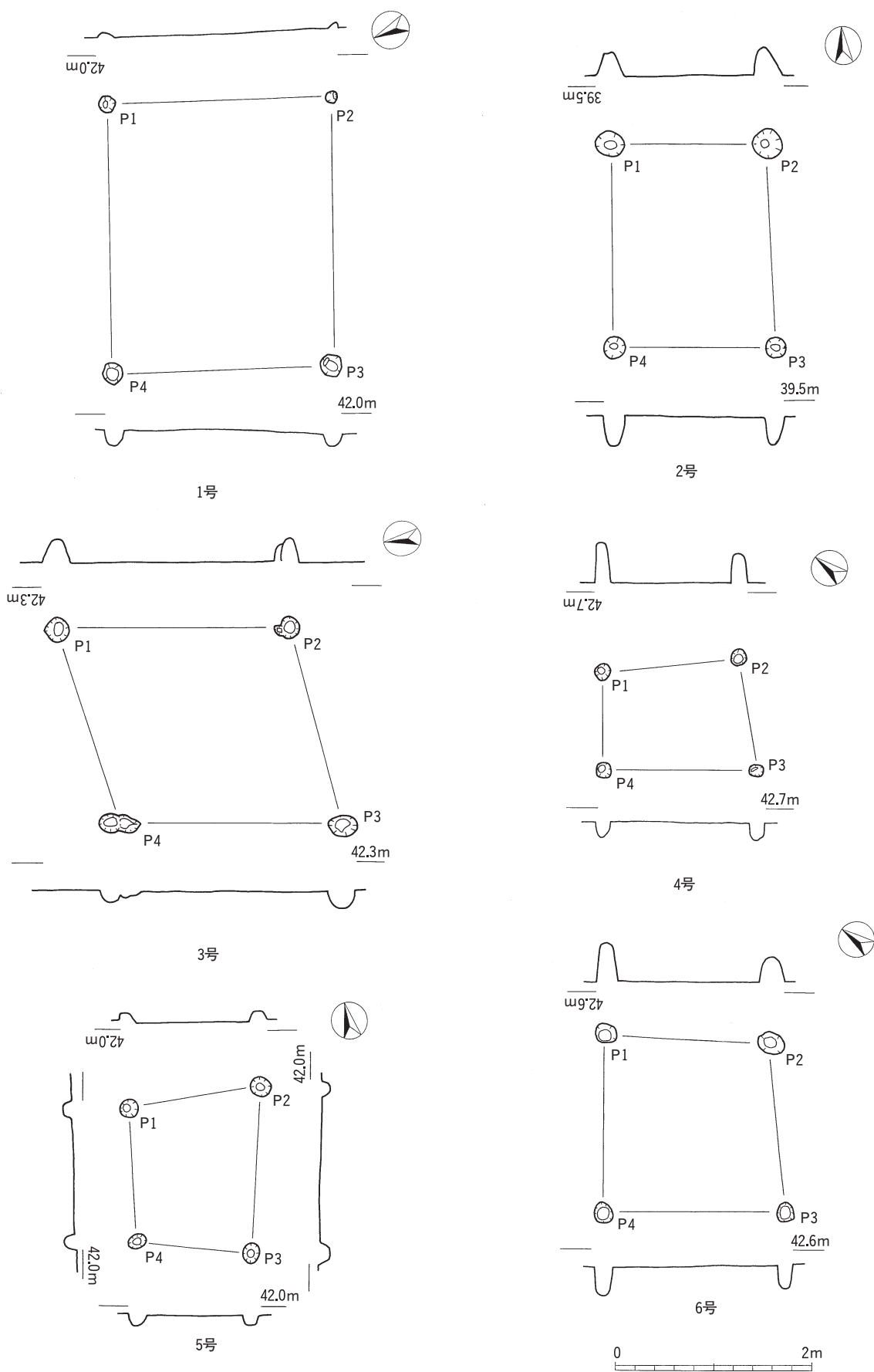
15・16は口縁部の文様帯が長くなり、外反する形状をなす。文様帯には沈線等の施文はされず、粗い条痕による調整が行われている。

17～20は深鉢形土器の胴部である。17・18は屈曲部がきつく張り出す形状をなし、19・20は屈曲部の張り出しは弱い。

21～28は浅鉢形土器の口縁部及びその付近である。21～23は口縁部と胴部に明確な稜線がみられ、頸部から口縁部にかけて大きく外反する形状である。口唇部は立ち上がる。内外面とも丁寧なヘラミガキである。



第7図 縄文時代晩期遺構配置図



第8図 縄文時代晩期掘立柱建物跡

第 3 表 掘立柱建物跡 柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

1 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	19	17	4
2	8	7	5
3	24	20	22
4	22	20	15

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	231
2～3	274
3～4	222
4～1	274

2 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	29	26	25
2	30	29	27
3	21	21	29
4	22	21	29

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	156
2～3	206
3～4	164
4～1	204

3 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	25	22	25
2	25	20	21
3	31	23	19
4	43	20	14

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	235
2～3	207
3～4	237
4～1	205

4 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	18	16	41
2	18	16	32
3	16	13	17
4	18	16	16

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	140
2～3	115
3～4	154
4～1	100

5 号

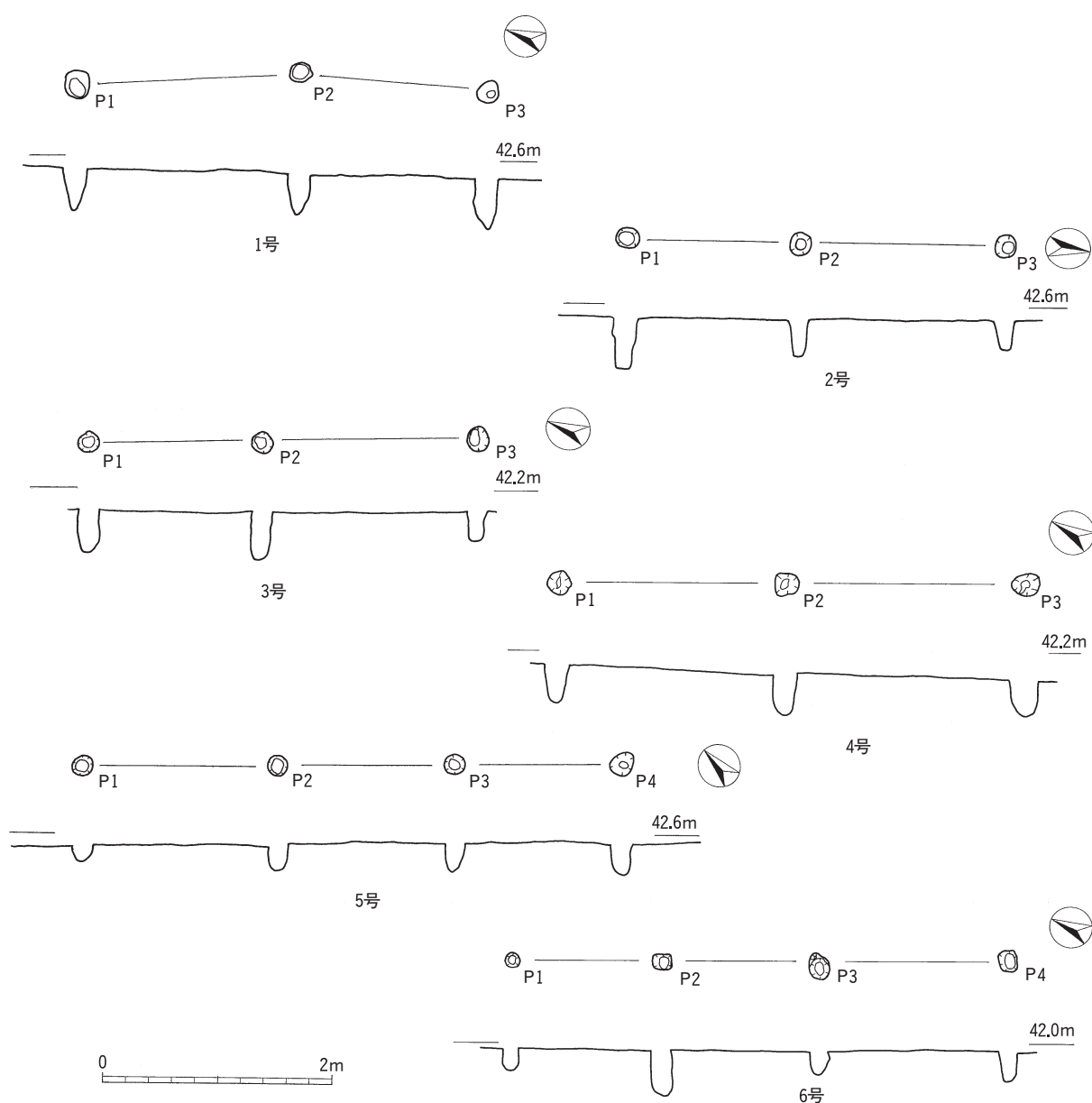
柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	16	11
2	21	18	11
3	22	16	11
4	19	14	13

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	136
2～3	180
3～4	117
4～1	130

6 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	24	20	39
2	28	22	25
3	20	18	24
4	21	18	29

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	170
2～3	175
3～4	185
4～1	185



第9図 縄文時代晩期柱穴列（1）

24・25は全体的な形状は同じである。口唇部の立ち上がりがなく、ミガキの技法もはっきりしない。

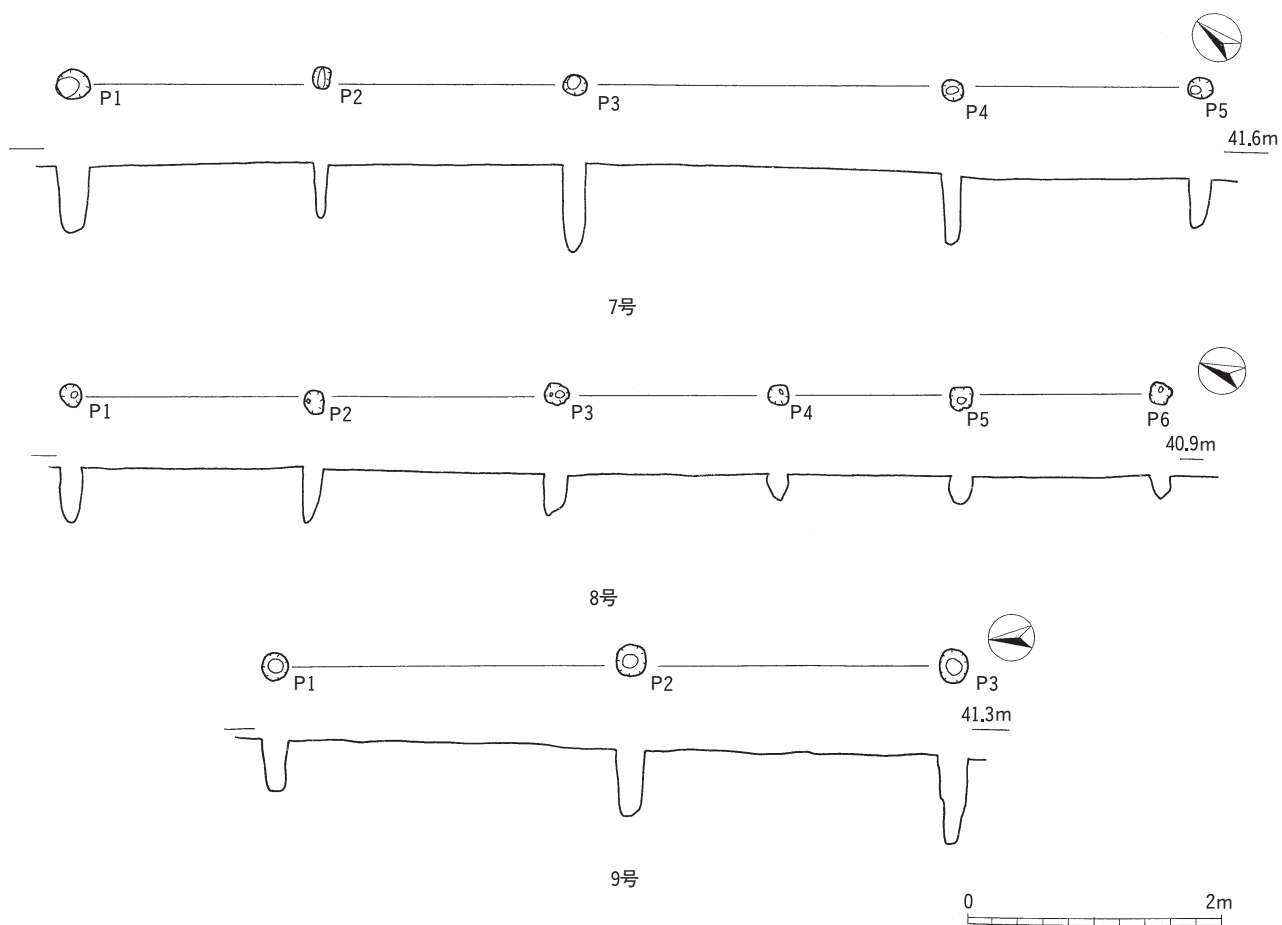
26の口縁部は屈曲せず立ち上がらず、頸部の張りもない。

27・28は口縁部直下の部分であろうと思われる。内外面とも丁寧なミガキがみられる。

29～34は底部である。形態から3種類に分類した。29・30は上げ底の形態をなす底部である。31・32は

平底の形態をなす。底部に特別な文様（組織痕）等はみられなかった。33・34はやや張り出す底部である。

石器の類は多くは出土していない。石鏃が1本出土した。形状は二等辺三角形で、挟りがやや深いのが特色である。他には、棒状の敲石が出土した。他には剥片類が出土したが図化できなかった。



第10図 縄文時代晩期柱穴列（2）

第4表 柱穴列1～3号 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

1号

柱穴 番号	柱穴痕(単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	26	21	37
2	21	17	36
3	20	19	44

柱穴 番号	柱間(単位: cm)
1～2	194
2～3	168
1～3	362

2号

柱穴 番号	柱穴痕(単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	17	45
2	20	18	32
3	20	18	26

柱穴 番号	柱間(単位: cm)
1～2	154
2～3	179
1～3	333

3号

柱穴 番号	柱穴痕(単位: cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	18	38
2	20	18	43
3	24	18	26

柱穴 番号	柱間(単位: cm)
1～2	151
2～3	186
1～3	336

第 5 表 柱穴列 4 ～ 9 号 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

4 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	20	34
2	21	19	35
3	24	18	31

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	197
2～3	210
1～3	407

5 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	16	15
2	19	18	24
3	19	16	25
4	22	18	26

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	172
2～3	156
3～4	147
1～4	474

6 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	14	12	20
2	19	14	40
3	24	15	21
4	19	15	26

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	133
2～3	136
3～4	167
1～4	434

7 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	27	23	51
2	18	14	41
3	18	16	71
4	18	17	55
5	21	16	39

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	197
2～3	200
3～4	296
4～5	194
1～5	887

8 号

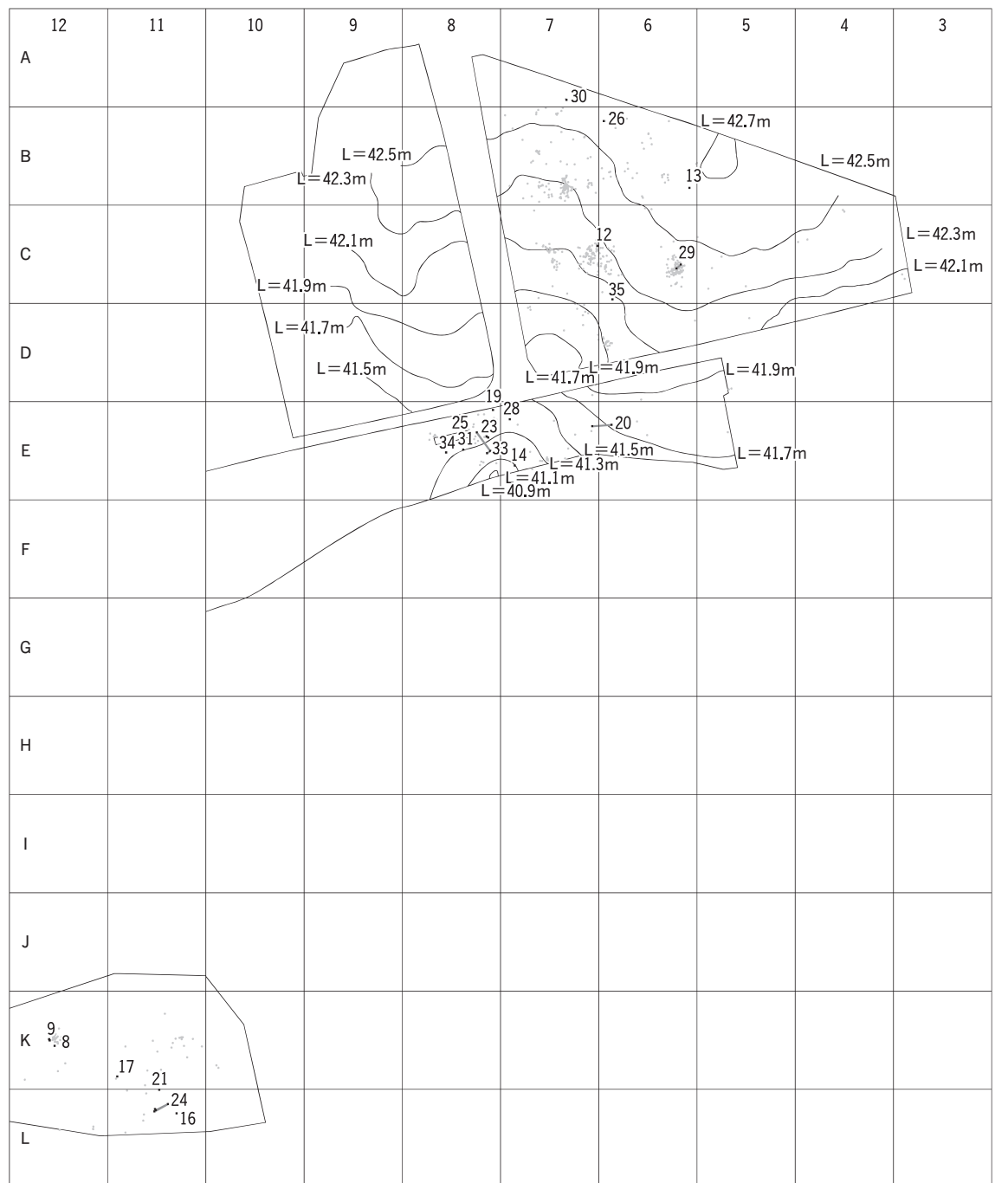
柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	19	16	41
2	19	16	43
3	20	16	31
4	17	15	21
5	21	16	22
6	18	16	18

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	187
2～3	193
3～4	171
4～5	147
5～6	157
1～6	854

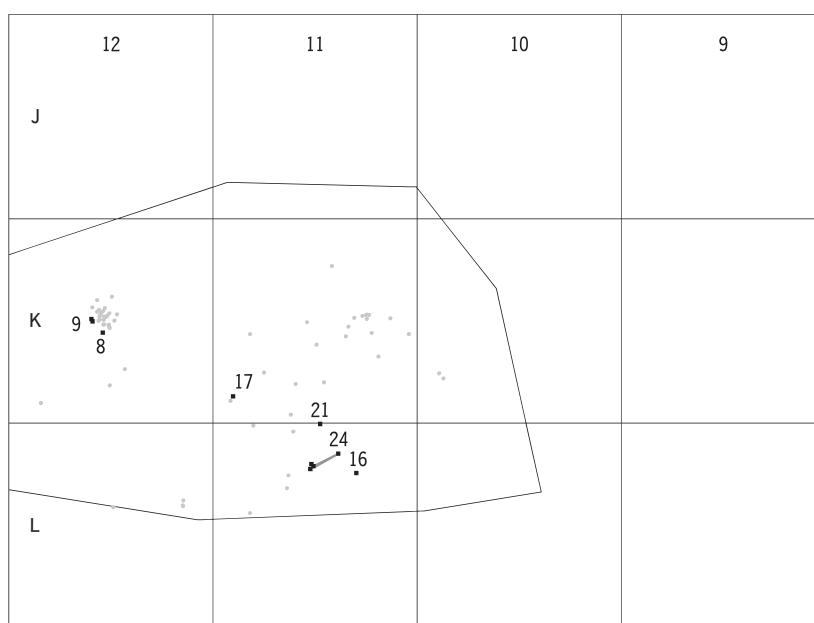
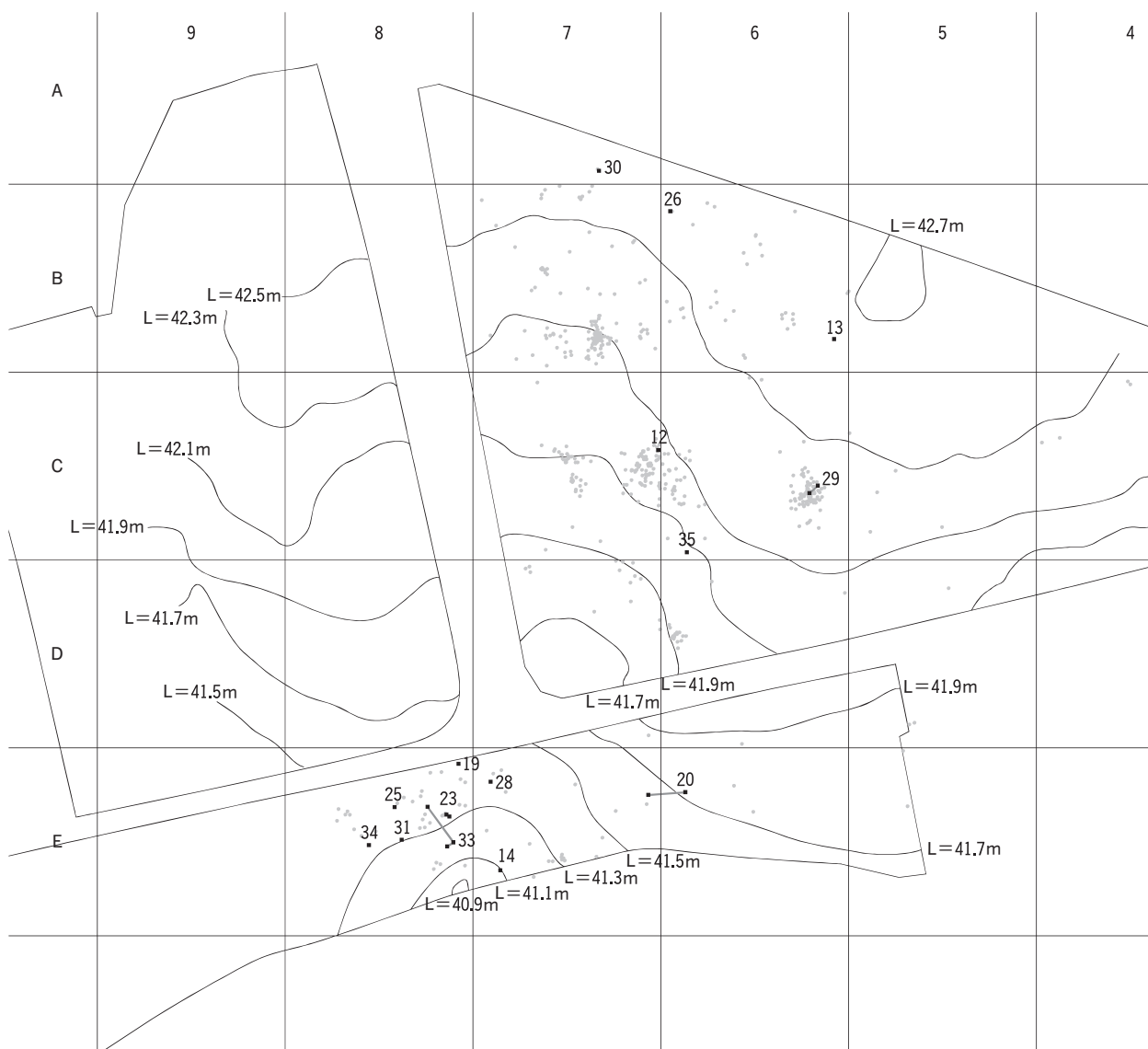
9 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	21	20	42
2	27	23	53
3	27	23	70

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	279
2～3	255
3～4	534

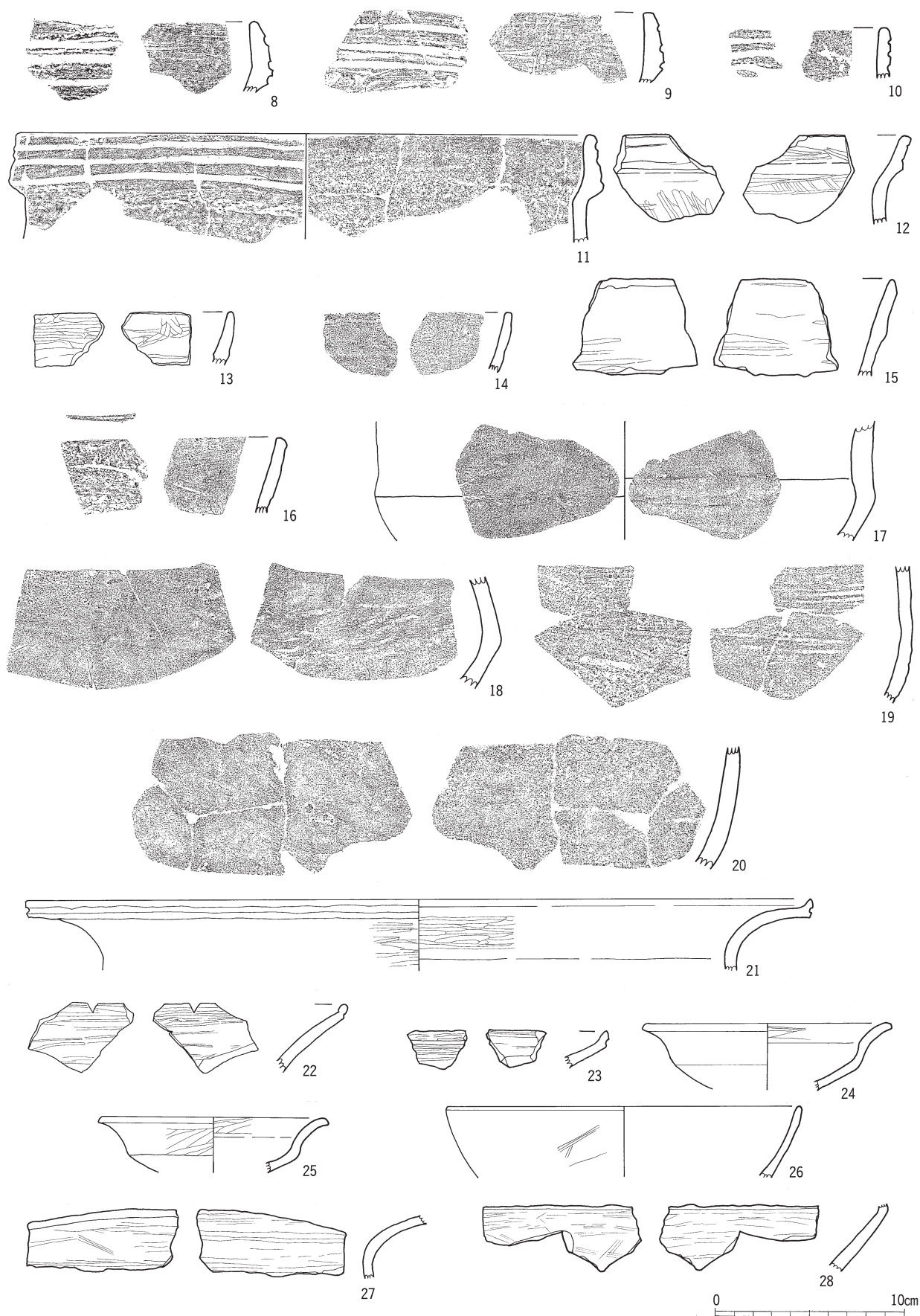


第11図 III層遺物出土状況図

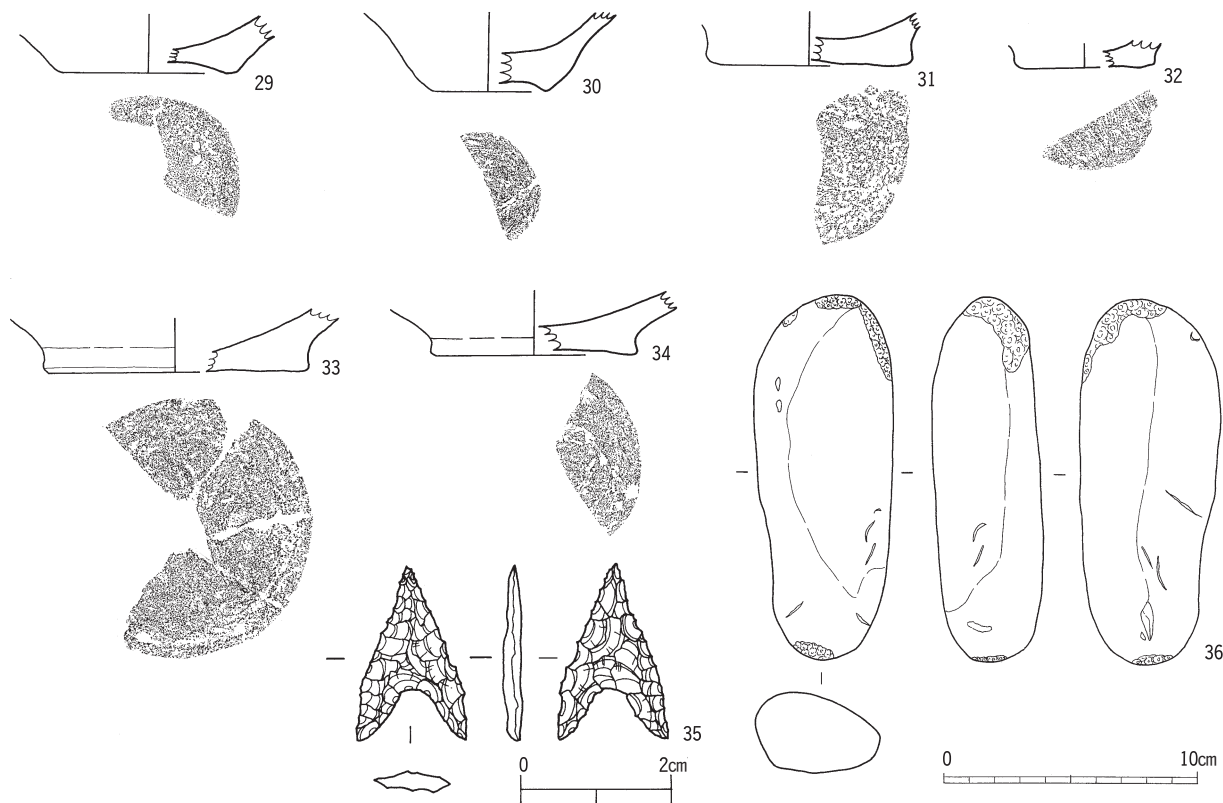


第12図 III層遺物出土状況拡大図

0 40m



第13図 縄文時代晩期土器（1）



第14図 縄文時代土器（2）・石器

第6表 縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面		内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他					
13	8	K-12	III	黄褐色	赤褐色	○	○			良	ケズリ	凹線	ケズリ	
	9	K-12	III	黄褐色	赤褐色	○	○			良	ケズリ	凹線	ケズリ	
	10	C-6	III	黄褐色	暗赤褐色		○			良	ミガキ	凹線	ケズリ	
	11	E-8	III	黒色	暗赤灰色		○			良	ケズリ	凹線	ケズリ	
	12	C-7	III	黒色	黒色		○			良	ミガキ		ミガキ	
	13	B-6	III	暗褐色	暗褐色					良	ミガキ	条痕	ミガキ	
	14	E-7	III	横橙色	暗横橙色		○	○		良	ケズリ		ケズリ	
	15	C-5	III	黒色	暗赤褐色					良	ケズリ		ケズリ	
	16	L-11	III	黒色	黒色					良	ミガキ	凹線	ミガキ	
	17	K-11	III	黒色	黒色					良	ミガキ	凹線	ミガキ	
	18	E-7	III	灰白色	灰白色					良	ケズリ		ケズリ	
	19	E-8	III	灰白色	灰白色					良	ケズリ		ケズリ	
	20	E-6・7	III	赤橙色	赤橙色					良	ケズリ	凹線	ミガキ	
	21	K-11	III	暗赤褐色	明黄白色					良	ケズリ		ミガキ	
	22	E-8	III	暗赤褐色	暗赤褐色					良	ミガキ		ケズリ	
	23	E-8	III	暗黄褐色	黒褐色					良	ケズリ		ケズリ	
	24	L-11	III	黄褐色	黄褐色		○	○		良	ケズリ		ケズリ	
	25	E-8	III	案黄褐色	案黄褐色		○			良	ケズリ		ケズリ	
	26	B-6	III	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○			良	ケズリ		ケズリ	
	27	E-7	III	暗黄白色	黒色					良	ミガキ		ミガキ	
	28	E-7	III	黒色	黒色					良	ミガキ		ミガキ	
14	29	C-6	III	黒色	暗黄白色		○			良	ケズリ		ケズリ	
	30	A-7	III	黒色	暗黄褐色		○			良	ケズリ		ケズリ	
	31	E-8	III	暗黄白色	赤褐色		○			良	ケズリ		ケズリ	
	32	E-8	III	赤褐色	赤褐色		○			良	ケズリ		ケズリ	
	33	E-8	III	暗黄白色	赤褐色		○	○		良	ケズリ		ケズリ	
	34	E-8	III	赤褐色	赤褐色		○			良	ケズリ		ケズリ	

第7表 縄文時代晩期石器観察表

図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
14	35	III	石鏃	C-6	頁岩	2.5	1.2	0.1	2	
	36	III	敲石	E-8	頁岩	14	5.5	4	560	

3 中・近世の調査

中・近世の包含層であるⅡ層は遺跡のほとんどの場所で削平を受けていたため、遺物の出土数は少なかった。ただし、表土から現代の物と一緒に該当期の土器片がみられた。開墾などにより表土に含まれた物と思われる。

(1) 遺構

中世と思われる遺構は、掘立柱建物跡8棟及び竪穴状遺構1基を検出した。

1 掘立柱建物跡(第15図～21図)

庇のある建物4棟とない建物4棟とに分類できた。(3号は頭無迫田遺跡に立地)

庇を持つ建物は、台地の北部分にみられる。3面庇になる建物が3棟みられる。2号は現道下に庇の一部が存在する可能性がある。

これら3棟の建物部分は2間×3間の掘立柱建物跡である。(すべての柱穴が存在しない建物もあり、検出状況からは一概に言えないが、形態をみると2間×3間になると思われる)。2号と3号は規模もほぼ同じで、東西方向が長く南北方向が短い形状も同じである。2間×3間の建物に南側をあげ、3方向を庇が取り囲んでいる。ただし、2号は建物西側の柱穴が1個検出されず、3号の方は庇部分の柱穴が検出されない部分があった。2号の東隣には南北方向が長く東西方向が短い、同規模の建物である1号が存在する。

1号は南北方向の真ん中の柱が検出されていない。建築当時から無かったのか、柱穴が浅く削平を受けたのかははっきりしない。

この3棟は非常に近い位置に存在する。特に1・2号は隣接し東側に東西に長い建物、西側に南北に長い建物が存在する。

庇を持つ建物である4号は、これらの建物群から少し離れた位置に存在する。建物の規模はやや小さく2間×2間である(南北方向の柱穴が存在しないため、2間×1間に見える)。庇の方も3面ではなく東・南側の2面であった。ただ、削平等により浅い柱穴は無くなっている可能性もあるので同様に2間×3間になる。庇もあと1面存在する可能性もあ

る。しかし、庇の方角はあわない。4号の西隣に5号は存在する。建物規模は2間×3間である。2号同様西側の柱穴は検出されていない。

6号は1号と5号との間で検出した。形状は4号の建物と同様である。この建物周辺には、対になりそうな建物はみられない。他の建物とは趣を異にする。

7・8号は現道を挟んで反対側に存在する。7号は東西方向の真ん中の柱穴が2個検出できなかった。故に、形態としては、2間×1間の形状である。柱穴が一部検出されない建物は農業開発総合センター遺跡群ではよく見られるので、7号は規模から2間×2間になると思われる。8号は1間×1間の掘立柱建物跡である。縄文時代晩期の建物跡と形態は同じであるが、埋土の色の違いから中世と判断した。

2 竪穴状遺構(第22図)

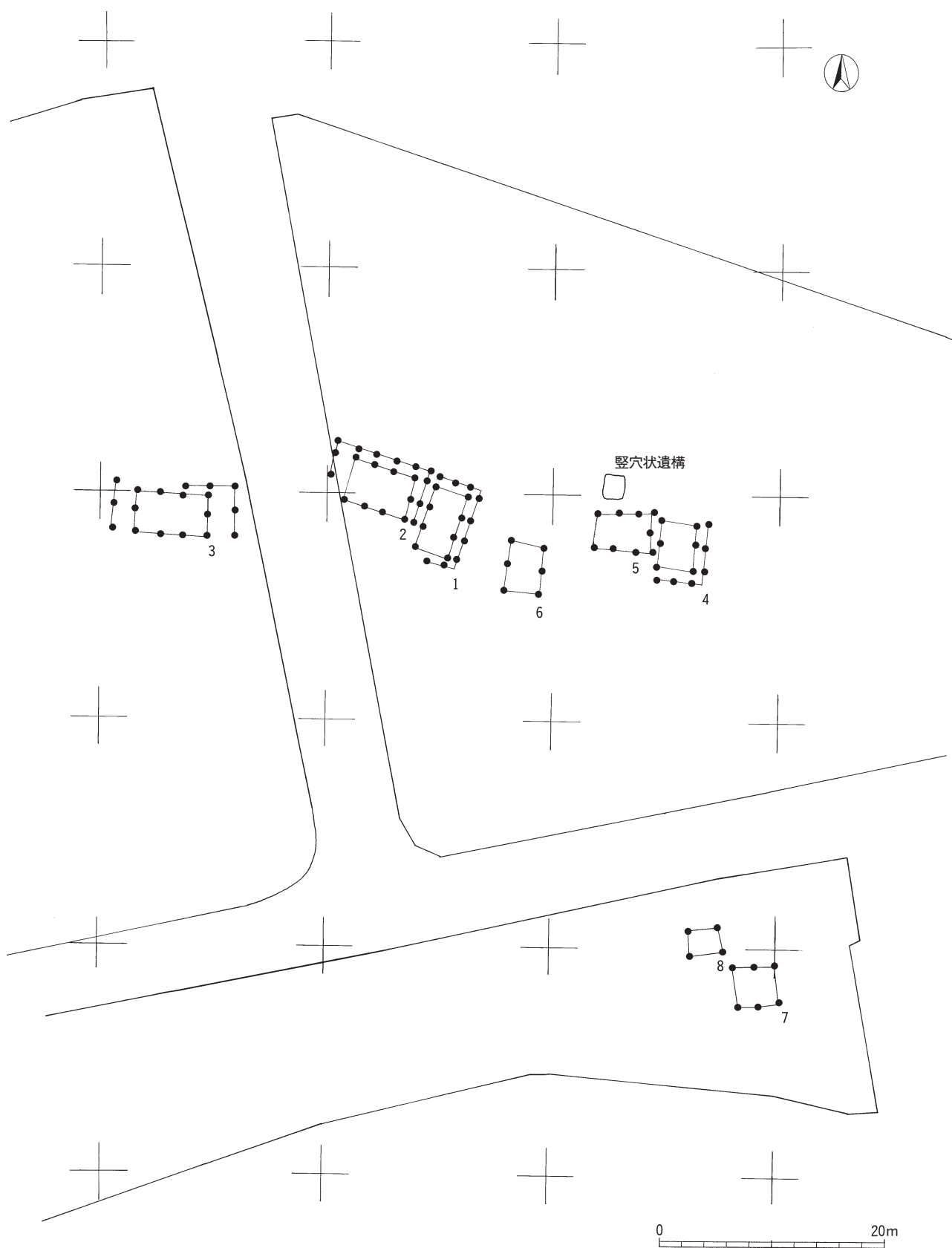
5号掘立柱建物跡のすぐ近くで検出された。2m×2mのほぼ正方形の形態である。立ち上がりも20cm程しか無く、遺物の出土もみられなかった。埋土が、掘立柱建物跡と同じ黒色土であったので、同じ中世の時期と考えられる。

(2) 遺物(第23図)

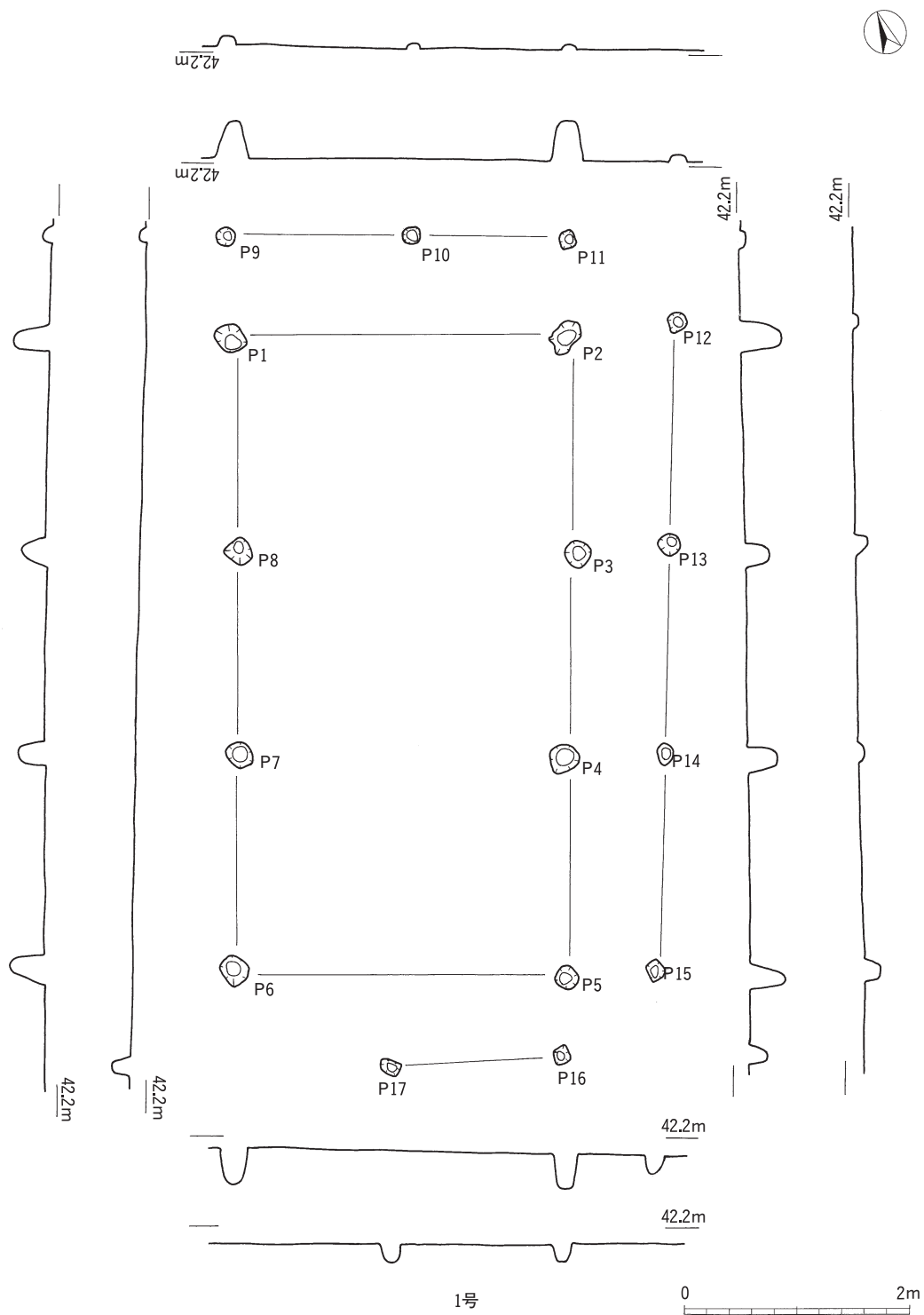
包含層の大半が削平されていたため遺物の出土は多くなかった。わずかに残った包含層から土師器が少量出土したが、細片がほとんどであった。

37～39は土師器の口縁部である。古代の土師器と異なり、やや硬質である。40は皿の底部である。煤痕などはみられなかった。41・42は甕の口縁部である。

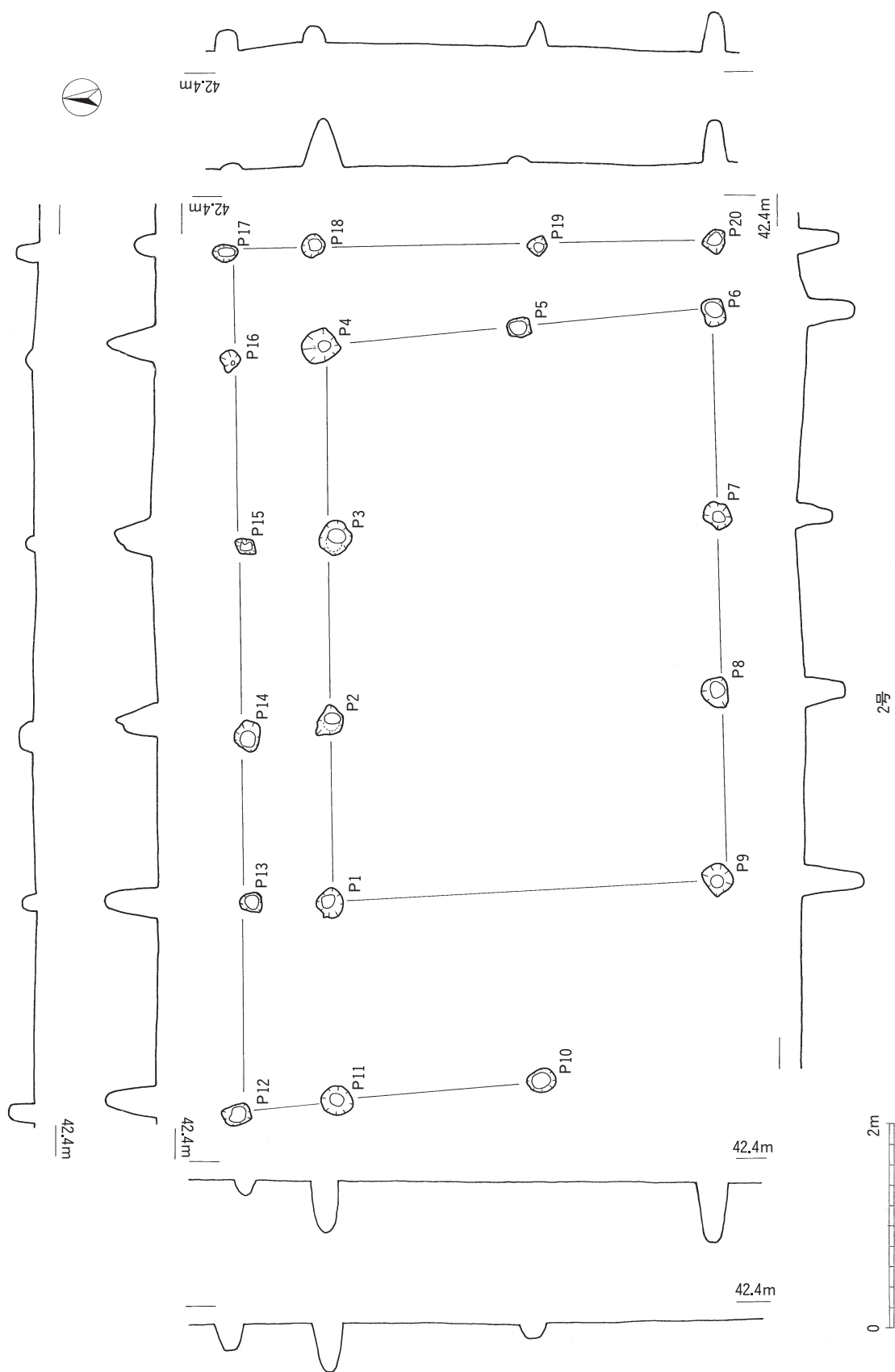
この時期の遺物は、表土中の遺物に同様の土器片もみられる。耕作は包含層に及んでいたことがわかる。



第15図 中世遺構配置図

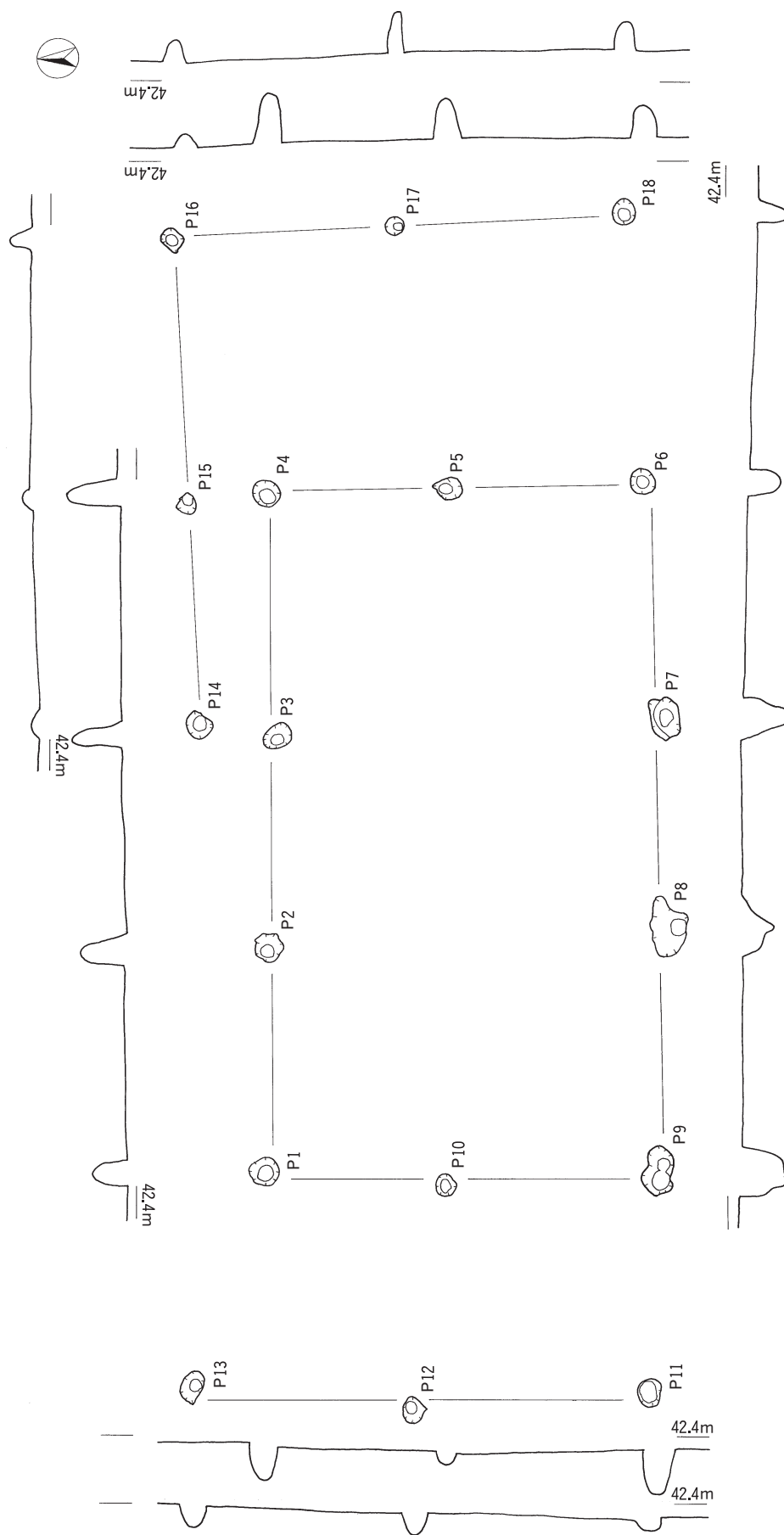


第16図 中世掘立柱建物跡（1）



第17图 中世掘立柱建物跡 (2)

2号



3号

第18图 中世掘立柱建物跡 (3)

第 8 表 1 ～ 3 号掘立柱建物跡 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

1 号

	柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
		長径	短径	深さ(最深)
棟 部	1	30	24	33
	2	32	19	36
	3	24	22	24
	4	27	24	29
	5	21	19	34
	6	28	21	32
	7	26	22	24
	8	27	20	22
底部分	9	17	16	9
	10	17	14	7
	11	17	14	5
	12	18	14	6
	13	20	18	12
	14	18	15	6
	15	20	16	14
	16	20	14	16
	17	17	13	16

	方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
棟 部	桁行 方向	2～3	191
		3～4	182
		4～5	195
		2～5	568
		1～8	188
		8～7	183
		7～6	190
		6～1	561
	梁間 方向	1～2	297
底部分		5～6	295
	桁行 方向	12～13	197
		13～14	184
		14～15	193
	梁間 方向	12～15	574
		9～10	164
		10～11	140
		9～11	304
		16～17	152

2 号

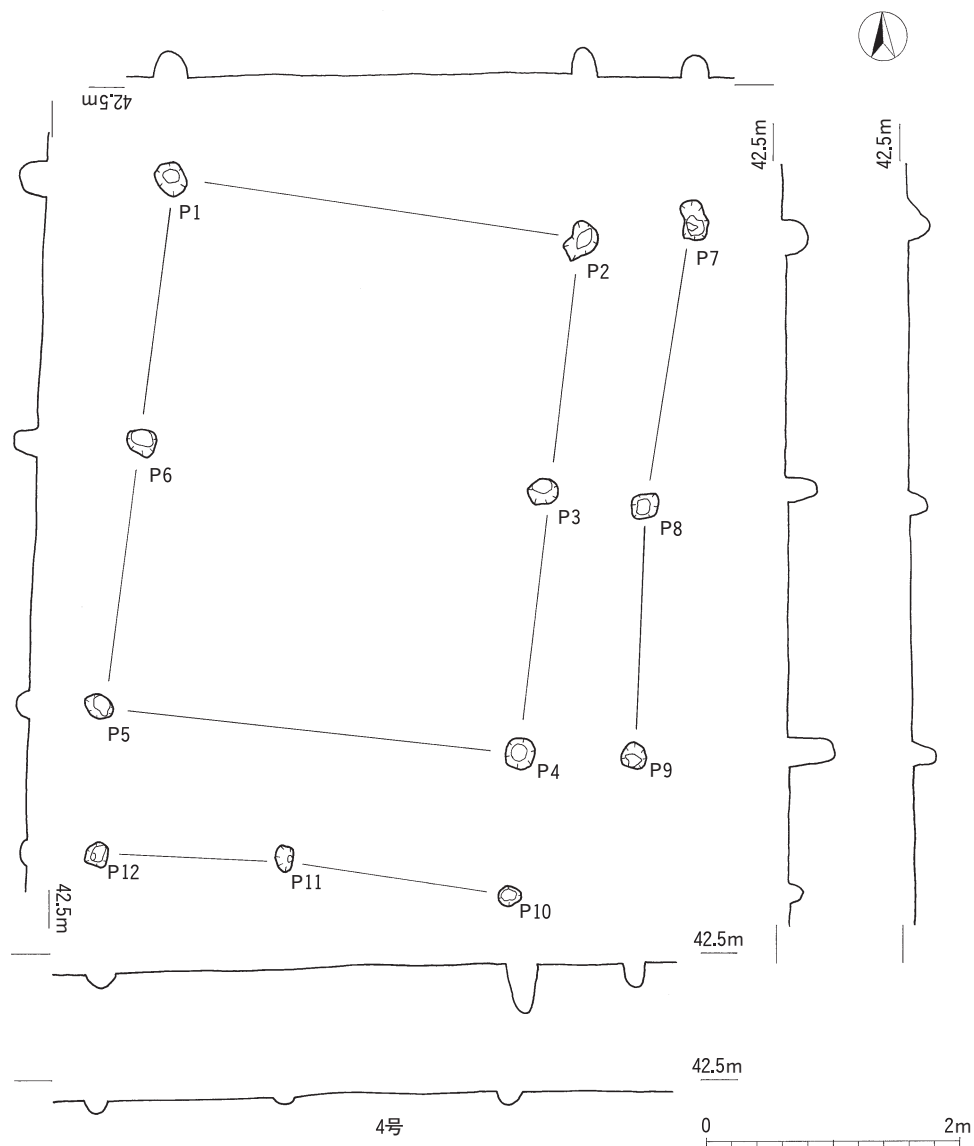
	柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
		長径	短径	深さ(最深)
棟 部	1	30	25	52
	2	31	22	40
	3	35	30	33
	4	38	31	45
	5	23	19	7
	6	28	21	44
	7	28	23	35
	8	31	24	40
	9	32	26	58
底部分	10	25	13	14
	11	30	28	48
	12	28	20	25
	13	21	18	15
	14	32	29	15
	15	23	18	13
	16	21	18	8
	17	24	17	23
	18	22	20	19
	19	21	15	24
	20	26	18	37

	方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
棟 部	桁行 方向	1～2	180
		2～3	178
		3～4	186
		1～4	543
		6～7	204
		7～8	170
		8～9	188
		6～9	560
	梁間 方向	4～5	190
		5～6	194
底部分		4～6	374
	桁行 方向	9～1	380
		12～13	207
		13～14	150
		14～15	187
		15～16	180
		16～17	128
		12～17	852
	梁間 方向	17～18	85
		18～19	220
		19～20	170
		17～20	475
		10～11	200
		11～12	100
		10～12	300

3 号

	柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
		長径	短径	深さ(最深)
棟 部	1	28	26	33
	2	28	26	42
	3	28	22	49
	4	26	24	48
	5	29	22	48
	6	35	23	30
	7	37	27	42
	8	56	32	30
	9	45	23	40
	10	20	18	1
底部分	11	26	24	8
	12	25	23	20
	13	32	21	22
	14	26	22	6
	15	19	18	10
	16	24	18	21
	17	18	17	39
	18	23	23	26

	方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
棟 部	桁行 方向	1～2	208
		2～3	195
		3～4	226
		1～4	629
		6～7	218
		7～8	200
		8～9	233
		6～9	651
	梁間 方向	4～5	167
		5～6	185
		4～6	352
		9～10	200
底部分	桁行 方向	10～1	168
		9～1	368
		13～14	614
		14～15	207
		15～16	243
		13～16	1062
	梁間 方向	16～17	211
		17～18	212
		16～18	423
		11～12	222

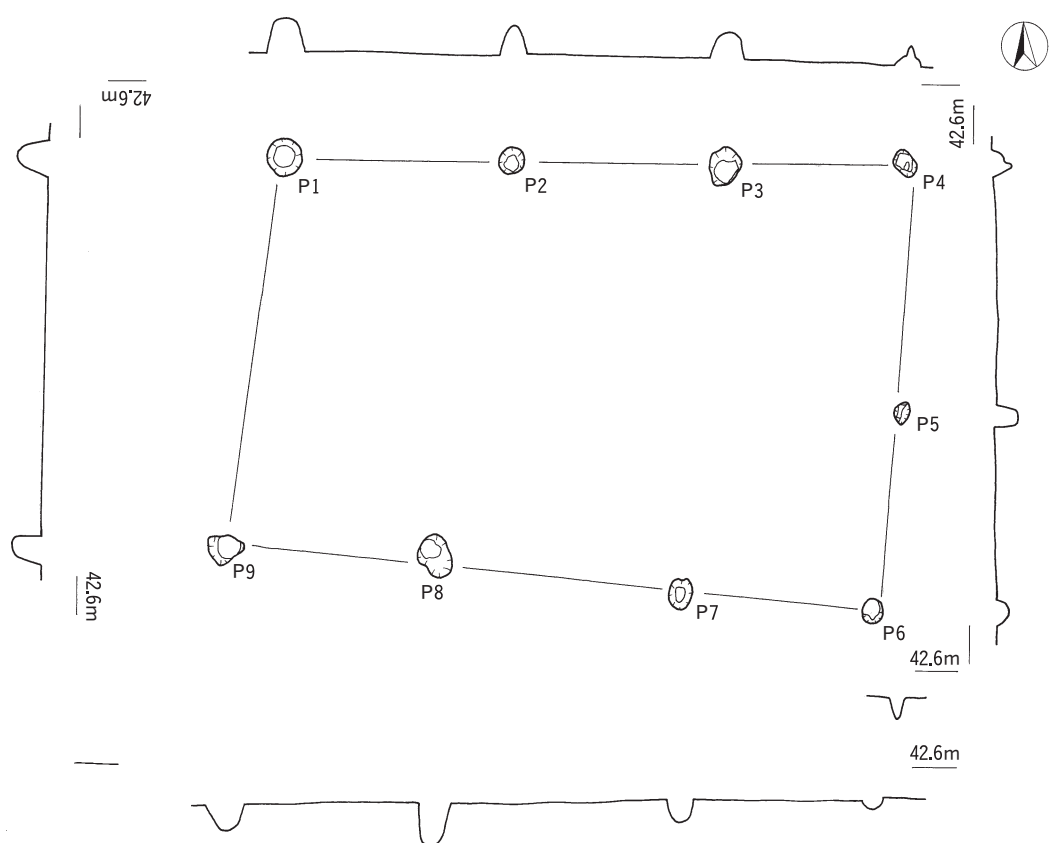


第19図 中世掘立柱建物跡（4）

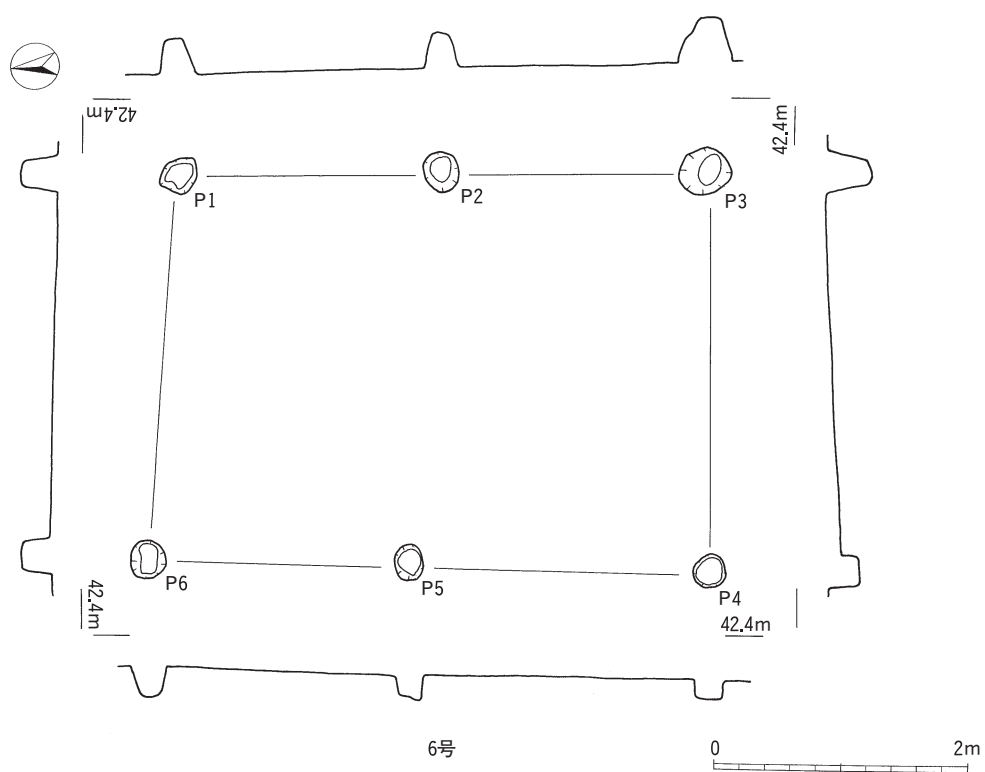
第9表 4号掘立柱建物跡 柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

	柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
		長径	短径	深さ(最深)
棟 部	1	28	22	21
	2	32	20	22
	3	24	21	24
	4	25	23	38
	5	26	17	11
	6	26	19	20
庇部分	7	32	21	21
	8	26	18	15
	9	12	10	20
	10	19	16	12
	11	21	15	5
	12	20	18	5

	方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
棟 部	桁行 方向	2～3	198
		3～4	210
		2～4	408
		5～6	214
		6～1	205
		5～1	219
庇部分	梁間 方向	1～2	330
		4～5	333
	桁行 方向	7～8	223
		8～9	197
		7～9	417
		10～11	175
		11～12	153
		10～12	327

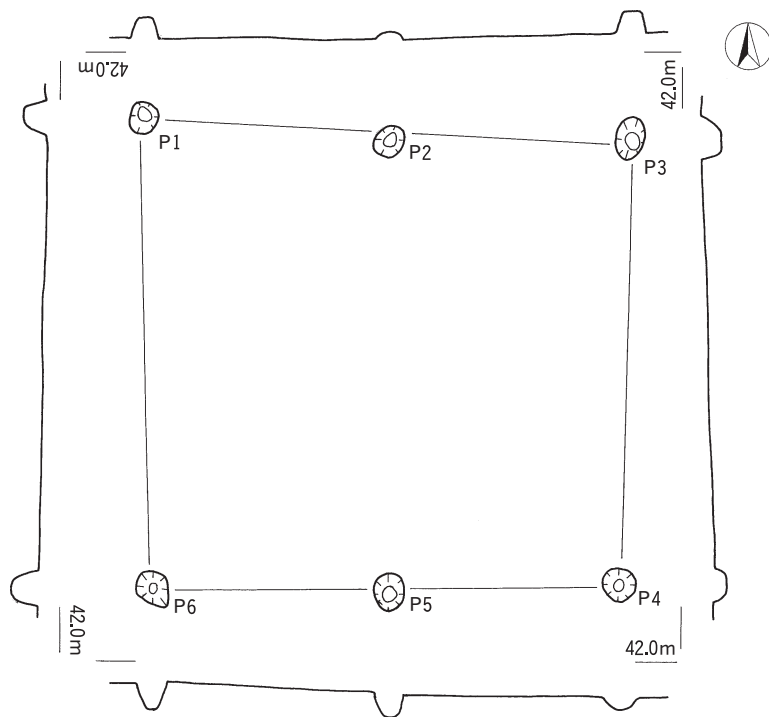


5号

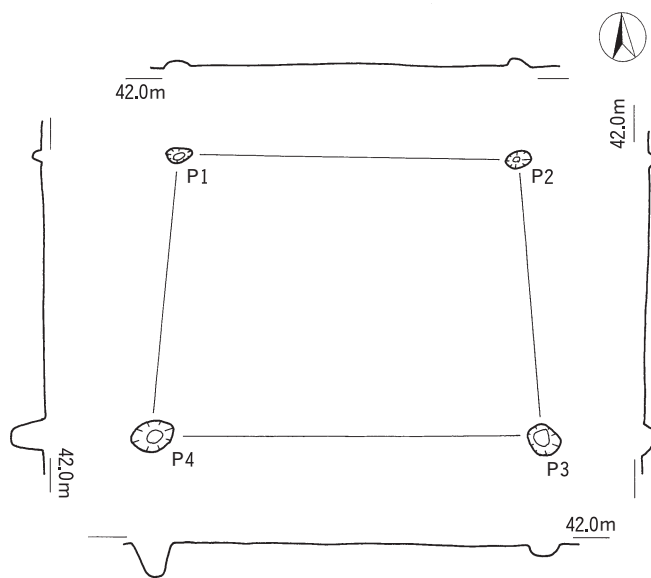


6号

第20図 中世掘立柱建物跡（5）



7号



8号



第21図 中世掘立柱建物跡（6）

第10表 5～8号掘立柱建物跡 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表

5号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	30	30	26
2	22	21	23
3	30	28	21
4	23	16	16
5	18	14	19
6	19	18	9
7	24	20	19
8	34	25	33
9	30	25	21

方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
桁行 方向	1～2	180
	2～3	170
	3～4	144
	1～4	494
	6～7	153
	7～8	199
	8～9	165
	6～9	517
梁間 方向	4～5	197
	5～6	157
	4～6	354
	9～1	309

6号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	33	25	28
2	32	27	26
3	42	36	35
4	28	25	15
5	28	23	20
6	31	29	25

方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
桁行 方向	1～2	207
	2～3	210
	1～3	417
	4～5	237
	5～6	204
	4～6	441
梁間 方向	3～4	311
	6～1	305

7号

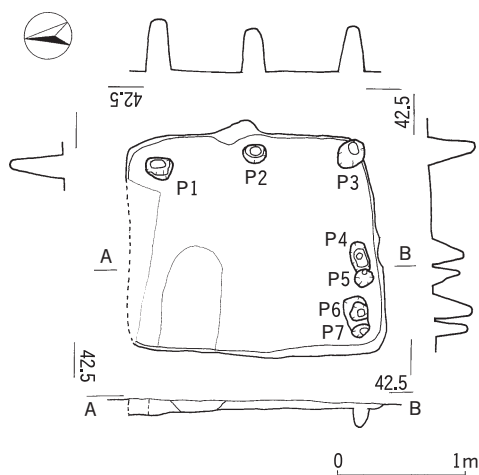
柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	26	22	19
2	26	23	7
3	34	23	18
4	26	26	10
5	30	23	19
6	32	25	21

方向	柱穴 番号	柱間(単位：cm)
桁行 方向	1～2	195
	2～3	190
	1～3	384
	4～5	180
	5～6	186
	4～6	366
梁間 方向	3～4	351
	6～1	374

8号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	21	11	5
2	20	13	6
3	27	20	10
4	34	25	27

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	264
2～3	217
3～4	305
4～1	221

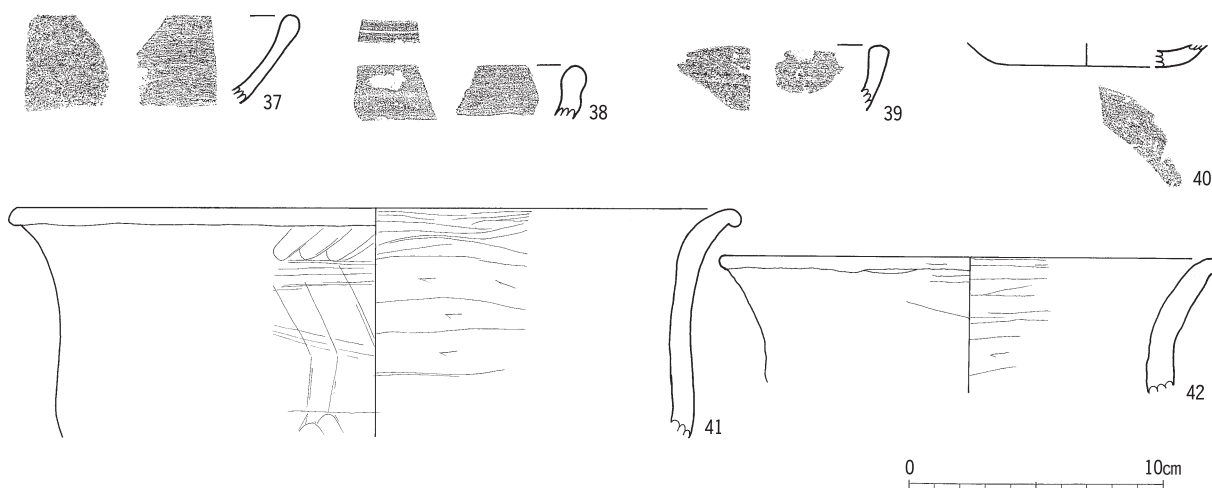


第22図 竪穴状遺構

第11表 竪穴状遺構柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

柱穴番号	柱穴痕(単位:cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	17	40
2	19	16	34
3	22	20	36
4	31	19	26
5	15	13	22
6	21	18	22
7	16	10	26

柱穴番号	柱間(単位:cm)	柱穴番号	柱間(単位:cm)
1~2	77	4~5	12
2~3	77	5~6	33
1~3	154	6~7	15
3~4	85	3~7	144



第23図 土師器

第12表 中・近世土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色 調		胎 土	焼成	外 面	内面	備考
				内	外					
23	37	C-5	II	灰白色	灰白色	精緻	良	ナデ	ナデ	
	38	B-7	II	灰白色	灰白色	精緻	良	ナデ	ナデ	
	39	C-5	II	明灰色	黒色	精緻	良	ナデ	ナデ	
	40	L-10	II	灰白色	灰白色	精緻	良	ナデ	ナデ	
	41	C-6	II	黄褐色	黒褐色	精緻	良	ナデ	ナデ	
	42	C-6	II	黄褐色	黒褐色	精緻	良	ナデ	ナデ	

第3節 小結

市堀遺跡は研究畑造成に伴い調査されたため、掘削深度が浅く、縄文時代早期以下の本調査は実施しなかった。

縄文時代早期以下に関しては、遺構はなく遺物の出土も多くなかった。確認調査の結果では、少量ではあるが早期中葉の土器である「石坂式土器」の出土が見られた。

本遺跡の中心をなす時期は縄文時代晩期である。遺構としては、1間×1間の掘立柱建物跡を6棟、柱穴列を9列検出した。

掘立柱建物跡は、統一性のなさ及びその広さから道具小屋のような簡易な施設の可能性が考えられるが、4本柱の上に母屋をのせた高床状の建物または、竪穴住居の床面は削平され、柱穴だけ残った状態などが想定できる。柱穴列は形状からテント状の施設を想定した。掘立柱建物跡に比べると更に簡易性が強いものではないかと考えられる。

縄文時代晩期の掘立柱建物跡は曾於郡大隅町（現曾於市）の鳴神遺跡と上野原遺跡での発見例が報告されている。鳴神遺跡の担当者は、農耕との関連を指摘している。縄文時代晩期に農耕が行われていた可能性は高いので、農耕関係の施設という可能性は否定できないが、今回の調査では、打製石斧等農耕に関する道具はあまり出土していない。上野原遺跡においては、出土例が少ないため、結論は出ていない。今後の類例を待ちたい。

出土した遺物は器種及び部位で分類を試みた。深鉢の口縁部の形態から2時期想定できた。口縁部の文様帯が短く、直行する形態をなす土器を上加世田式土器とし、やや口縁部が長くなり文様が見られなくなる時期の土器を入佐式土器に想定した。しかし、上加世田式土器の特色を持ちながら、やや入佐式土器に近い物もみられる。浅鉢も口縁部の形態から上加世田式土器と入佐式土器の2種類に区別できるようである。

また、胴部の形態は屈曲部の緩やかなものからきつく変化している。底部はあげ底・平底・張り出し底の3種類の底部がみられた。いずれも、上加世田

式土器から入佐式土器の範疇に収まるものと考えられる。ただ、晩期後葉の黒川式土器はみられないことから、市堀遺跡の中心をなすのは晩期の中でも前葉終末から中葉にかけての時期が想定される。

中・近世に関しては、掘立柱建物跡が8棟検出されている。底を持つ物と持たない物とに分類した。底を持つ掘立柱建物跡は1棟を除き比較的近い位置に立地している。

1号と2号は非常に近い状態で存在する。立地の状況から見ると、1対の建物のようにみえる。3号の場合、東側が道路のため調査がされていないので、東隣に建物跡が存在する可能性もある。もし、1・2号が1対の建物であれば、3号の隣にも南北を長軸として建物が存在していた可能性もある。4号と5号についても東西・南北に主軸を持つ建物が並んで建つという状況は同じである。しかし、底の有無・形態には差がみられる。他の掘立柱建物跡については、主軸の方向・形態等がまちまちのため一概には言えない。

竪穴状遺構についても遺物の出土はなく、周辺でも検出されていないため、用途等は不明である。こちらも今後の類例を待ちたい。

市堀遺跡は掘削が及ぶ部分のみの調査であったので、今後開発等を行う場合は関係機関と協議を行い慎重に対応することが必要になる。

参考文献

- 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)「上加世田遺跡Ⅰ」 1985年
- 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)「上加世田遺跡Ⅱ」 1987年
- 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)「榎木原遺跡」 1987年
- 鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83) 農業開発総合センター遺跡群 2005年
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79) 大坪遺跡 2005年
- 堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古』31号 鹿児島県考古学会 1997年

大門口遺跡

第Ⅵ章 大門口遺跡

第1節 調査の概要

1 遺跡の立地及び調査の概要

(1) 遺跡の立地

金峰町大野字大門口に所在し、農業試験場研究畑として整備される部分を調査した。北から南側に傾斜する尾根に立地する。標高は約43m～48mである。南側は市堀遺跡と接し、東側は現況ではわかりにくい、谷を挟んで諏訪協遺跡と対峙する。西側は国道に向かいややきつく傾斜する。北側は現道を境に諏訪前遺跡と接する。

(2) 調査の概要

大門口遺跡の調査は、平成12年と平成13年の2回にわたって行われた。研究畑造成に起因する調査のため、造成される部分のみの調査であった。したがって、本調査は、造成により掘削される部分のみ実施し、掘削が及ばない部分については本調査実施後、一部下層確認調査を実施した。

本調査は、表土を重機で除去後、人力で掘り下げた。しかし、後世の開発・圃場整備等により包含層

であるⅡ・Ⅲ層の削除されている部分も多かった。

残存していたⅡ層からは土師器が、Ⅲ層上部からは縄文時代前期から晩期に該当する土器・石器が出土した。また、Ⅲ層下面からⅣ層上面において、縄文時代晩期と考えられる柱列・掘立柱建物跡(1間×1間)や近世以降の時期かと考えられる溝状遺構・道路状遺構が検出された。

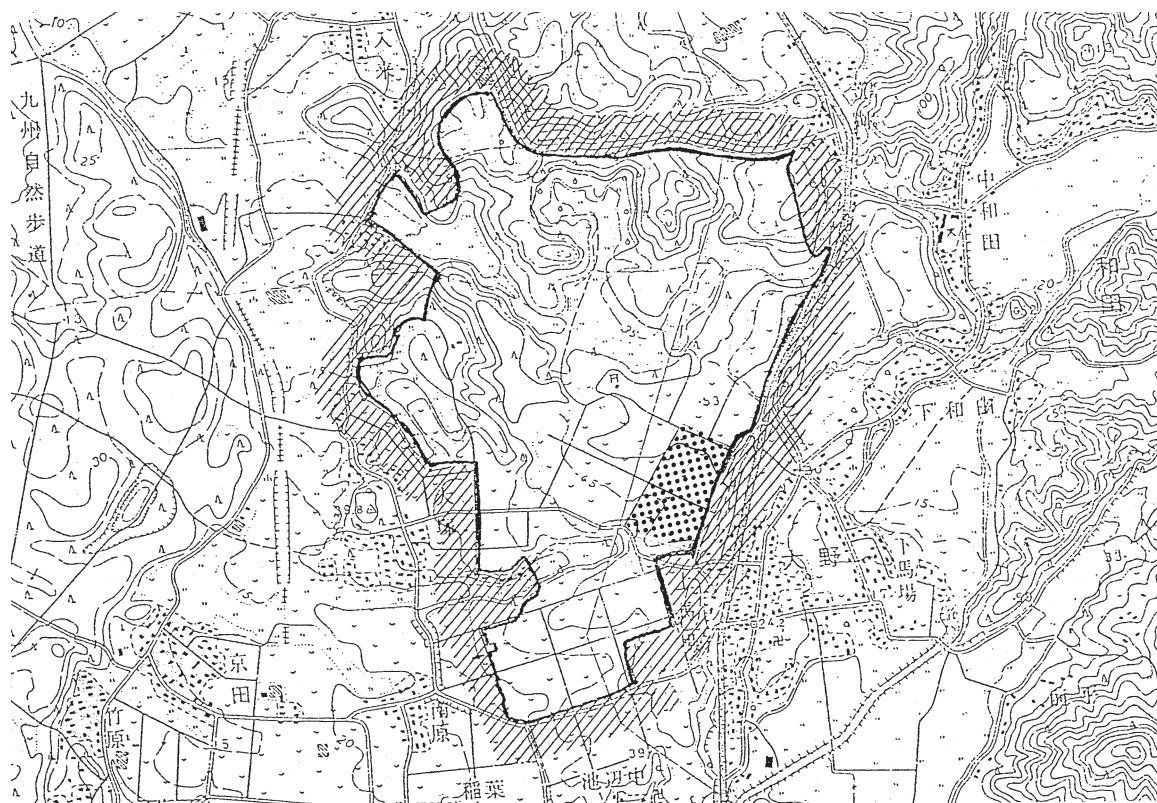
掘削が及ぶ部分はⅢ層までがほとんどであったが、諏訪前遺跡との境の道路に関して、拡張される部分があったため、その部分だけは、Ⅳ層以下の本調査を実施した。

確認調査の結果、縄文時代早期に該当するⅣ層から土器片や剥片等の遺物が出土した。遺物は北側(諏訪前遺跡)部分では多くみられたが、南側(市堀遺跡方向)になるにつれ出土しなくなった。遺物の数量は多くなかった。

旧石器時代の遺物は、1点も出土しなかった。

2 遺跡の層序

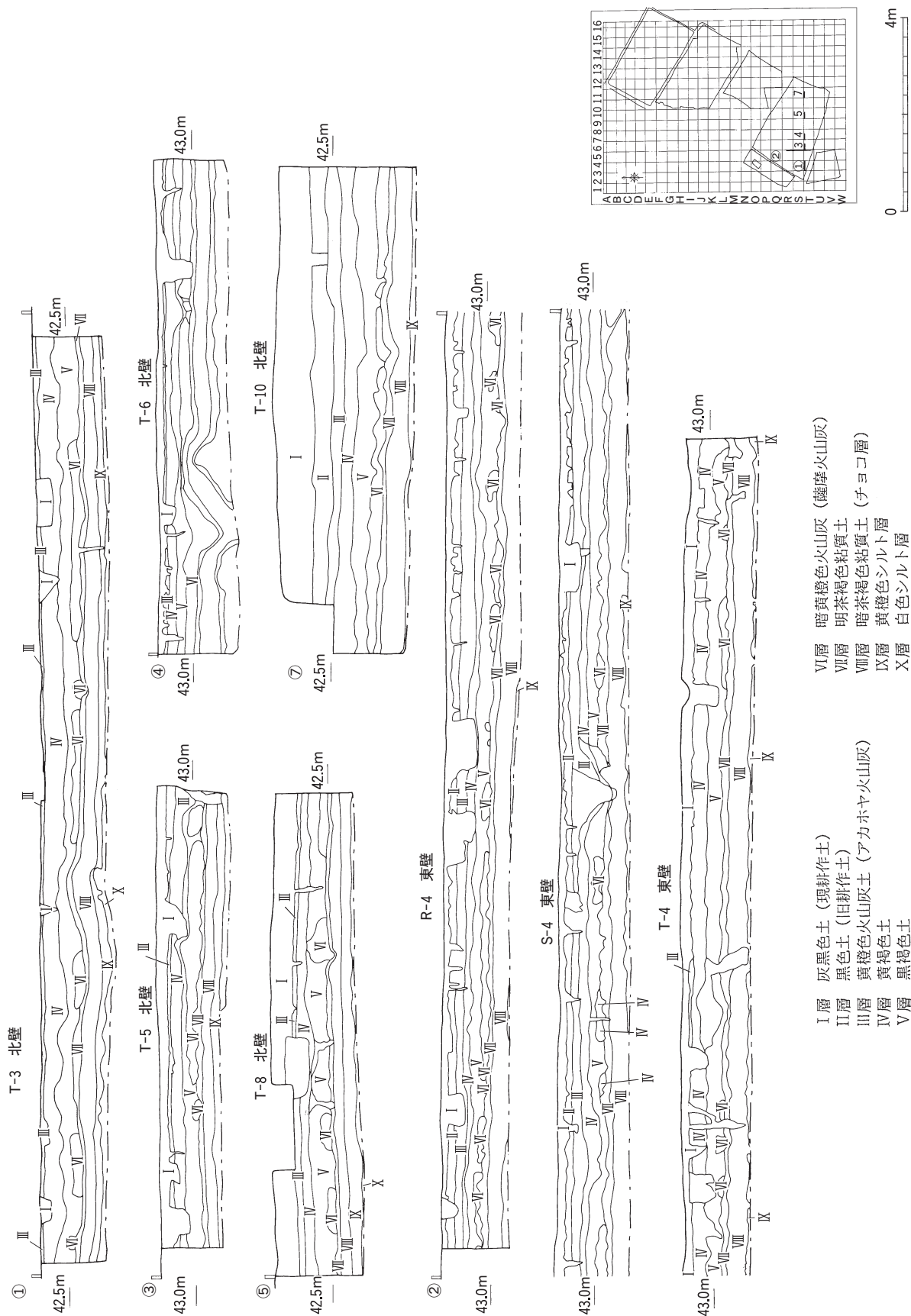
本遺跡の層序は、農業開発総合センター遺跡群全体の基準層序と基本的に変わらない。



第1図 大門口遺跡位置図

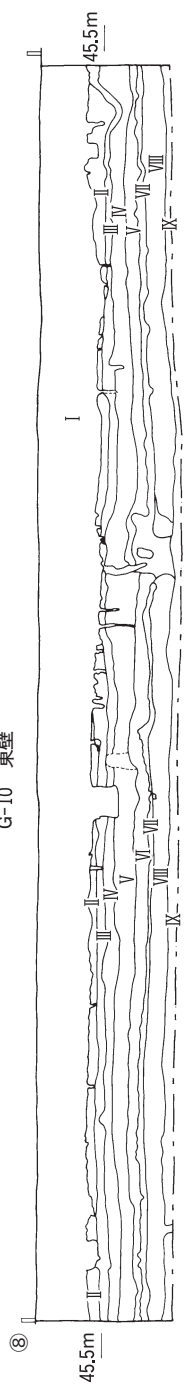


第2図 グリッド図

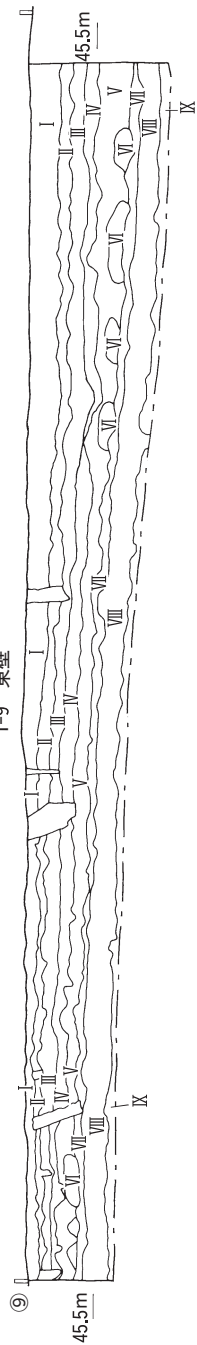


第3図 土層断面図 (1)

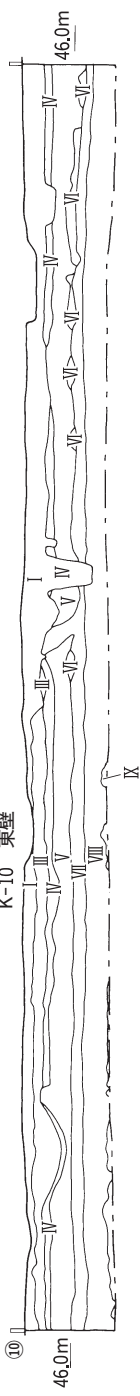
G-10 東壁



I-9 東壁



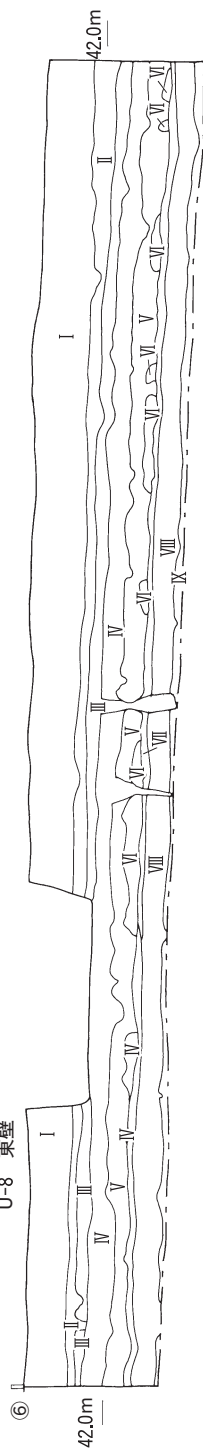
K-10 東壁



B-13 西壁

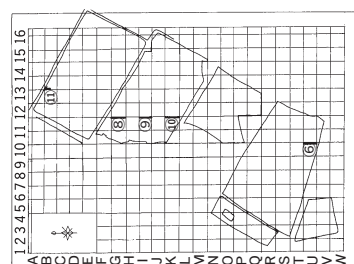


U-8 東壁



- I 層 灰黒色土 (現耕作土)
- II 層 黒色土 (旧耕作土)
- III 層 黄褐色火山灰土 (アカホヤ火山灰)
- IV 層 黄褐色土
- V 層 黒褐色土

- VI 層 暗黄緑色火山灰 (薩摩火山灰)
- VII 層 明茶褐色粘質土
- VIII 層 暗茶褐色粘質土 (チヨコ層)
- IX 層 黄緑色シルト層
- X 層 白色シルト層



第4図 土層断面図 (2)

第2節 発掘調査の成果

1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の遺構は検出されなかった。遺物に関しては確認トレンチ内・表土下Ⅳ層部分・本調査を実施した部分（道路拡幅部分）で出土した。遺物は遺跡の北側の部分で出土したが、南側に向かうにつれ出土量は少なくなった。

遺物は、土器・石器合わせて30点程度出土しただけであった。特に石器については剥片のみの出土で、数量も多くなかった。

トレンチから出土した遺物も少なく、南側への遺跡の広がりには、あまりないものと考えられる。

（1）土器（第5・6図）

I類土器（第5図—1）

I類土器は外面に貝殻刺突の文様を施す土器である。細片が多く図化できたのは1点だけであった。1は胴部であると思われる。器壁は薄く、外面の縦方向の貝殻による刺突が4条施されている。

II類土器（第5・6図—2～19）

円筒形で器壁が厚く、口縁部が外反もしくは直行し、胴部に綾杉状の条痕を施す土器である。

2～10は口縁部である。口唇部には刻み目が施され、口縁部下には貝殻による刺突文が施文してある。

2～4は、口縁部が外反する形状で、口唇部に浅い刻み目があり、口縁部下に貝殻腹縁部による斜位の刺突が交互に施されている。3は胴部に綾杉状の貝殻条痕が施されている。

5～7も口唇部に浅い刻み目を施しているが、口縁部下の施文は横位の刺突文である。5・6は胴部に綾杉状の文様が施文してある。

8・9は口唇部の刻み目がへう状の工具で鋭く施文してある。口縁部下の文様は横位の刺突文が施文されている。9は、補修孔の跡がみられる。また、綾杉状の文様が施文してあるが、やや粗い施文のしかたである。

10の口唇部の刻み目は浅い。口縁部がやや肥厚している。口縁部下の模様は、横位の貝殻腹縁による刺突文が施されているが、刺突文の幅が非常に狭い。胴部には貝殻による条痕文が施されている。

11～16は胴部である。11・12は口縁部に近いところで、斜位の貝殻刺突文及び綾杉状の貝殻条痕が観察できる。13～15は綾杉状の貝殻条痕がみられるが、16は9と同様に粗い綾杉状の文様に見えるが、縦位の条痕も観察できる。

17～19は底部である。17は外面の多くが剥落していて文様の判別が難しいが、斜位の条痕が施されている。18は立ち上がりの部分にへう状の工具で縦方向に細い沈線が施されていて、その上に条痕文が施されている。19は横位の条痕が巡らされている。

III類土器（第6図—20）

III類土器は胴部片のみの出土であった。外面に貝殻刺突による文様が斜位に施されている。

IV類土器（第6図—21）

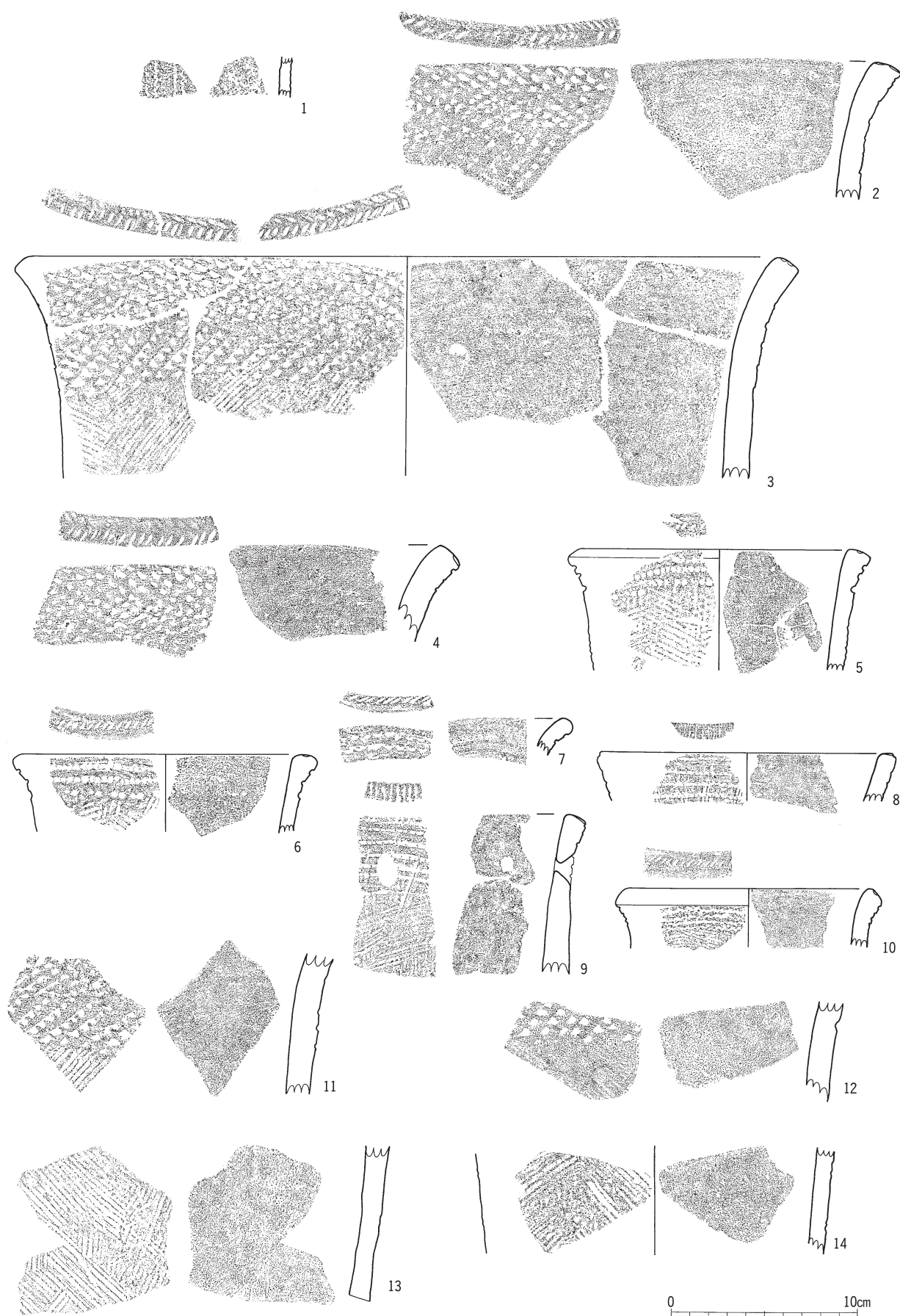
IV類土器も胴部片のみの出土であった。外面にクシ状の工具による施文の痕がみられる。施文の方向性ははっきりしない。

V類土器（第6図—22）

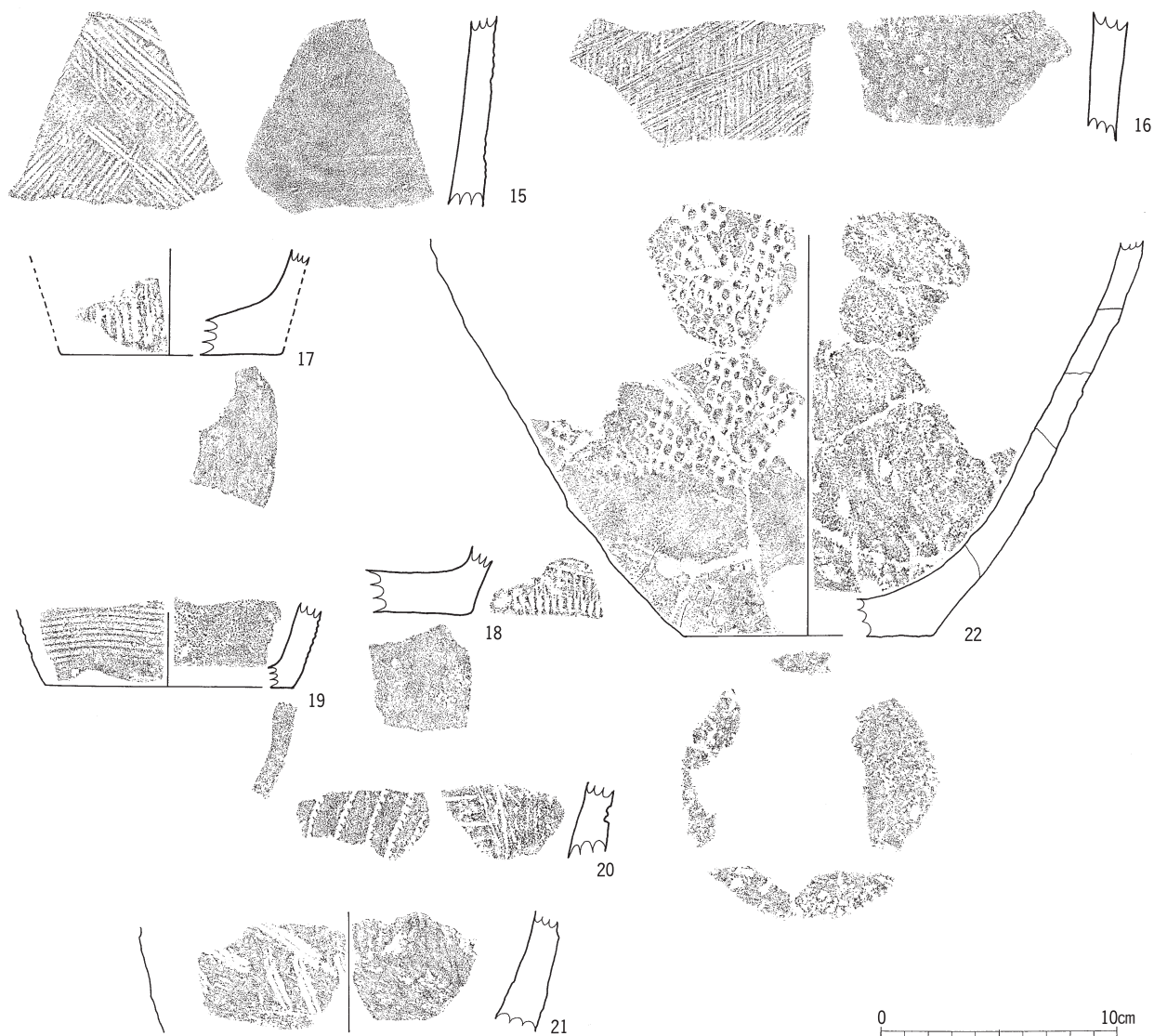
V類土器は、細片がまとまって出土した土器である。接合・復元してみると胴部から底部にかけての形態が復元できた。口縁部付近が存在しないため全体的な器形ははっきりしないが、胴部の張りはさほどないようである。底部は平底の形態をなしている。底部周辺には、特別に文様は施されていないが、底部から約7cmほど上には器面全体に楕円押形の文様が施されている。施文の方向は残存状態がよくないためはっきりしなが、縦方向のように見える。

（2）石器

縄文時代早期については、確認調査が中心であったため、調査面積は狭かった。そのため、出土した遺物量もさほど多くなかった。石器に関しても出土量は少なかった。また、出土した石器も剥片類ばかりで、図化できるようなものはなかった。



第5図 縄文時代早期土器（1）



第6図 縄文時代早期土器（2）

第1表 縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
5	1			黒色	黒褐色	○	○	○		良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	2	O-3	Ⅲ	赤褐色	明赤褐色	○	○			良	刻線	ケズリ	
	3	O-3	Ⅳ	赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	4	O-3	Ⅳ	赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	貝殻刺突	ケズリ	
	5	F-15	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○	○		良	貝殻刺突	ケズリ	
	6	F-15	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	7		Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	8	O-3	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突	ケズリ	
	9	O-3	Ⅳ	明赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突	ケズリ	
	10	F-15	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	11	O-3	Ⅳ	褐色	褐色	○	○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	12	J-10	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	13	O-3	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	14	O-3	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
6	15	O-3	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
	16	O-3	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
	17		Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
	18	D-14	Ⅳ	暗黄白色	明赤褐色	○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
	19	D-14	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	貝殻条痕	ケズリ	
	20	R-4	Ⅳ	褐色	褐色	○	○			良	貝殻刺突	ケズリ	
	21	K-15	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	条痕	ケズリ	
	22	E-13	Ⅳ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	楕円押型文	ケズリ	

2 縄文時代前期～後期の調査（第7図）

該当期の土器は、次の晩期の遺物と混在してⅢ層中から出土した。遺物の出土数は圧倒的に晩期の時期の土器が多かった。

石器については、別項で述べる。

Ⅵ類土器（第7図—23～25）

Ⅵ類土器は、外面に連点状の文様が施されている土器である。

23・24は縦方向に工具による条痕が施され、その横にやはり縦位に連点文状の文様がみられる。23は摩耗が激しく文様の特色ははっきり見えない。24は半竹管文のように見えるが、はっきりしない。25は斜位に連点文状の施文が施してある。

Ⅶ類土器（第7図—26～28）

外面が、貝殻条痕文で調整されている土器である。26は口縁部に近い胴部であると思われる。緩やかに張り出す形態を持つ。口縁部は存在しないが、内傾する口縁になると思われる。胴部である。頸部付近において、曲線上の突帯が貼り付けられ、ヘラ状の工具による沈線が施されている。27は内外面とも貝殻条痕で調整されている。28は底部である。同様に内外面とも貝殻条痕による調整がされている。上げ底の形態をなす。

Ⅷ類土器（第7図—29）

胴部片のみの出土であった。口縁部に近い部位だと思われる。浅い凹線が2条巡らされ、その周辺に横位・斜位の貝殻刺突文が施されている。滑石が混入されているのも特色である。

Ⅸ類土器（第7図—30・31）

Ⅸ類土器は、山形の口縁部と口縁部下に凹線が巡る土器である。

30・31は同一個体になる可能性がある。口唇部を工具により同一間隔で押しつぶすように調整して山形状の口唇部を形成している。口縁部の文様は、同じような幅の太い凹線が巡らされている。

X類土器（第7図—32～34）

X類土器は口縁部が肥厚する土器である。

32は口縁部幅が狭く、ヘラ状の工具により斜位に刻み目が施されている。33は復元完形品になった土器である。口唇部直下でやや肥厚し、文様帯をつくり貝殻腹縁部で文様を施文している。胴部は貝殻条痕文で調整している。底部は平底の形態をなす。

34は口縁部が、やや肥厚する。肥厚した部分を文様帯として、貝殻刺突文を斜位に施している。文様帯以下には施文はされていない。

Ⅺ類土器（第7図—35）

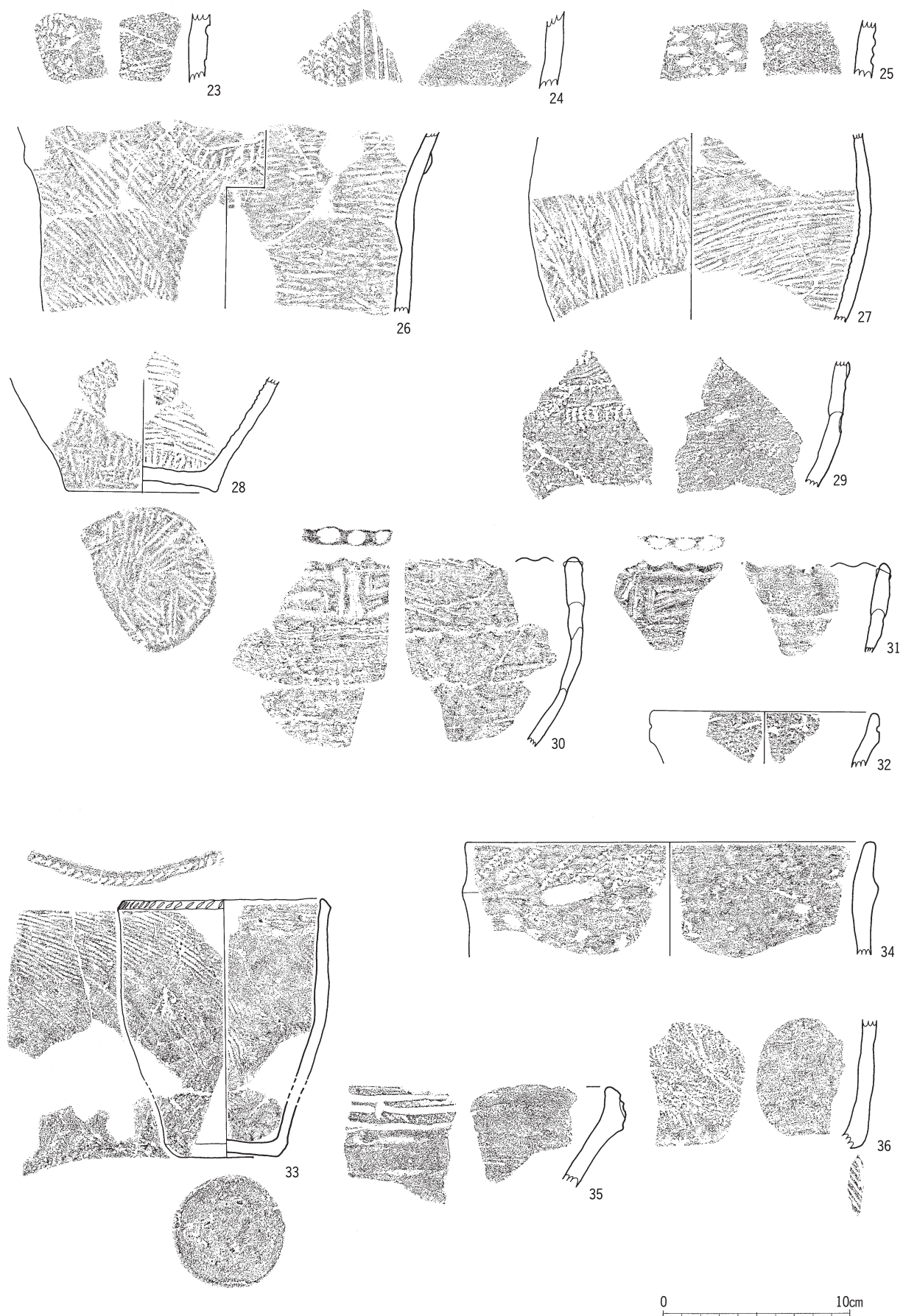
Ⅺ類土器も口縁部が肥厚する土器である。口縁部はやや内傾し、肥厚した部分に文様帯を作る。文様帯は、3条の沈線が巡り太めの刻み目が施されている。沈線と沈線の間は縄文により調整がしてある。

Ⅻ類土器（第7図—36）

Ⅻ類土器は、底部である。わずかであるが、底に網状の文様がみられる。型式名は不明ながら縄文時代後期に該当すると思われる。

第2表 縄文時代前期～後期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
7	23	O-8	Ⅲ	黒褐色	赤褐色	○	○	○		良		ケズリ	
	24	S-7	Ⅲ	黒褐色	赤褐色	○	○			良	ケズリ	ケズリ	
	25	R-7	Ⅲ	赤褐色	灰褐色	○	○			良	ケズリ	ケズリ	
	26		Ⅲ	黒色	赤褐色	○	○	○		良	条痕文	条痕文	
	27		Ⅲ	黒色	赤褐色	○	○	○		良	条痕文	条痕文	
	28		Ⅲ	褐色	褐色	○	○	○		良	条痕文	条痕文	
	29		Ⅲ	赤褐色	黒色	○	○	○	滑石	良	ケズリ 凹線	ケズリ	
	30	R-5	Ⅲ	黒色	黒色	○	○			良	ケズリ 凹線	ケズリ	
	31	R-5	Ⅲ	黒色	黒色	○	○			良	ケズリ 凹線	ケズリ	
	32	E-8	Ⅲ	褐色	赤褐色	○	○			良	ケズリ 刻目	ケズリ	
	33	D-14	Ⅲ	褐色	赤褐色	○	○			良	ケズリ 刻目	ケズリ	
	34	T-5	Ⅲ	赤褐色	赤褐色	○	○			良	ケズリ 刻目	ケズリ	
	35	L-15	Ⅲ	黒褐色	黒褐色	○	○			良	ケズリ 沈線	ケズリ	
	36		Ⅲ	暗赤褐色	明黄白色	○	○	○		良	ケズリ	ケズリ	



第7図 縄文時代前期～後期土器

3 縄文時代晩期の調査

該当期に関しては、遺構・遺物の出土量ともに他の時期とは比べものにならないほど多かった。

(1) 遺構

①土坑 (第9・10図)

土坑は5基検出した。楕円形もしくはほぼ円形の形状であった。遺物が検出された土坑が2基あった。Ⅳ層上面で検出している。いずれの土坑もⅢ層を埋土としていた。検出面からの深さはさほど深くなく、深いものでも50cmである。

形状については円形のものが多かった。楕円形をなすいずれの土坑にしても用途・性格については不明である。

1号土坑

1号土坑は、長径340cm、短径112cmの楕円状の形態をなす。深さは25cmである。

土坑内からおそらく1個体であろう土器片が検出された。37は口縁部から胴部にかけての部分である。文様帯が長く外反する口縁部を持ち、頸部から胴部へかけての張りはさほど強くない。口縁部は条痕により調整されているが、はっきりとした文様は施されていない。38と39は口縁部である。37同様に文様帯は長い。文様帯には、37同様条痕による調整はあるが沈線等の文様はみられない。40は胴部である。緩やかな張りを持つ。底部は出土しなかったため、全体の器形はわからない。そのほかに、細片が検出されたが、すべて胴部片のようである。

2号土坑

2号土坑は、ほぼ円形をなす形態で長径314cm・短径245cm・深さ38cmである。土器の細片が少量出土したが、図化できなかった。

3号・4号・5号土坑

これらの土坑は遺物の出土はなかった。3号土坑は、ほぼ円形をなす形態で長径188cm・短径169cm・深さ50cmである。4号土坑は、ほぼ円形をなす形態で長径80cm・短径68cm・深さ22cmである。5号土坑は、円形をなす形態で長径250cm・短径233cm・深さ39cmである。

②掘立柱建物跡 (第11～13図)

掘立柱建物跡は14棟検出された。形状は、きちんと四角形になるものもあれば、いびつな形になるものもあり規則性はみられない。また、柱穴の形状・深さ・柱間についても規則性はみられない。このような掘立柱建物跡は、Ⅴ章「市堀遺跡」と本遺跡周辺で多く検出された。市堀遺跡でもふれたが、規則性や方向性などまちまちのため、建物の性格は不明であるが、重要な建物とは考えにくい。簡易の建物であろうと思われる。

③柱列 (第14～17図)

柱列として、3個以上の柱穴が直線上に並ぶものを人為的なもの(遺構)と考えた。

本遺跡においては30列の柱列を検出した。最大で6個の柱穴が直線上に並んだ。市堀遺跡と同様に柱穴の大きさに規則性はみられない。また、方位についても統一性はない。

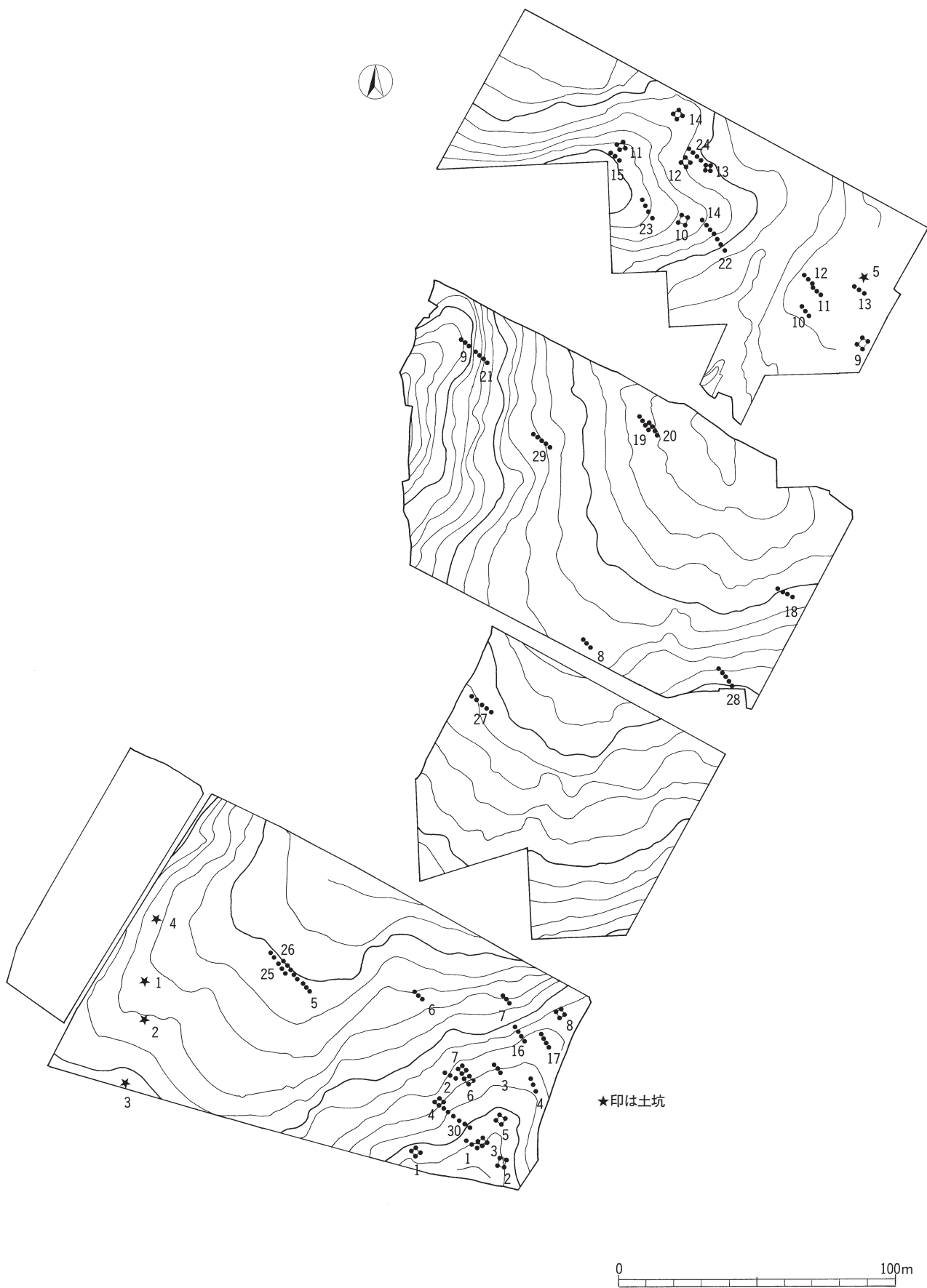
性格については、市堀遺跡でもふれたが、テント状の簡易の建物ではないかと考えられる。

遺構は遺物にも同様のことが言えるが、市堀遺跡側(南)と諏訪前遺跡側(北)に多く出土している。中程は遺構・遺物とも検出数は少ない。

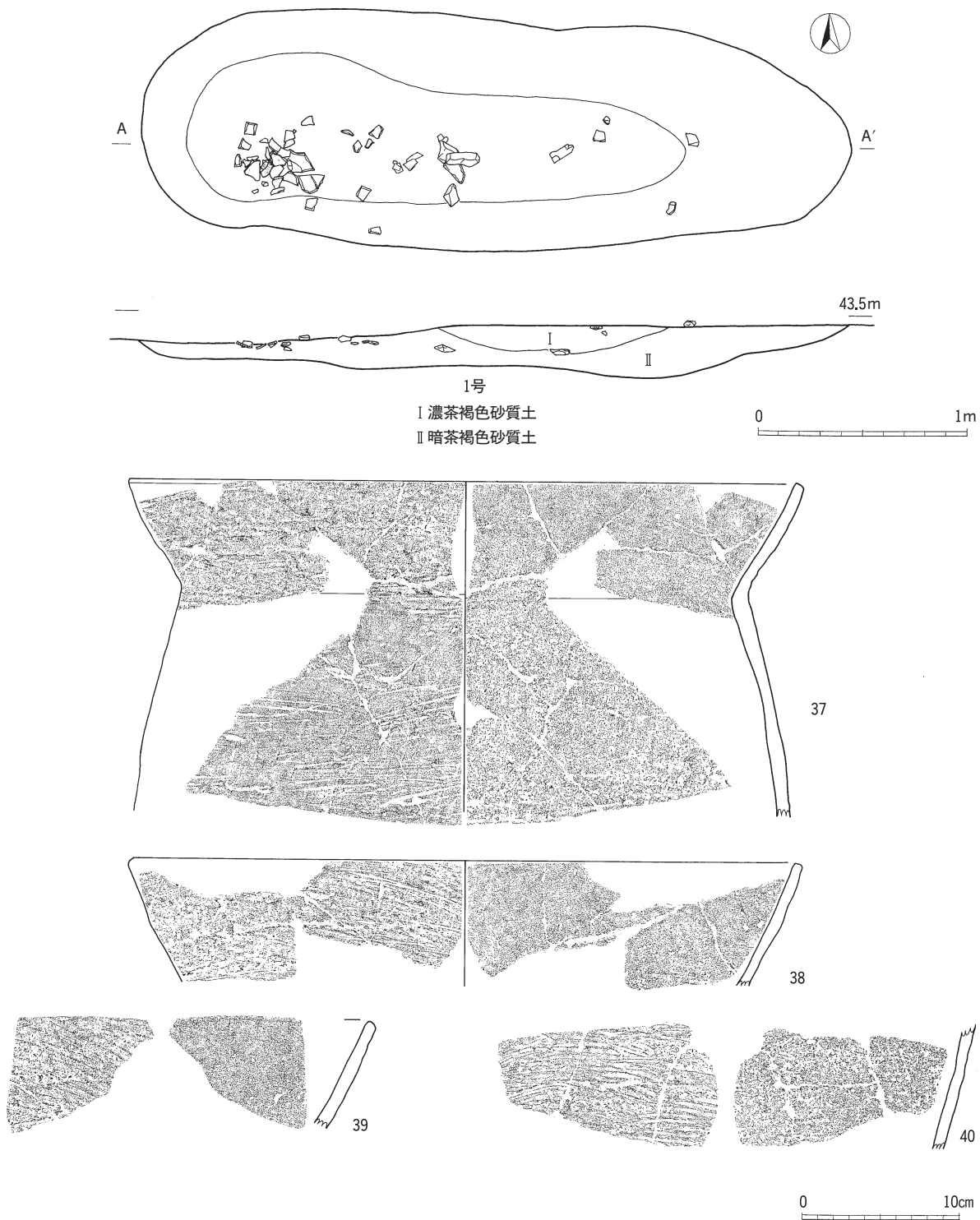
北側部分は、該当期の住居跡などの遺構や数多くの遺物が見つかった諏訪牟田・諏訪脇・諏訪前遺跡の周辺であるので、それらとの関連を考えなければならない。また、南側は、市堀遺跡と一体として考えなければならないが、周辺には縄文時代晩期の住居跡などは見つからない。しかし、市堀遺跡周辺は、圃場整備等により大きく削平されているところもあるため、該当期の遺跡が立地しなかったとは言えない。あるいは、途中で遺構・遺物が発見されていないが、晩期の遺跡が集中して見つかった北側の諏訪牟田・諏訪脇・諏訪前遺跡との関連で考えるべきかもしれない。

(2) 土器

縄文時代晩期の土器は深鉢形土器と浅鉢形土器に形態分類できる。概して深鉢形土器は粗製土器で浅鉢形土器は黒色研磨の精製土器である。ここでは粗製深鉢形土器をⅩⅢ類、精製浅鉢形土器や埴形土器をⅩⅣ類に分類した。



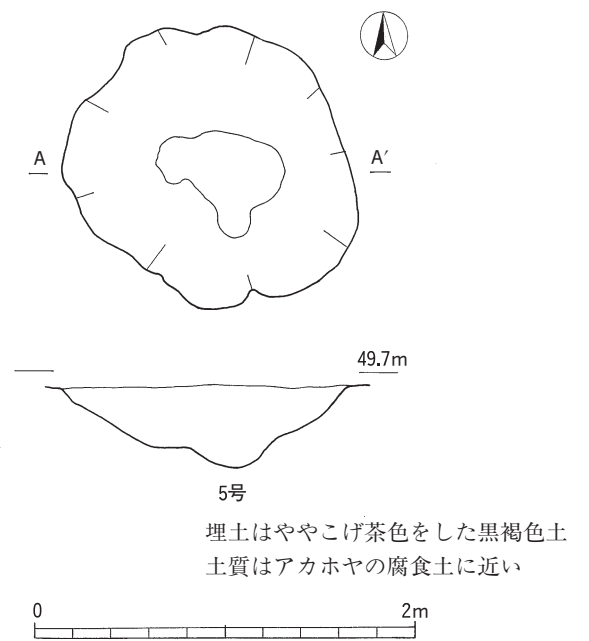
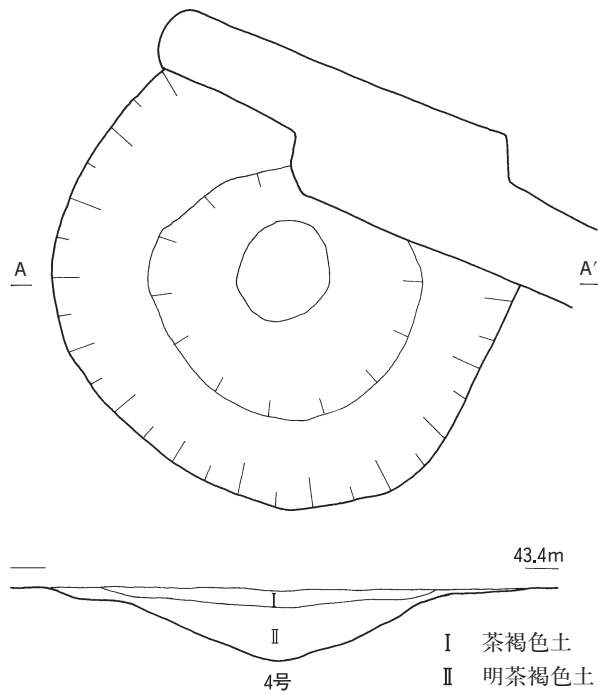
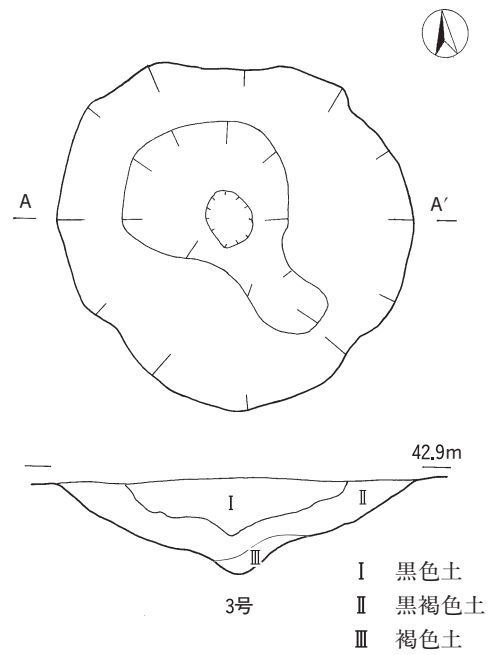
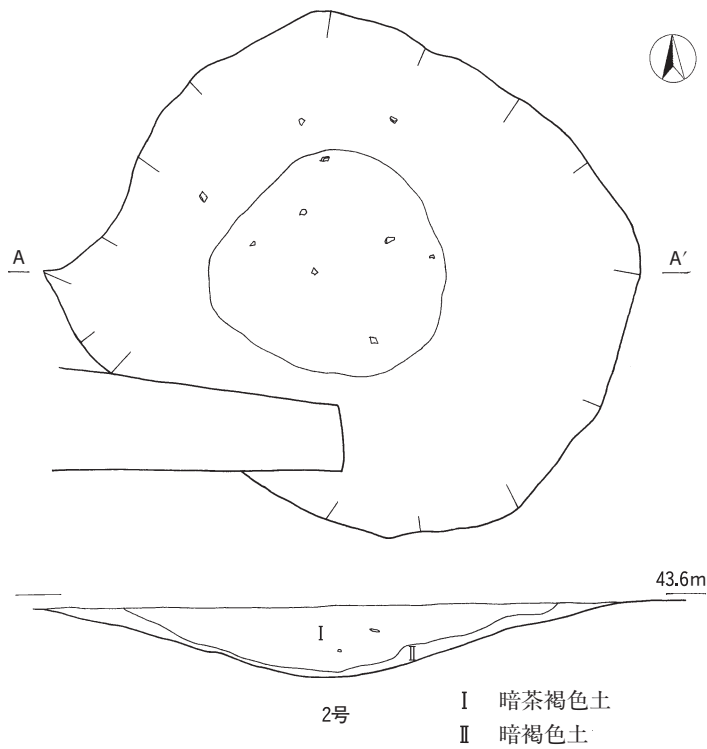
第8図 縄文時代晩期遺構配置図



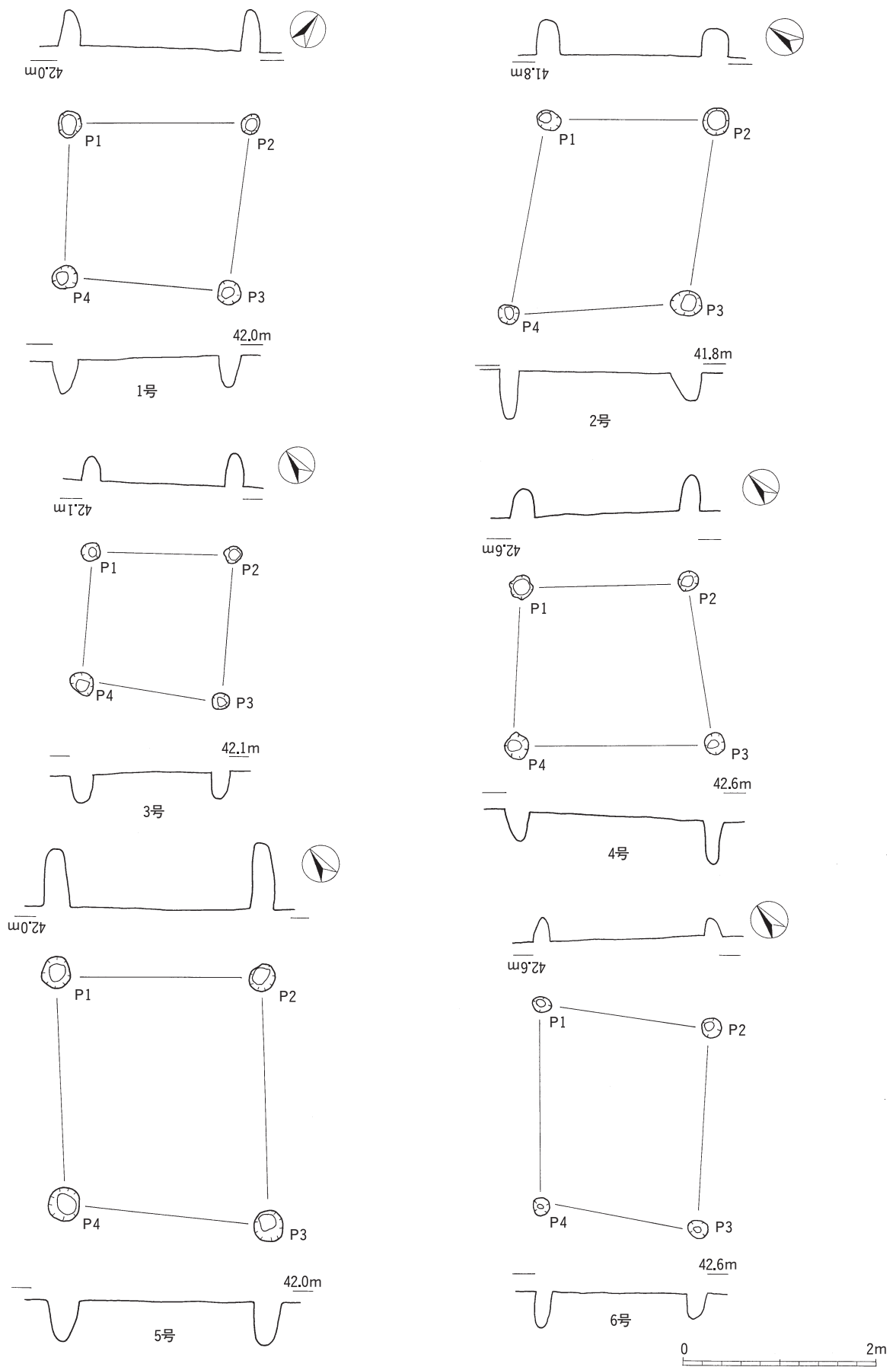
第9図 縄文時代晩期土坑（1）・出土土器

第3表 遺構内出土土器観察表

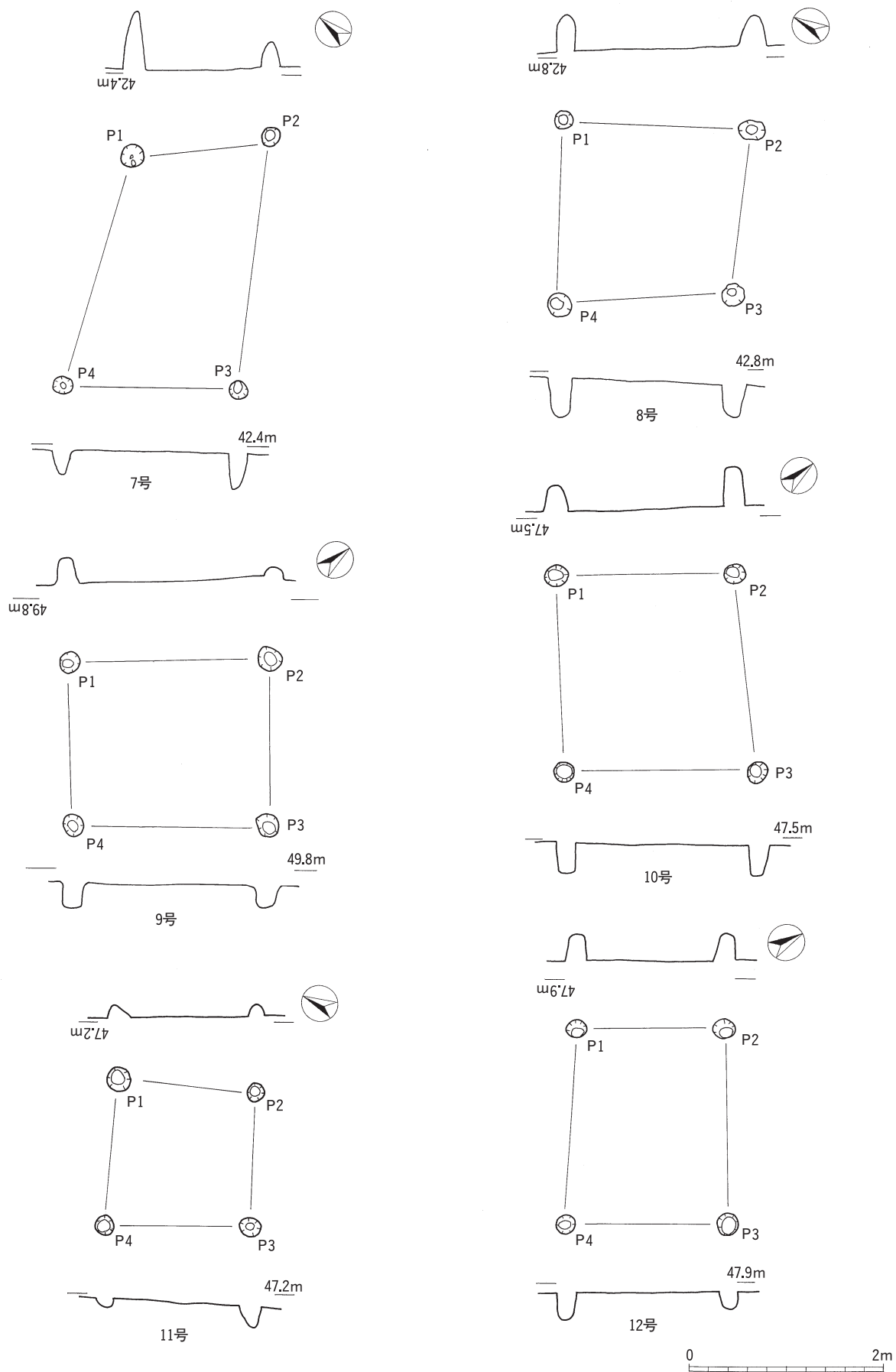
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内面	備考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他				
9	37	R-3	Ⅱ	赤褐色	褐色	○	○	○		良	ケズリ	ケズリ	
	38	R-3	Ⅱ	赤褐色	褐色	○	○	○		良	ケズリ	ケズリ	
	39	R-3	Ⅱ	赤褐色	褐色	○	○	○		良	ケズリ	ケズリ	
	40	R-3	Ⅱ	赤褐色	褐色	○	○	○		良	ケズリ	ケズリ	



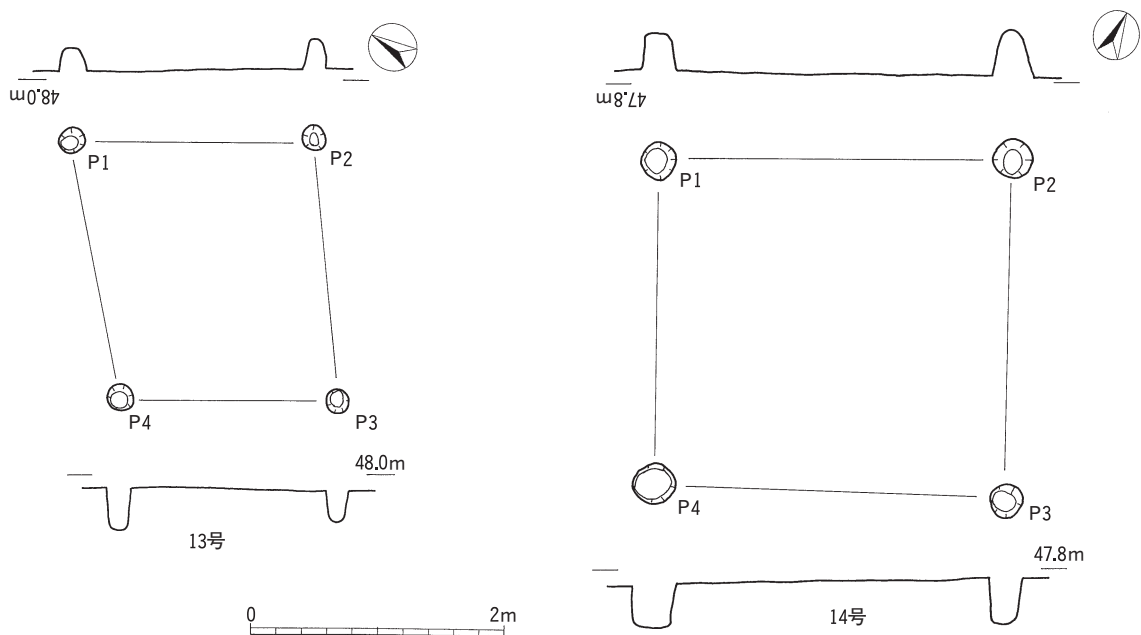
第10図 縄文時代晩期土坑（2）



第11図 縄文時代晩期掘立柱建物跡 (1)



第12図 縄文時代晩期掘立柱建物跡 (2)



第13図 縄文時代晩期掘立柱建物跡（3）

第 4 表 掘立柱建物跡 柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表（1）

1 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	25	24	36
2	21	18	42
3	26	23	32
4	25	24	34

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	189
2～3	175
3～4	170
4～1	158

2 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	24	20	34
2	28	27	30
3	33	26	29
4	24	20	50

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	176
2～3	188
3～4	183
4～1	204

3 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	20	25
2	18	16	35
3	19	17	28
4	24	20	28

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	145
2～3	150
3～4	144
4～1	139

4 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	24	22	29
2	22	20	38
3	23	20	44
4	26	22	31

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	171
2～3	169
3～4	205
4～1	165

5 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	32	29	58
2	28	23	68
3	30	28	44
4	34	32	42

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	210
2～3	250
3～4	207
4～1	235

6 号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	18	16	25
2	21	20	20
3	21	18	27
4	18	18	37

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	175
2～3	208
3～4	162
4～1	208

第5表 掘立柱建物跡 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表（2）

7号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	24	23	59
2	20	20	25
3	20	18	26
4	21	18	25

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	148
2～3	260
3～4	179
4～1	243

8号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	18	38
2	27	19	31
3	24	22	34
4	25	23	37

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	192
2～3	167
3～4	178
4～1	188

9号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	21	25
2	26	22	13
3	27	22	20
4	22	21	27

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	207
2～3	170
3～4	201
4～1	166

10号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	21	23	27
2	22	21	40
3	23	19	31
4	20	19	31

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	182
2～3	205
3～4	195
4～1	202

11号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	25	24	12
2	19	18	10
3	22	19	21
4	21	19	11

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	141
2～3	133
3～4	150
4～1	153

12号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	17	29
2	22	20	27
3	23	21	16
4	19	18	29

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	153
2～3	201
3～4	167
4～1	200

13号

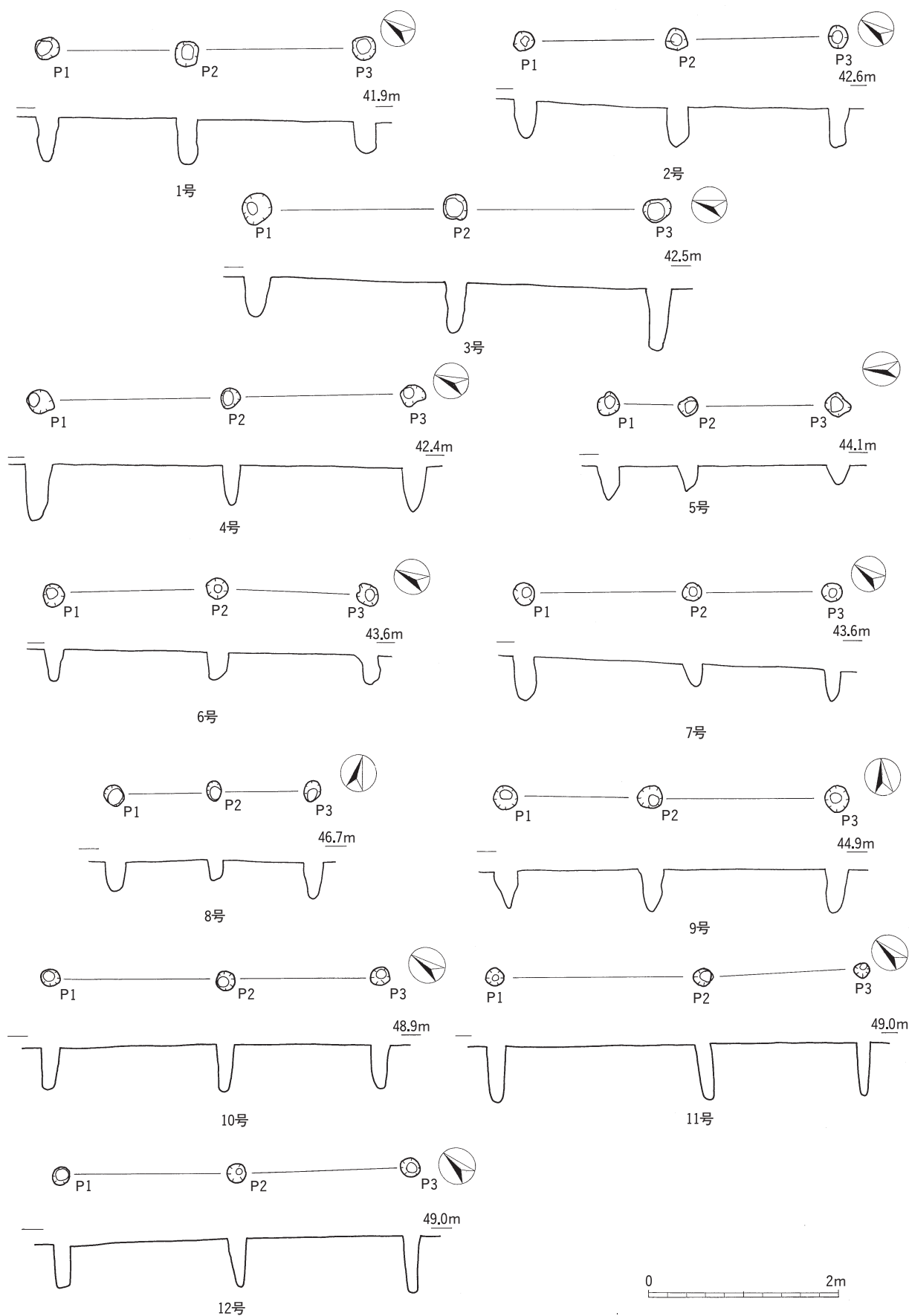
柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	21	18	18
2	20	18	23
3	19	17	24
4	20	19	33

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	193
2～3	203
3～4	170
4～1	204

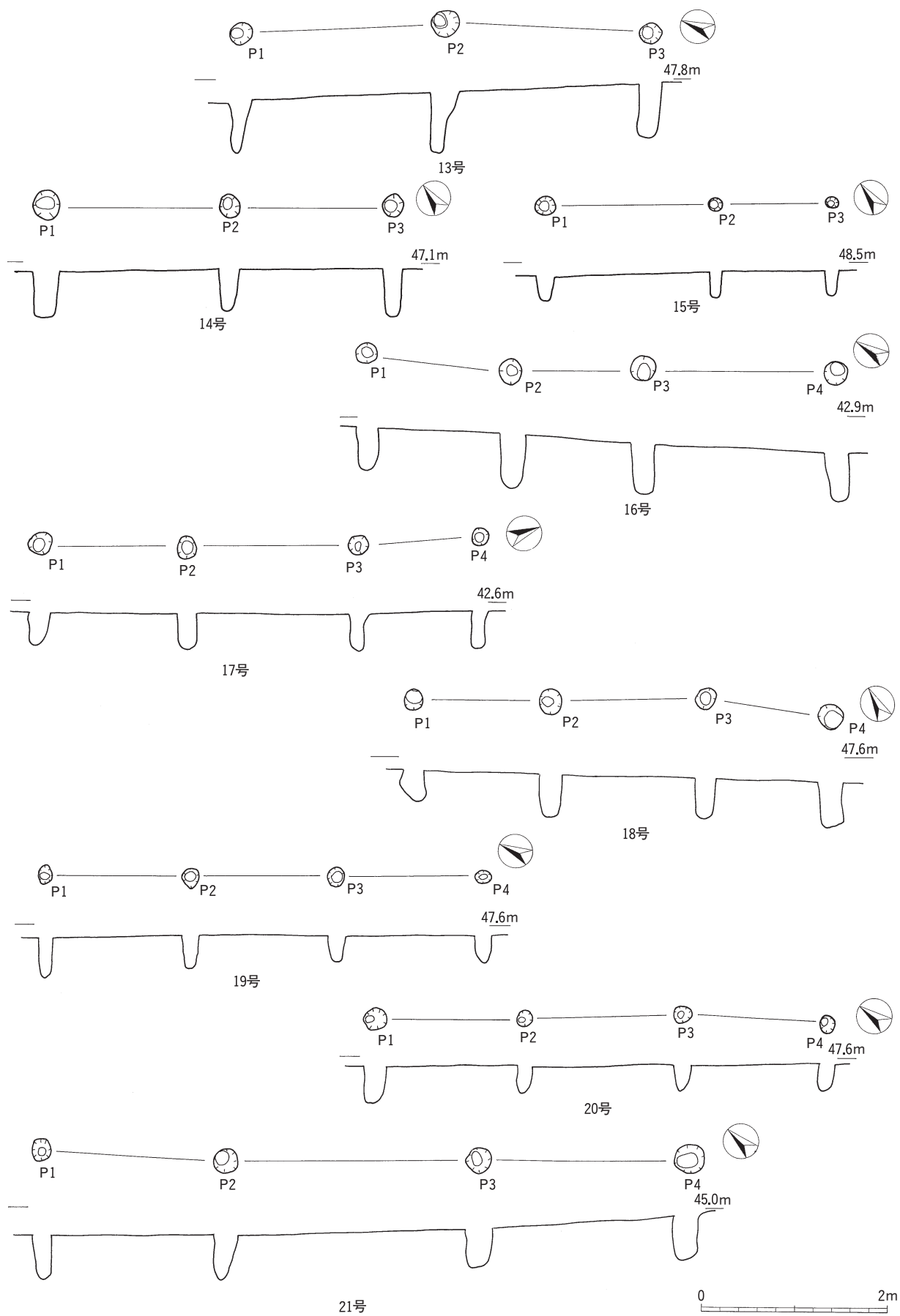
14号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	30	26	30
2	31	29	37
3	26	25	36
4	35	31	33

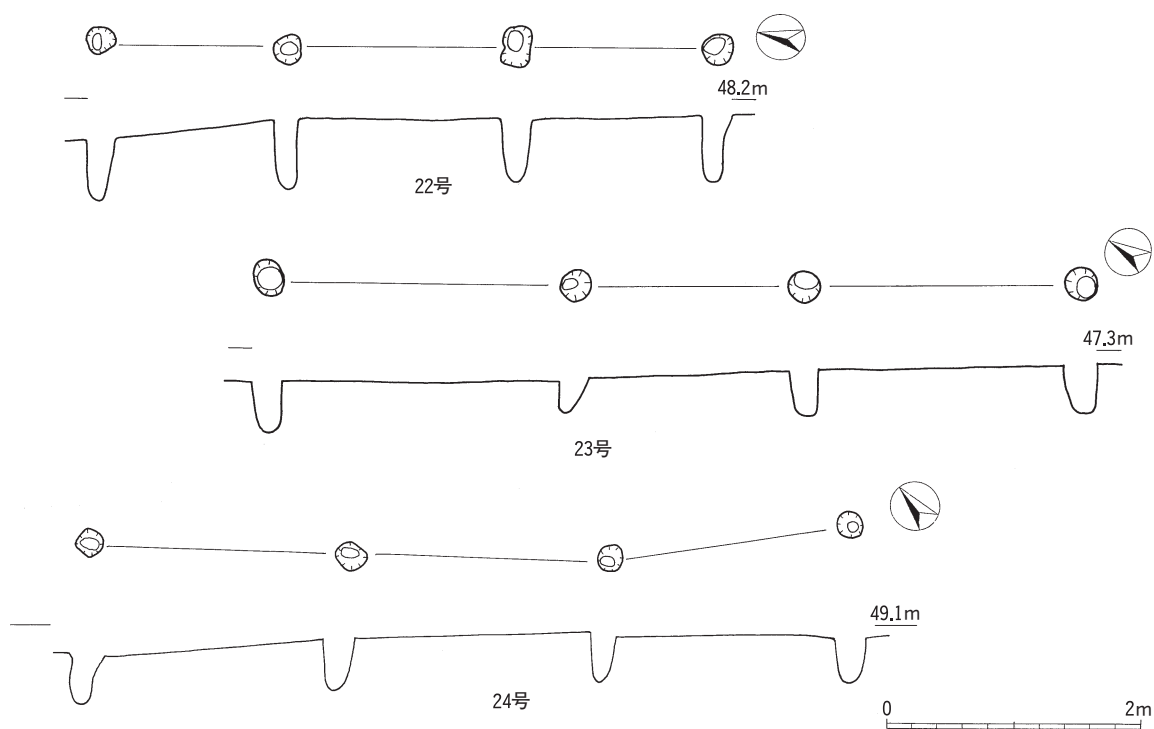
柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	278
2～3	266
3～4	276
4～1	252



第14図 縄文時代晩期柱穴列 (1)



第15図 縄文時代晩期柱穴列（2）



第16図 縄文時代晩期柱穴列（3）

第 6 表 柱穴列 柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表（1）

1号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	25	22	46
2	27	24	44
3	26	24	32

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	152
2～3	185
1～3	337

2号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	23	20	42
2	24	23	40
3	23	21	40

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	158
2～3	170
1～3	328

3号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	34	30	42
2	28	25	51
3	30	24	62

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	212
2～3	214
1～3	425

4号

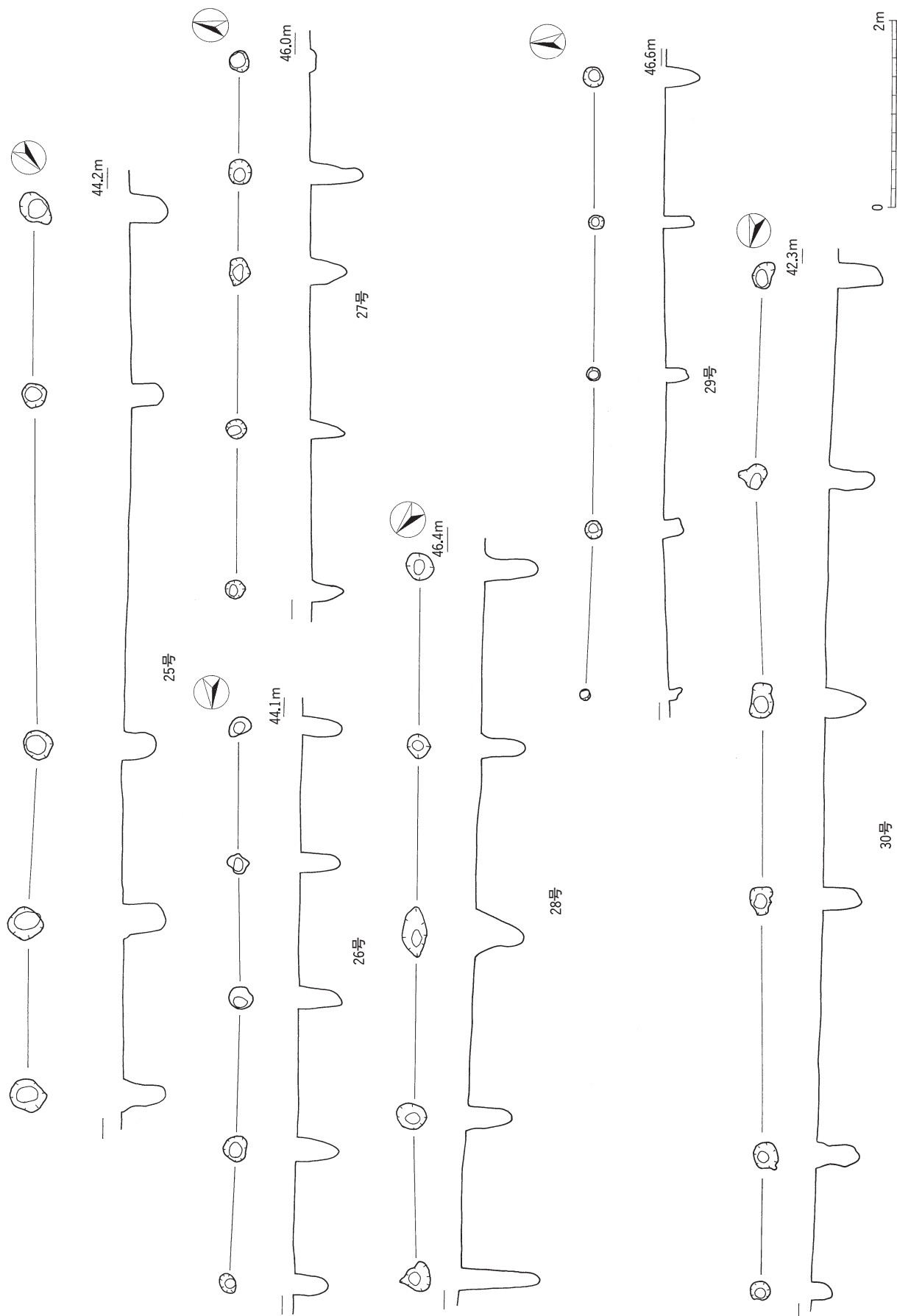
柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	30	24	60
2	21	20	42
3	27	18	49

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	201
2～3	192
1～3	391

5号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	26	20	36
2	22	18	27
3	28	25	22

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	85
2～3	155
1～3	240



第17図 縄文時代晚期柱穴列 (4)

第7表 柱穴列 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表（2）

6号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	25	25	34
2	24	24	27
3	24	23	30

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	175
2～3	165
1～3	340

7号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	23	23	46
2	20	18	25
3	22	20	22

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	175
2～3	150
1～3	325

8号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	19	33
2	21	16	22
3	22	19	38

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	107
2～3	102
1～3	209

9号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	26	24	39
2	27	25	44
3	28	25	46

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	153
2～3	196
1～3	349

10号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	19	18	43
2	20	20	49
3	21	20	45

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	184
2～3	165
1～3	350

11号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	18	18	59
2	18	18	55
3	16	15	56

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	218
2～3	170
1～3	388

12号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	18	17	42
2	21	20	50
3	20	18	59

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	185
2～3	180
1～3	365

13号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	24	22	56
2	30	28	65
3	24	22	58

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	218
2～3	222
1～3	440

14号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	31	29	48
2	24	22	44
3	24	22	50

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	195
2～3	175
1～3	370

15号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	21	25
2	16	14	27
3	14	11	23

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	185
2～3	125
1～3	310

第 8 表 柱穴列 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表（3）

16号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	25	22	46
2	29	25	59
3	26	26	55
4	27	27	52

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	155
2～3	140
3～4	205
1～4	500

17号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	26	22	34
2	24	20	38
3	23	20	40
4	20	18	39

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	158
2～3	183
3～4	132
1～4	472

18号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	20	
2	28	24	
3	23	22	
4	28	25	

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	146
2～3	169
3～4	136
1～4	450

19号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	21	16	43
2	21	18	36
3	21	18	27
4	19	15	29

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	155
2～3	157
3～4	158
1～4	470

20号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	26	24	39
2	17	16	30
3	20	18	26
4	19	17	29

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	163
2～3	160
3～4	153
1～4	476

21号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	22	20	48
2	27	26	47
3	28	26	41
4	33	30	50

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	196
2～3	274
3～4	223
1～4	693

22号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	23	20	49
2	24	22	53
3	32	20	50
4	26	24	48

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	151
2～3	179
3～4	156
1～4	486

23号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	28	22	39
2	25	22	24
3	24	24	34
4	25	25	40

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	240
2～3	180
3～4	220
1～4	640

第9表 柱穴列 柱穴計測表・柱間芯間距離計測表（4）

24号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	23	22	39
2	25	22	24
3	21	24	34
4	22	25	40

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	206
2～3	206
3～4	193
1～4	605

25号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	36	32	46
2	36	34	46
3	32	30	34
4	26	25	32
5	40	28	38

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	186
2～3	190
3～4	372
4～5	196
1～5	942

26号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	24	22	34
2	28	24	47
3	25	24	43
4	23	22	40
5	25	18	39

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	143
2～3	158
3～4	147
4～5	146
1～5	594

27号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	20	20	35
2	21	20	36
3	32	22	37
4	27	25	55
5	23	22	6

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	170
2～3	169
3～4	105
4～5	120
1～5	564

28号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	33	27	84
2	30	27	47
3	54	25	48
4	27	24	46
5	29	26	56

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	171
2～3	195
3～4	205
4～5	191
1～5	762

29号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	12	12	15
2	20	18	21
3	14	14	24
4	16	14	32
5	22	20	36

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	176
2～3	165
3～4	162
4～5	158
1～5	661

30号

柱穴 番号	柱穴痕(単位：cm)		
	長径	短径	深さ(最深)
1	21	19	22
2	28	24	44
3	28	21	40
4	36	20	43
5	27	21	47
6	30	26	45

柱穴 番号	柱間(単位：cm)
1～2	143
2～3	272
3～4	213
4～5	241
5～6	214
1～6	1083

XIII類土器（粗製深鉢形土器 第21～24図）

粗製深鉢形土器は、口縁部等の形状により a 類（41～46）と b 類（47～68）に細分される。a 類は既存の型式名では上加世田式土器に、b 類は入佐式土器に該当する。

a 類41～46は口縁部が肥厚し、口縁部に凹線を有するものである。口縁部は短く肥厚し、数条の凹線を巡らす。41・42は肥厚する口縁部で、凹線を 3～4 条巡らすものである。43は頸部から口縁部への外反の度合いが強い。44は凹線が不明瞭になり条痕的であるが、45は逆に鋭い凹線が 1 条巡るものである。46は頸部で、ゆるやかに外反するものである。

b 類47～60は胴部最大径が器高を二分する位置よりやや上にあり、口縁部直径と同じかやや小さい。口縁部がくの字状に外反する。47は口縁部に6～7条の凹線を巡らす。48の凹線は直線と曲線の組み合わせである。49・50は凹線がなくナデのみである。51は完形土器である。底部は円盤状をなしている。胴部最大径でくの字状に内側に屈曲する。頸部でもくの字状に外反し、はっきりした段差がある。

52～58は胴部で、口縁部が直線的に外反するものと、内弯気味に外反するものがある。59は丸みを帯びながら緩く内弯するものである。

60は胴部の屈曲部が頸部に近づいている。黒川式土器への移行期に当たるものと考えられる。

61～68は深鉢形土器の底部である。ほとんどが平底であるが、張り出しのあるものと無いものがある。

68は外面が粗い削りで面取りされている。胎土や焼成もこれまでのものとは違っており、時期的にはやや下がるものであるかもしれない。

XIV類土器（精製浅鉢形土器 第25～26図）

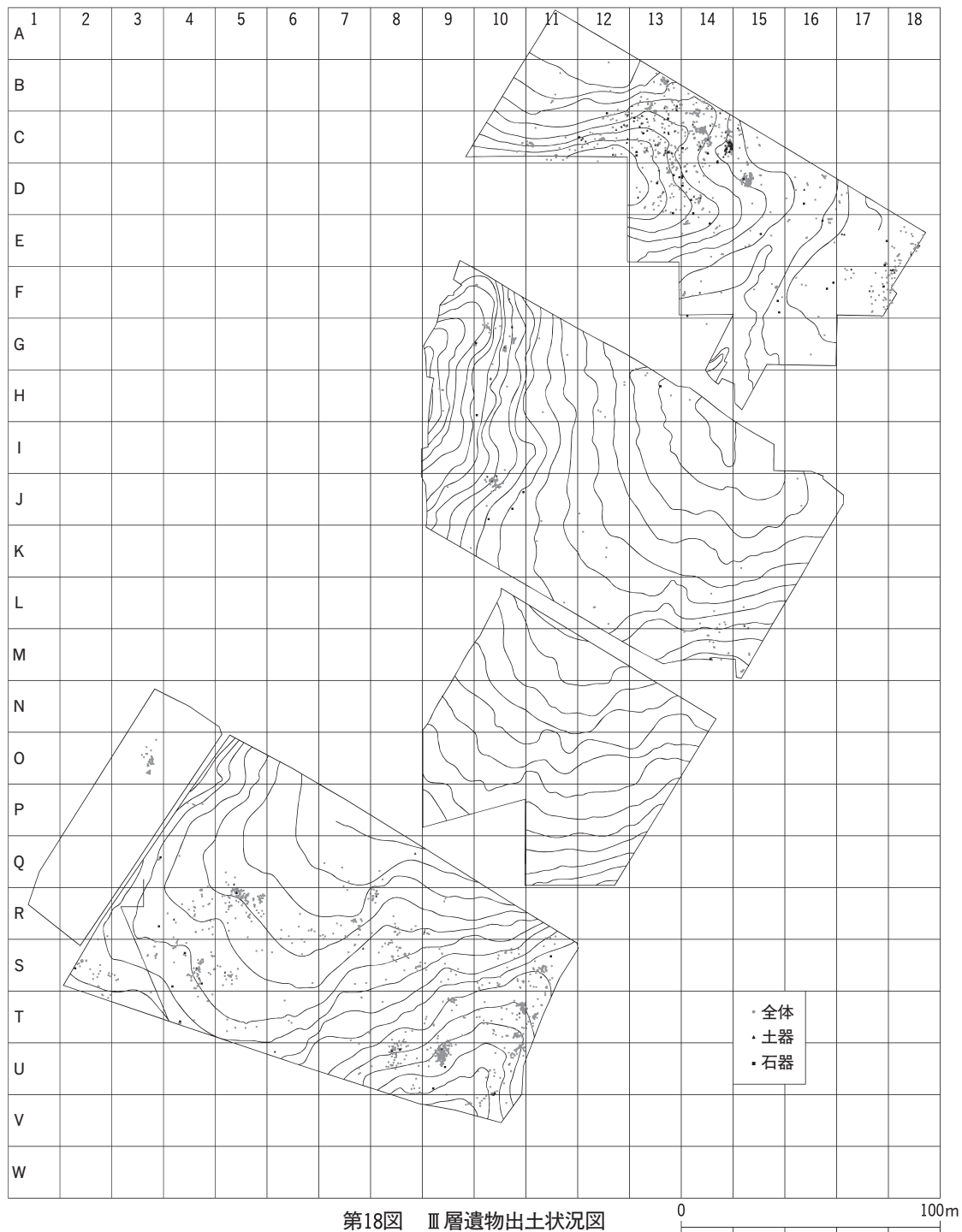
精製浅鉢形土器も形状により a 類（69～72）と b 類（73～85）に大別できる。a 類は既存の型式名では上加世田式土器に、b 類は入佐式土器に該当する。なお、86・87は形態が特殊なため c 類とした。

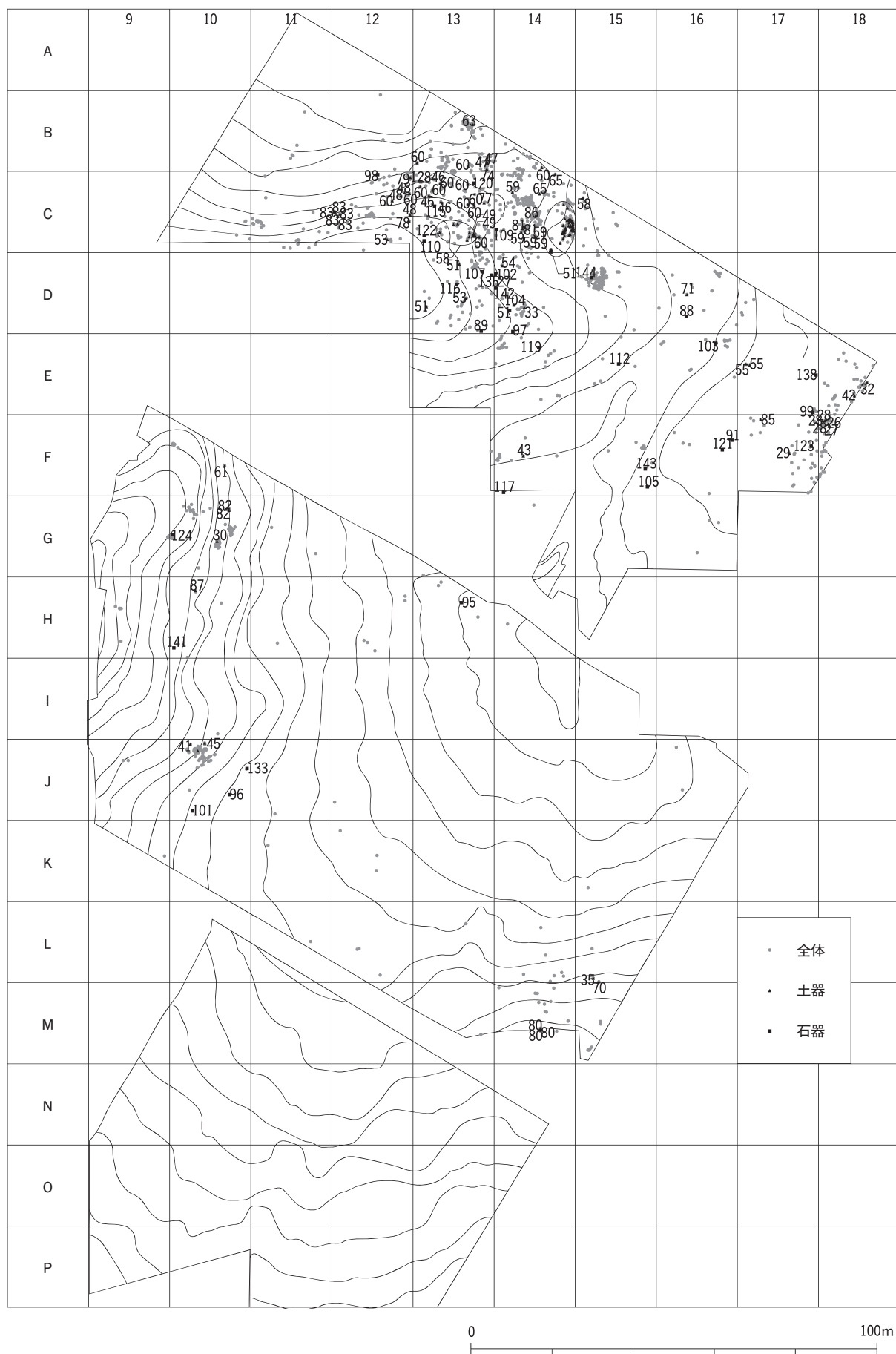
a 類69～72は口縁部が急激に外反するもので、口唇部に粘土紐を一段重ねている。69・70は口唇部に凹みのある突起を持つ。

b 類73～85は胴部で逆くの字状に屈曲する浅鉢形土器や埴形土器である。73～77は底部から外方へ立ち上がり、胴部で逆くの字状に屈曲して口縁部は反り気味に外反するもので、口縁部は概して長いものである。78・79は頸部がなく口唇部に凹線を 1 条巡らすマリと呼ばれる埴形土器である。80は胴部がかなり内弯するものである。頸部がほとんどなく口唇部に至るもので、粘土紐を一段重ねている。81～82は胴部に屈曲部を有しないで口縁部へ至るもので、口縁部は短くの字状に外反する。

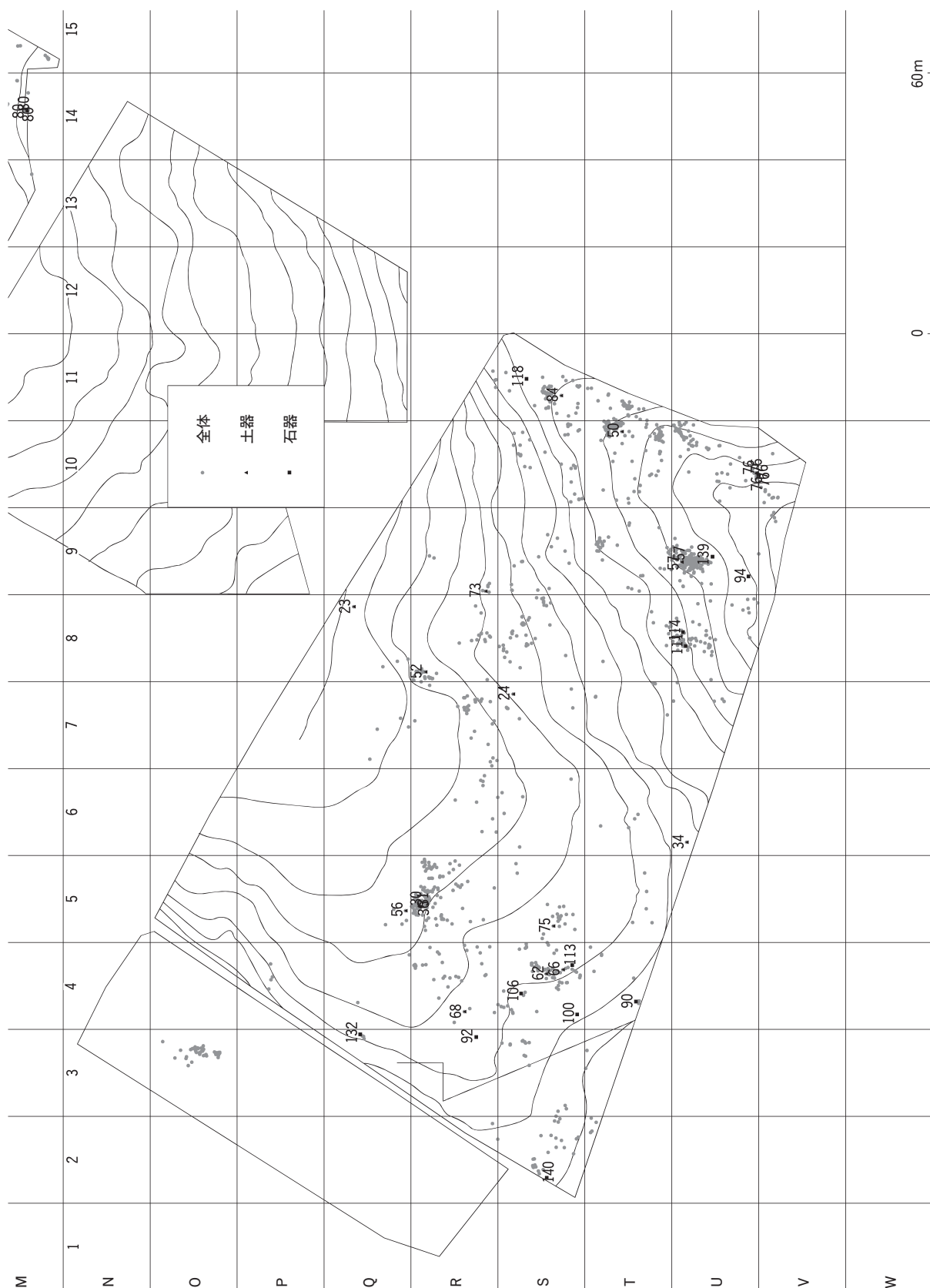
83～84は浅鉢形土器の底部である。ほとんどが平底であるが、83は上げ底である。84は張り出しが無いものである。また、85は丸底の底部から頸部まで均等な厚みであるが、口縁部が不明である。

c 類86・87はこれまでのものとは違った特徴を持つものである。86は口縁部全体に厚みがあり、ゆるやかに内弯する。87は深鉢形土器のように胴部に屈曲部を有する小型の精製土器である。

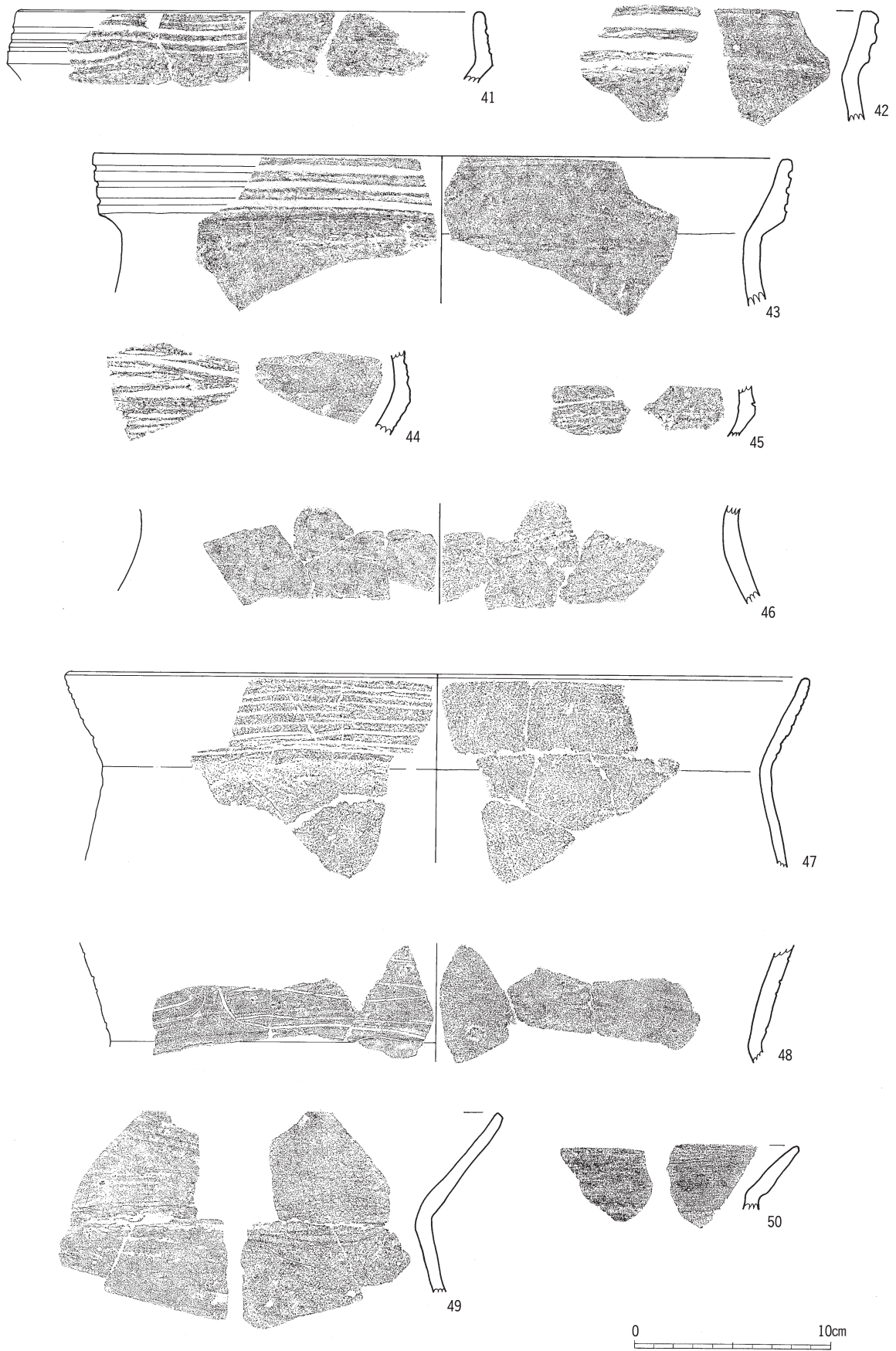




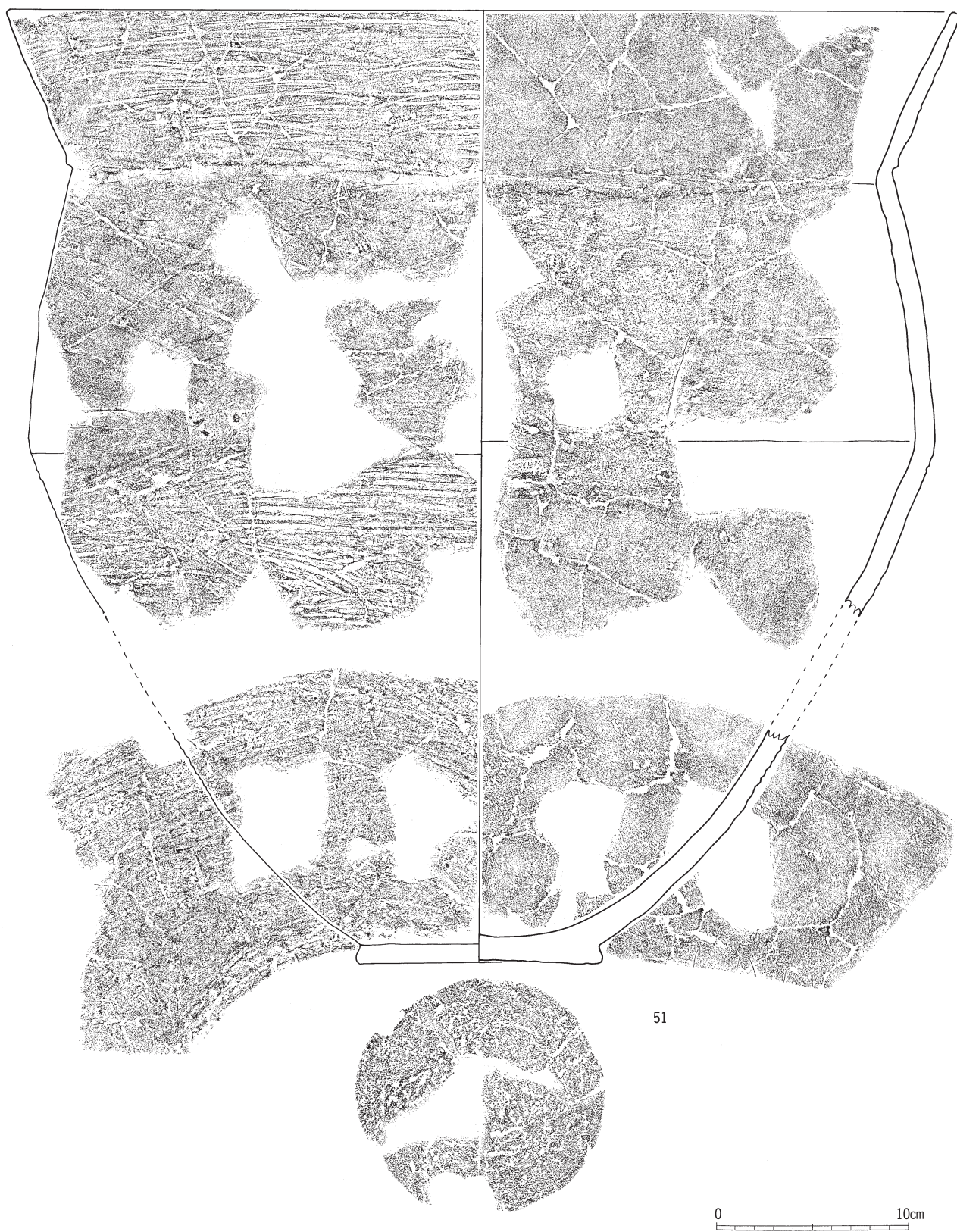
第19図 Ⅲ層遺物出土状況拡大図（1）



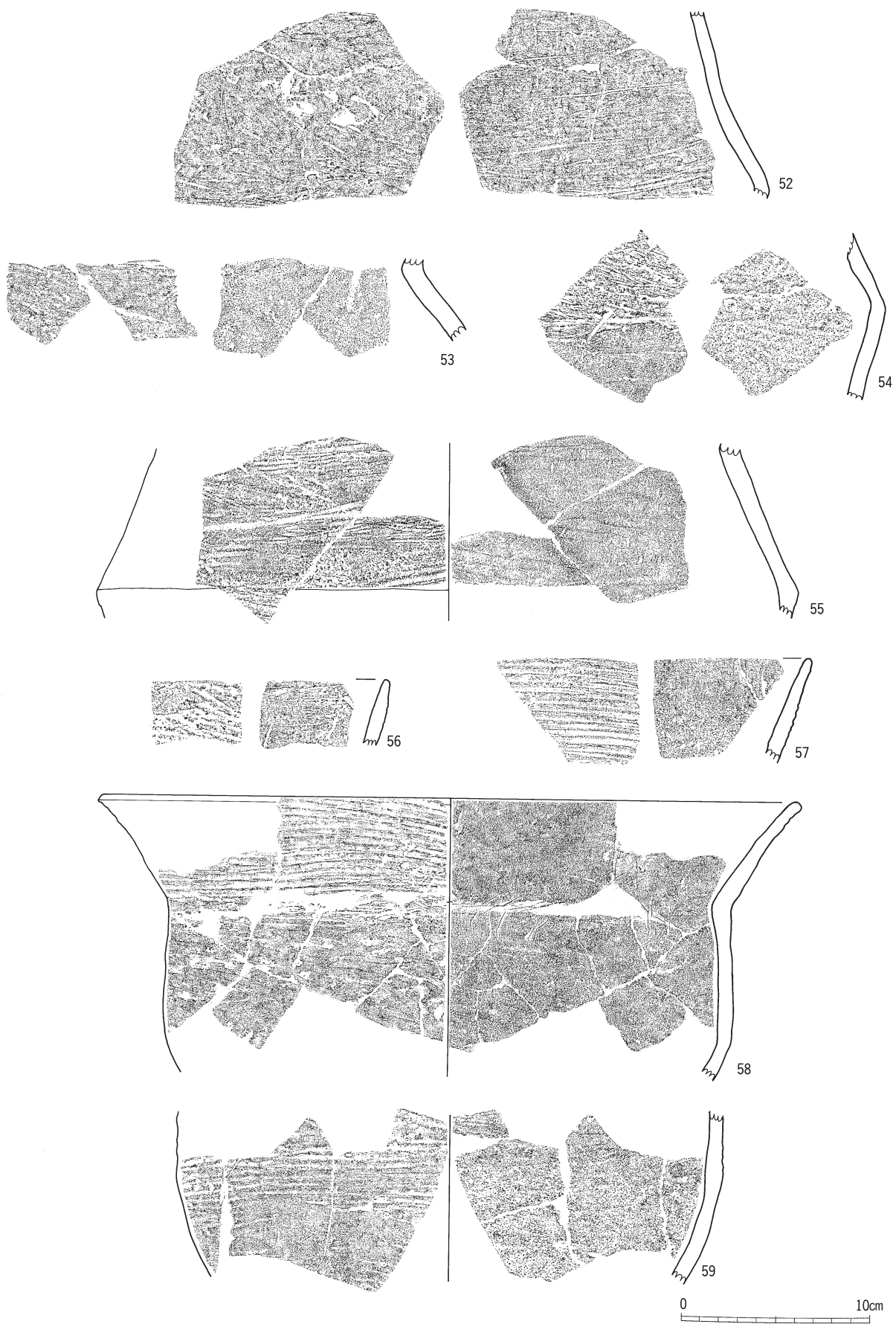
第20図 III層遺物出土状況拡大図(2)



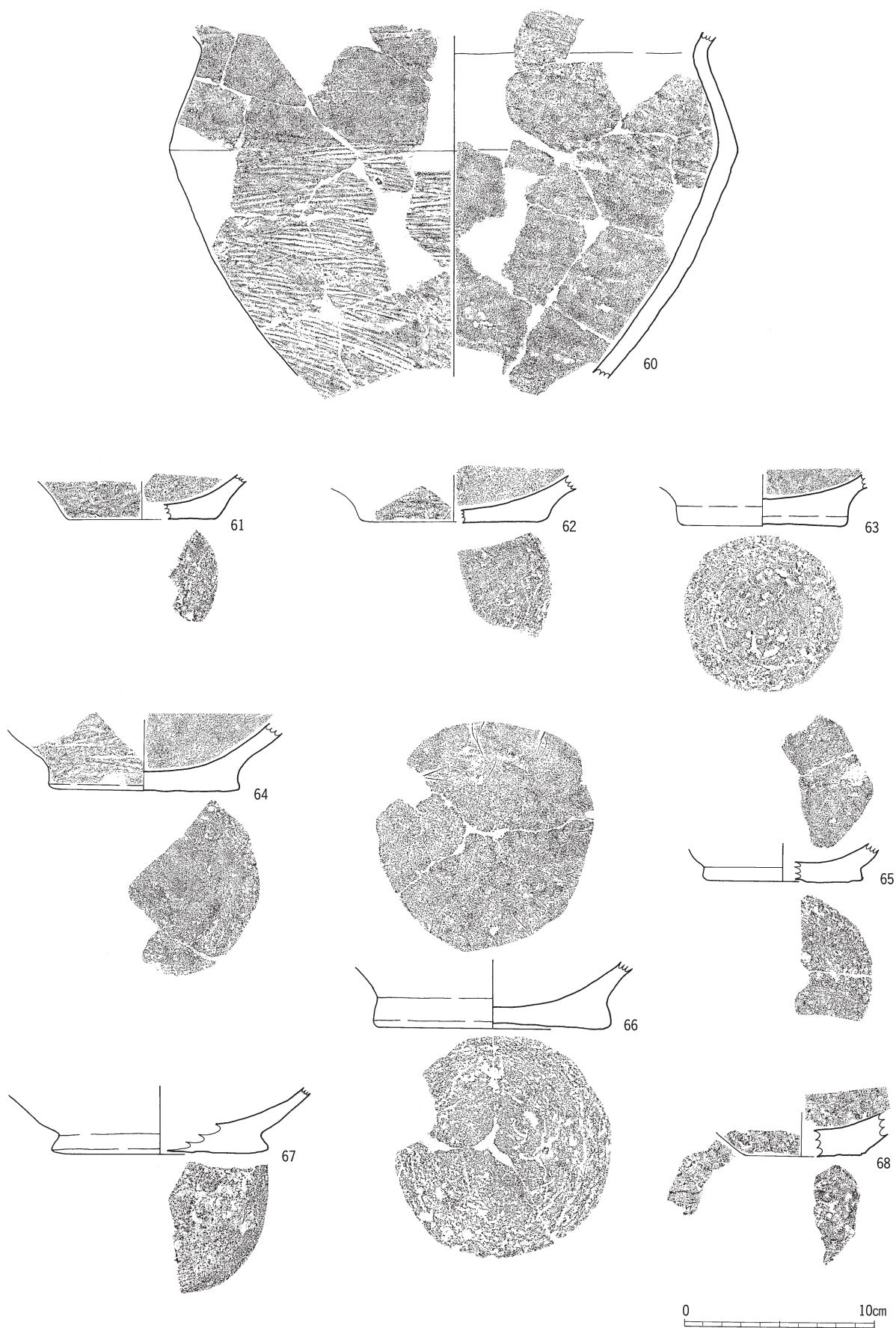
第21図 縄文時代晩期土器（1）



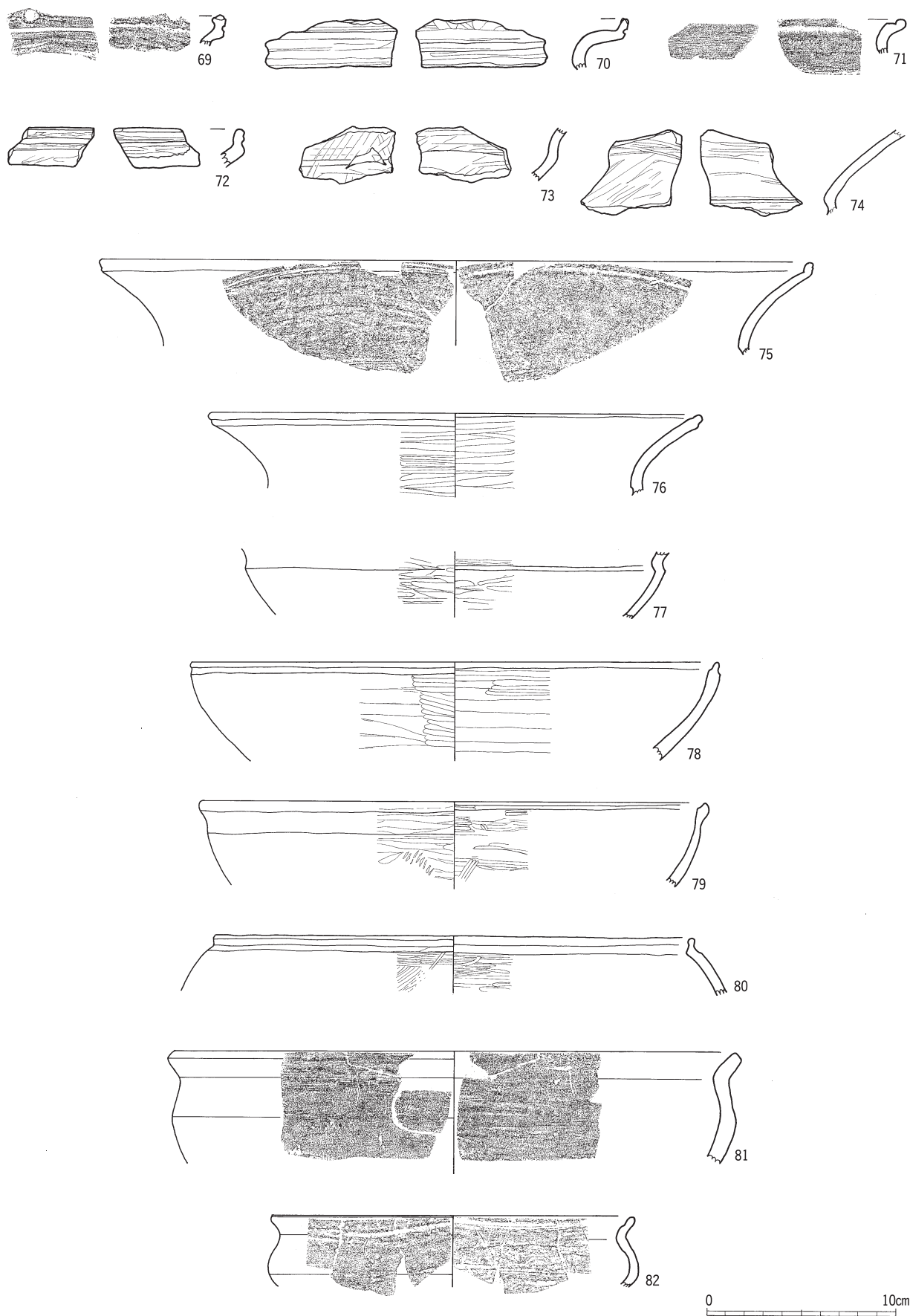
第22図 縄文時代晩期土器（2）



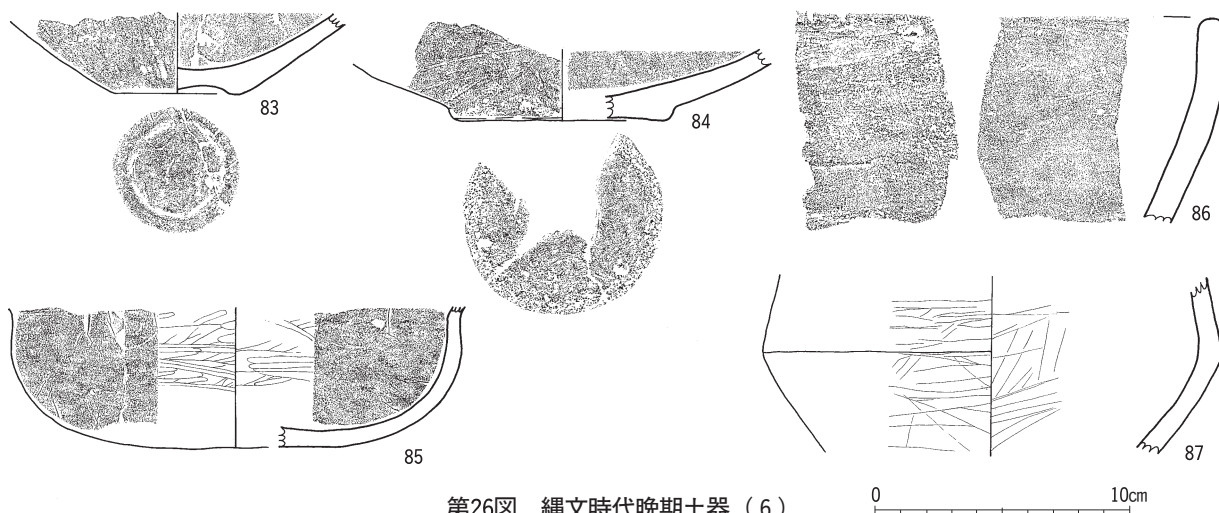
第23図 縄文時代晩期土器（3）



第24図 縄文時代晩期土器（4）



第25図 縄文時代晩期土器（5）



第26図 縄文時代晩期土器（6）

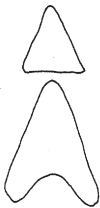
第10表 縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
				内	外	石英	長石	燧石	その他				
21	41	J-10	Ⅲ	灰黄褐色	褐灰色	○	○	○	礫少量	良	ナデ 凹線	ナデ	
	42	E-18	Ⅲ	橙色	黄橙色	○	○	○		良	ナデ 凹線	ナデ	
	43	F-4	Ⅲ	にぶい赤褐色	にぶい橙色	○	○	○		良	ナデ 凹線	ナデ	
	44		Ⅲ	灰黄褐色	灰白色	○	○	○	砂少い	良	条傷文	ナデ	
	45	J-10	Ⅲ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	ていねいなナデ	ナデ	
	46	C-13	Ⅲ	明赤褐色	灰黄褐色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	47	B-13	Ⅲ	にぶい褐色	灰黄褐色	○	○	○	砂多め	普	ナデ 沈線文	ナデ	
	48	C-12	Ⅲ	にぶい赤褐色	橙色	○	○	○	礫少量	良	ナデ 沈線文	ナデ	
	49	C-13	Ⅲ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	50	T-10	Ⅲ	橙色	橙色	○	○			良	ナデ 炭化物付着	ナデ	
22	51	CD-13/14	Ⅲ	橙色	橙色	○	○		礫少量	良	条痕 ケズリ ナデ	ナデ	復元
	52	R-8	Ⅲ	赤褐色	灰褐色	○	○		礫少量	良	ケズリ ナデ	ナデ	
	53	D-13	Ⅲ	褐灰色	灰黄色	○	○		礫少量	良	ナデ	ナデ	
	54	E-14	Ⅲ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		良	ケズリ ナデ	ナデ	
	55	E-17	Ⅲ	褐灰色	褐灰色	○	○	○		良	ケズリ	ナデ ミガキ	
	56	Q-5	Ⅲ	暗褐色	黒褐色	○	○	○		良	条痕 炭化物付着	ナデ	
	57	U-9	Ⅲ	橙色	黄灰色	○	○		礫少量	良	条痕	ナデ	
	58	C-15	Ⅲ	灰褐色	にぶい橙色	○	○		雲母	良	細いケズリ ナデ ミガキ	ナデ	
	59	C-12	Ⅲ	にぶい橙色	灰黄色	○	○			普	条痕 ナデ	ナデ	
24	60	BC-13	Ⅲ	明赤褐色	にぶい橙色	○	○	○	礫少量	良	条痕 ナデ	ナデ	
	61	F-10	Ⅲ	浅黄橙色	浅黄橙色	○	○	○	礫多量	良	ナデ	ナデ	
	62	S-4	Ⅲ	橙色	褐灰色	○	○	○	雲母	良	ナデ	ナデ	
	63	B-13	Ⅲ	明黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	64	R-3土	Ⅲ	橙色	橙色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	65	C-14	Ⅲ	にぶい赤褐色	褐灰色	○	○	○	礫多量	良	ナデ	ナデ	
	66	S-4	Ⅲ	にぶい黄褐色	褐灰色	○	○	○	礫少量	普	ナデ	ナデ	
	67		Ⅲ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		良	ナデ	ていねいなナデ	
	68	R-4	Ⅲ	にぶい赤褐色	褐灰色	○	○	○	礫少量	良	粗いケズリ	ナデ	
	69		Ⅲ	にぶい橙色	褐灰色	○	○	○		良	ナデ 凹線 口唇突起 凹み	ナデ	
25	70	L-15	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい橙色	○	○			良	ナデ ミガキ 凹線 凹み	ナデ ミガキ	
	71	D-15	Ⅲ	橙色	橙色	○	○			良	ナデ ミガキ	ミガキ	
	72		Ⅲ	灰褐色	にぶい赤褐色	○	○	○		優	ミガキ 凹線	ミガキ	
	73	R-9	Ⅲ	褐灰色	灰褐色	○	○	○		優	ミガキ	ミガキ	
	74	B-13	Ⅲ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	75	S-5	Ⅲ	灰褐色	灰褐色	○	○	○		良	ナデ ミガキ 凹線	ミガキ	
	76	U-9	Ⅲ	にぶい橙色	黒色	○	○	○		良	ミガキ 凹線	ミガキ	
	77	C-13	Ⅲ	褐灰色	褐灰色	○	○	○	礫少量	良	ミガキ	ミガキ	
	78	C-12	Ⅲ	灰黄褐色	黒褐色	○	○			良	ミガキ 凹線	ミガキ 凹線	
	79	C-12	Ⅲ	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○	○	○		良	ミガキ 凹線	ミガキ 凹線	
	80	M-14	Ⅲ	黒色	黒色	○	○		砂少い	良	ミガキ	ミガキ	
	81	C-14	Ⅲ	浅黄色	灰褐色	○	○		砂少い	普	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	
26	82	G-10	Ⅲ	灰褐色	褐灰色	○	○	○	砂少い	良	ミガキ	ケズリ ミガキ	
	83	C-12	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	礫少量	良	ミガキ	ミガキ	
	84	S-11	Ⅲ	にぶい褐色	黒褐色	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	85		Ⅲ	灰白色	黄灰色	○	○	○	礫少量	良	ミガキ	ミガキ	
	86	C-14	Ⅲ	にぶい橙色	褐灰色	○	○	○	礫少量	良	ナデ	ナデ	
	87	H-10	Ⅲ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			良	ミガキ	ミガキ	

4 Ⅲ層出土の石器（第28～33図）

Ⅲ層から縄文時代前期から晩期までの土器が出土したが、石器に関してはその属性ははっきりしない。出土土器は縄文時代晩期の土器量が圧倒的に多かった。遺構も晩期の遺構が多かった。このことから、石器の多くが晩期の可能性が高い。

88～122は石鏃である。形状については、下記の表により分類している。

	A (ほぼ三角形)	B (ほぼ五角形)	C (ほぼ丸形)	
形 状				
	a (1～1.5: ほぼ正三角形)	b (1.5～2: ほぼ二等辺三角形)	c (2 以上: 縦長)	
長幅比 (長さ÷幅)				
	a (平坦)	b (浅い)	c (深い)	d (U字状)
基 部				

第27図 石鏃分類図

A-a-a 類

88～92が該当する。長幅比 1～1.5で形状がほぼ正三角形を呈し、平坦な基部である。

A-a-b 類

93～100が該当する。長幅比 1～1.5で形状がほぼ正三角形で、基部に浅い抉りが施されているものである。

A-a-c 類

101～103が該当する。長幅比 1～1.5で形状がほぼ正三角形で、基部に深い抉りが施されているもので

ある。

A-a-d 類

104～108が該当する。長幅比 1～1.5で形状がほぼ正三角形で、U字の抉りが施されているものである。

A-b-c 類

109～115が該当する。長幅比 1.5～2で形状がほぼ二等辺三角形を呈する。深い抉りが施されているものである。

B 類

B類は五角形をなすものである。116～119が該当する。更に基部に抉りが無いもの116・117とあるものの118と119に分けられる。

その他

120～122はその他とした。全体的に幅が短く・長身のものである。

123～129は磨製石斧である。123と124は刃部の形状が蛤状に整形され、きれいに磨かれている。刃部以外は敲打により調整されており、その後研磨されている。125と126は刃部が欠損していて、その他の部分は敲打により整形されている。123はその後研磨されている。127～129は小型の磨製石斧である。127は刃部が欠損しているが共に全体的に研磨されている。129はおそらく未製品であろうと思われる。

130～132は打製石斧である。130は有肩形の形状をなす。131は欠損品である。132は未製品と思われる。

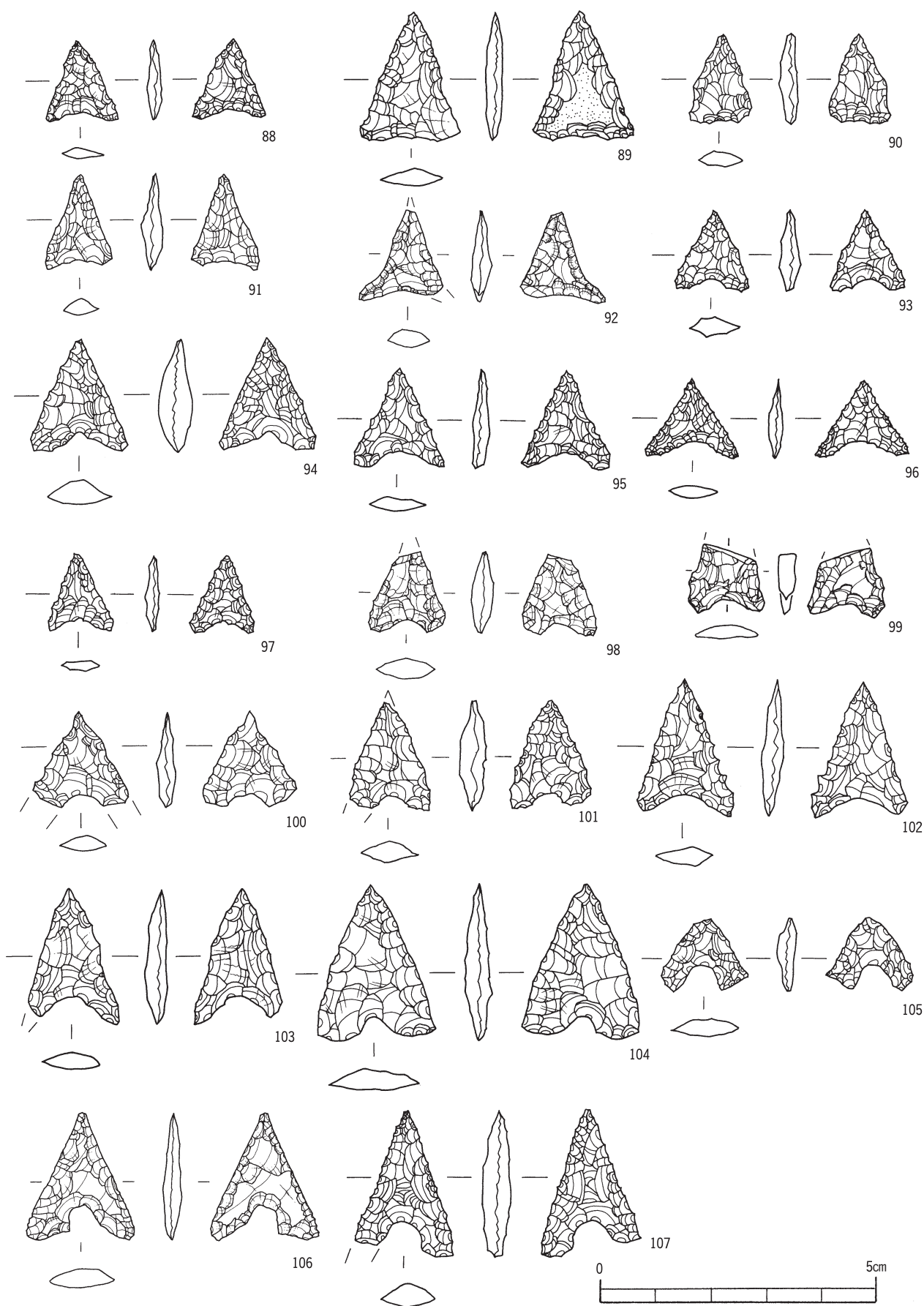
133は局部磨製石斧であろうと思われる。刃部付近は磨かれているが、基部周辺は剥離されているだけである。

134は形状から考えると石鏃の可能性が考えられる。

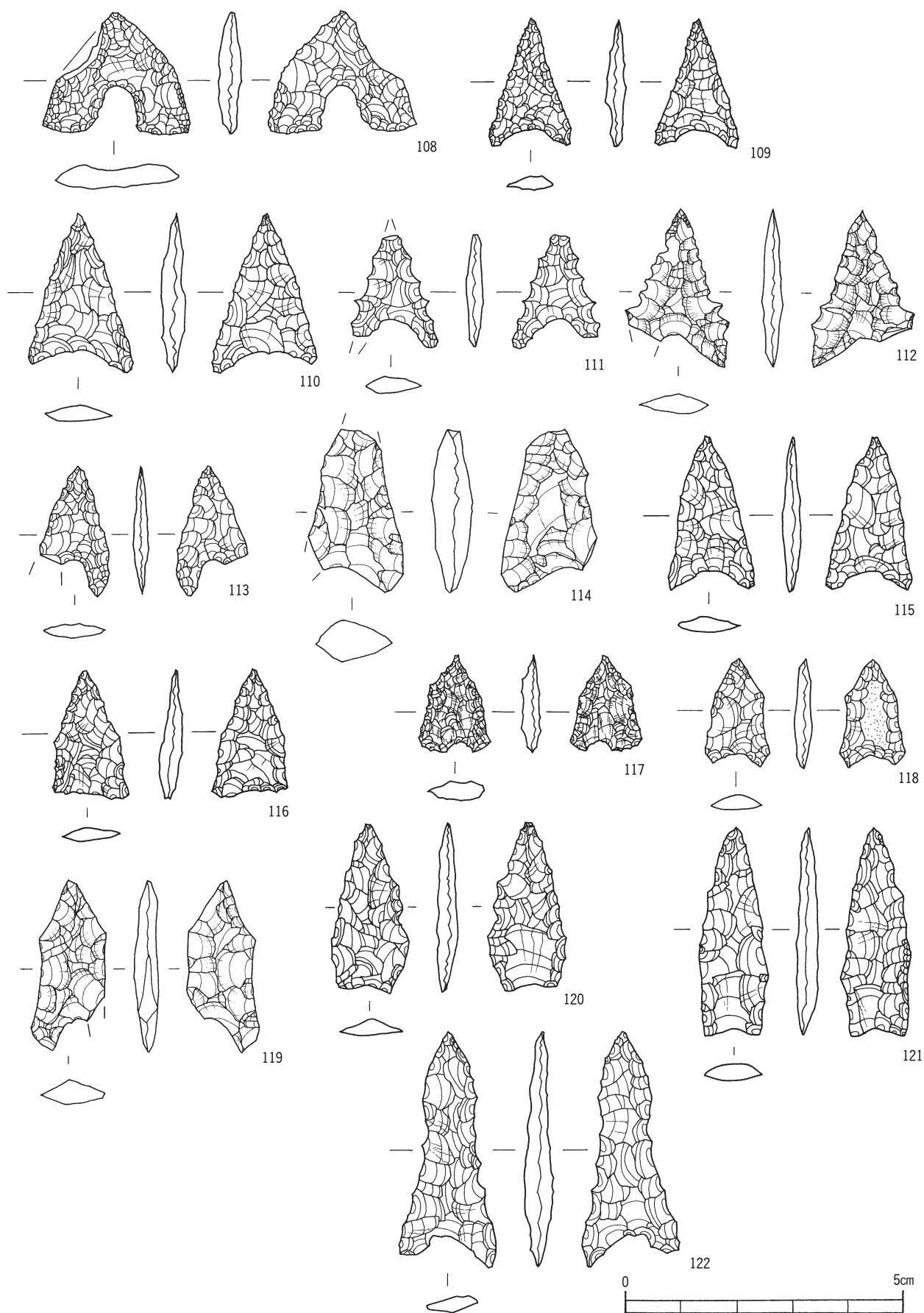
135～140は礫器に該当すると考えられる。いずれも自然面を多く残す礫を素材とするものである。下面あるいは下面と側面に粗い剥離がみられる。

141～143は磨石・敲石である。全体的にあるいは部分的に磨面を有し、平坦面や側面に敲打痕がみられる。

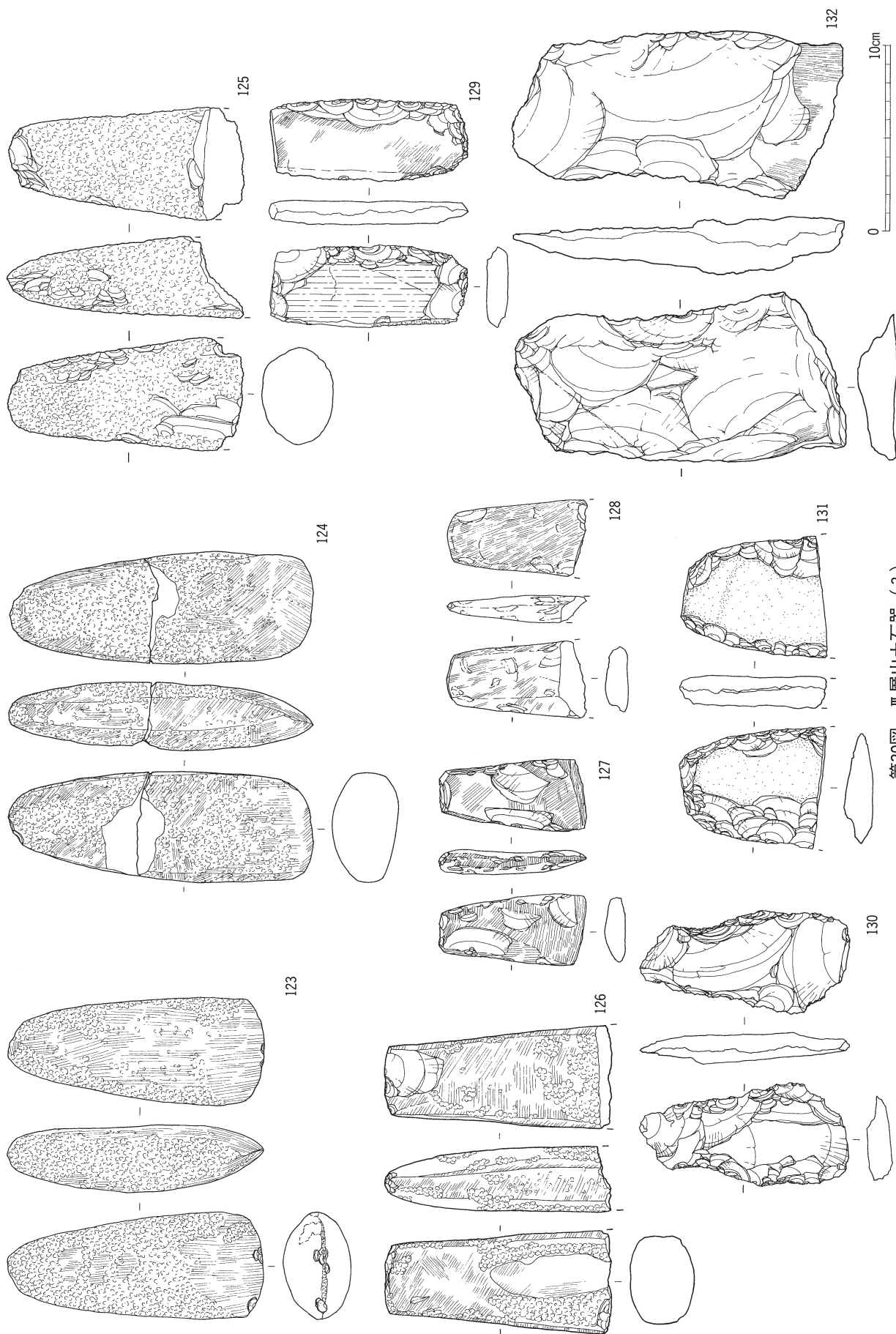
144・145は装飾品と考えられる。144は垂飾であろう。145は塊状耳飾りと思われる。



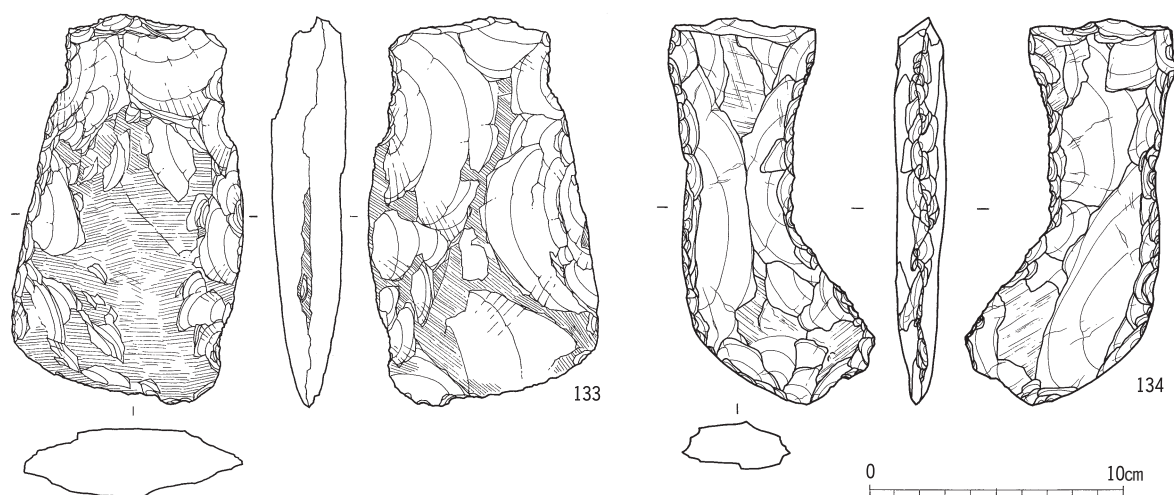
第28图 Ⅲ層出土石器（1）



第29图 Ⅲ層出土石器（2）



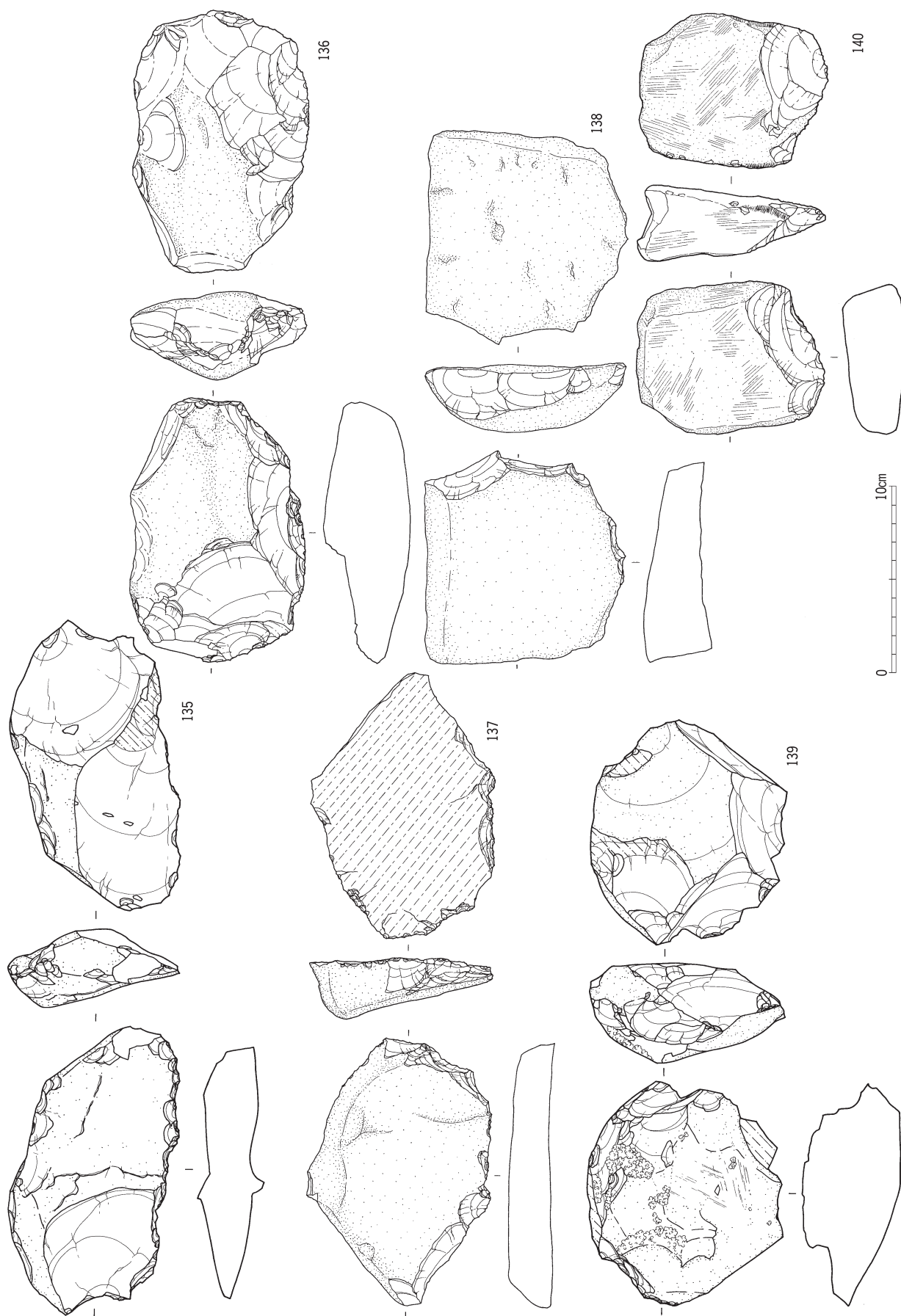
第30图 Ⅲ 层出土石器 (3)



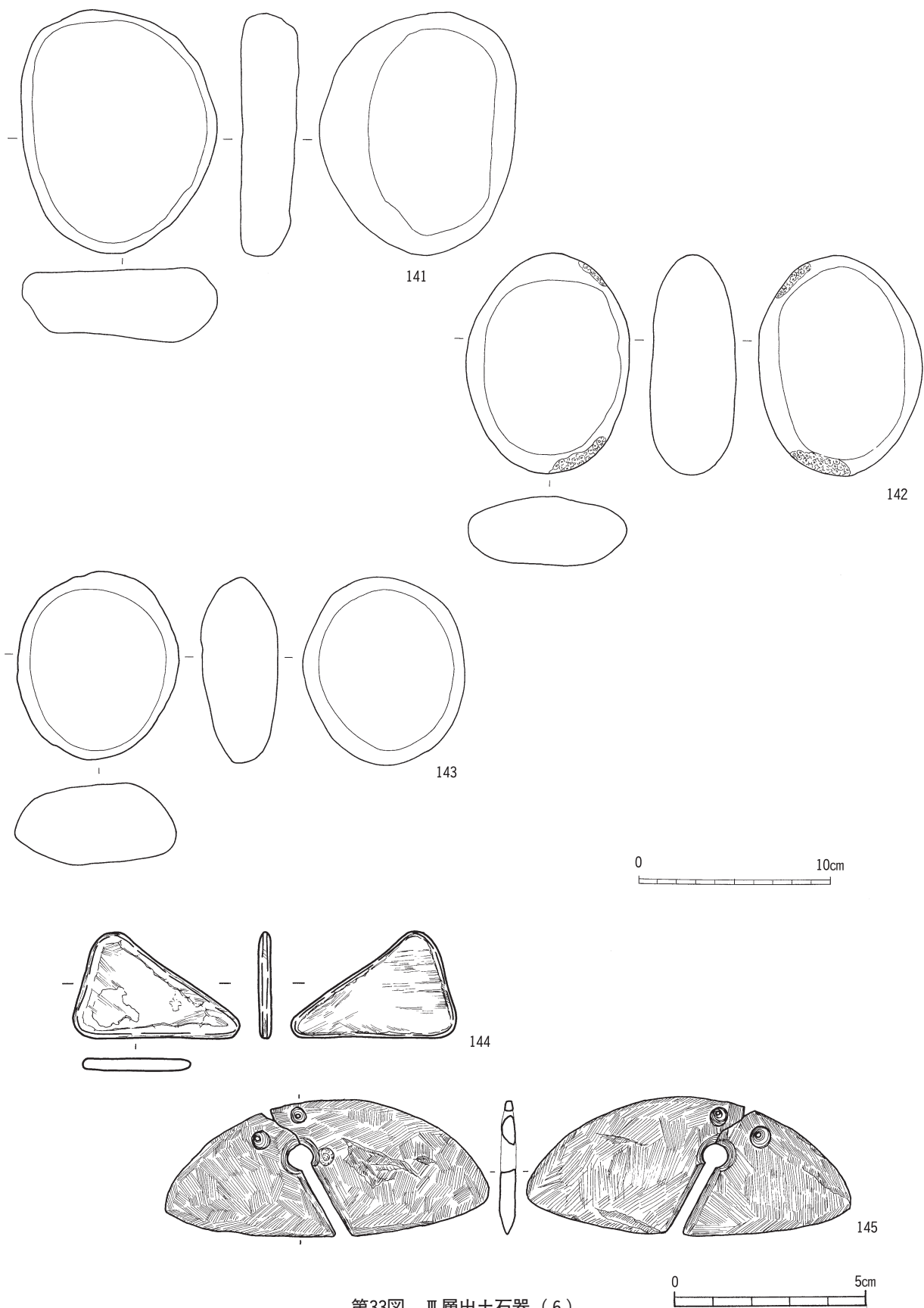
第31図 III層出土石器（4）

第11表 III層出土石器観察表

挿図 番号	遺物番号	層位	器 種	出土区	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
						cm	cm	cm	g	
28	88	III	石鏃	D-16	黒曜石	1.4	0.8	0.2	0.31	
	89	III	石鏃	E-13	鉄石英	2.3	1.8	0.3	1.16	
	90	III	石鏃	T-4	黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.5	
	91	III	石鏃	F-11	頁岩	1.7	1.2	0.3	0.55	
	92	III	石鏃	R-3	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.44	
	93	表採	石鏃		チャート	1.5	1.8	0.4	0.45	
	94	III	石鏃	U-9	黒曜石	2	1.8	0.5	1.38	
	95	III	石鏃	H-13	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.58	
	96	III	石鏃	J-10	黒曜石	1.4	1.7	0.3	0.32	
	97	III	石鏃	D-14	チャート	1.4	1.2	0.2	0.28	
	98	III	石鏃	C-12	チャート	1.5	1.4	0.4	0.59	
	99	表採	石鏃		チャート	1.1	1.4	0.3	0.56	
	100	III	石鏃	S-4	黒曜石	1.7	1.8	0.3	0.56	
	101	III	石鏃	J-10	黒曜石	2	1.5	0.4	0.99	
	102	III	石鏃	E-14	頁岩	2.4	1.8	0.4	1	
	103	III	石鏃	E-16	頁岩	2.4	1.6	0.3	1.19	
	104	III	石鏃	D-14	黒曜石	2.8	2.2	0.4	1.85	
	105	III	石鏃	F-15	黒曜石	1.3	1.6	0.3	0.47	
29	106	III	石鏃	S-4	鉄石英	2.4	2	0.4	0.91	
	107	III	石鏃	E-13	黒曜石	2.7	1.8	0.4	1.35	
	108	III	石鏃	C-14	黒曜石	1.7	2.7	0.4	1.85	
	109	III	石鏃	C-13	頁岩	2.3	1.5	0.3	0.72	
	110	III	石鏃	U-8	頁岩	2.9	1.9	0.4	1.56	
	111	III	石鏃	E-15	チャート	2	1.5	0.3	0.6	
	112	III	石鏃	S-4	黒曜石	2.9	1.7	0.4	1.15	
	113	III	石鏃	U-8	黒曜石	2.3	1.3	0.2	0.42	
	114	III	石鏃	C-13	チャート	2	1.7	0.8	3.02	
	115	III	石鏃	F-14	頁岩	2.8	1.6	0.3	1.06	
	116	III	石鏃	S-11	チャート	2.3	1.4	0.3	1.12	
	117	III	石鏃	F-14	黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.73	
	118	III	石鏃	C-13	チャート	1.9	1.3	0.3	0.64	
	119	III	石鏃	F-14	チャート	3.1	1.2	0.5	1.59	
	120	III	石鏃	C-13	チャート	3.1	1.4	0.3	1.36	
	121	III	石鏃	F-16	チャート	3.7	1.2	0.3	1.59	
	122	III	石鏃	C-13	頁岩	4.2	1.8	0.3	2.03	
30	123	表採	石斧		花崗岩	13.9	5.8	3.6	402	
	124	III	石斧	G-10	花崗岩	16.4	6	3.6	528	
	125	III	石斧	トレンチ	花崗岩	12.7	6.1	4.5	405	
	126	表採	石斧		花崗岩	12.2	5.6	3.5	382	
	127	III	石斧	E-14	頁岩	7.9	3.9	1.3	61	
	128	III	石斧	C-13	頁岩	7.5	4.1	1.5	62	
	129	III	石斧	トレンチ	安山岩	10.7	4.5	1.2	105	
	130	表採	石斧		頁岩	11.3	5.6	1.5	93	
	131	表採	石斧		頁岩	7.9	6.5	1.8	122	
	132	III	石斧	Q-3	頁岩	17.8	9	2.9	391	
31	133	III	石斧	J-10	頁岩	15.3	9.1	2.9	462	
	134	III	石斧	トレンチ	頁岩	10.1	4.7	1.2	62	
	135	III	礫器	E-13	頁岩	8.1	14.7	3.5	480	
32	136	III	礫器	トレンチ	頁岩	9.4	14.2	4.1	726	
	137	表採	礫器		ホルンフェルス	9.8	14.4	3.1	430	
	138	III	礫器	トレンチ	頁岩	10.8	11.5	3.7	598	
	139	III	礫器	U-9	安山岩	10.5	12.1	5.3	735	
	140	III	礫器	S-12	安山岩	10	8.3	4.1	411	
33	141	III	磨石	H-10	花崗岩	12.6	10.3	3.1	780	
	142	III	磨石	E-14	安山岩	11.5	8.5	4.6	720	
	143	III	磨石	F-15	花崗岩	9.8	8.5	4.1	567	
	144	III	垂飾？	D-15	頁岩	2.8	4.3	0.4	5.46	
	145	III	袂状耳飾り	C-14	蛇紋岩	3.6	8.5	0.5	10	



第32図 Ⅲ層出土石器（5）



第33図 Ⅲ層出土石器（6）

5 弥生時代以降の調査

弥生時代以降の包含層はⅡ層にあたるが、その多くが後世の開発・圃場整備等により削平されていた。そのため、遺物はほとんど出土しなかった。わずかに残っていたⅡ層から弥生時代の土器片と土師器が数点出土した。

包含層は削平を受けていたが、Ⅲ層面から該当期の遺構が検出された。埋土の違いにより縄文時代晩期とそれ以降とに区別した。

(1) 遺構 (第35図)

検出された遺構は、溝状遺構8条・道跡遺構4本を検出した。

①溝状遺構

溝状遺構については、掘り込み面は浅く幅も広くなかった。埋土の色は、中世に該当する黒色とは異なり、薄い黒色であった。わずかに残存する圃場整備以前の旧耕作土に該当すると思われる。

②道跡遺構

圃場整備以前に神社への参道及び参道への脇道として使用されていた道のようなものである。圃場整備に伴

い、区画が変わったため埋められたようである。硬化面もしっかり残存していた。

(2) 遺物 (第34図)

前述のとおり、大部分の包含層が開発により削平を受けており、出土した遺物もわずかであった。また、細片も多く図化できるものも少なかった。

XV類土器

XV類は弥生時代の土器である。146は甕形土器の口縁部である。口縁部はやや下がり気味である。内外面ともへら状工具により調整されている。147は口縁部近辺の部位であろうと思われる。胴部に2条の浅い沈線が巡らされている。

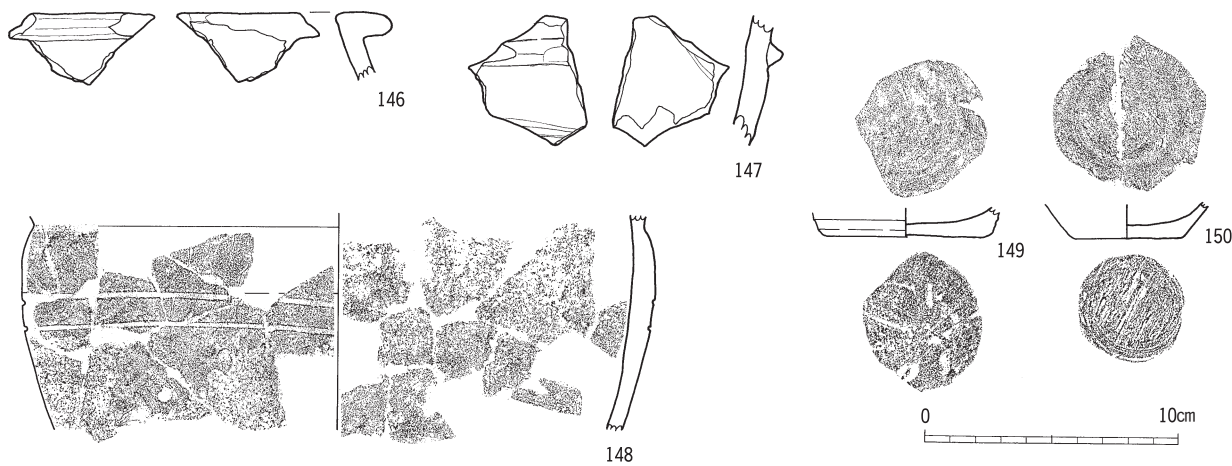
XVI類土器

XVI類土器は古墳時代の土器である。甕形土器の口縁部付近である。図化できたのは1点だけであった。胴部に突帯文が巡らされている。

XVII類土器

XVII類土器は土師器である。149・150共に小皿である。底部はへら切りの形態をなす。

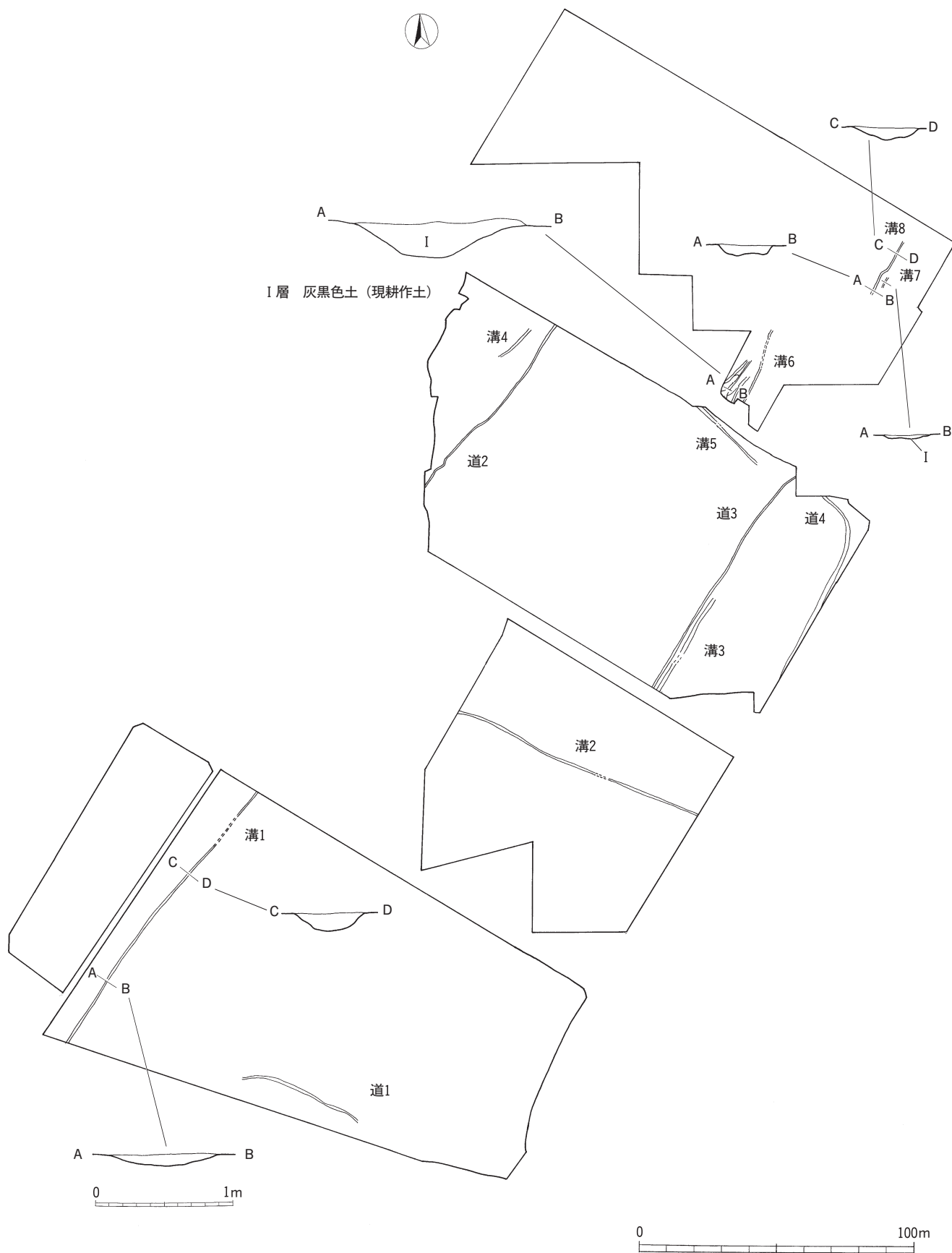
石器は、図化できるようなものはなかった。



第34図 弥生時代以降土器

第12表 弥生時代以降土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
				内	外	石英	長石	燐石	その他				
34	146	C-14	Ⅱ	暗赤褐色	暗赤褐色	○			精緻	良	ナデ	ナデ	
	147	S-9	Ⅱ	暗赤褐色	暗赤褐色	○				良	ナデ 沈線	ナデ	
	148	C-14	Ⅱ	暗褐色	黒色	○				良	ナデ	ナデ	
	149		Ⅱ	明黄白色	明黄白色					精微	ナデ	ナデ	
	150		Ⅱ	明黄白色	明黄白色					精微	ナデ	ナデ	



第35図 近世～現代遺構配置図

第3節 小結

大門口遺跡も畑地造成のための調査であったので、縄文時代早期に関しては一部分本調査（道路拡幅部分）及び確認調査での調査であったので、遺構もなく、出土遺物も少なかった。

発掘調査の中心はⅢ層の調査であった。縄文時代前期から縄文時代晩期までの遺物が出土した。

また、Ⅲ層上面で縄文時代晩期から近世にかけての遺構も検出された。晩期の遺構とそれ以外は埋土の違いにより区別した。

1 縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は検出されなかった。この時期に関しては前述のとおり、造成の関係で発掘調査面積が狭かったため遺物も少なかった。

確認調査の結果では、南側に関しては、トレンチからの出土はほとんどなかったことから、遺跡は諏訪牟田遺跡に接する北側に存在するものと思われる。ただし、トレンチ調査・一部の本調査の結果から見ると、広い範囲になる可能性は低い。

出土した土器はⅠ類からⅤ類まで分類した。Ⅰ類は、破片が多く、図化できたのは1点だけであった。早期前葉に位置づけられている前平式土器であろうと思われる。

Ⅱ類土器が縄文時代早期の中で一番多く出土した土器である。口唇部に浅い刻み目を施し、口縁部下に貝殻による刺突が施され、胴部には綾杉状の貝殻条痕文が巡らされている。早期中葉に位置づけられている石坂式土器に該当する。

Ⅲ類からⅤ類の土器は出土した量も少なく、図化できる土器も少なかった。Ⅲ類は下剝峯式土器、Ⅳ類は桑ノ丸式土器、Ⅴ類土器は押型文土器に該当するものと思われる。いずれの土器も早期中葉に位置づけられている。

2 縄文時代前期から後期

該当期の遺物は少量ではあるが全時期にわたり土器片が出土している。該当期の明確な遺構は検出されなかった。

Ⅵ類土器は連点状の模様を施文していることから深浦式土器に該当すると思われる。深浦式土器に関

しては、時期・形態等に関し様々な提唱がされている。時期に関しては、従来前期末といわれてきたが、中期前半まで下る可能性も指摘され、型式の細分化も提唱されている。

Ⅶ類土器は春日式土器であろう。春日式土器に関しては、早期中葉に設定されている。26がキャリパー形の形態をなす可能性があることから、春日式土器の中でもやや前半に位置づけすることができると思われる。

Ⅷ類土器は中期後半に設定されている並木式土器に比定される。滑石を含むのが特色である。

Ⅸ類土器は南福寺式土器であろうと思われる。太い凹線や施文等は南福寺式土器の特色であるが、胎土からは在地化した傾向が見られる。

Ⅹ類土器は口縁部付近が肥厚し、文様帯を構成することから市来式土器の範疇として捉えた。32は口縁部の文様帯の狭さから松山式の可能性もある。33は口縁部形態からは古手に見えるが、底部の形態が丸みを帯びることから、鹿児島市の草野貝塚出土の土器に類似することから草野式土器の可能性も考えられる。34は口縁部自体が肥厚ではなく口縁部下が帯状に肥厚することから丸尾式土器の可能性もある。

Ⅺ類土器は磨消縄文の文様を特色とし、断面が「く」の字になることから西平式土器に比定される。

Ⅻ類土器は底部で型式不明である。底部が網代底にみえることから、後期の範疇とした。

3 縄文時代晩期の調査

該当期に関しては、遺構・遺物の発見数・量ともに他の時期とは比べものにならないほど多かった。

遺構としては、土坑5基・掘立柱建物跡14棟・柱列30を検出した。土坑は全体的な形状は楕円形もしくは円形の形状をなす。1号土坑以外は土器が出土しないか、少量出土する土坑である。1号土坑以外の土器は埋土の中程から上位の位置で検出されていることや実測できないほどの細片であったことから、流れ込みの可能性もある。

性格については、不明である。隣接地に住居跡・埋設土器などが検出された諏訪牟田・諏訪前遺跡が存在するので、両遺跡との関連を考えなければなら

ないと思う。

本遺跡においても、市堀遺跡同様に1間×1間の掘立柱建物跡・柱列を検出した。性格等についてはよくわからない。

遺構・遺物共に、北側の諏訪前遺跡・南側の市堀遺跡周辺に多くみられ、その間には遺構・遺物はあまりみられなかった。

この時期の土器は、Ⅲ類（粗製土器）とⅣ類（精製土器）に分類したが、既存の型式名では上加世田式～入佐式土器に該当する。特徴の変化は暫時的で、徐々に変化していく様子が見て取れる。特に入佐式土器から黒川式土器への移行期に当たるものと思われる土器は、今後の土器編年を考える上で重要である。精製土器については、研究者によって見解に相違があるが、小型土器の資料を加える事ができた。時期的にかなり幅があるが、全体に出土量は少な目である。ほとんどが破片で、完形復元できたのは1点にすぎない。深鉢形土器の中には外面に炭化物が付着したものもあるが、はっきりした焼土が無いことも考えると、長期的に継続した生活が営まれた所ではないと考えられる。

Ⅲ層出土の石器は、該当時期が縄文時代前期から晩期まで範疇に含まれるため、時代の決定ができなかった。

完形品の石鏃の数が多かったことを考えると、前期から晩期にかけてのいずれかの時期に「狩り場」として活用されていた可能性がある。晩期に関しては、近くで住居跡や埋設土器が検出された諏訪牟田・諏訪前・諏訪脇遺跡があり、また本遺跡においても土坑等が検出されていることから、「狩り場」とは考えにくい。ゆえに、石鏃の多くは前期から後期の時期に該当するのではないかと考える。石斧（磨製・打製）・磨石などは、生活に関する道具なので晩期に所属する可能性が高い。

4 弥生時代以降

弥生時代以降の調査は包含層の多くが、開発等により削除されていたため、遺物の出土は少なかった。また、出土した遺物も破片が多かった。

遺構に関しては、近・現代の遺構ではないかと思

われる溝・道跡が検出された。発掘作業員の話によると特に北側の道跡は圃場整備が行われるまで、神社への参道として使用されていたようである。他の道跡はすべて参道の方向につながるため、脇道と判断した。圃場整備により区画が変わったため埋められたと思われる。

また、溝状遺構に関しては埋土がⅠ層とした旧耕作土（残存状況はよくない）に類似することから古くても近世の時期ではないかと考えられる。

Ⅴ類土器は弥生時代の土器である。甕口縁部の傾き及び胴部の細沈線から入来式土器ではないかと思われる。

Ⅵ類土器は古墳時代の土器であるが、時期的なものは不明である。

Ⅶ類土器は土師器である。ヘラ切りの技法を使用していることから古代の時期に該当すると思われる。

参考文献

- 高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）「江内貝塚」1992年
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（22）「干迫遺跡」1997年
加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）「上加世田遺跡Ⅰ」1985年
加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）「上加世田遺跡Ⅱ」1987年
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（44）「榎木原遺跡」1987年
鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（83）農業開発総合センター遺跡群 2005年
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）大坪遺跡 2005年
黒川忠広「南九州貝殻文系土器Ⅰ」鹿児島県「南九州縄文研究会」2002年
東和幸「九州地方 中期（春日式）縄文時代10 第2分冊 土器形式編年研究（2）」1999年
相美伊久雄「深浦式系土器の再検討」人類史研究12 2000年
堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討・入佐式と黒川式の細分」 鹿児島考古31号 鹿児島県考古学会 1997年

付

編

鹿児島県，農業センター遺跡群における
自然科学分析

I．農業センター遺跡群から出土した木材および炭化材の樹種同定

1．試料

試料は，大門口遺跡から出土した炭化材 1 点，および馬塚松遺跡から出土した炭化材 3 点と木材（樹根）1 点の合計 5 点である。試料の詳細を表 1 に示す。

2．方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面，放射断面，接線断面）を作製し，生物顕微鏡によって 60～600 倍で観察した。炭化材は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面，放射断面，接線断面）を作製し，落射顕微鏡によって 75～750 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結果

結果を表 1 に示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表 1 農業センター遺跡群出土試料の樹種同定結果

遺跡名・遺構	試料	備考	樹種（和名／学名）
大門口遺跡			
ピット内	炭化物	縄文時代晩期	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
馬塚松遺跡			
竪穴遺構内	炭化物①	鎌倉時代	散孔材 <i>diffuse-porous wood</i>
竪穴遺構内	炭化物②	鎌倉時代	クスノキ科 <i>Lauraceae</i>
竪穴遺構内	炭化物③	鎌倉時代	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
道跡脇	木材（樹根）	江戸時代	ヤマハゼ <i>Rhus sylvstris</i> Sieb. et Zucc.

a. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版 1

横断面：中型から大型の道管が，1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

b. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版 2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が，1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が，単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

c. クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。

放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シログモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭なことから、クスノキ科の同定にとどめた。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

d. ヤマハゼ *Rhus sylvstris* Sieb. et Zucc. ウルシ科 図版 3

横断面：やや小型で厚壁の丸い道管が、単独および2～数個おもに放射方向に複合して散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部に直立細胞があらわれ、1～2細胞幅である。

e. 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：多列の放射組織が存在する。

炭化物①は、保存状態が悪く広範囲の観察ができないことから、散孔材の同定にとどめた。

4. 考察

大門口遺跡の縄文時代晩期とされるピット(柱穴)内の炭化材は、コナラ属アカガシ亜属と同定された。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、

アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布している。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。照葉樹林の主要高木である。

馬塚松遺跡の14世紀とされる竪穴遺構から出土した炭化材は、散孔材、クスノキ科、コナラ属クヌギ節と同定された。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布している。落葉高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。クスノキ科は照葉樹林の主要高木である。

馬塚松遺跡の江戸時代とされる道跡脇から出土した材は、ヤマハゼと同定された。ヤマハゼは、関東以西の本州、四国、九州に分布する落葉の小高木である。

文献

佐伯浩・原田浩(1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

Ⅱ. 農業センター遺跡群における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

次ページ表

2. 測定結果

次ページ表

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年 AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

農業センター遺跡群出土木材及び炭化材の顕微鏡写真



横断面 ————— : 0.4 mm

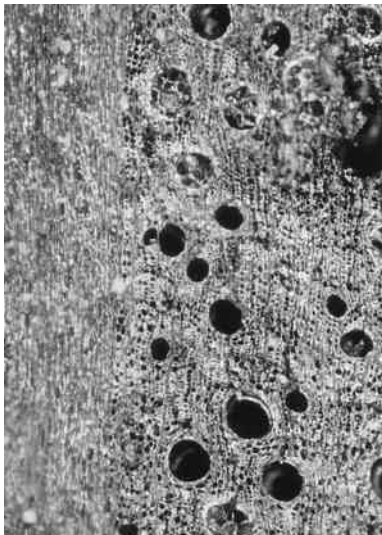


放射断面 ————— : 0.2 mm



接線断面 ————— : 0.4 mm

1. 大門口遺跡 ピット (柱穴) 内炭化物 コナラ属アカガシ亜属



横断面 ————— : 0.4 mm



放射断面 ————— : 0.2 mm

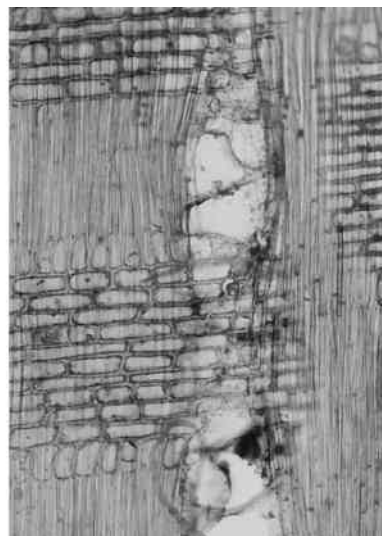


接線断面 ————— : 0.4 mm

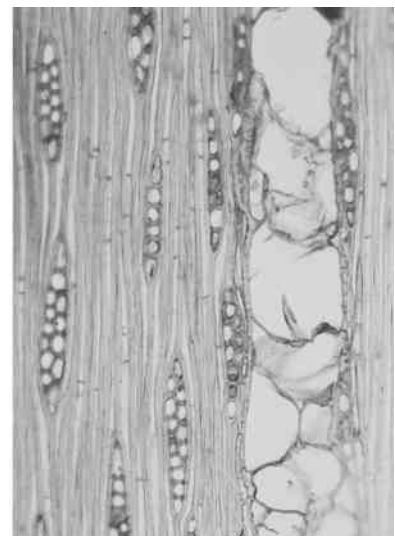
2. 馬塚松遺跡 縦穴遺構出土炭化物③ コナラ属クヌギ節



横断面 ————— : 0.2 mm



放射断面 ————— : 0.2 mm



接線断面 ————— : 0.2 mm

3. 馬塚松遺跡 道跡脇出土生材 ヤマハゼ

Ⅱ．農業センター遺跡群における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	大門口遺跡，ピット内	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.2	馬塚松遺跡，竪穴1床面	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No. (Beta-)
No.1	3020 $\pm$ 50	-27.9	2980 $\pm$ 50	BC1200 (BC1275~1120)	118965
No.2	890 $\pm$ 40	-25.5	890 $\pm$ 40	AD1175 (AD1055~1090, AD1150~1215)	118966

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り， $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年 BP より古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の 1σ 値が表記される場合もある。

Ⅲ．農業センター遺跡群における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，

この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

2．試料

分析試料は，南原内堀遺跡64トレンチから採取された6点，諏訪牟田遺跡の焼土1から採取された3点，馬塚松遺跡中世竪穴状遺構の覆土から採取された2点の合計11点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法(藤原，1976)をもとに，次の手順で行った。

1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2) 試料約1 g に対して直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g 添加

（電子分析天秤により0.1m g の精度で秤量）

3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去

6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10⁻⁵ g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94, ヨシ属 (ヨシ) は6.31, ススキ属 (ススキ) は1.24, メダケ節は1.16, ネザサ節は0.48, クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75, ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ, キビ族型, ヨシ属, ススキ属型 (おもにススキ属), ウシクサ族 A (チガヤ属など), シバ属
〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節, ヤダケ属), ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節), クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など), ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節), 未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源, 棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来), 茎部起源, 未分類等

〔樹木〕

ブナ科 (シイ属), クスノキ科, マンサク科 (イスノキ属), その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

馬塚松遺跡 (図3)

中世竪穴状遺構1の覆土上部 (試料1) と覆土下部 (試料2) について分析を行った。その結果, 両試料ともネザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出され, ススキ属型, ウシクサ族 A, シバ属, メダケ節型, クマザサ属型, およびブナ科 (シイ属) やクスノキ科なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると, メダケ節型およびネザサ節型が卓越していることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

馬塚松遺跡

14世紀とされる中世竪穴状遺構1の埋没当時は, メダケ節やネザサ節などのタケ亜科を主体としてススキ属やチガヤ属, シバ属なども見られるイネ科植生であり, 遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹林も分布していたものと推定される。

文献

岩内明子・横田修一郎・岩松 暉 (1992) 鹿児島市沖積層の花
粉分析. 日本地質学会西日本支部第125回例会 講演要旨,
p.1-2.

杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の
現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27-37.

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植
物園報告, 第31号, p.70-83.

杉山真二 (1997) 人類をとりまく植生と環境. 宮崎県史通史編
「原始・古代」. p.150-172.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) -
数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と
自然科学, 9, p.15-29

表1 鹿児島県、農業センター遺跡群における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料		馬塚松遺跡						南原内堀遺跡						諏訪牟田遺跡		
		中世堅穴状遺構1		64トレンチ												焼土		
		1	2	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3
イネ科	Gramineae (Grasses)																	
イネ	Oryza sativa (domestic rice)																	
キビ族型	Panicum type																	
ヨシ属	Phragmites (reed)																	
ススキ属型	Miscanthus type	7	67															
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type	68	80	23	14	15	7			29	29	45	51	7		13	29	35
シバ属	Zoysia	14	20													44	22	49
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																	
メダケ節型	Pleiochloa sect.	109	160															
ネザサ節型	Pleiochloa sect.	422	479															
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	14	27	11	36	30	22	49	67							51	51	28
ミヤコザサ節型	Sasa Miyakozasa sect.		7															
未分類等	Others	306	253	6	22	23	7	14	7							76	227	99
その他のイネ科	Others																	
表皮毛起源	Husk hair origin	14		11	14	8	7											
棒状珪酸体	Rodshaped	721	739	63	87	45	117	112	37							521	785	466
茎部起源	Stem origin																	
未分類等	Others	762	819	161	254	98	263	259	247							629	763	663
樹木起源	Arboreal																	
ブナ科 (シイ属)	Castanopsis	27	7													6		14
クスノキ科	Lauraceae	54	80	6		8										13	66	56
マンサク科 (イスノキ属)	Distylium																	7
その他	Others		7														7	28
植物珪酸体総数	Total	2518	2743	310	486	301	496	497	405							1703	2568	1729
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)																		
イネ	Oryza sativa (domestic rice)																	
ヨシ属	Phragmites (reed)	0.08	0.83	0.28	0.46											0.16	0.36	0.21
ススキ属型	Miscanthus type	1.26	1.85		0.18	0.19	0.09									1.25	1.62	0.44
メダケ節型	Pleiochloa sect.	2.02	2.30		0.03											1.13	2.25	1.06
ネザサ節型	Pleiochloa sect.	0.10	0.20	0.09	0.27	0.23	0.16	0.37	0.51							0.38	0.39	0.88
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)		0.02			0.05	0.04	0.17	0.11								0.02	0.21
ミヤコザサ節型	Sasa Miyakozasa sect.																	
タケ亜科の比率 (%)																		
メダケ節型	Pleiochloa sect.	37	42			24										45	38	49
ネザサ節型	Pleiochloa sect.	60	53													41	53	41
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	3	5	100	89	63	79	69	82							14	9	10
ミヤコザサ節型	Sasa Miyakozasa sect.		0			13	21	31	18								1	

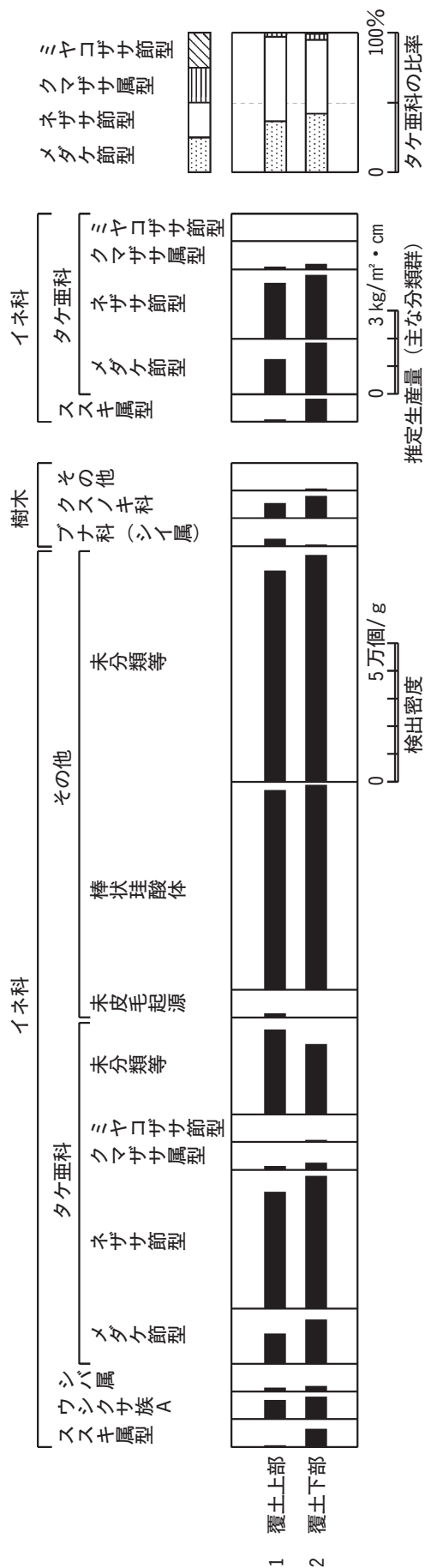


図3 馬塚松遺跡、中世竪穴状遺構1における植物珣酸体分析結果



(シババ属)



(ネザサ節型)

植物珣酸体顕微鏡写真 (×400)



版



図版1 掘立柱建物跡検出状況（空撮）

馬塚松遺跡



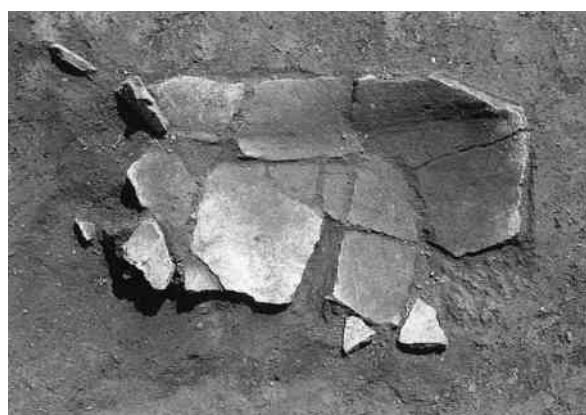
調査風景



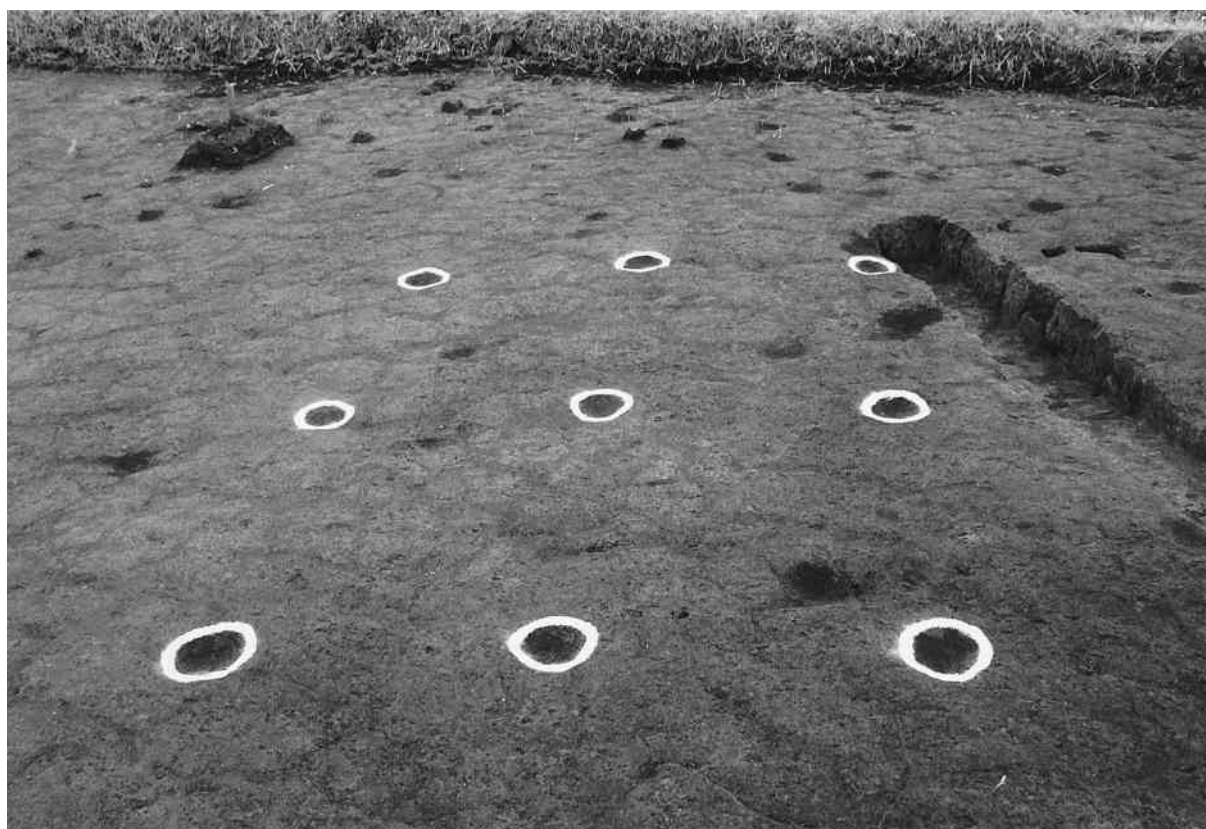
土層断面



縄文時代早期集石 1



縄文時代晩期土器出土状況



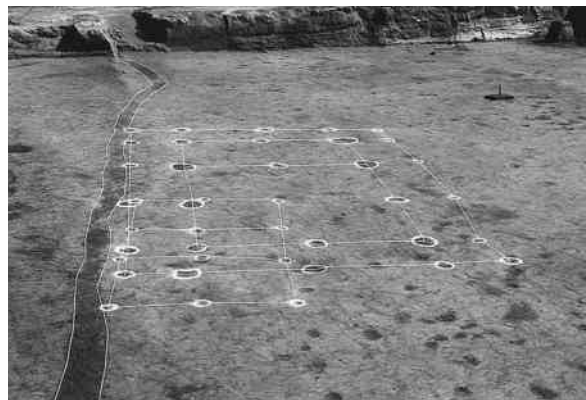
弥生時代総柱建物跡

図版 2 縄文時代早期・弥生時代遺構他

馬塚松遺跡



掘立柱建物跡 1・12・16, 溝状遺構検出状況



掘立柱建物跡 1・2・16, 溝状遺構検出状況



掘立柱建物跡 1 検出状況



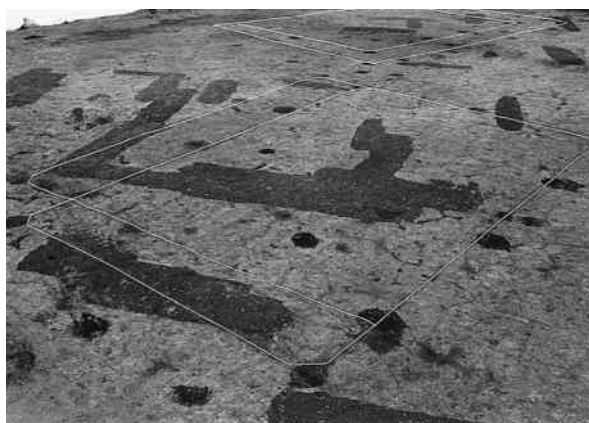
掘立柱建物跡19・20・21 検出状況



掘立柱建物跡21・22 検出状況



掘立柱建物跡19 検出状況



掘立柱建物跡21 検出状況



掘立柱建物跡15 検出状況

図版 3 中世掘立柱建物跡



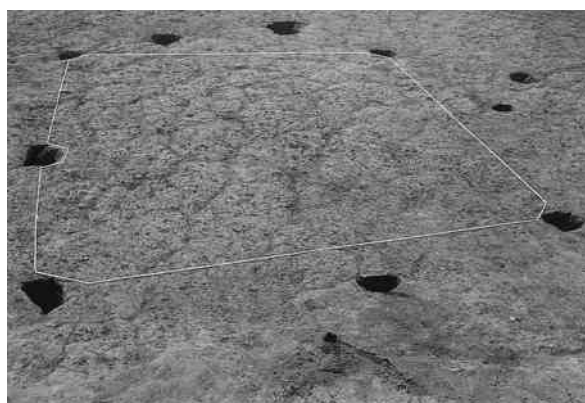
掘立柱建物跡10 検出状況



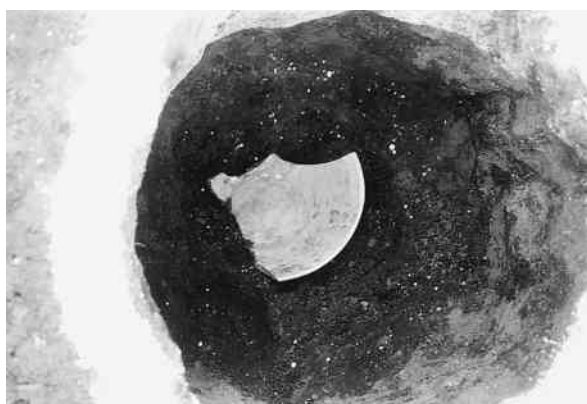
掘立柱建物跡3 検出状況



掘立柱建物跡8 竪穴状遺構検出状況



掘立柱建物跡14 検出状況



掘立柱建物跡9 柱穴8 遺物出土状況



掘立柱建物跡1 柱穴5 遺物出土状況



竪穴状遺構検出状況



竪穴状遺構内遺物出土状況

図版4 中世掘立柱建物跡，竪穴状遺構他

馬塚松遺跡



溝状遺構 6・7 検出状況



溝状遺構 6・7 検出状況



溝状遺構 6・7 検出状況



竪穴状遺構，掘立柱建物跡10，溝状遺構 4



溝状遺構 5 検出状況

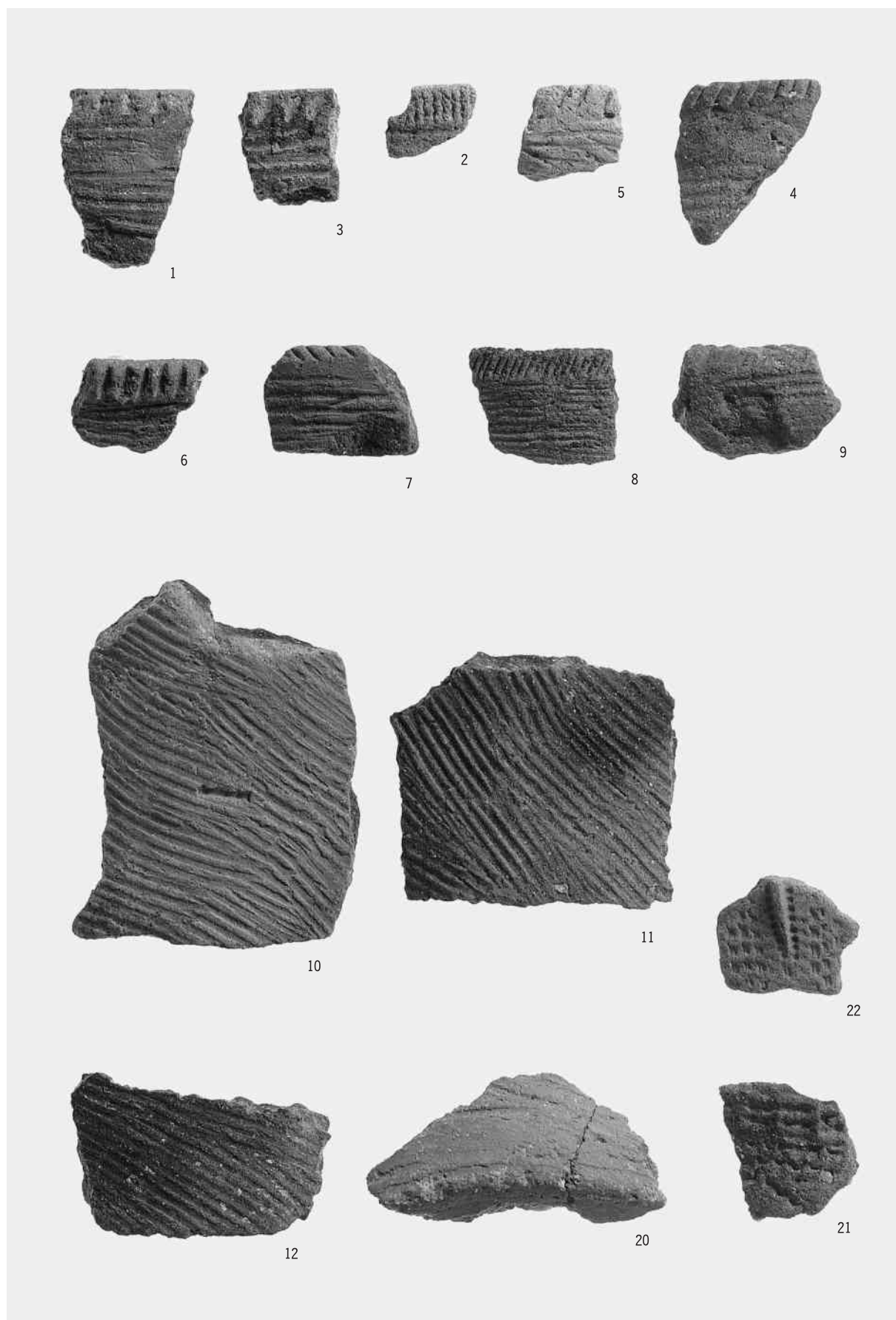


溝状遺構 2・3・4

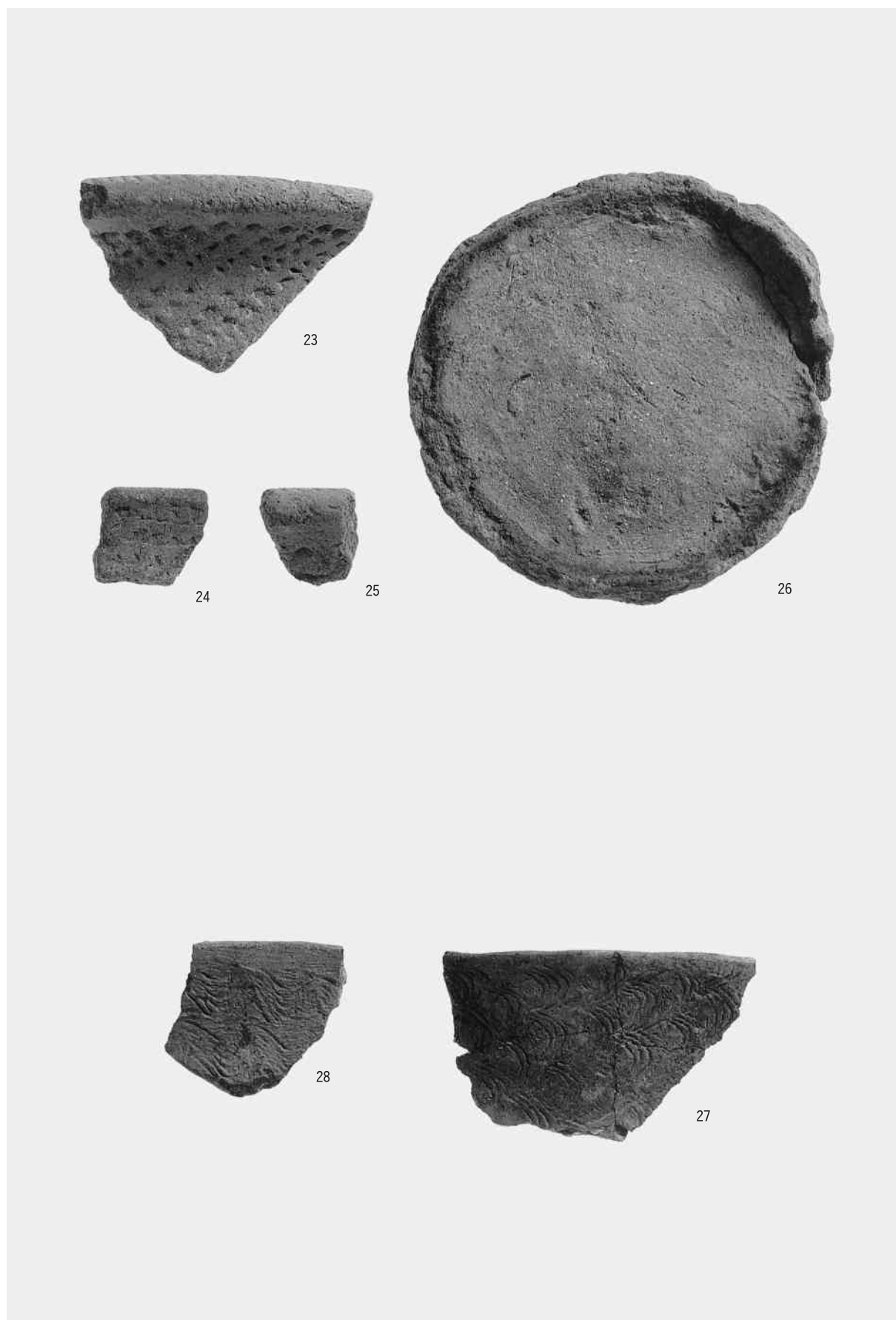


溝状遺構10・11

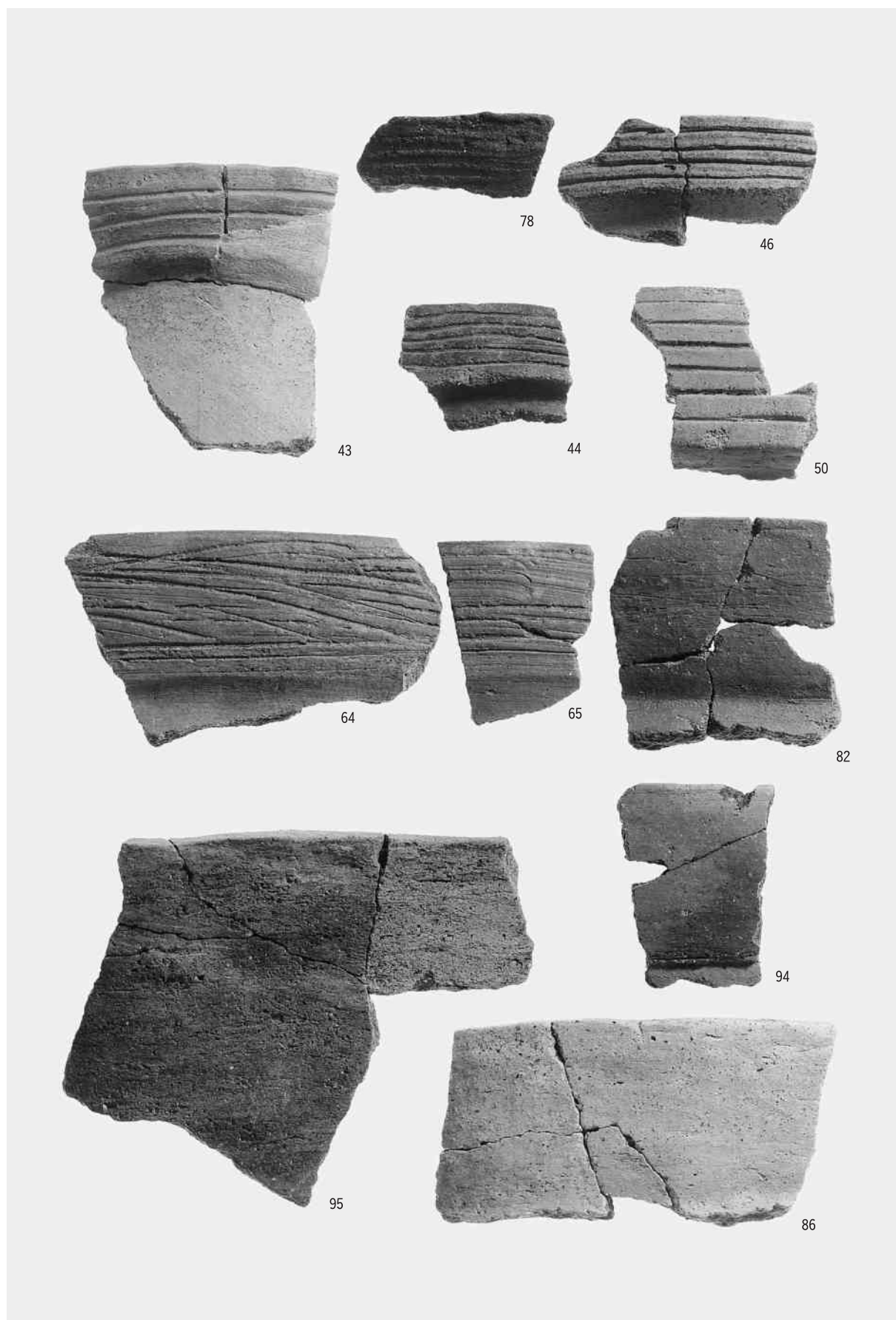
図版 5 中世溝状遺構他



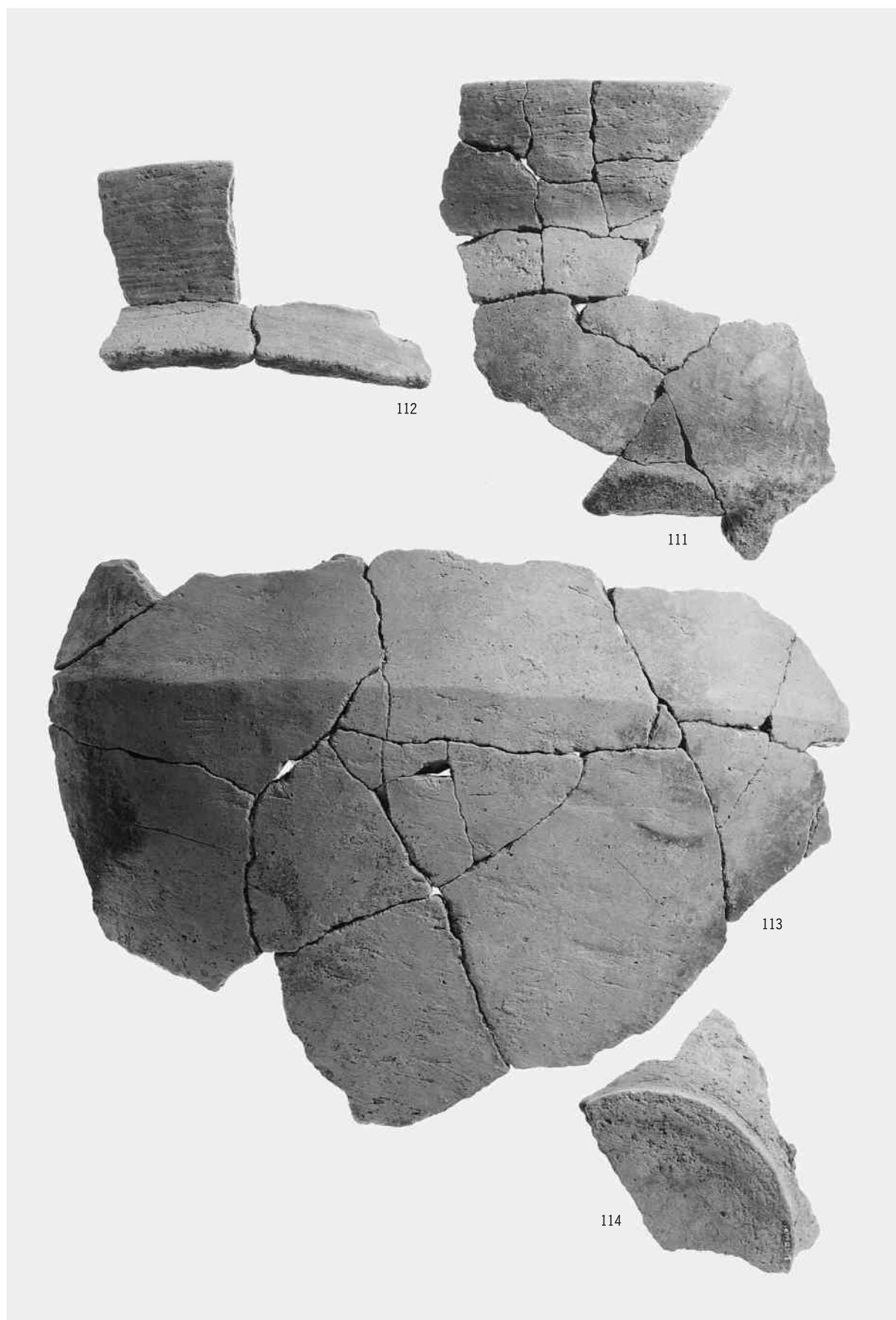
図版6 縄文時代早期土器（1）



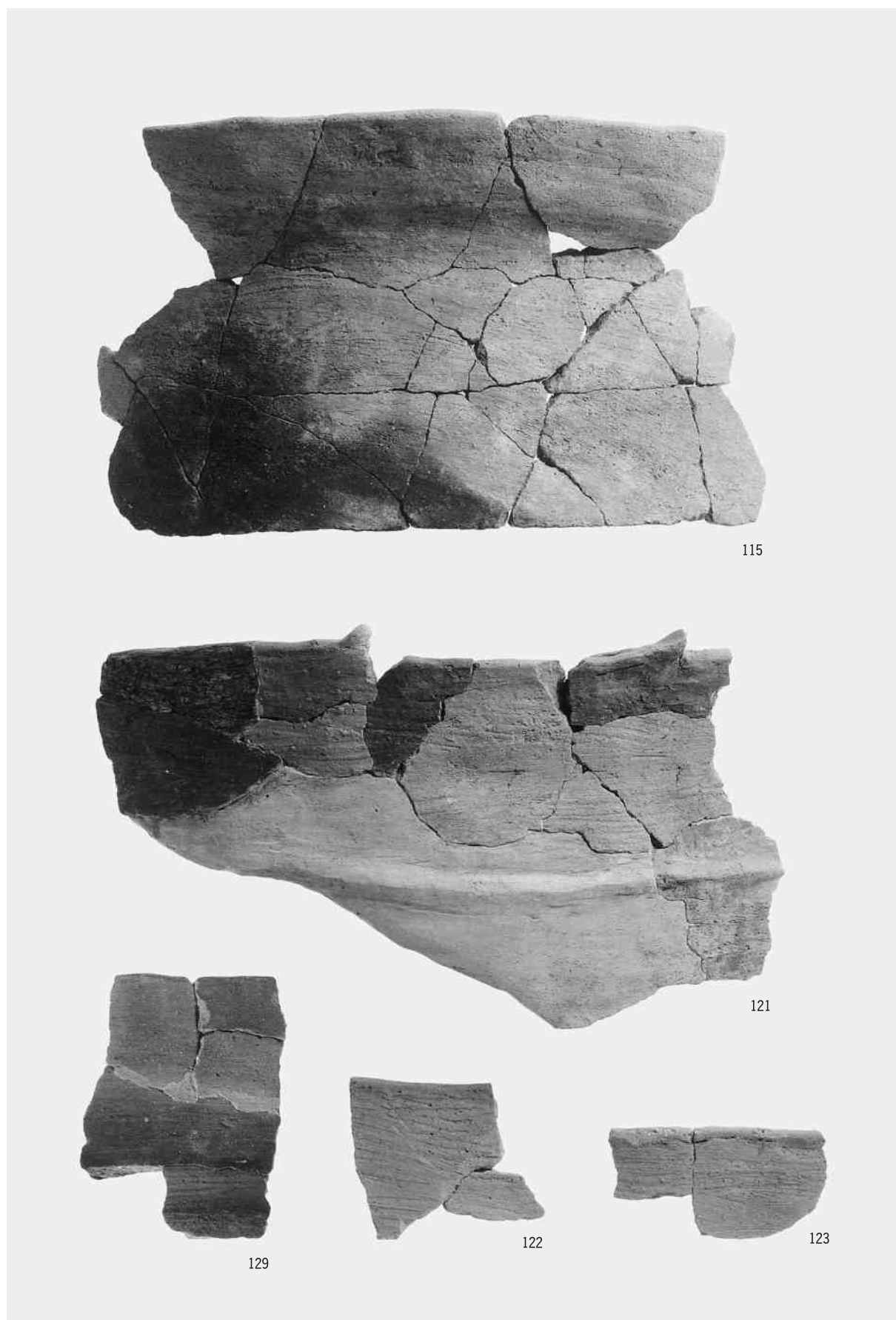
図版 7 縄文時代早期土器 (2)



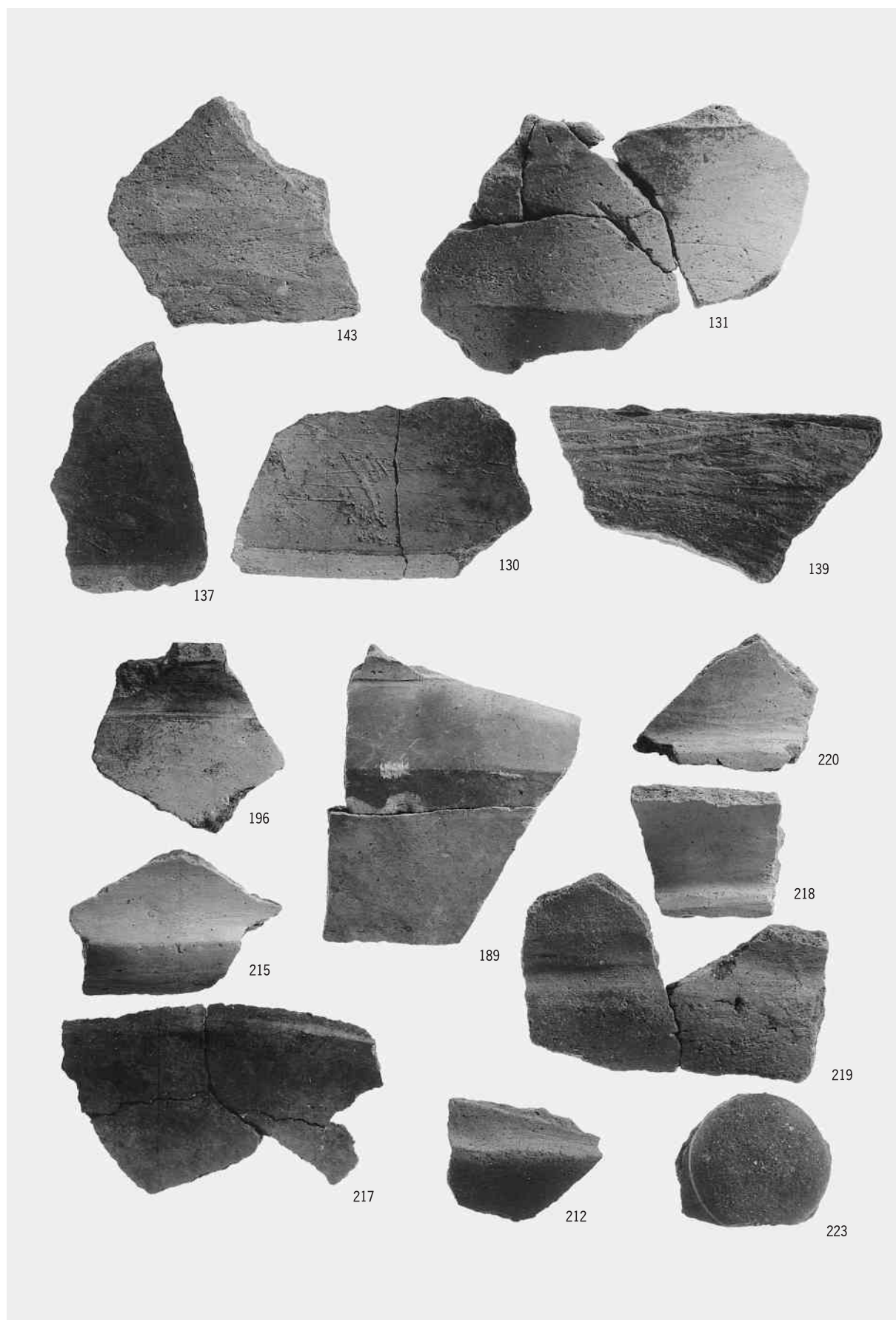
図版 8 縄文時代晩期土器 (1)



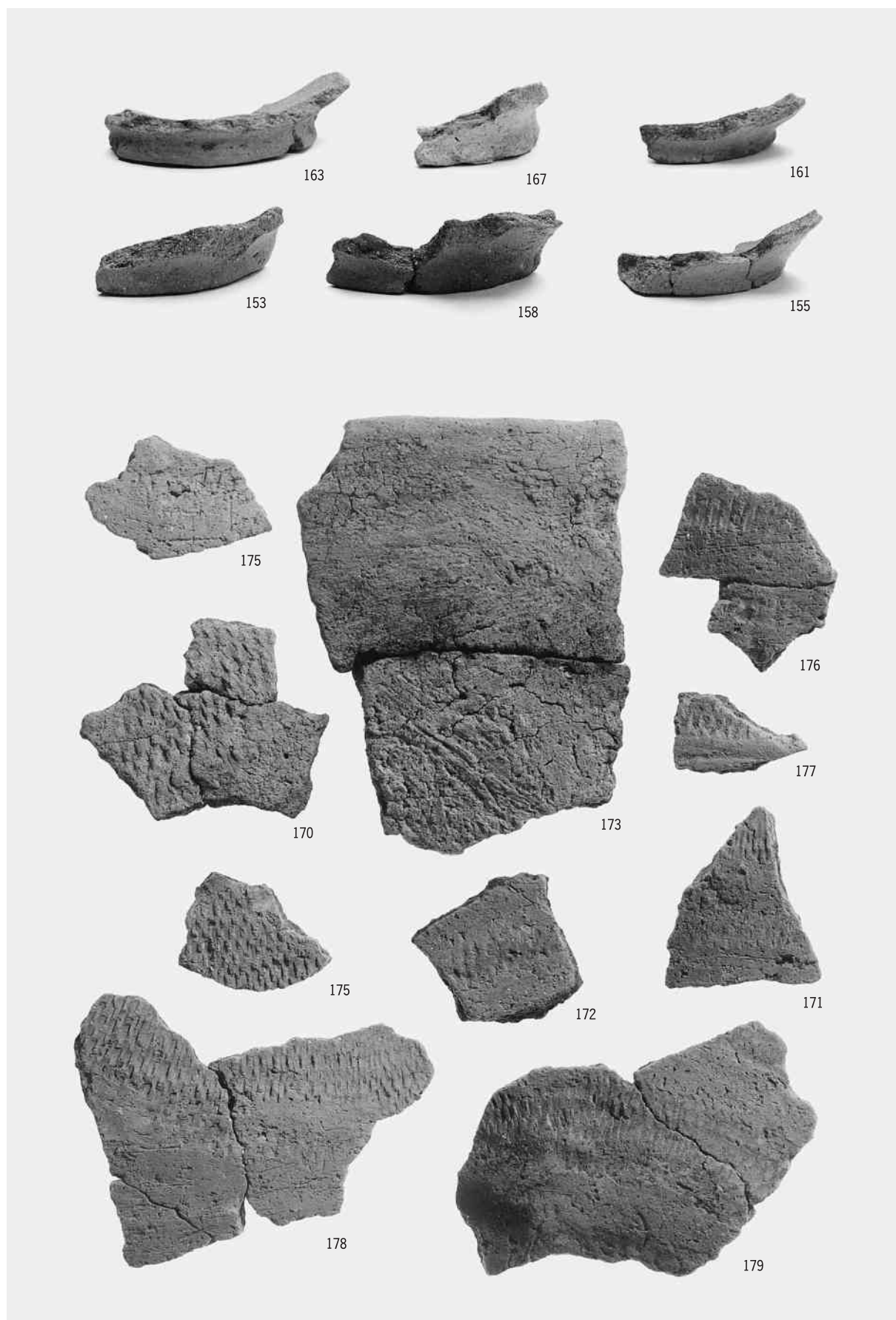
図版9 縄文時代晩期土器（2）



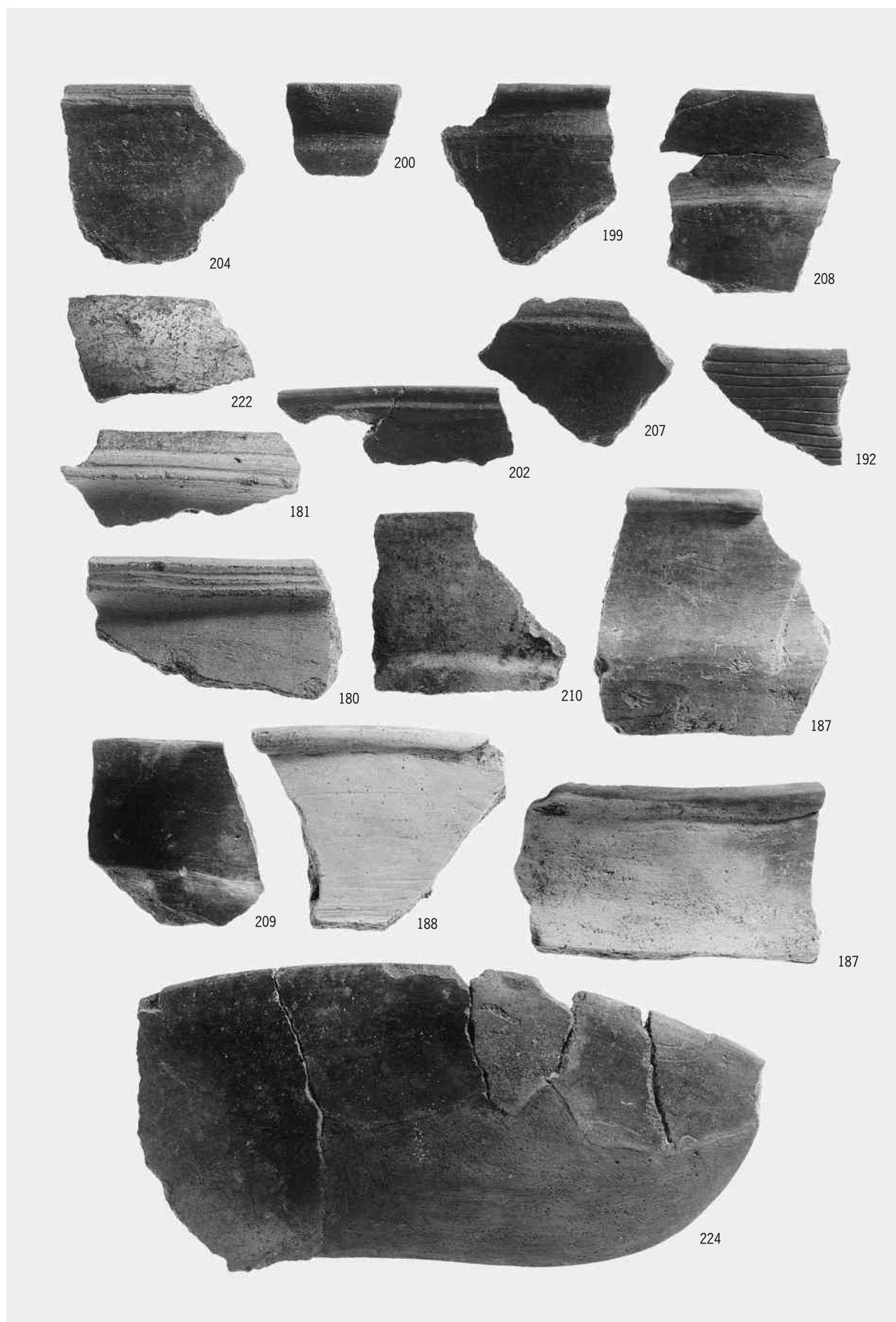
図版10 縄文時代晩期土器（3）



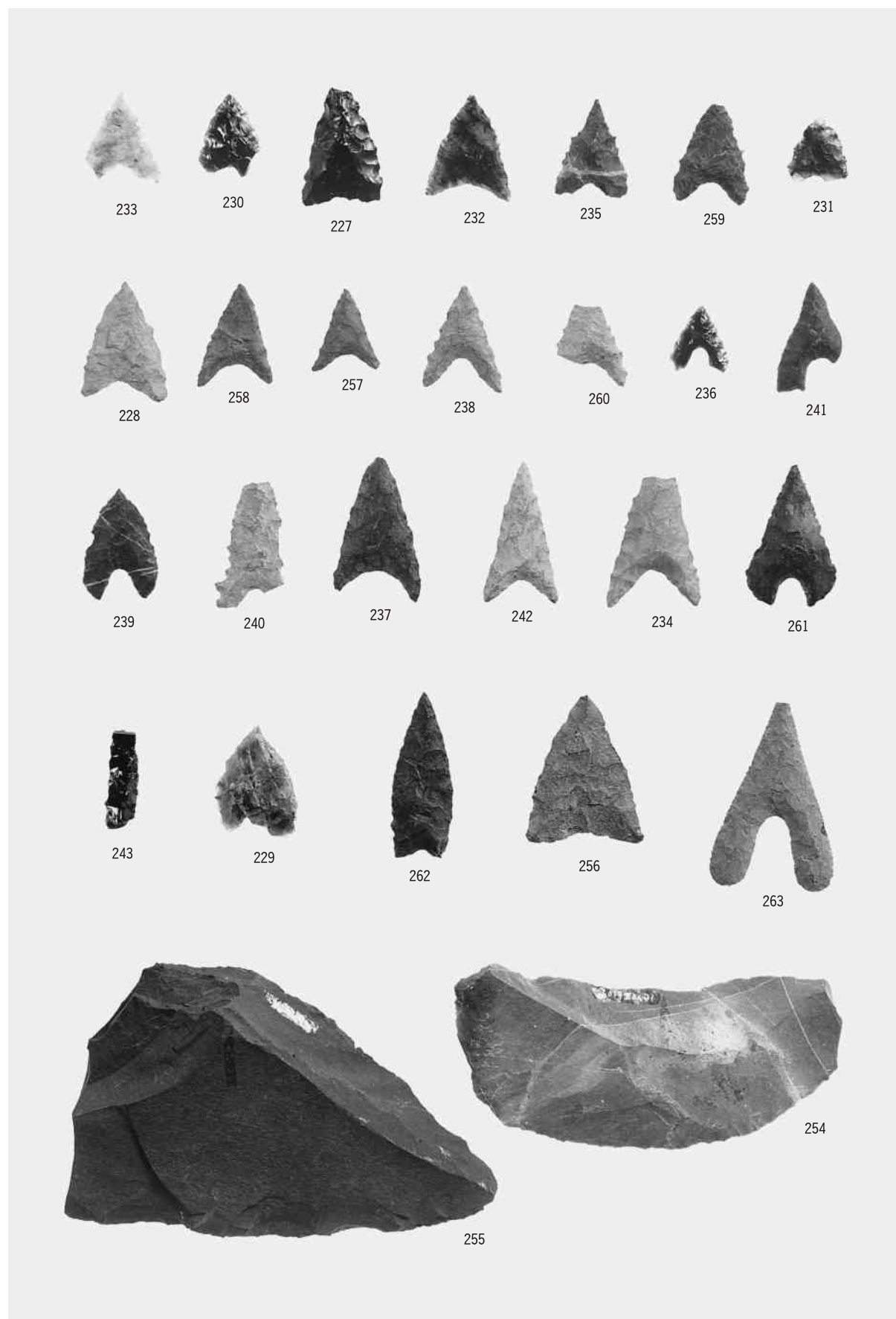
図版11 縄文時代晩期土器（4）



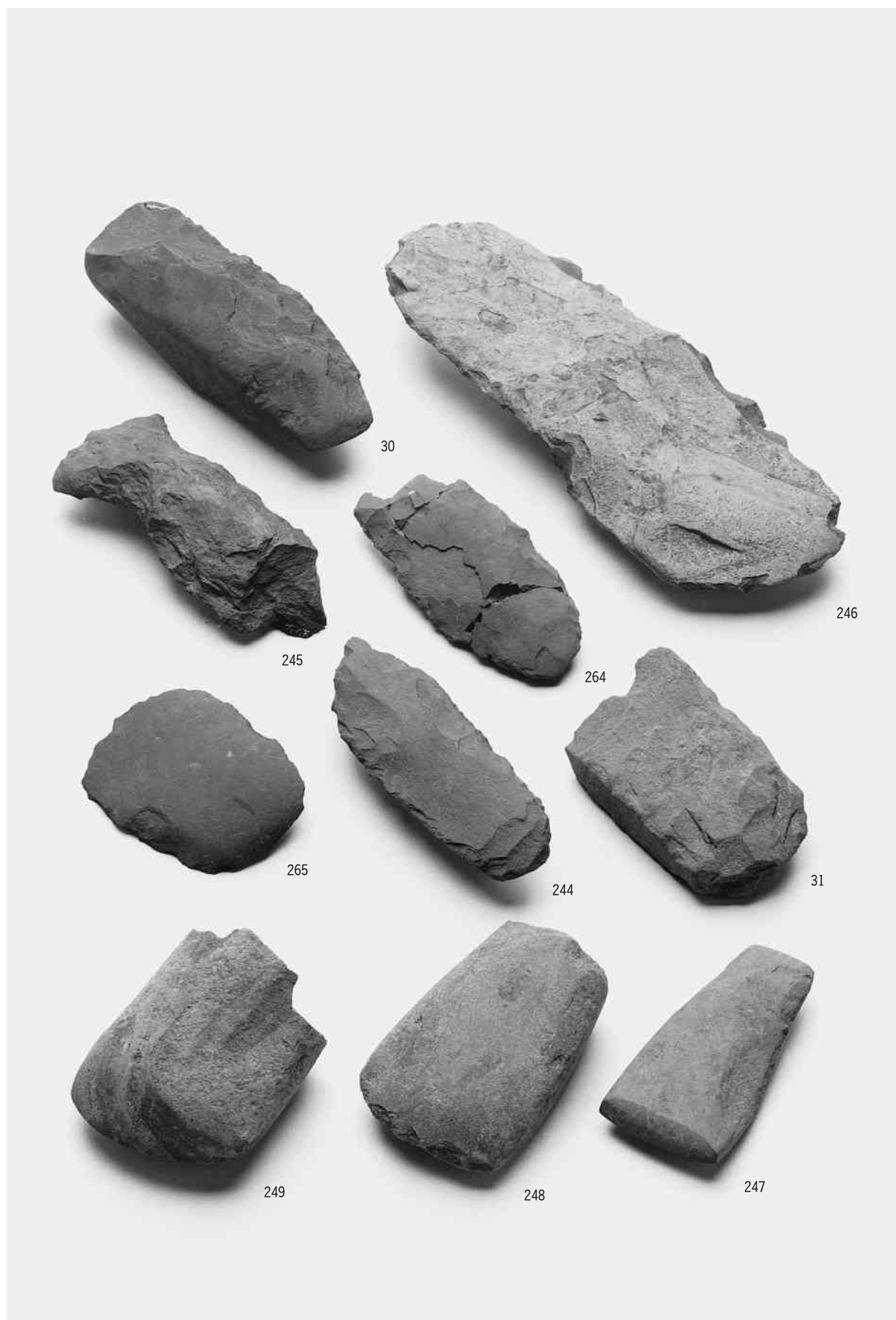
図版12 縄文時代晩期土器（5）



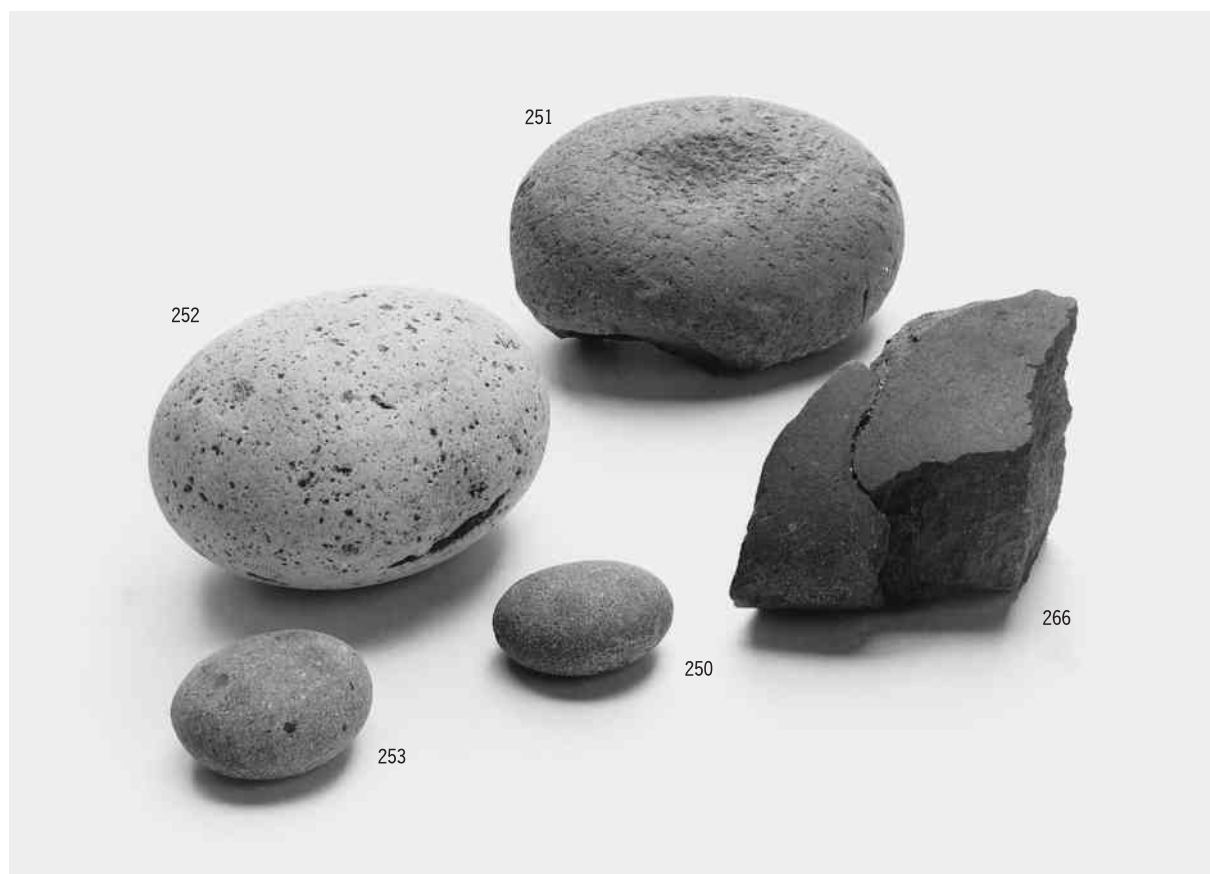
図版13 縄文時代晩期土器（6）



図版14 縄文時代石器（1）



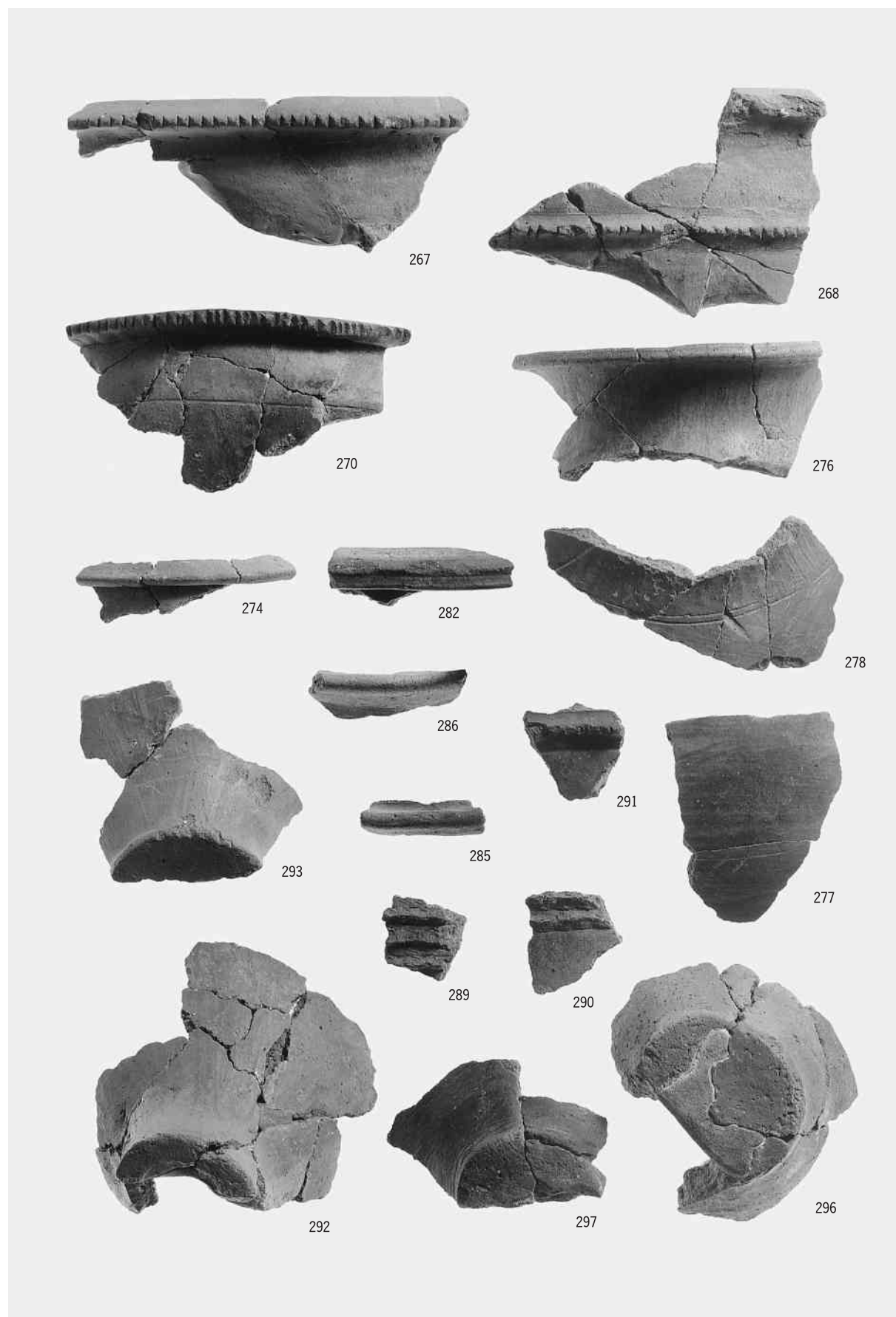
図版15 縄文時代石器（2）



図版16 縄文時代石器（3）



図版17 弥生時代石器

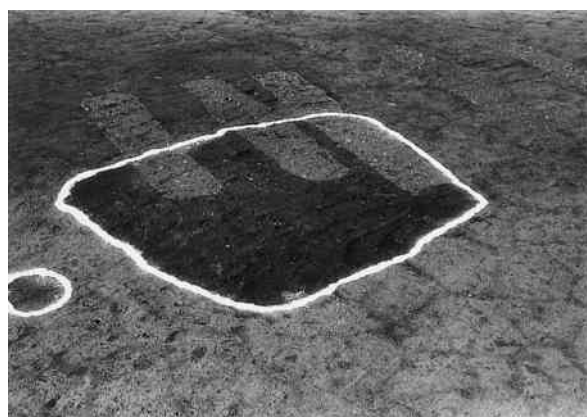
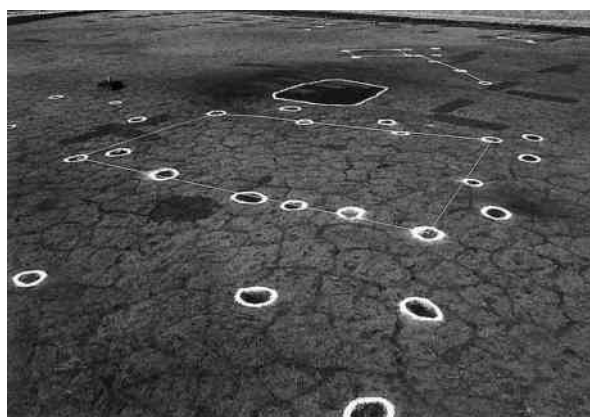
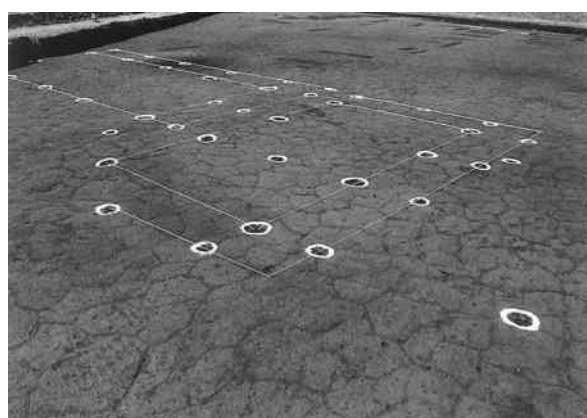
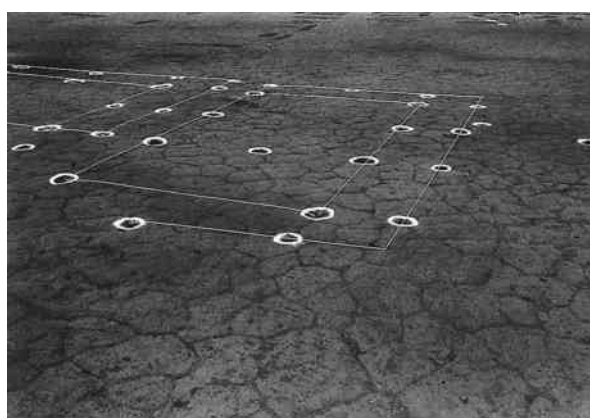
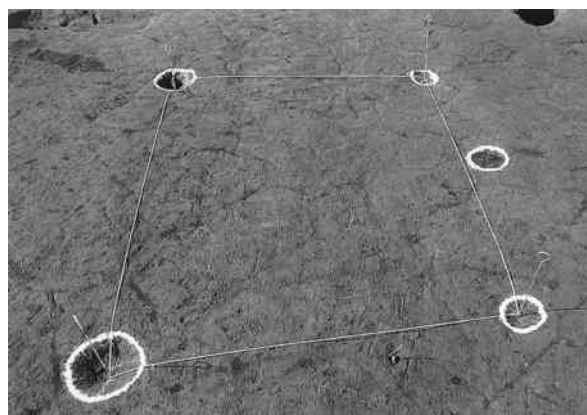
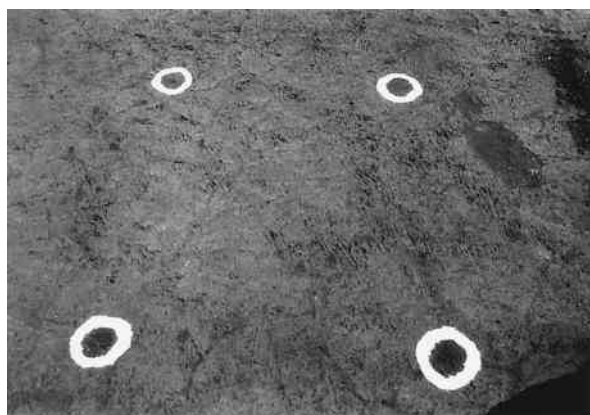


図版18 弥生時代土器

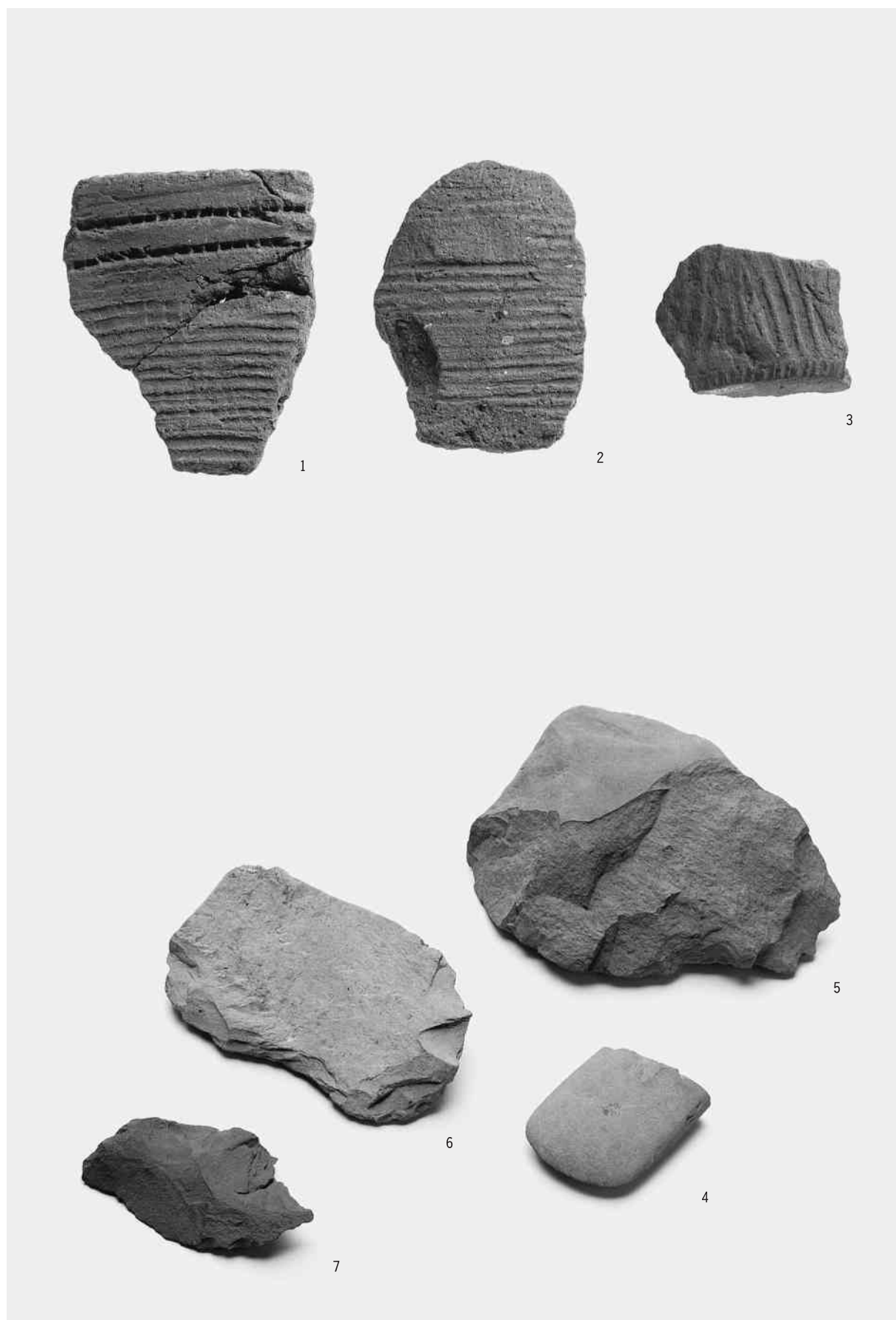


図版19 中世遺物（青磁・黒色土器・土師器）

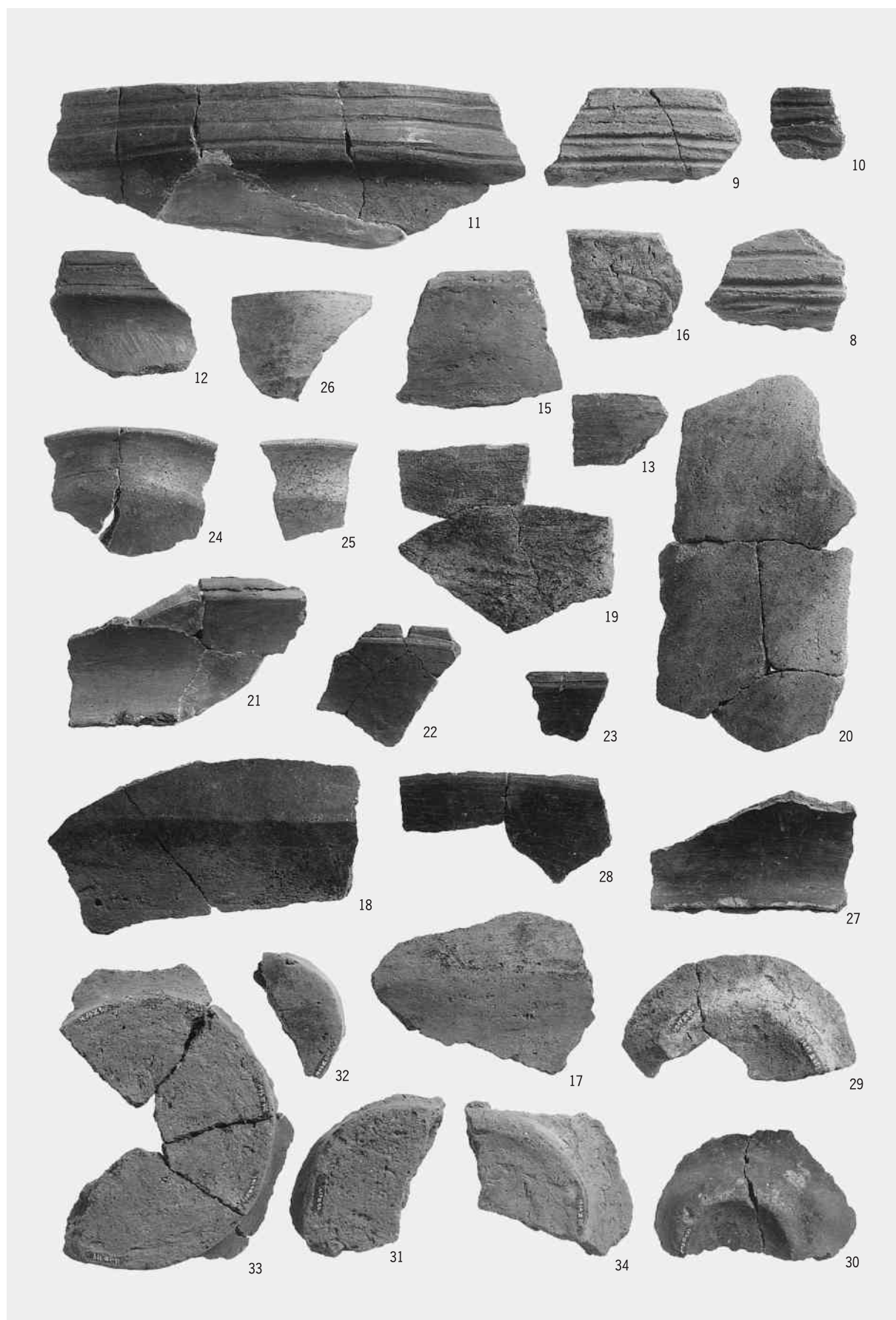
市堀遺跡



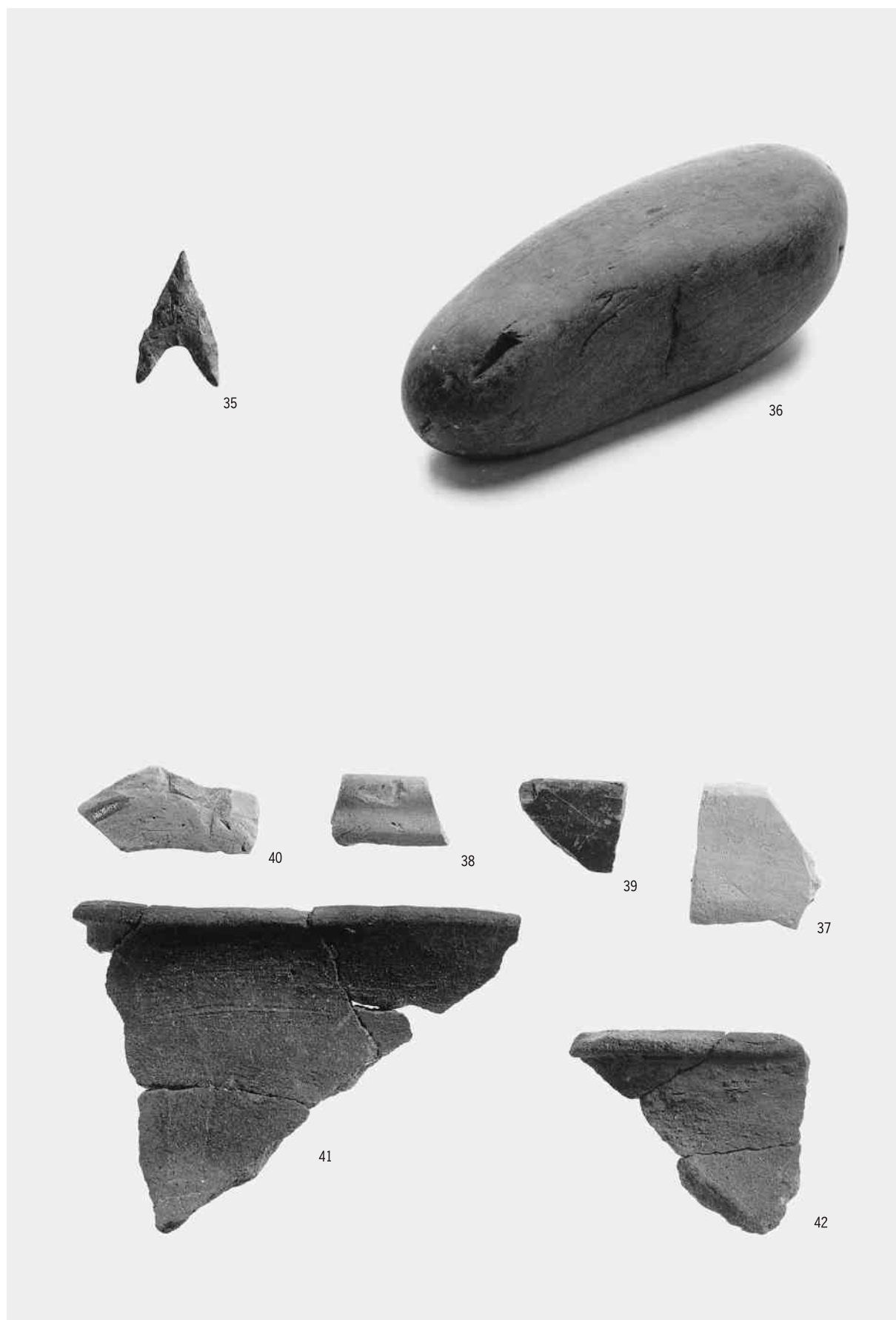
図版 1 縄文時代晩期掘立柱建物跡・柱穴列
中世掘立柱建物跡・竪穴状遺構他



図版2 縄文時代早期土器・石器

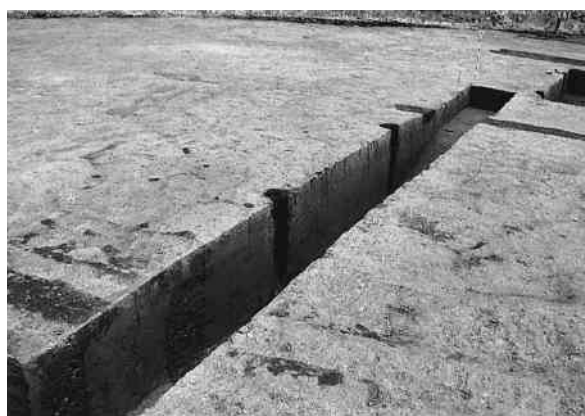
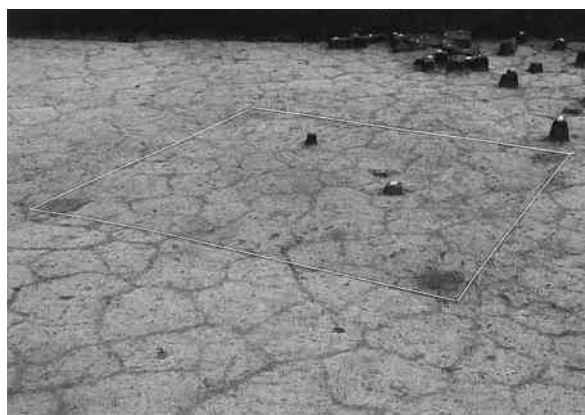


図版3 縄文時代晩期土器

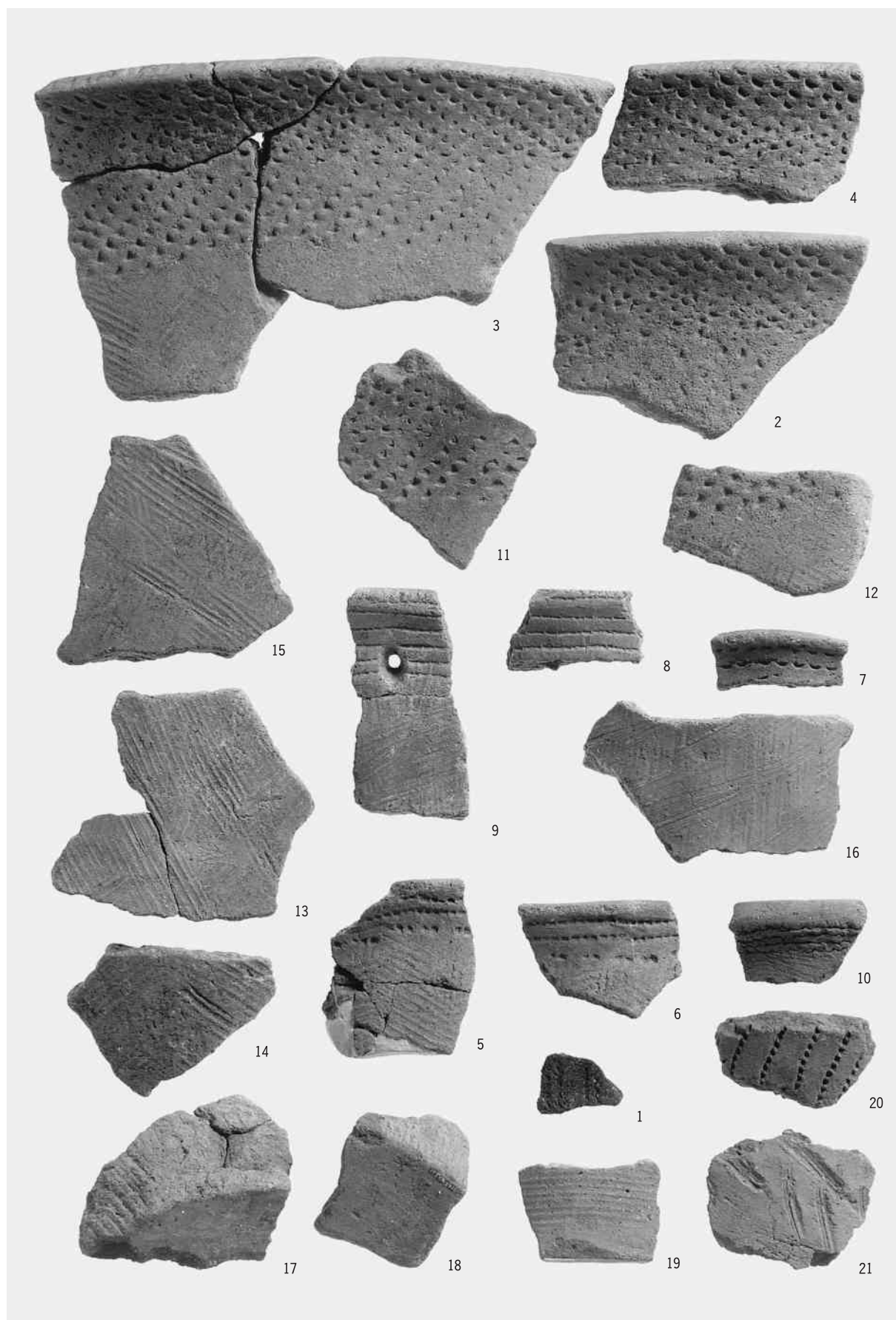


図版 4 縄文時代晩期石器・土師器

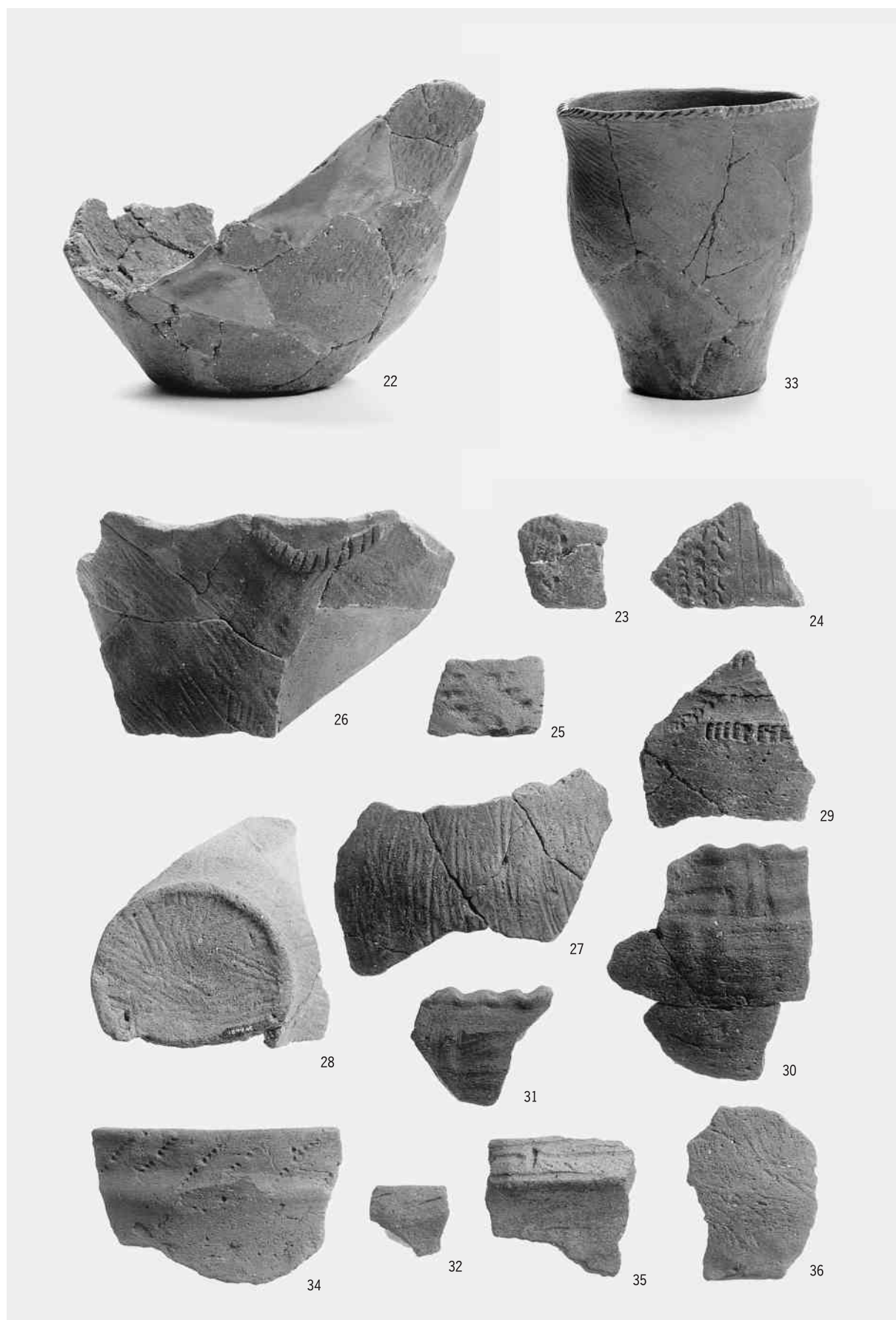
大門口遺跡



図版 1 縄文時代晩期掘立柱建物跡・柱穴列
遺物出土状況他



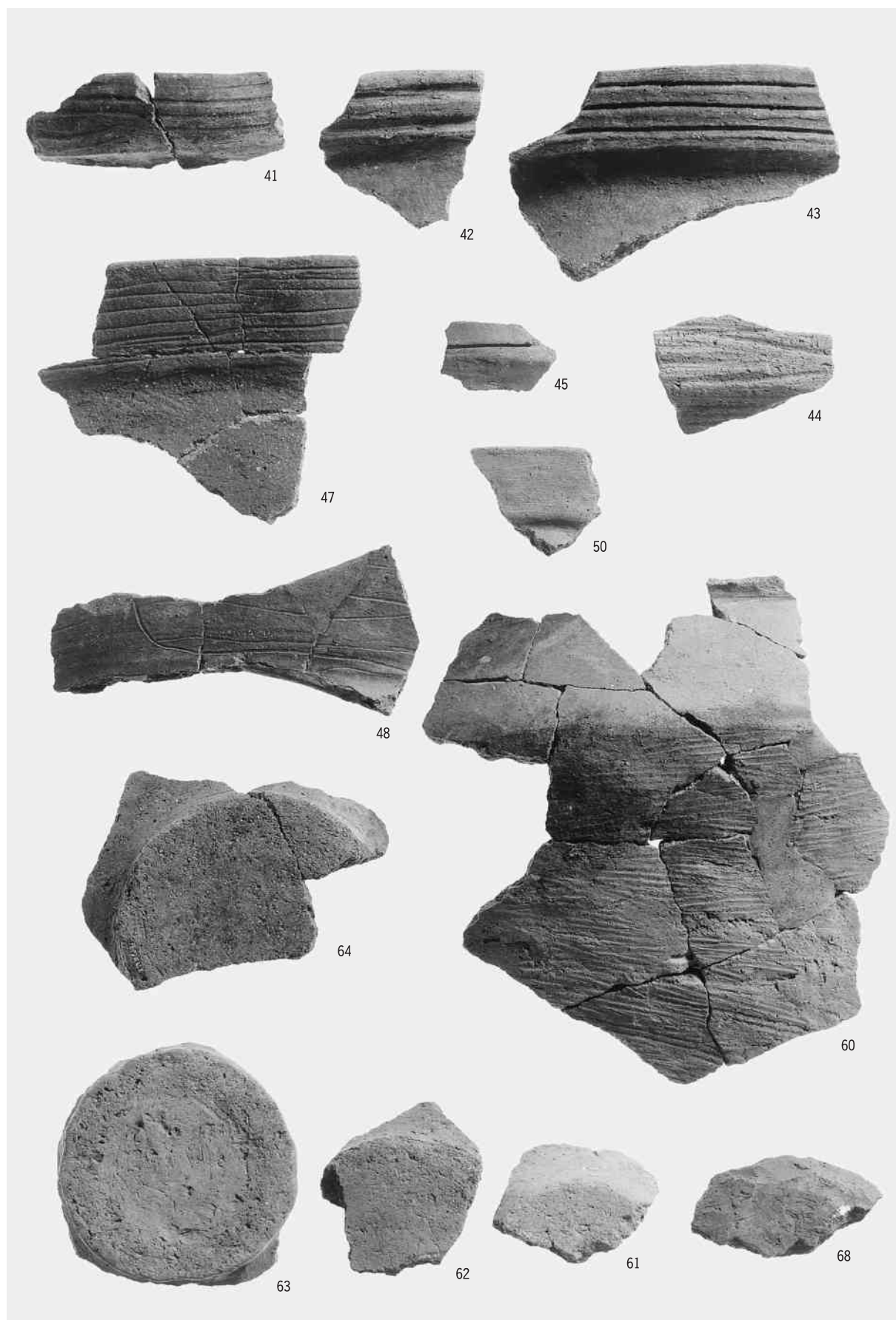
図版2 縄文時代早期土器（1）



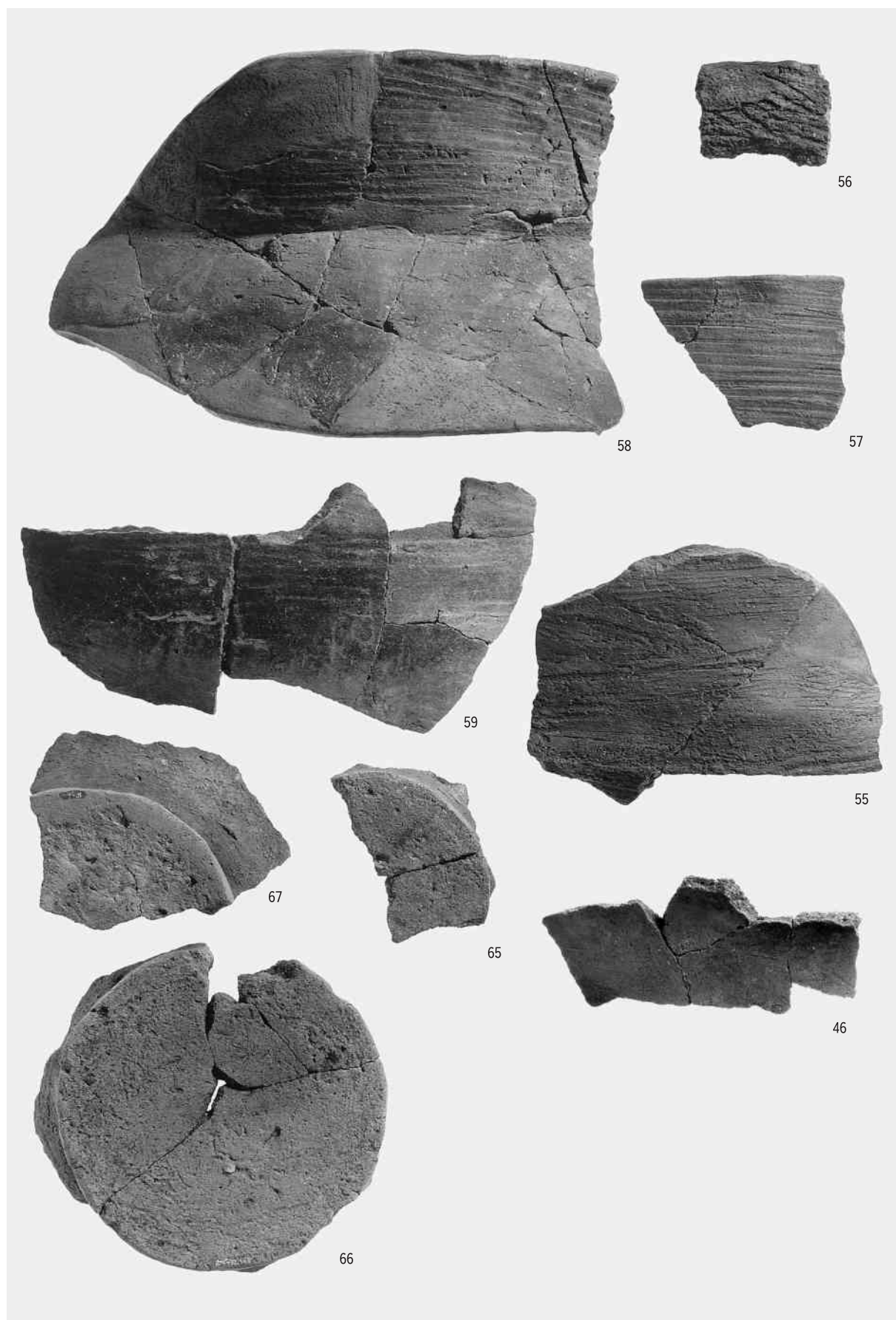
図版3 縄文時代早期～後期土器



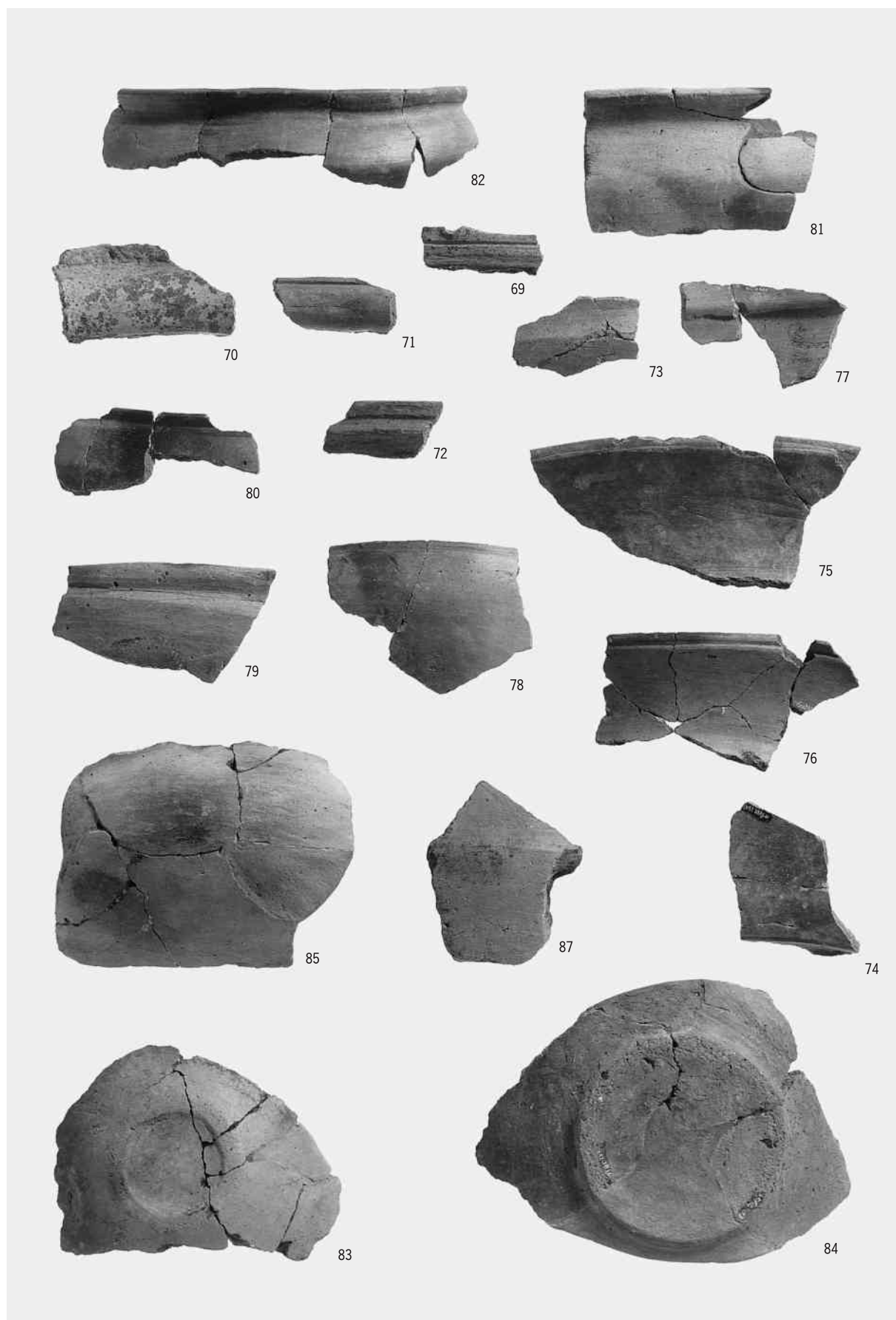
図版4 縄文時代晩期土器(1)



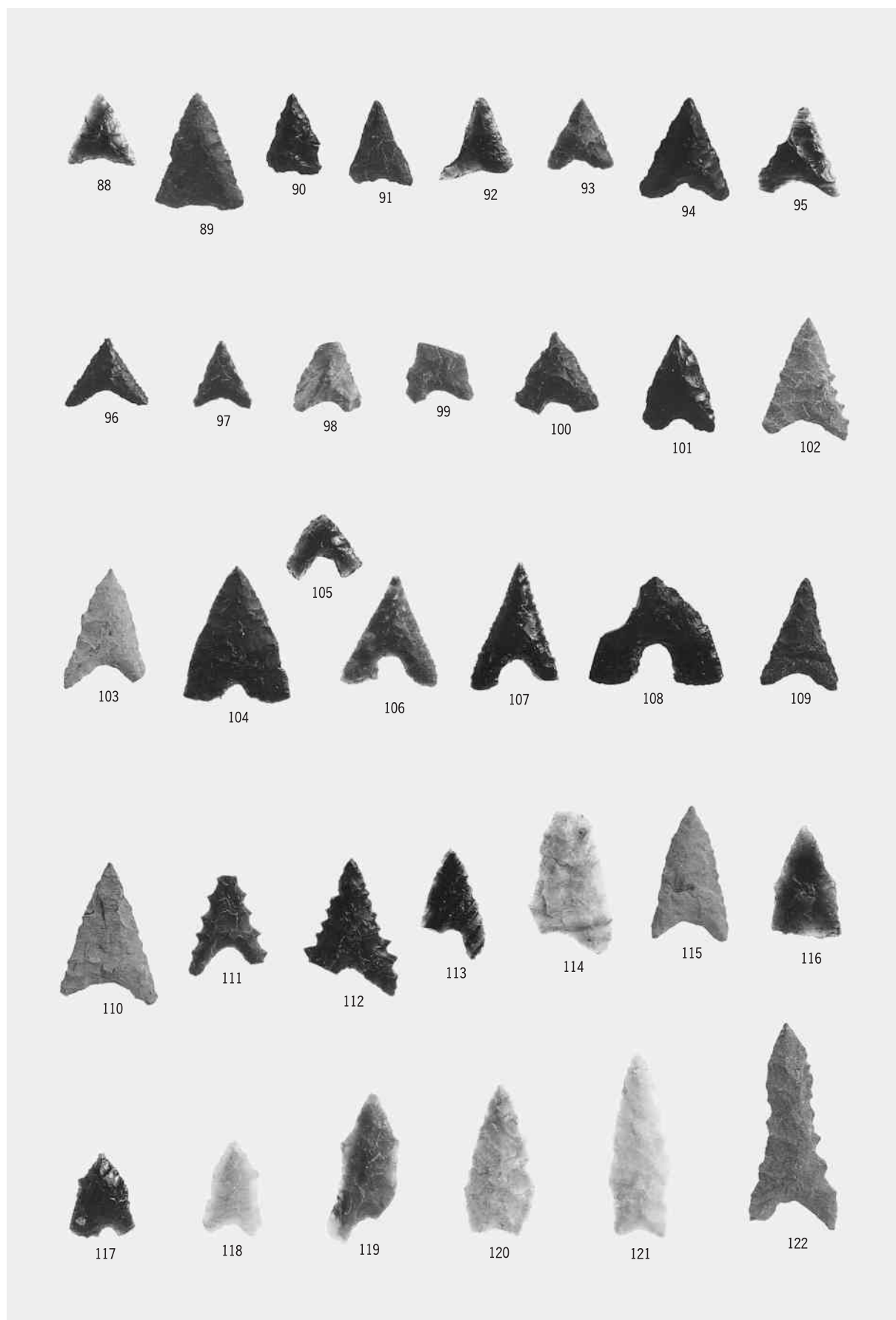
図版5 縄文時代晩期土器（2）



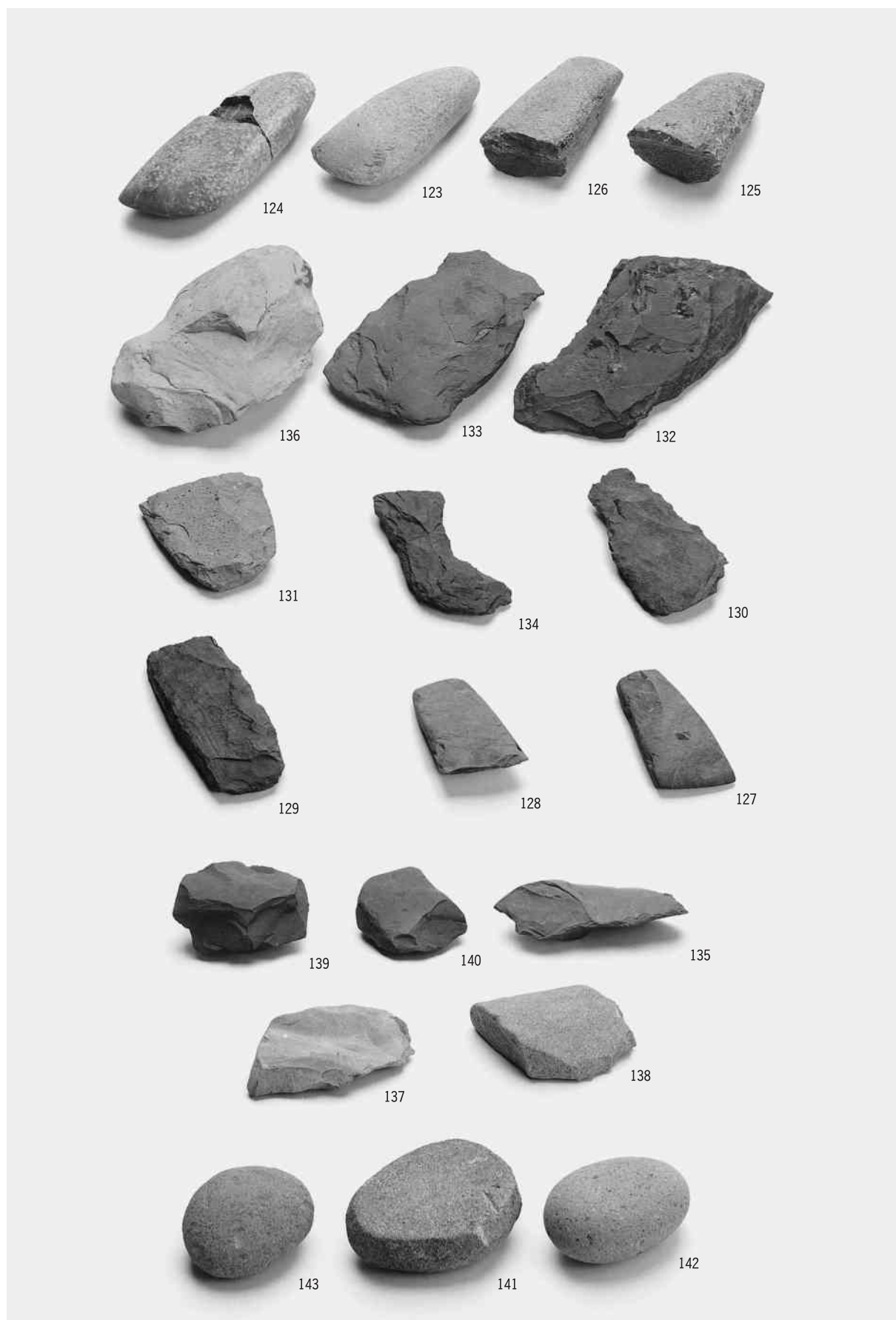
図版 6 縄文時代晩期土器 (3)



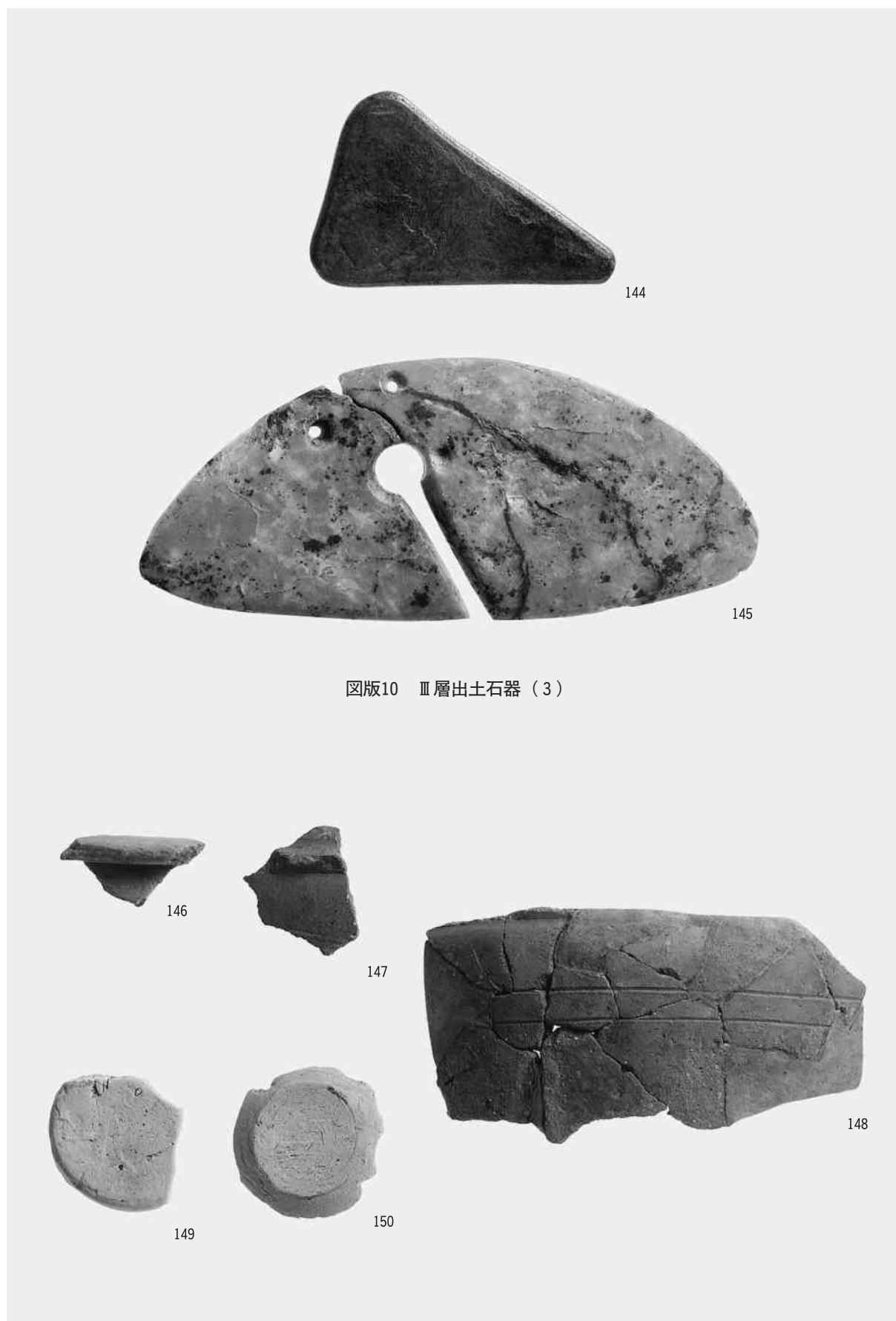
図版7 縄文時代晩期土器（4）



図版8 Ⅲ層出土石器(1)



図版9 Ⅲ層出土石器(2)



図版10 Ⅲ層出土石器（3）

図版11 弥生時代以降土器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（97）

農業開発総合センター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

農業開発総合センター遺跡群Ⅱ

馬塚松遺跡・市堀遺跡・大門口遺跡

発行日 平成18年2月28日

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318

鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL（0995）48-5811

印刷所 株式会社トライ社
〒892-0834

鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6
TEL（099）226-0815